第 60 図　上唐原榎町遺跡3次I区全体図（1/300）

２　３次Ｉ区の調査

Ｉ区は 50 地点の最も南東部で、南に隣接する農地への進入路を挟んで、東西に分かれている。限定協議の範囲の東端に橋台部分が入るので、調査区中央と合わせて限定協議範囲として残した。また、県道吉富本耶馬渓線から現堤防をつなぐ町道部分は、工事工程との関係から後から調査し、計 2,800 ㎡を調査した。

基盤層は砂質土で砂鉄を含んだラミナ状の黒灰色土が互層に堆積しており、ラミナが平面に広がる部分は遺構のプランがわかりにくく、明らかに検出できないものは掘り下げて遺物の出方を見て判断した。その方法をとっていたため、17 号竪穴住居跡は遺物があったので竪穴住居跡としたが、切られている 14 号竪穴住居跡の貼床を剥がしても主柱穴らしいものがないので竪穴住居跡ではないと考えて欠番にした。その結果、竪穴住居跡は 25 基を数えるが、重複している基数を含めると 29 基、掘立柱建物跡４棟、土坑 13 基、溝状遺構５条などが検出された。

以下、遺構・遺物を説明するが、弥生時代終末から古墳時代初頭の土器の時期区分は久住猛論文（註２）を参照した。

（１）竪穴住居跡

1 号竪穴住居跡（図版 38、第 61 図）

調査区東端に位置し、２号竪穴住居跡を切り、南端部は限定協議範囲に入る。辺約 410 ㎝の正方形プランで主柱穴４基が検出された。壁は残っておらず、プランは基盤層にわずかな変色がある程度で、主柱穴との距離から推定してかろうじて検出したもので確実性に欠ける。プランと主柱穴数から竈が敷設されていた可能性が高いが火床も残っていなかった。主柱穴と壁の距離が広い西辺に竈があったと仮定すると主軸方向はＮ-74°-Ｗとなる。主柱穴には柱痕が残っており、柱３・４は限定協議範囲内であったが、限定協議範囲との境界線に近いので掘り下げた。柱穴は深いもので 50 ㎝ほど残っていた。

出土遺物が少なく時期を特定しにくいが、４本主柱穴の正方形プランなので第 63 図２は混入品であり、６世紀後半から 7 世紀前半に属するだろう。

出土遺物（第 63 図）

第 63 図１は小型甕で、外面はタテハケ、内面はケズリ。小型ながら作りがよい。２は平底の甕で、外面は煮沸使用により赤化している。器面摩滅で調整不明。

２号竪穴住居跡（図版 38、第 61 図）

調査区東端に位置し、限定協議範囲に入るので柱穴は掘削せずプランの検出のみにとどめた。１号竪穴住居跡に切られる。本来主柱穴は４つあったと考えられるが１基検出できなかった。壁は残っていなかったが基盤層にわずかな変色がある程度で、主柱穴との距離から推定してかろうじてプランを検出し、一辺 380㎝ほどに推定できる。北東コーナーしか確認できなかったが正方形プランなので竈が敷設されていた可能性が高い。主柱穴と壁の距離が広い北辺に竈があったと仮定すると主軸方向はＮ -32° 40′-Ｅとなる。出土遺物がなく時期不明。

３号竪穴住居跡（図版 38・39、第 62 図）

調査区東部に位置する長方形プランで、東ほど壁の残りが悪いため、東隅は検出されなかっ

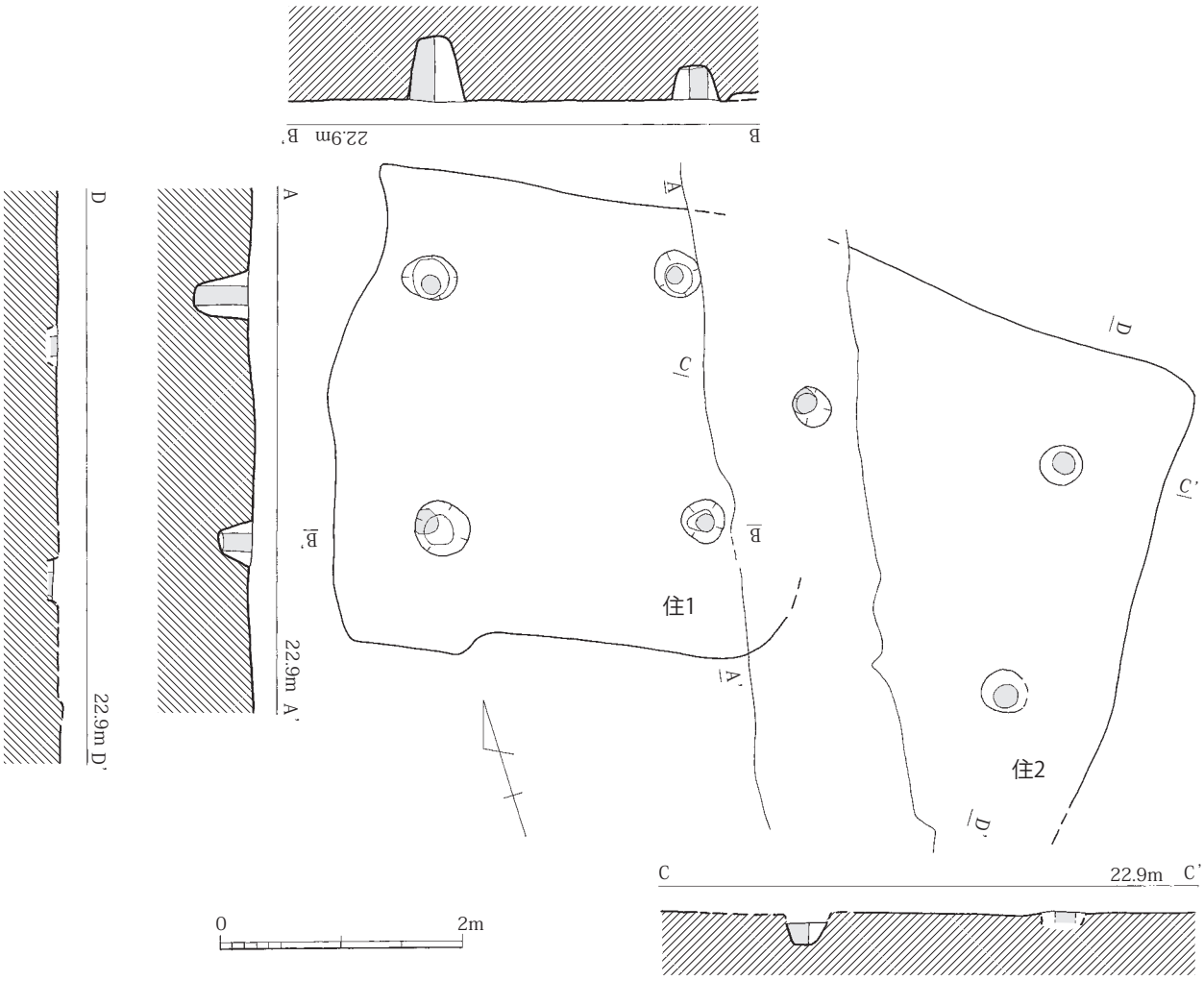
た。長軸 715cm、短辺 470cm ほどのやや大きい住居である。貼付けのベッド状遺構が両短辺に確認できたが、東側が削平を受けているため長辺側にＬ字形に続くのかはわからなかった。２基の主柱穴と中央の炉跡、長辺側の屋内土坑が検出され、周溝も部分的に確認できた。主柱穴は抜き取り穴により上位を切られているが、下位で柱痕を確認できた。出土遺物は床直上に南側に集中して出土しており、主柱穴の抜き取り穴の上にほぼ完形の甕が横倒しで出土したので、柱の抜き取り後に廃棄土坑として利用されたものと考えられる。

出土遺物は久住ⅡＢ新段階からⅡＣ古段階が見られるので、使用時期はⅡＢ新段階（布留１式）で、最終埋没がⅡＣ古段階（布留１式古段階）であろう。

出土遺物（図版 50・70、第 63・65・104 図）

第 63 図３は大型の二重口縁壺で、内外丁寧なヨコハケで作りが良い。４～６は直口壺で、４は外面ハケ、内面は底部がケズリ、胴中位以上はハケ。５は外面胴中位以上がタタキで、その後全体にハケ調整。内面はオサエ後ナデで、口縁部のみヨコハケ。肩部には積み上げ痕が残る。６は図上接合なので、全体の器形は不正確である。外面目の細かいハケで、部分的にミガキが残る。内面はケズリ。７は精製器種Ｂの高坏で、内外細い単位のミガキが入る。坏部の屈曲部の接合部は不明瞭なので口縁部の傾きは確実性に欠ける。

第 65 図１～６は甕で、１は庄内模倣甕で外面胴下半は底部を手持ちで回転させながら叩い



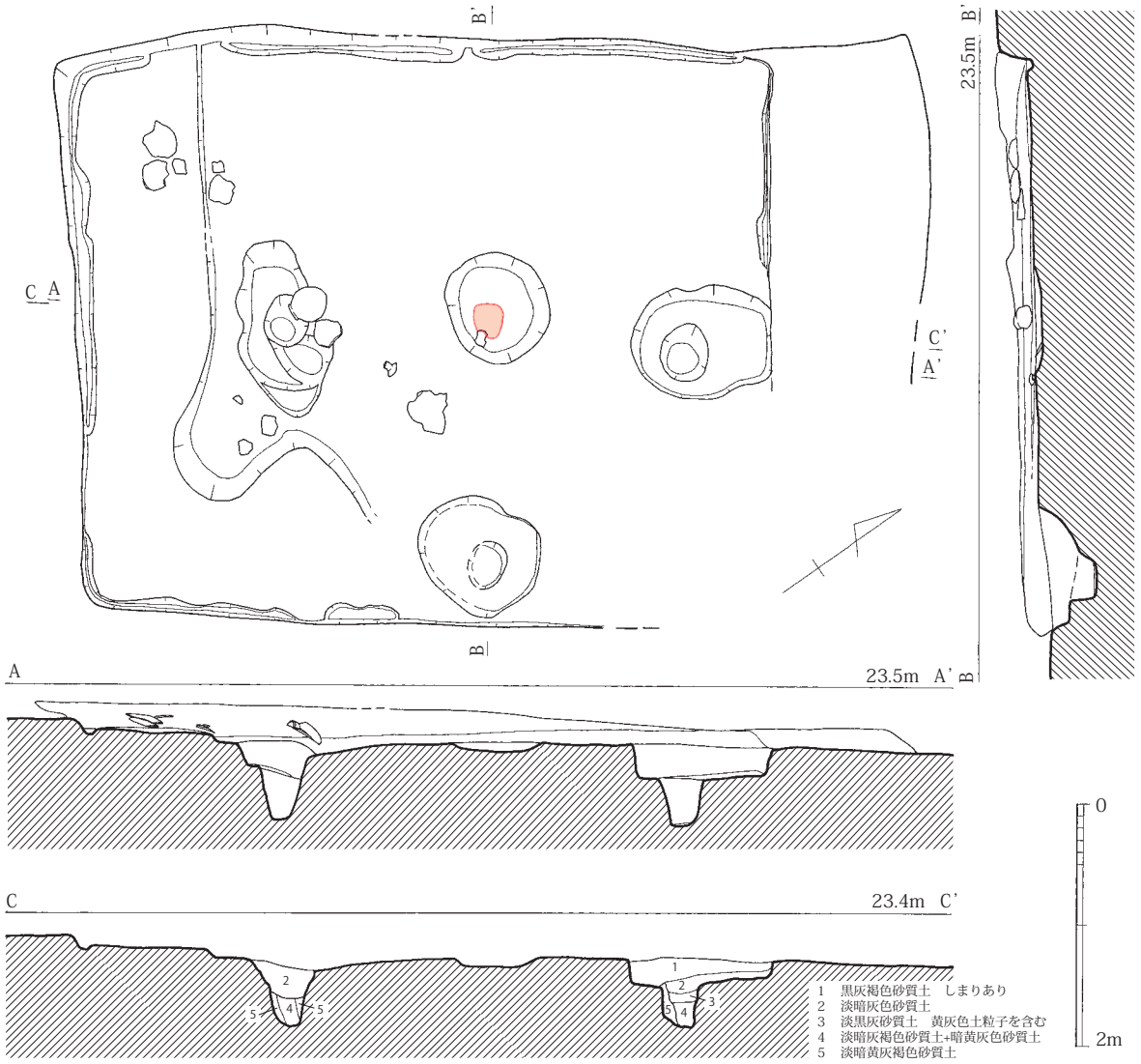
第 61 図　３次Ⅰ区１・２号竪穴住居跡実測図（1/60）

ている。上半はタタキ後ハケで、内面はハケ調整である。口縁端部に返りはない。外面は使用変色しているが内面には変色がない。２は在地系譜の甕で外面ハケ、内面はケズリ後未調整で、胴上半は器壁が厚い。肩部の沈線は途切れているので意図的なものかは不明である。３は南主柱穴から出土した布留式甕で、口唇部は平坦である。外面はナデ、内面ケズリで、口縁部外面はナデ窪んでいる。内外黄橙色で変色なし。４は口縁端部に小さな返りがある布留模倣甕で、外面ハケをナデ消しており、内面はケズリ。頸部内面の沈線はヘラ状工具によるオサエ痕と見られる。５は庄内模倣甕で、外面胴部は水平方向のタタキ、胴上半はタタキ後ハケ調整。内面は胴部ケズリ、口縁部はハケで、頸部にオサエによる平坦面をもつ。外面底部は赤化しており煮沸使用している。６は在地系譜の甕で外面ハケ、内面胴下半はケズリ、上半は目の細かいハケで、外面胴下半は黒灰褐色に変色しているので煮沸使用している。

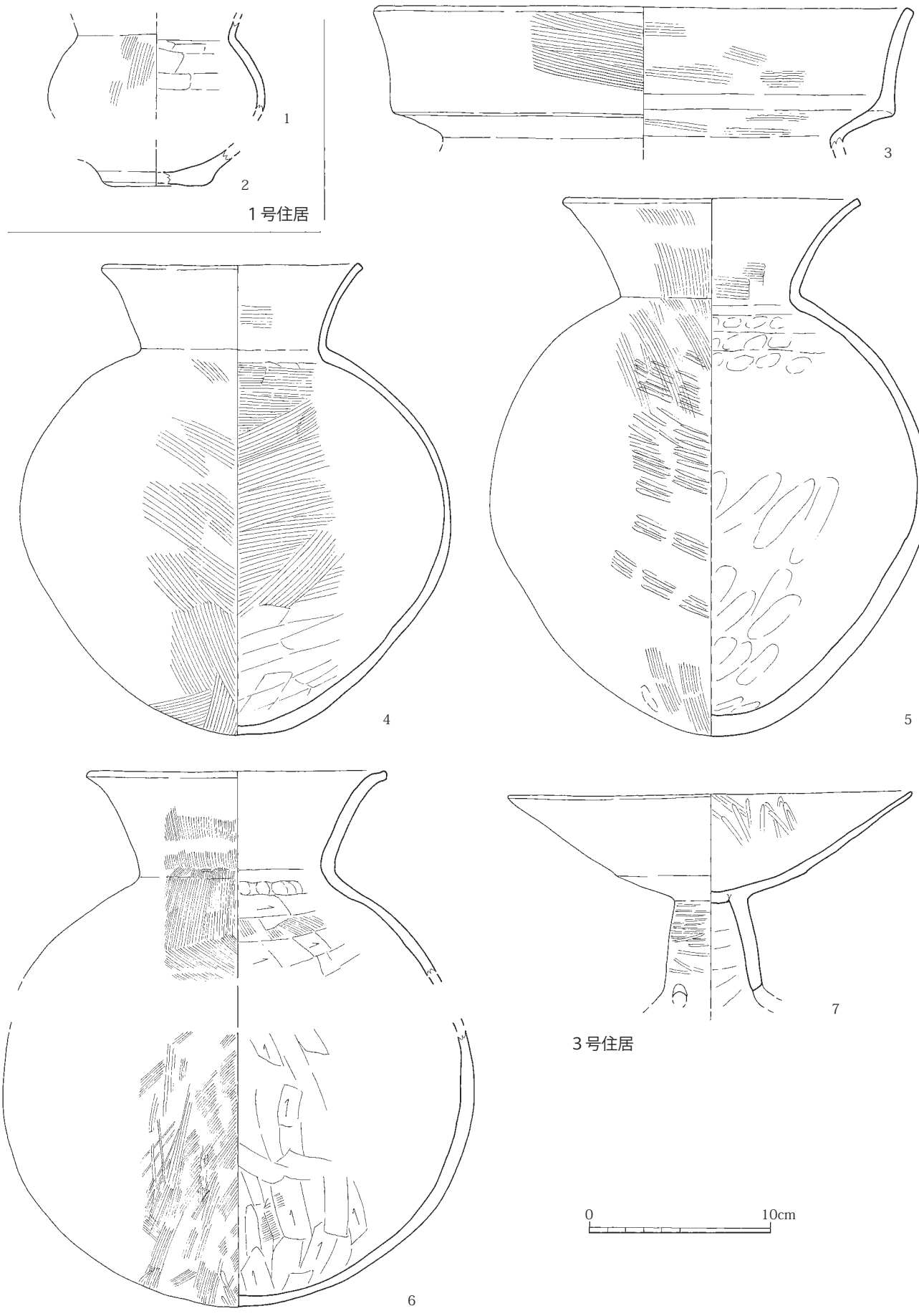
その他に第 104 図 14 のガラス小玉が出土している。

４号竪穴住居跡（図版 39・40、第 64 図）

調査区南東部に位置し、５号竪穴住居跡に大部分を切られていたが、当初は１つの遺構と認



第 62 図　3次Ⅰ区3号竪穴住居跡実測図（1/60）



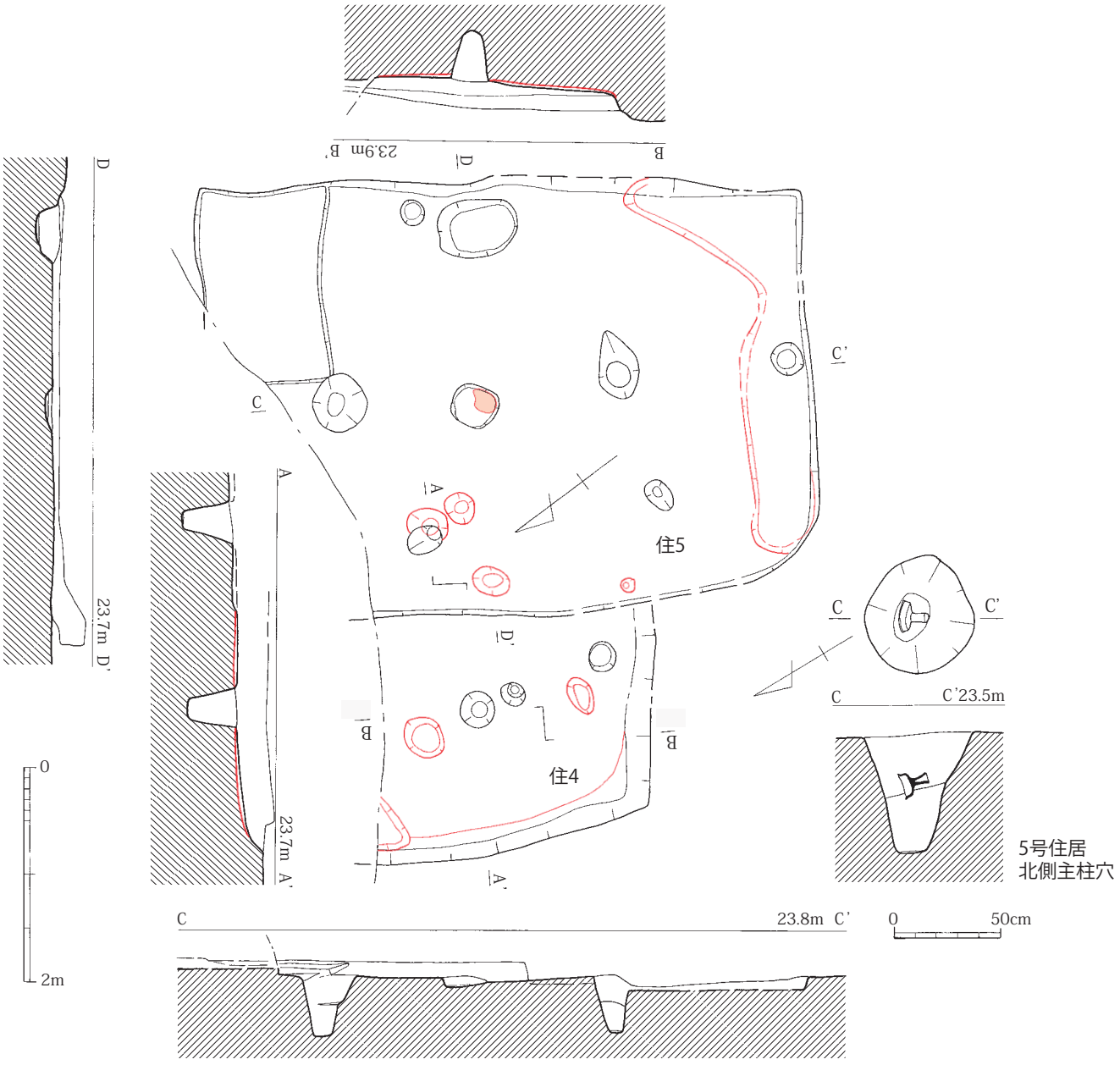
第 63 図　3次Ⅰ区1・3号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

識していたため出土遺物は５号竪穴住居跡と混ざった可能性がある。また、中央部は別の竪穴住居跡のコーナーらしいＬ字状のプランに切られていた。北側は限定協議範囲内に入るのでプランも規模もわからない。しかしながら、久住ⅡＢ古段階の５号竪穴住居跡に切られており、出土遺物から見て弥生時代後期の２本主柱穴の方形プランの可能性が高い。この推定のもとに、５号竪穴住居跡から検出された柱穴とで２つの主柱穴を想定したが、中央の炉跡も屋内土坑も貼床も検出されていないので確実性に欠ける。しかしながら、屋内施設をもたない小型竪穴住居跡も存在するので、竪穴住居跡として報告する。

出土遺物から弥生時代後期後半から末であろう。

出土遺物（第 65 図）

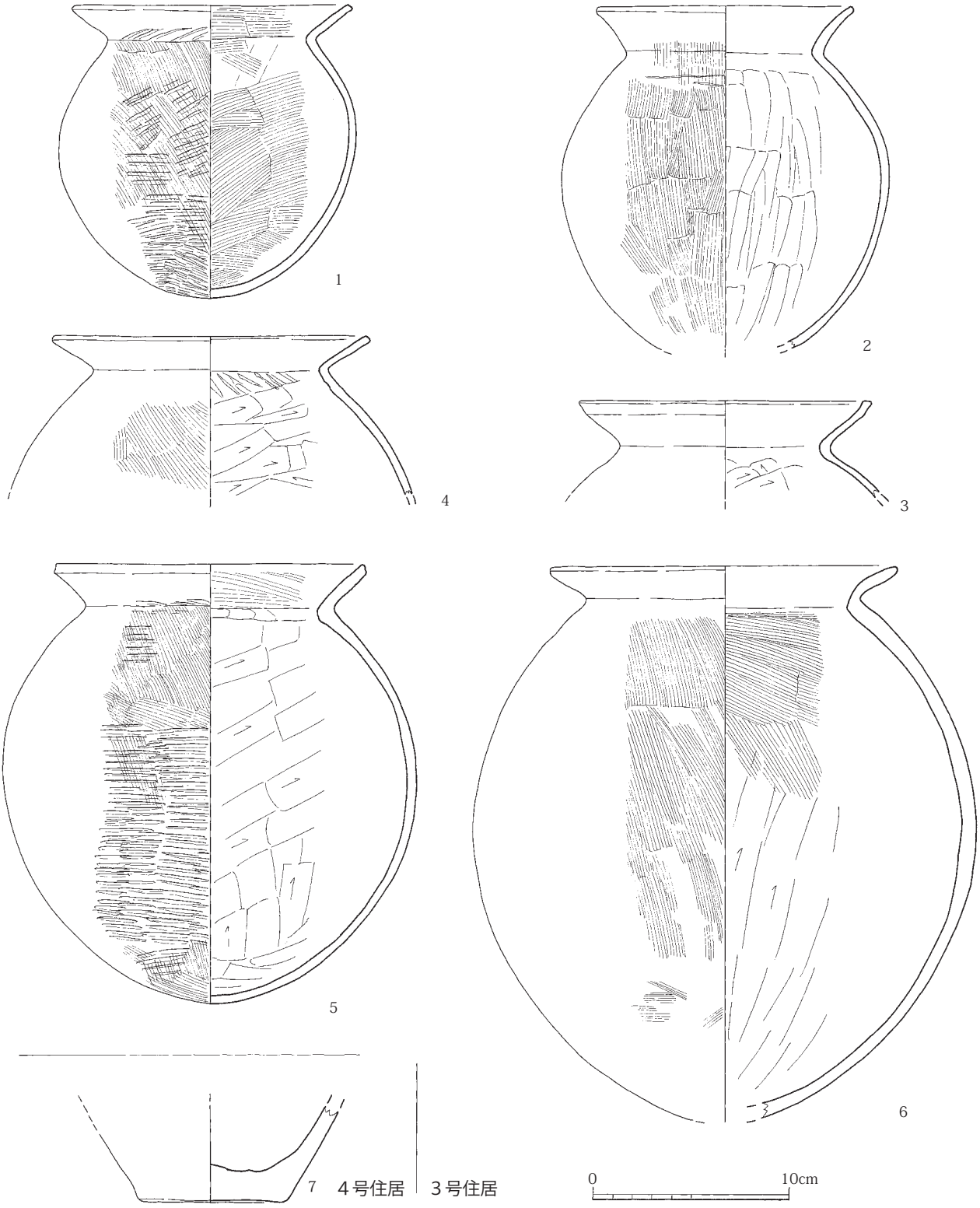
７は平底で、外面が赤化しているので甕であろう。摩滅のため調整不明。



第 64 図　3次Ⅰ区４・５号竪穴住居跡実測図（1/60・1/30）

５号竪穴住居跡（図版 39・40、第 64 図）

調査区南東部に位置し、８号竪穴住居跡に切られ、４号竪穴住居跡を切り、床下から８号土坑が検出された。４号竪穴住居跡を切っており、当初は１つの遺構と認識していたので出土遺物は４号竪穴住居跡と混ざった可能性がある。北東隅は限定協議範囲内に入る。長方形プランで、574 × 404cm を測る。２本主柱穴で、北側の柱穴中位からは高坏の欠損品が出土しており、主柱穴中位まで抜き取り穴が入っていたことがわかる。南側主柱穴上位には高坏の坏部が床面



第 65 図　3次Ⅰ区3・4号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

に伏せた状態で出土したが、意図的なものかはわからない。中央の炉跡と屋内土坑も検出され、北東隅に削り出しのベッド状遺構が作り付けられていた。炉跡の北側からは台石が出土している。

出土遺物から久住ⅡＢ古段階（布留０式新段階）であろう。

出土遺物（図版 50・53、第 67・101 図）

第 67 図１は内外ハケ調整の弥生後期からの在地系甕で、外面口縁部に煤が付着しているので煮沸使用している。内面頸部はオサエ列による平坦面がある。２は外面目の細かいハケで、内面はケズリ、肩部はハケ調整。内面に褐色に変色している部分があるが、外面には使用変色がない。３・４は高坏の坏部で、内外ミガキが入る。４は変色しているが本来黄灰褐色であったようだ。５は坏部が屈曲する高坏で、外面ナデで、脚部はミガキが入る。内面ヨコハケ。橙褐色を呈する。６は丹塗磨研土器片で、外面に沈線が１条見られる。広口壺か高坏の口唇部だろうか。７は器台の坏部で、口縁部はオサエの凹凸ナデ消している。坏部下半にはミガキが入り、橙褐色を呈する。８・９は小型高坏か器台の脚部で、８は縦に２段の透かし孔がある。穿孔は上段に４ヶ所、下段は上段と互い違いの位置に４ヶ所入っている。内外ハケで、胎土にカクセン石と白雲母がないので搬入品の可能性がある。９は外面タテハケ、内面ヨコハケで、裾部と脚部の間が屈曲し中実を意図している。10 は坏で、手捏ね成型で、オサエ痕をナデ消しているが口縁部は波打つ。

第 101 図３の打製石鏃、21 の掻器が出土している。

６号竪穴住居跡（図版 40、第 66 図）

調査区南側中央に位置し、７・８号竪穴住居跡を切る。主柱穴は３本が検出された。本来柱穴は４つあったと考えられるが１基検出できなかった。壁は 10 ㎝ほどしか残っておらず、プランは隅丸正方形で、南西隅は調査区外に延びる。貼床は不明瞭で貼床下の掘り込みと見られるものも７号竪穴住居跡を切る部分でしか確認できなかった。主柱穴は深いが、砂質土であったため掘りすぎた可能性もある。竈は北壁中央に敷設されており、主軸方向はＮ－6°－Ｗ となる。竈袖は不明瞭だったが黄色粘土が混じるので確認できた。しかし、支脚も支脚抜き穴も袖補強材もなかった。周溝は見られず、出土遺物は床面直上のものが多い。

出土遺物から７世紀初頭から前葉であろう。

出土遺物（図版 50・53・54、第 67・101・102 図）

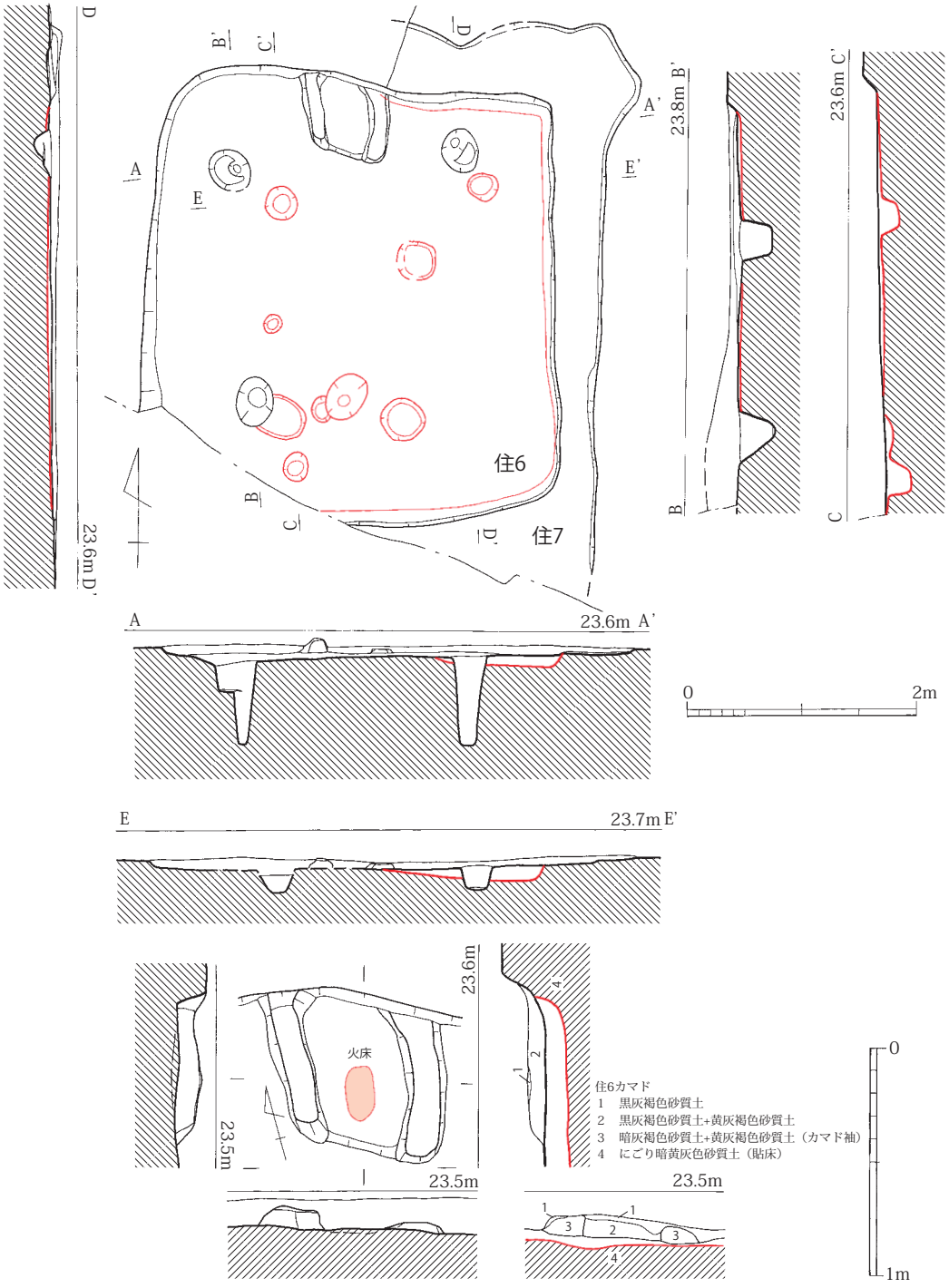
第 67 図 11 は甕で、外面は目の粗いタテハケで、内面はケズリ。内外赤橙褐色を呈し、変色はなく堅緻。12 は高坏の坏部で、外面タテハケ、内面ヨコハケ。胎土は精良で黄灰白色を呈する。13 はミニチュアの壺で、手捏ね成型。外面はナデ仕上げで、内面は積み上げ痕を残す。外面の沈線は工具痕だろう。14 は小型丸壺で、手捏ね成形のため器面に凹凸を残す。表面にはざらつきがあり、胎土に砂礫を多く含む粗製品であるので実用品ではないだろう。15 ～ 17 は須恵器坏蓋で、15 の天井部は回転ヘラ切り時に窪んでいる。内面はナデ仕上げで、火膨れが見られる。16 は回転ヘラ切り後ナデ仕上げで天井部が歪んで器高が低くなっている。17 は器壁が薄く、天井部にヘラ記号があり、欠損しているため全体はわからないが３本の沈線が見られる。18 は坏身で、回転ヘラ切り後ナデ仕上げで、器壁が厚く胴部の凹凸が大きい。19 は瑞の体部で底部外面は格子目タタキ、肩部に沈線が入る。頸部には絞りが観察できる。20 は縄文

土器の深鉢口縁部で、外面に数本単位の凹線が入り、Ｖ字状に見えるが施文単位の端部が残ったものである。広田Ⅳ式。

その他に、第 101 図１の打製石鏃、第 102 図 10 の石核が出土している。

７号竪穴住居跡（図版 40、第 66 図）

調査区南側中央に位置し、６・８号竪穴住居跡に切られる。主柱穴は６号竪穴住居跡の床面下から３基が検出された。本来柱穴は４つあったと考えられるが１基検出できなかった。壁は５㎝ほどしか残っていない。特に南端部は削平されているため残っていないが、プランは正方



第 66 図　３次Ⅰ区６・７号竪穴住居跡実測図（1/60・1/30）

形か方形だったようだ。ほとんどが６号竪穴住居跡に切られているので詳細は不明だが、主軸方向は６号竪穴住居跡と同じことから、６号竪穴住居跡の建替えの可能性もあるが、８号竪穴住居跡に切られ、出土遺物から古墳時代初頭から古墳時代前期に属するので、偶然同方向で切り合っていると考えられる。

出土遺物（第 67 図）

21 は変色が見られるので甕の肩部片だろう。肩が張らない器形で、外面タテハケ、内面ケズリなので弥生後期以来の在地系のものだろう。

８a・b 号竪穴住居跡（図版 40・41、第 68 図）

調査区南側中央に位置し、６号竪穴住居跡に切られ、５号竪穴住居跡を切る。主柱穴は深いので他のピットと明瞭に区別でき、４基が検出されたが、建替えと見られる主柱穴がやや内側にずれて検出された。南西隅は調査区外に延び、南東隅を６号竪穴住居跡に切られるが、平面プランは正方形であろう。切り合いがないのでプラン拡大に伴う建替えであろう。壁は 20㎝ほどしか残っておらず、貼床と床下の掘り込みは確認できた。砂質土であったため掘りすぎた可能性もある。竈は北壁中央に敷設されており、主軸方向はＮ-4°-Ｅとなる。竈袖は黄色粘土を部分的に使用していたので確認でき、框石の部分の粘土が崩落した状態で検出されたが、粘土ではなく砂岩が風化したものかもしれない。竈内の支脚は床面からやや浮いており、据えるための穴もなかった。抜いた支脚を竈祭祀の際に入れた可能性があるが、石自体が焼けていないので、支脚ではない可能性もある。また、袖下に位置する可能性が高かった建替え前の火床は確認できなかった。出土遺物は床面直上のものが多く、出土遺物から６世紀末～７世紀初頭に属する。

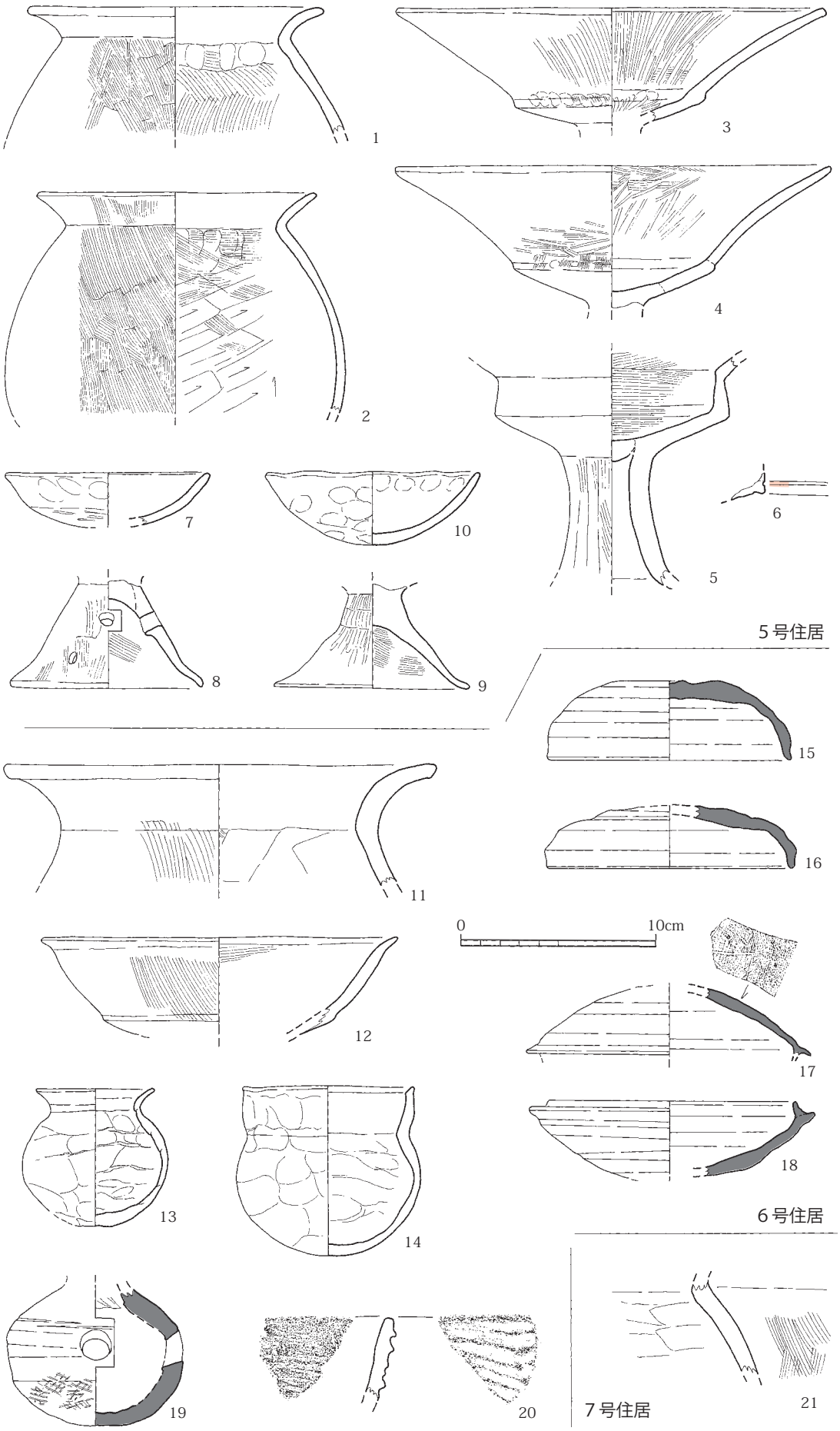
出土遺物（図版 54・61、第 70・101・103・104 図）

第 70 図１～３は土師器である。１は高坏で、外面の坏部と口縁部の積み上げ部の外面がナデられていないので、積み上げ時の窪みが残っている。口縁部外面はハケ。内面は摩滅のため調整不明。２は甕で器壁が厚い。外面がタテハケで、内面ケズリ。外面に大きな凹線があるが、偶然ついたものではないだろうか。３は甑で、外面はタテハケで口縁部はナデ。内面はヨコハケ。内外にぶい暗黄灰色を呈する。４～８は須恵器で、４は壺蓋であろう。天井部端に凹線が入る。５・６は坏蓋、７・８は坏身と見られる。

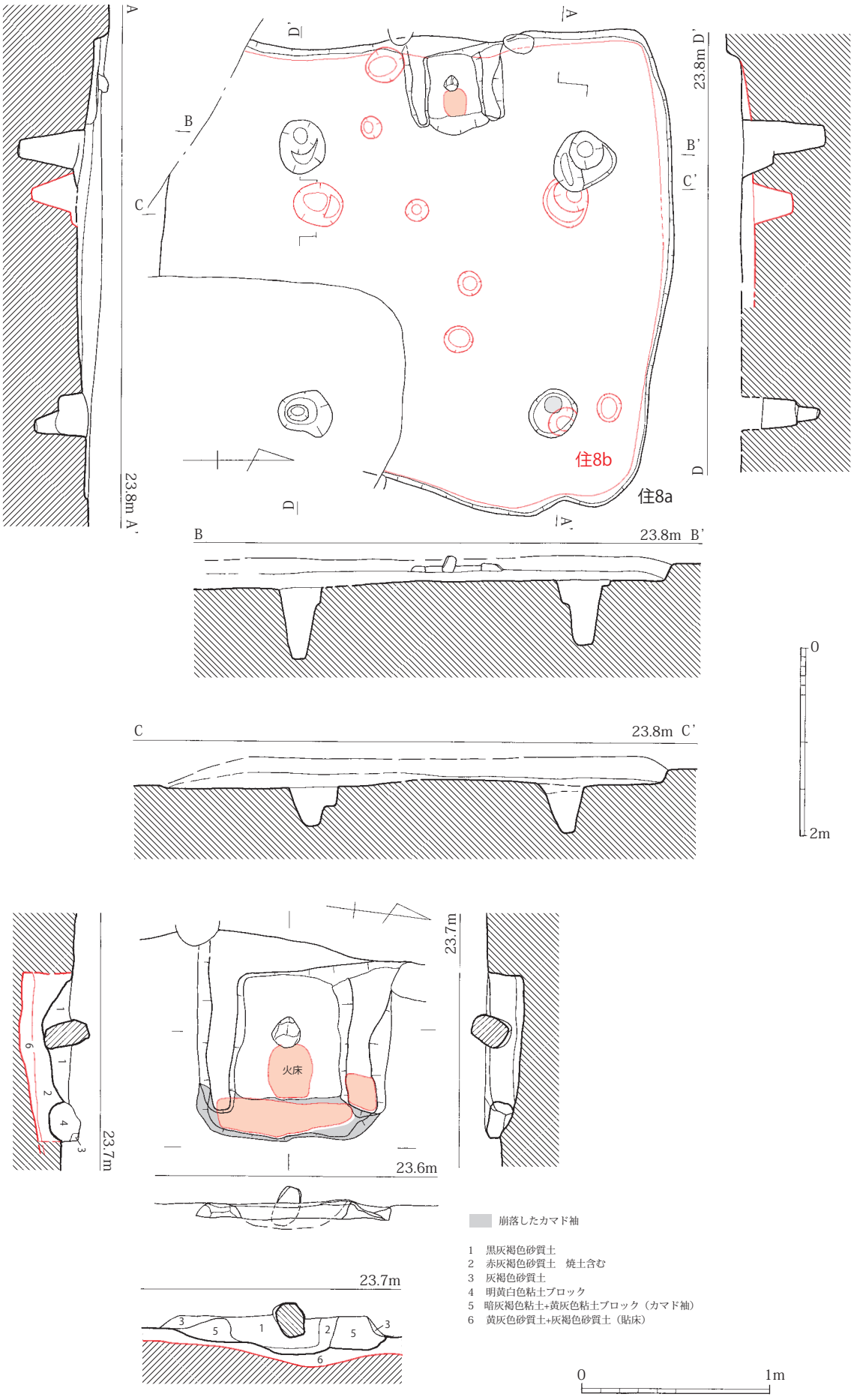
この他、第 101 図 16・17 の掻器、第 103 図７の磨製石斧基部片、第 104 図３の管状土錘、12 の耳環が出土している。

９a・b 号竪穴住居跡（図版 41・42・47、第 69 図）

農道西側調査区の南端側に位置し、20 号竪穴住居跡を切り、７号土坑とは近接しているのみで切り合い関係は不明瞭だった。北西隅は 11 号土坑を切る。造り付けベッド状遺構はコの字形配置に多く見られる配置パターンだが、11 号土坑と切り合う部分からは検出されていない。南西半分が調査区外に延びるため不確実だが、北東隅にＬ字形に敷設されていたと判断した。プランは正方形と推定でき、主柱穴はベッド状遺構の内側隅に見られたが、北東の主柱穴はもう１つの柱穴と切り合うので建替えの可能性を考えた。東辺にわずかにずれるプランと北西隅にわずかにずれるプランがあったので、これを 9b 号とする。9b 号に伴う主柱穴はベッド状遺



第 67 図　3次I区5～7号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）



第 68 図　3次I区8a・b 号竪穴住居跡実測図（1/60・1/30）

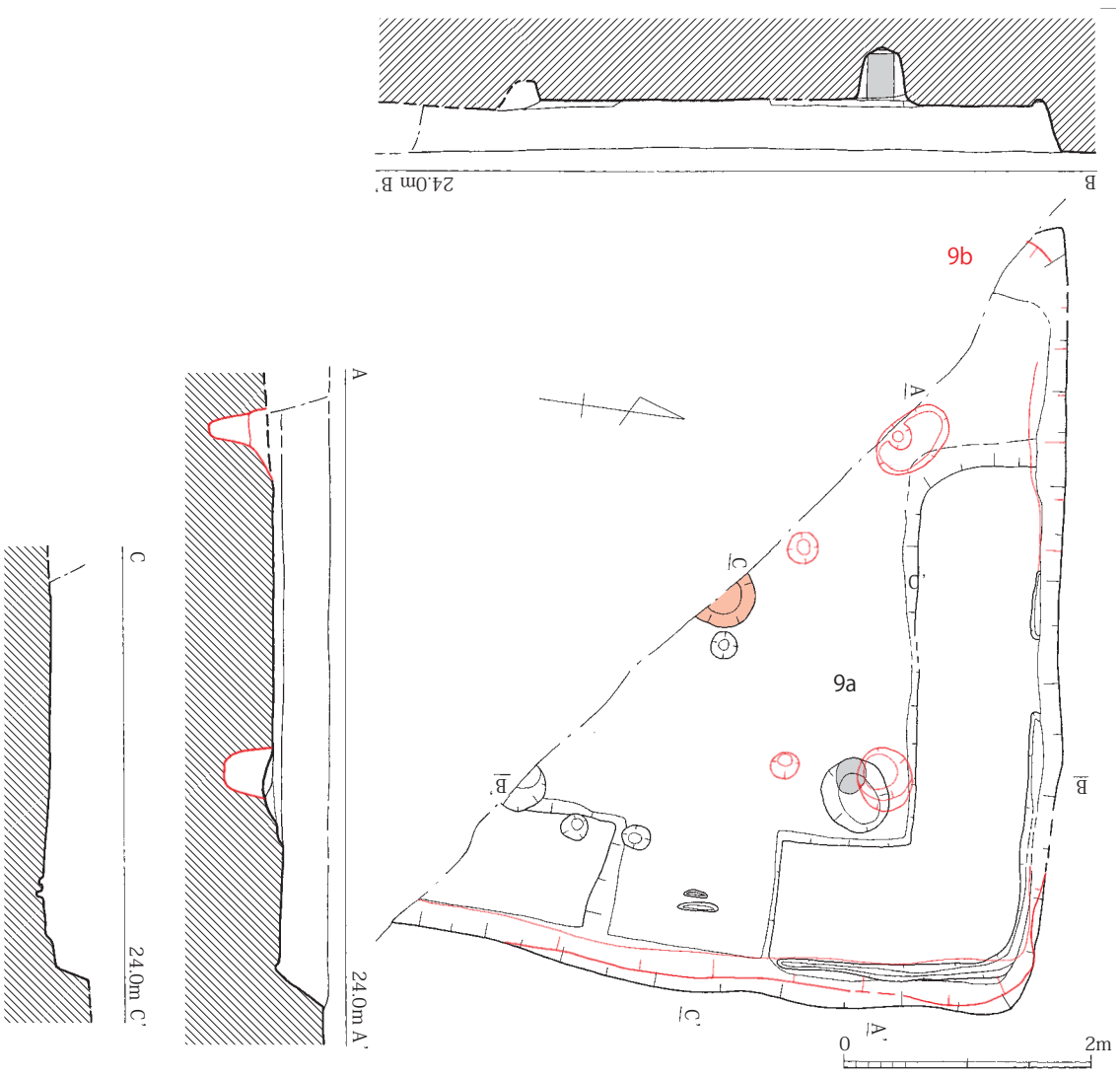
構の下から検出されており、北西の柱穴が 9a 号のものだとすると、柱穴の軸方向と壁の平面プランのずれが大きい。おそらく、調査区外に 9a 号の北西主柱穴があり、平面プランの拡大に伴う建替えなのだろう。この仮説によれば、9a 号は北辺が約 620cm、9b 号は 605cm ほどを測る。

貼床は確認できたが床面下の掘り込みはほとんどなかった。壁は約 40cm 残っており、調査区内で最も残りが良い。屋内土坑の位置するコの字形ベッドの開口部には、長さ 36cm と 19cm の平面円弧状の窪みが２つ発見された。この掘り込みの周囲は黄色粘土化していたので基盤層が掘り込み内の木質の影響を受けていることがわかる。深さは５cmほどしかないので、丸太を縦に割って円弧側に刻みを入れた梯子を挿し込んで固定した痕跡ではないだろうか。しかし、掘り込みはほぼ垂直で、壁に立てかける様な角度ではなかったので梯子を支える板の痕跡だろうか。２つあるのは建替えと見られ、建て替え後も床面の高さはほぼ同じだったと考えられる。9a 号については周溝と炉跡も確認できた。壁の残りの良さに比べて出土遺物は少なく、床面近くから出土したものはない。

出土遺物から久住ⅡＢ古段階（布留０式新段階）だろう。

出土遺物（図版 54、第 70・103 図）

第 70 図９・10 は布留式甕で、タテハケ後肩部にヨコハケが入り、内面はケズリ。９は口縁端部に小さな返りがつくが、10 は明瞭である。10 の外面はタタキをハケで消しており、肩部



第 69 図　3次Ⅰ区9a・b 号竪穴住居跡実測図（1/60）

に屈曲があるのはタタキの段によるものである。11・12 は高坏で、11 は坏部で、口縁部は内外ハケ、坏部内面はミガキ。12 は脚部で精製器種の線状のミガキが入る。穿孔は間隔から３ヶ所で、脚部内面はケズリ。13 は器台の脚部で坏部内面はナデ、脚部外面はミガキ、内面はハケ。14 は小型甕の図上接合で、外面は頸部がオサエ後ヨコハケ。内面はオサエ後ナデ。胴部は外面ナデで、内面はケズリ。煮沸使用の痕跡はない。15・16 は小型丸底壺で、15 は内外オサエ後ハケで、胎土に金雲母が目立ちカクセン石がないことから搬入品の可能性が高い。16 は口縁部と体部の図上接合で、外面体部はミガキ、外面口縁部と内面はナデ。

この他、第 103 図 11 の砥石が出土している。

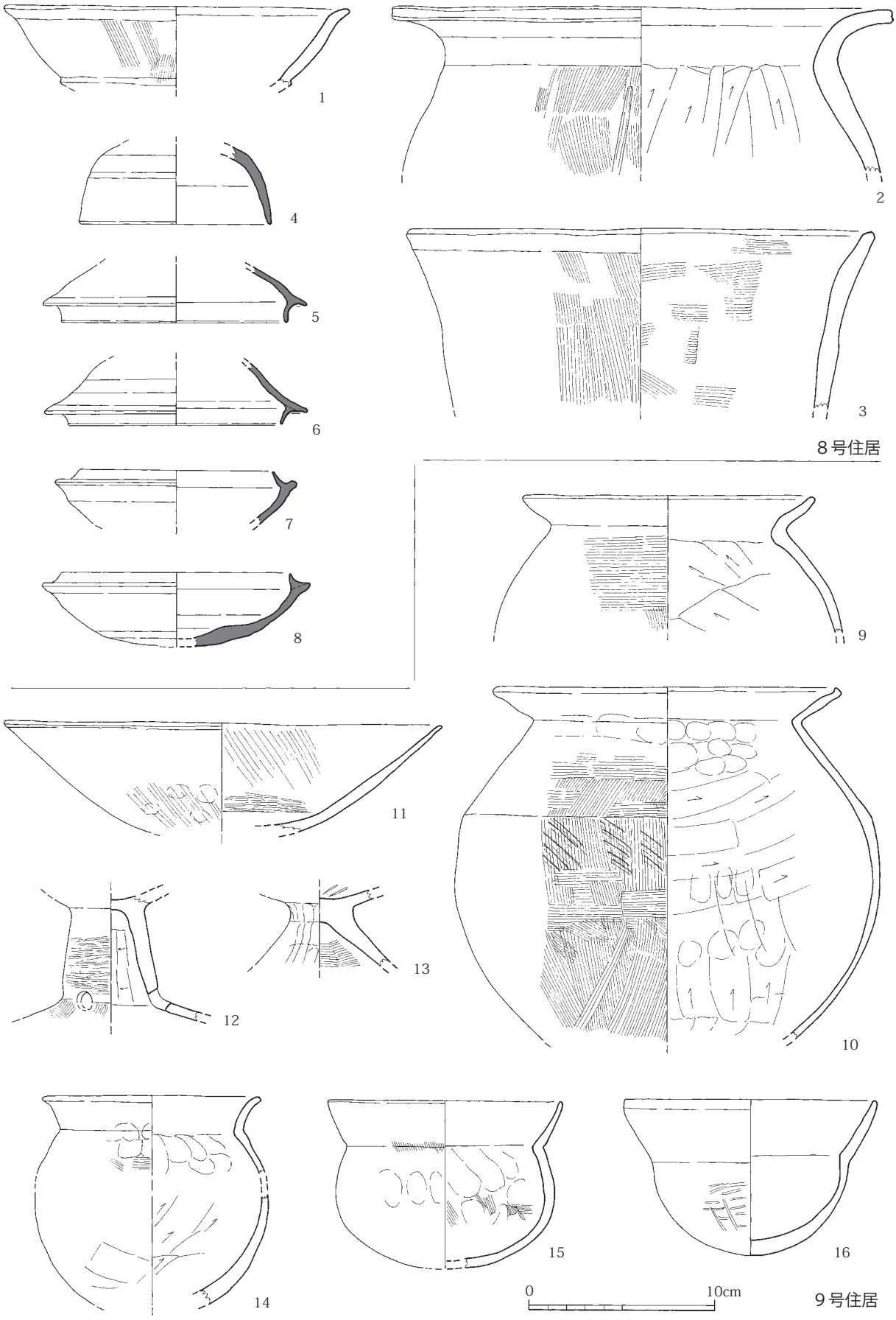
11 号竪穴住居跡（図版 40・43、第 71 図）

調査区中央部南に位置し、西側を 15 号竪穴住居跡に切られる。南端部は限定協議範囲に入っていたが、遺物が多く出土する遺構で調査区外に大きく延びなかったことから中津工事事務所と協議の上拡張して全体を調査した。その結果、長軸は約 615、短軸 528cm の長方形プランで、４本主柱穴住居であることがわかった。屋内土坑が東壁側に付き、中央によく焼けた炉跡も検出された。主柱穴は 60cm ほどの深さがあるので他の柱穴と明瞭に区別でき、平面形が不整形なのは柱の抜き取りによるものだろう。貼床は明瞭で、床下の掘り込みは不整形だった。出土遺物はほぼすべて床から浮いており、プラン全体に均等に見られた。久住ⅡＢ古段階からⅡＣ古段階の時期差が見られるので、住居廃絶後廃棄土坑として長期間使用されたようだ。使用時期はⅡＢ古段階（布留０式新段階）で、最終埋没はⅡＣ（布留１式古段階）であろう。

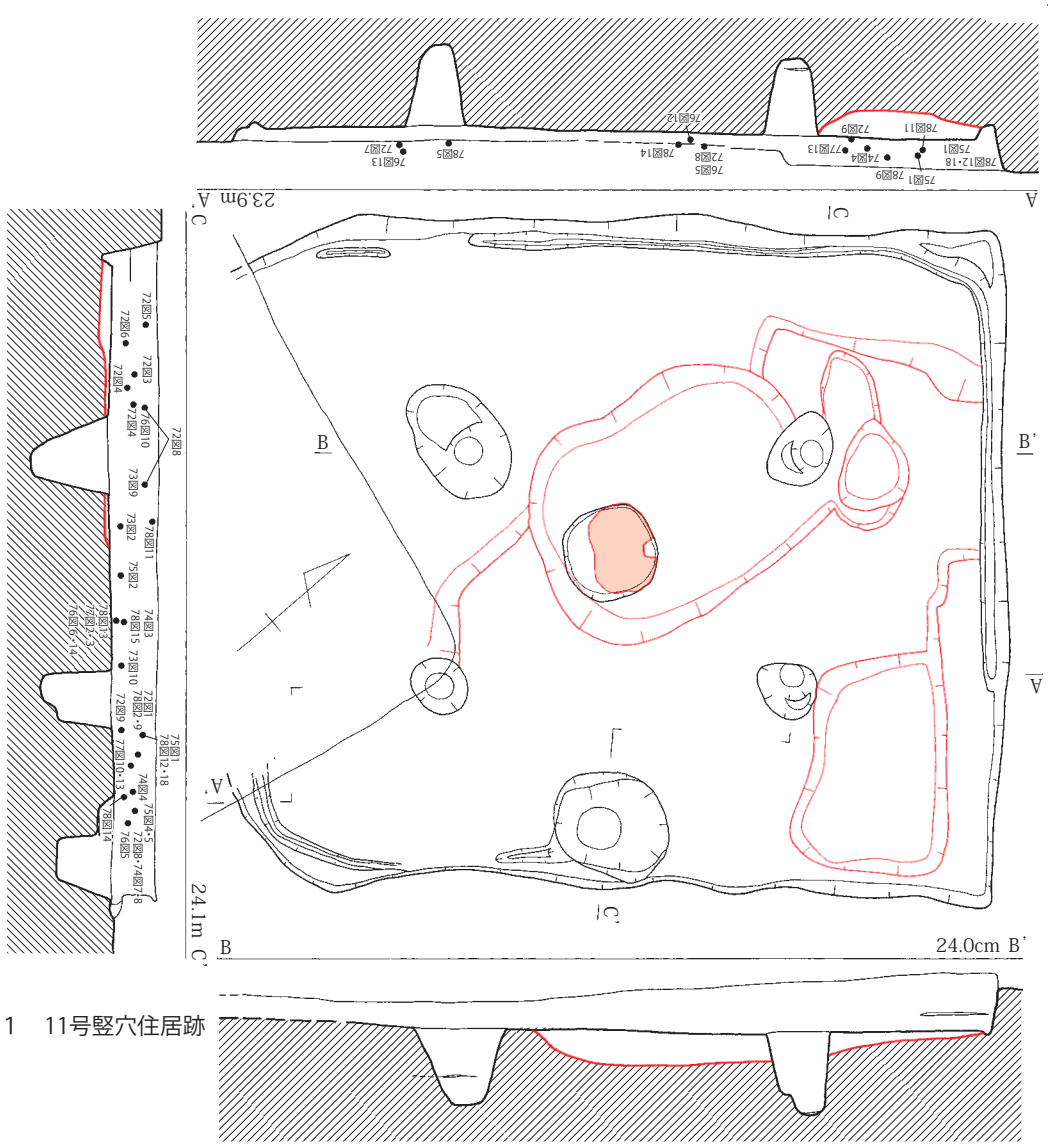
出土遺物（図版 50・51・53・54、第 72 ～ 78・101 ～ 104 図）

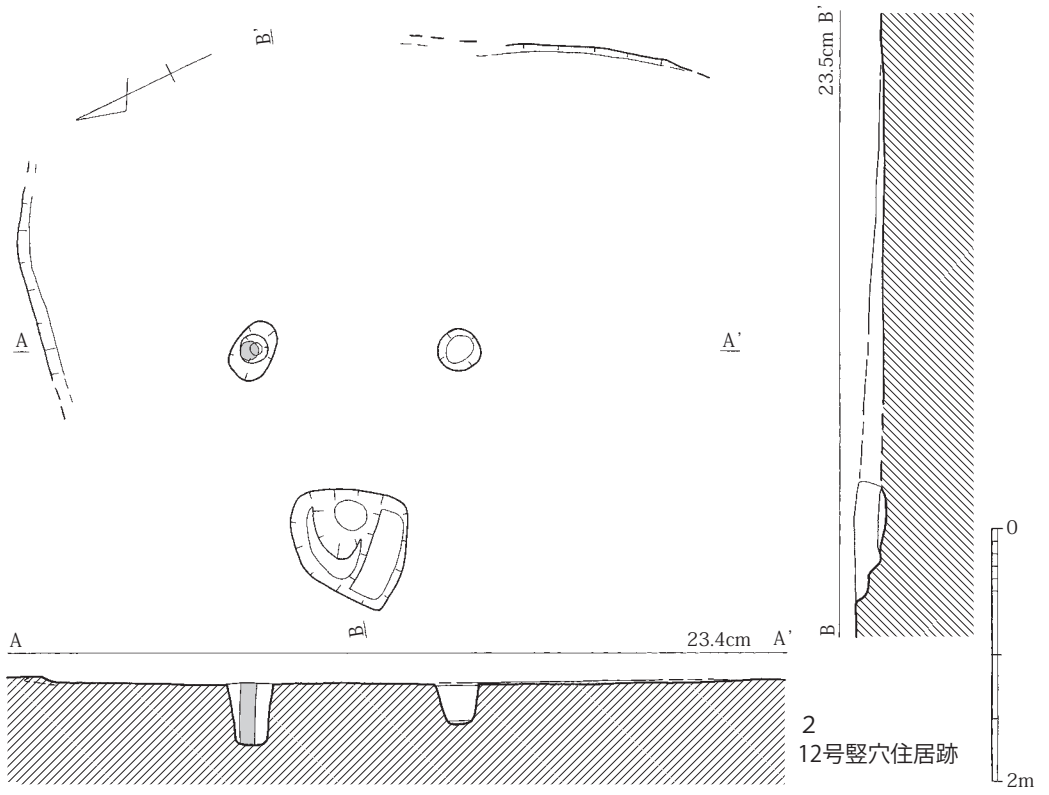
第 72 図１～ 10 は直口壺である。１～３は頸部が内傾して口縁を積み上げるタイプで、口縁部は内外ハケで肩部はケズリ。３の外面は摩滅のためハケ工具の単位だけが残っている。４～ 10 は頸部が内湾せず、丸みを持つものがあるものの突出して口縁を積み上げるタイプで、５・６は外面と口縁部内面はハケで、肩部はオサエのみのため６には積み上げ痕が明瞭に残る。４・７・９・10 は内面ケズリ。8 は肩部が大きく膨らむ器形のため、内面の調整が可能なので内面にもハケが入る。11・12 は二重口縁壺の口縁部で、11 は大型壺で、頸部はほぼ直立するものと見られる。外面はハケ状工具によるナデ。12 は山陰系で屈曲部が突出しており、頸部内面にケズリが残る。

第 73 図１～６は壺で、１は屈曲部外面に刻目突帯を貼り付け、口縁部が大きく外反するもので、外面はタテハケだが、内面は目の粗いヨコハケ。２は屈曲部に丸みをもつ二重口縁で、外面はタケハケ、内面はケズリ。器壁が厚く、３の底部と同一個体になる可能性がある。４は在地系複合口縁壺によく見られる頸部に刻目突帯を貼り付ける壺で、突帯の端部が垂れ下がっている。５は小型の二重口縁で、外面タテハケ、内面ヨコハケで、器壁が厚い。６は山陰系二重口縁壺で胎土は在地のものである。内外ナデで、外面黄橙褐色、内面にぶい灰褐色を呈する。７～ 13 は弥生時代後期以来の在地系甕で、７は内外ハケで外面頸部の沈線はナデの工具端の傷と見られる。器壁が厚く、歪みがあるため最大径の位置は場所によって異なる。外面は煮沸使用により器面の剥落と赤化が見られる。８は内外丁寧なハケで、内外黄橙灰色を呈する。９は内外丁寧なハケで、内面はケズリをハケで消しているかもしれない。口縁端部には返りはなく、口縁外面中位の段はナデ工具端である。10 は内外目の細かいハケで、内面はケズリ後に

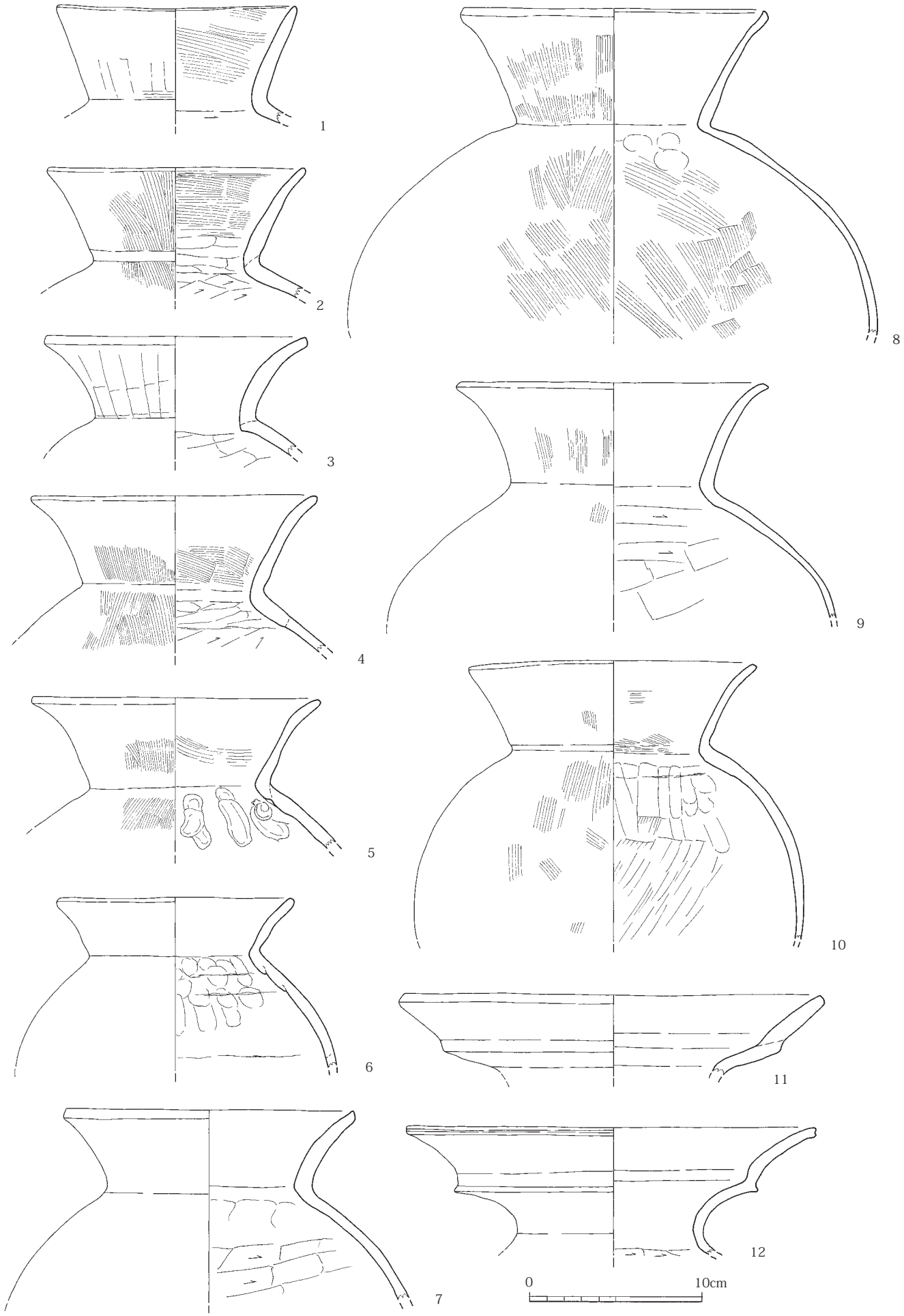


第 70 図　3次Ⅰ区8・9号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

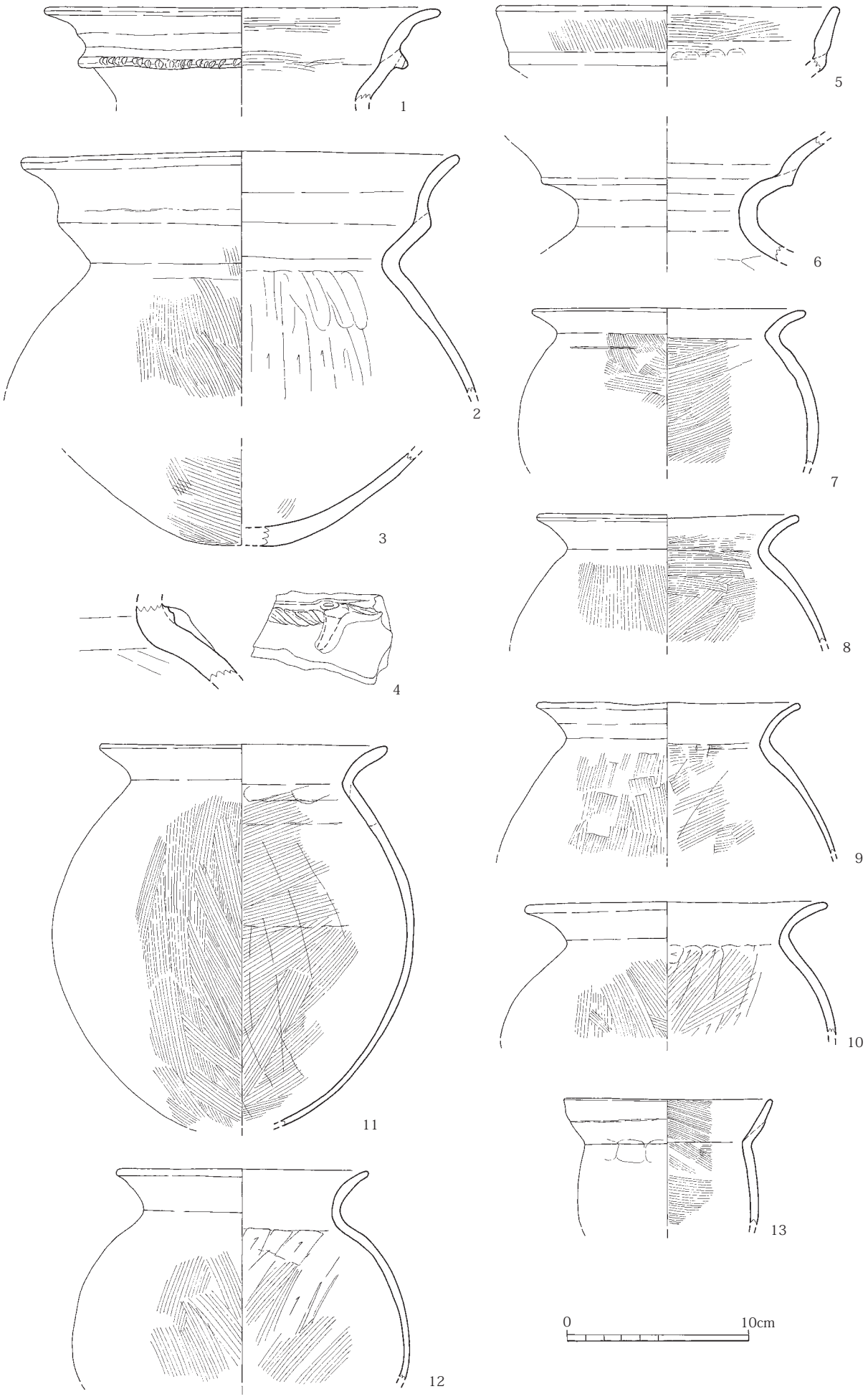




第 71 図　3次Ⅰ区 11・12 号竪穴住居跡実測図（1/60）



第 72 図　3次I区 11 号竪穴住居跡出土土器実測図1（1/3）



第 73 図　3次Ⅰ区 11 号竪穴住居跡出土土器実測図2（1/3）

ハケ調整している。内外黄灰色で変色は見られない。11は５号竪穴住居跡出土片と接合した。外面ハケで、内面はケズリ後ハケ。内外にぶい黄灰色で、外面肩部以下は変色が見られる。12は頸部径が広く肩が張らない特異な形態で、内面のケズリがハケ調整で完全には消えていないなど、他の甕とは異なることから搬入品の可能性がある。内外にぶい黄灰色を呈する。

第74図１～10は外面ハケ、内面ケズリ調整の甕で、１は口縁端部がやや返るので布留模倣甕だろう。外面摩滅で調整不明。内外黄灰白色を呈する。２・３は頸部径が大きく、頸部内面にナデ窪みによる突起がつく特異な形態で、胎土に雲母が入らないので搬入品の可能性がある。３から内面胴下位はハケ調整が入る。４は布留模倣甕で、頸部内面は尖る。外面のハケと内面のケズリをナデ消すもので、外面はハケがわずかに残る。５は外面ハケ、内面ケズリで器壁が厚い。肩が張らないやや長い球胴になるので弥生後期以来の在地系甕だろう。６～８も在地系甕が球胴化したもので、7は小型品であるため器壁が厚く、頸部内面にミガキが入る。使用変色は見られない。８・９は器壁が薄い在地系甕で、８は歪みが大きいので傾きと復元径は不確実である。10は口縁端部がやや内傾する在地系甕で、外面ハケ、内面ケズリ。

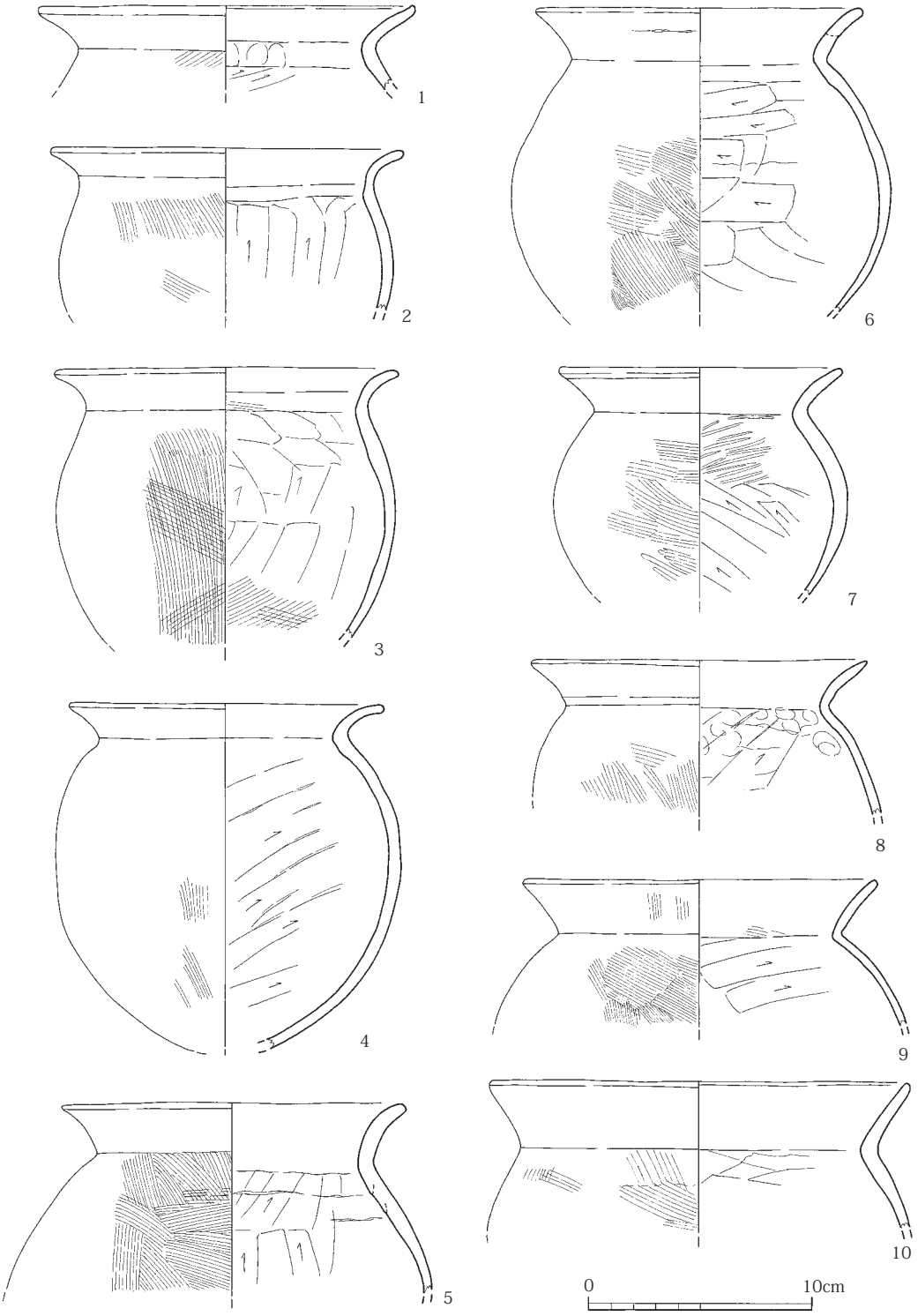
第75図１～５は布留式甕で、１・２は小型甕、３～５は中型甕で器壁が薄い。１は口縁端部に返りが見られる。外面は丁寧なハケで、口縁部から肩部にかけてはヨコナデ。内面はケズリ。肩部以下は灰黒色に変色している。２は口唇部がナデで平坦にされており、肩部から口縁部までの器壁が厚い。内面はハケで、外面は摩滅している。肩部に沈線が入るが途中で途切れている。赤化が見られ、煮沸使用している。３は口縁端部に返りが見られ、口唇部はナデで平坦にされている。外面タテハケ後ヨコハケで、内面ケズリ。胎土の混入物が他のものと異なるので搬入品の可能性がある。内面胴下半部は暗黄灰色に変色しているので頻度は少ないものの使用されている。４・５は口唇部外側が突出するもので、外面は摩滅し、内面はケズリ。内外にぶい黄灰色で変色なし。６は頸部から肩部まで完存している甕で、頸部径が広く、肩を最大径とするので布留式模倣甕だろう。外面ハケ、内面ケズリで、外面はにぶい暗黄灰褐色に変色しているので煮沸使用している。７は吉備系の二重口縁小型甕で、胎土は在地のものなので模倣品である。

第76図1は小型丸底鉢で、外面体部と内面口縁部はオサエと丁寧なハケで、内面胴部はナデ仕上げ。２～13は小型丸底壺で、３・４は器面摩滅で、２・５・７はハケが見られる。いずれも器壁が薄く作りがよいので、摩滅しているものも本来はハケ調整か、あるいは６のようなミガキが入っていたものと考えられる。８は底部にケズリが残り、器壁がやや厚い。９は胴内面のナデを除いて幅の狭いミガキ入る精製器種で、10は外面にハケ、内面口縁部は精製器種に見られる細いミガキが入る。11～13は短頸壺で、11・12は外面ハケで12はハケをナデ消している。内面はケズリとナデ。13は口縁が直立するタイプで、体部上半にハケが入るので長頸壺にはならない。外面は器面摩滅で調整不明だが平滑で仕上げが丁寧である。14は長頸壺で、内外丁寧なハケで、内面口縁部はミガキが入る。外面肩部には積み上げ痕が残っている。

第77図１～８は頸部で屈曲する鉢で、１～５は外面ハケ、内面ケズリで３は口縁部にヨコハケが残る。５は胎土の砂礫の種類が異なるので搬入品の可能性が高い。６は二重口縁をもつ鉢で、内外ハケで、口縁部はナデ。７・８は頸部が屈曲しない鉢で、7は径から大型品とわかる。外面は丁寧なタテハケで、内面口縁部はヨコハケ。内面胴部はケズリが入る。８は外面タテハケ、内面ヨコハケで、丁寧な調整である。９～12は台付鉢で、９は外面ハケ、10は内外線状

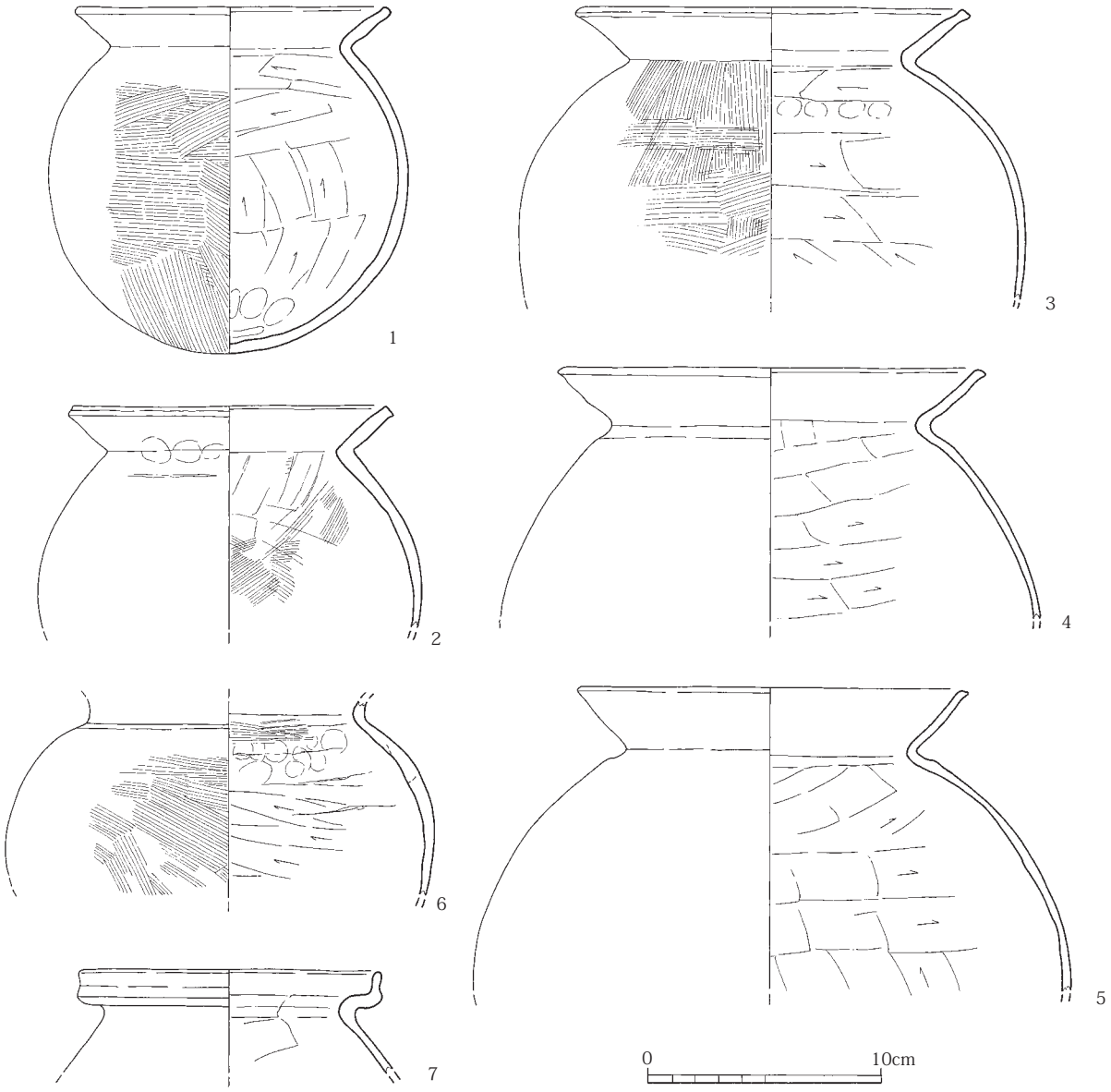
のミガキが入る精製器種で、11 は内外にケズリ状のナデが入る大型品である。12 は内外ケズリが粗く入り、台部はオサエのみの粗製品。13 は小型高坏か器台の脚部で、穿孔は１つしか残っていなかったので総数はわからない。内面ハケ。

第 78 図１は高坏坏部で、内外ミガキで、脚部との接合面は放射状に凹凸の刻みが入っている。２～４は高坏の脚部で、２は精製器種Ｂで、タテハケ後に線状のミガキが入る。穿孔は間隔から４ヶ所だろう。３は内外器面摩滅で、穿孔は間隔から４ヶ所だろう。４は坏部口縁部の積み上げ部ではずれているため、擬口縁状になっている。坏部内面は黒灰色なので伏せ焼きされた

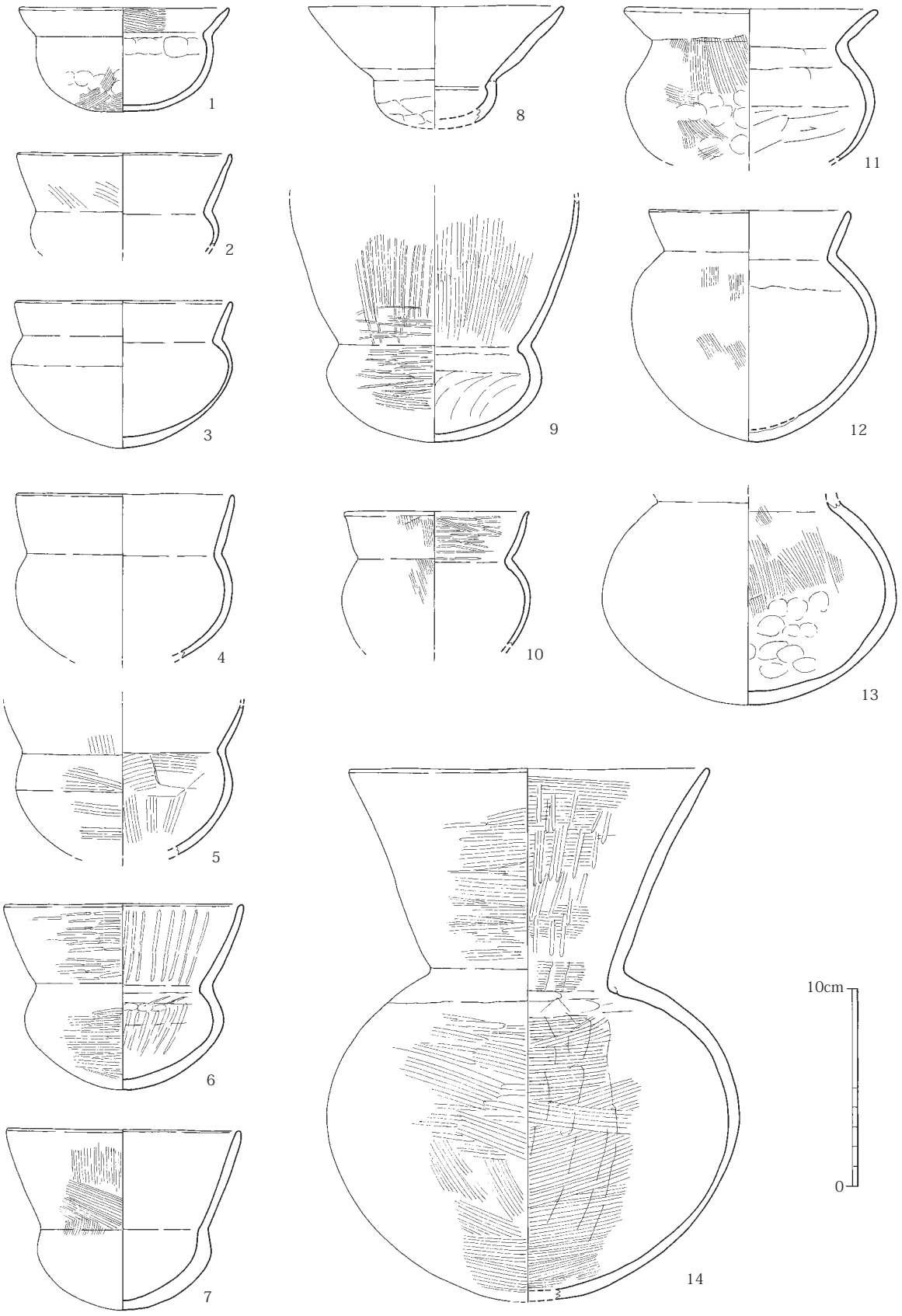


第 74 図　3次I区 11 号竪穴住居跡出土土器実測図3（1/3）

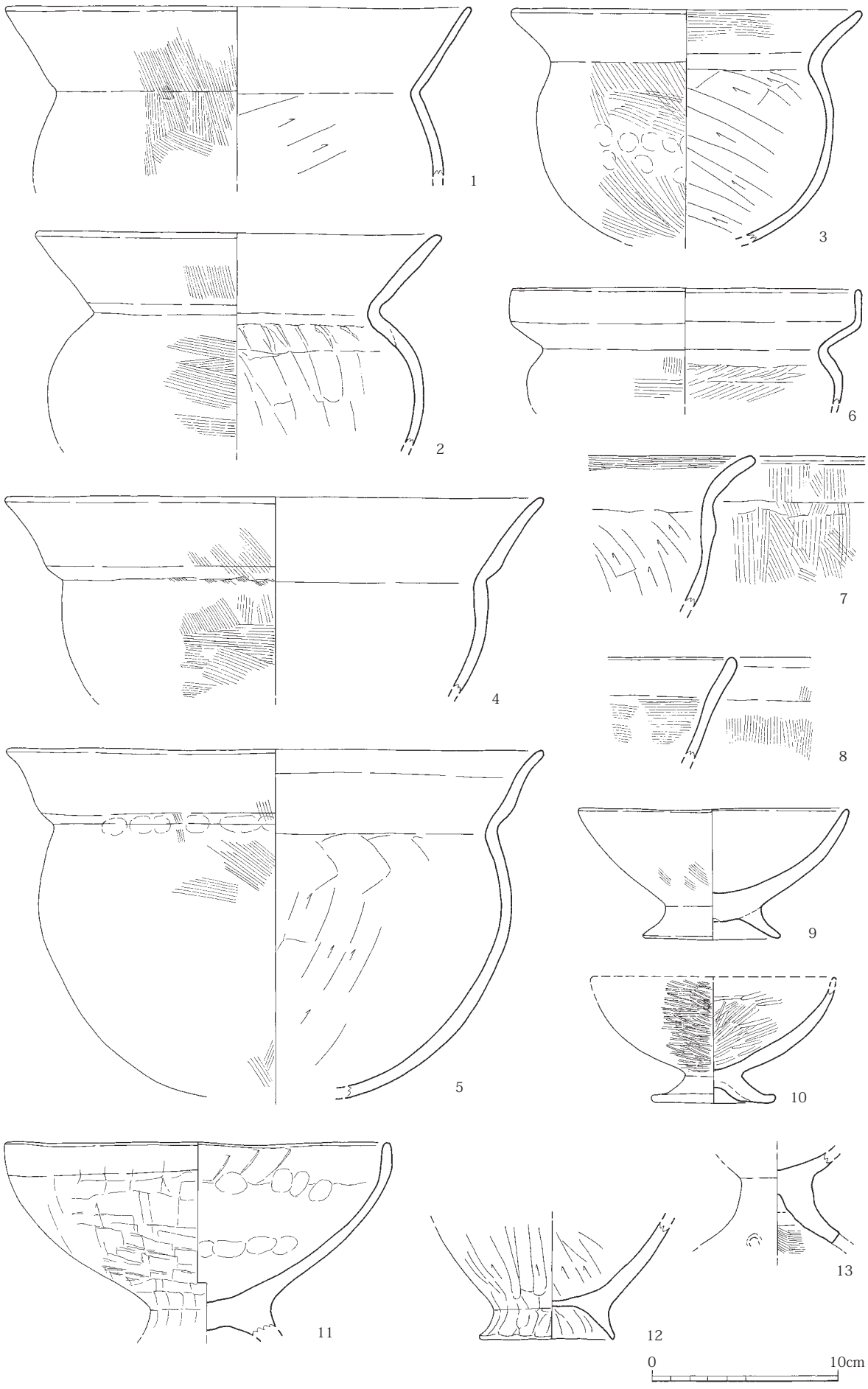
可能性がある。５・６は器台で、５は器面摩滅で調整不明だがつくりが良い。６は内外に丁寧なミガキが入る。坏部に底がなく鼓状を呈する。７は支脚で、内面は中位までナデで中位以下は中実で穿孔している。外面はオサエのみ。外面は２次焼成のため赤化している。８～11は身の深い坏で、８の器面は摩滅しているが平滑に仕上げている。９は手捏ね成型で、オサエ痕跡が目立ち、口縁部は波打つ。10は外面が胴部ヨコナデ、底部はオサエ、内面底部はケズリが残る。11は平底の坏で、胴下位はタタキが入る。内面の沈線はナデ工具痕である。外面中位に粘土積み上げ痕が残る。12～18は身の浅い坏で、12は外面ハケ、内面は縦方向の線状のミガキが入り、均一で丁寧な作りである。13は外面底部がケズリ、胴部はナデ。内面はミガキが入る。14は外面がオサエ後丁寧なナデ仕上げで、内面はナデ。内外赤橙褐色を呈し、意図的に赤く焼成したかもしれない。15・16は内外ナデ。17・18は口縁下に屈曲部をもつ器形で、外面にハケが入る。19は袋状口縁壺で、頸部内外にハケが入る。20は煮沸使用による変色がないので壺の底部だろう。外面タテハケで、外底にもハケが入る。21はレンズ底状の底部で、内外ハケ。外底は器面摩滅で調整不明。22は外面が赤橙褐色に変色しているので甕であろう。



第75図　3次I区11号竪穴住居跡出土土器実測図４（1/3）



第 76 図　3次Ⅰ区 11 号竪穴住居跡出土土器実測図5（1/3）



第 77 図　3次I区 11 号竪穴住居跡出土土器実測図6（1/3）

平底で調整不明。23は小型器種の平底で、壺か甕かはわからない。24は縄文土器で黒色磨研の浅鉢の口縁部片で、肥厚部外面に凹線文が入るので広田Ⅳ式か。

その他に、第101図２の打製石鏃、11・12のサイドスクレーパー、第102図８の石核、第103図３の石庖丁未製品、６の磨製石斧基部片、第103図13の砥石、14の凹み石、第104図１の円盤形土製品、２のミニチュア土製品、４の圭頭鏃、５の弓金具が出土している。

12号竪穴住居跡（図版44、第71図）

調査区東部に位置し、縄文包含層の上に掘り込まれていたため検出段階からプランは不明瞭で、壁の一部しか確認できなかった。１号土坑に切られるように見えたが、壁がないので明確な切り合いとはいえない。そのため主柱穴と見られる２基の柱穴と屋内土坑らしいものの位置関係からプランを復元した。炉跡らしいものも炭化物が集中しているのみで焼土がない。長軸・短軸とも規模はわからない。床下から石庖丁を埋納したピット89が検出された。出土遺物から弥生時代後期中葉である。

出土遺物（図版51、第80図）

１は外面に変色がないので壺で、頸部の径が大きいことから、口縁部の低い複合口縁壺の可能性が高い。器壁が厚く、底部は平底。内外丁寧なハケ調整。２・３は甕で、２は小型器種で外面は目の粗いタテハケ。内面はケズリである。３は頸部がすぼまらない甕で、底部は図上接合だが、完全な平底である。外面は胴下半がケズリ、胴上半は工具によるナデだろう。内面もナデ仕上げである。４は支脚の裾部で、内面に入る沈線はナデ工具の端部の傷だろう。外面は丁寧なタテハケ。器壁が厚く、赤変は認められない。５は坏で、器面摩滅だが器壁が薄いので丁寧に調整したものと見られる。

13号竪穴住居跡（図版44、第79図）

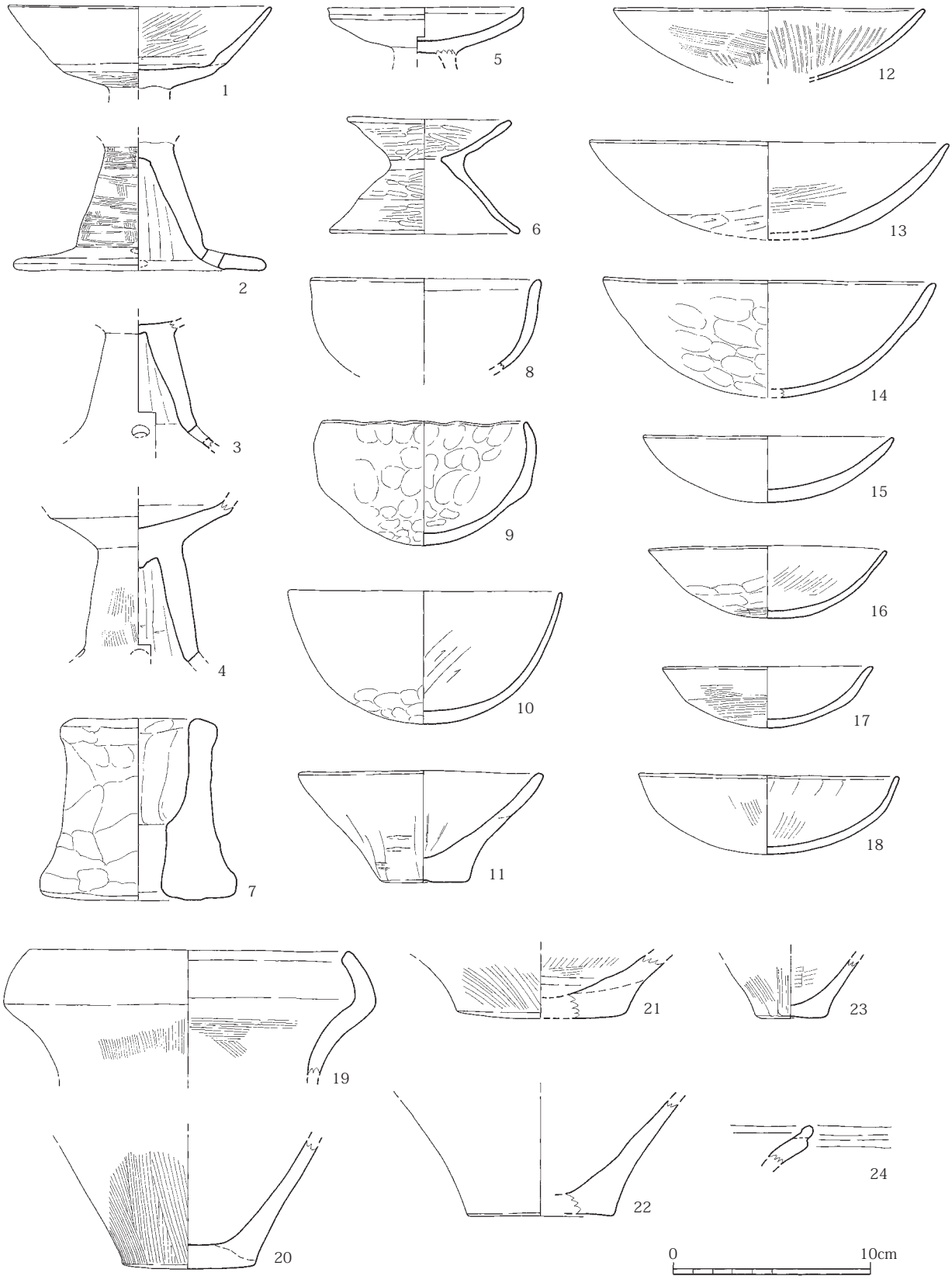
調査区東北部に位置し、北・西壁は大きく削平されている。縄文包含層に掘り込まれていたためプランがわかりにくく、炉跡が見られたことから２本柱穴と屋内土坑をもつ長方形プランの住居を復元した。しかし、主柱穴は浅く、１㎝ほどの貼床を外した段階で検出されており、屋内土坑は略円形なので他の竪穴住居跡と一致しないため、竪穴住居跡ではない可能性もある。出土遺物が少なく時期を絞り込みにくいが、久住ⅡＢ古段階（布留０式新段階）だろうか。

出土遺物（第80図）

６は布留式甕で、口縁端部に返りがあり、口唇部は平坦面もつ。外面ハタテハケ、内面ケズリ。７は在地系譜の甕で内外丁寧なハケが入る。８は丹塗磨研土器で、高坏か壺だろう。弥生中期後半から後期前葉のものである。９・10は縄文土器で、９は粗製深鉢の屈曲部が突出したもので、内外二枚貝条痕跡が残っている。10は底部片で、二枚貝底条痕が外底にも入るので端部が高台のように見える。

14a・ｂ号竪穴住居跡（図版44、第79図）

調査区中央部南に位置し、西側を15号竪穴住居跡と４号土坑に、北側を16号竪穴住居跡に切られ、屋内土坑は５号土坑を切る。11号竪穴住居跡との切り合いは鮮明でなかった。炉跡と屋内土坑があることから２本主柱穴の長方形プランに復元したものを14a号とした。屋内土



第 78 図　3次I区 11 号竪穴住居跡出土土器実測図7（1/3）

坑の位置に５号土坑があり、掘削時に掘りすぎたため、屋内土坑出土遺物は５号土坑出土遺物と混ざった。西壁は検出されたプランが東壁と平行でないことから、別の遺構のプランの可能性がある。南東部に幅 480cm の方形の張り出し部分は、張り出しにしては幅が広いことから、別の竪穴住居跡とみて 14b 号とした。出土遺物が少なく時期を絞り込みにくいが、久住ⅡＡ新段階（布留０式古段階）だろうか。

出土遺物（図版 52・53、第 80・101・103 図）

11 は壺か甕の底部で、器面が摩滅しているため色調がわからず、どちらかわからない。内外工具痕だけ残っている。12 は単孔の甑で、口縁部内面に粘土の付着があるが、これは意図的なものではないだろう。外面下半がケズリ、上半はヨコハケ、内面はケズリ。13・14 は高坏の坏部で、内外ミガキが入る。15 は縄文後晩期の粗製深鉢の胴部片で、二枚貝条痕が内面に明瞭に残る。

その他に第 101 図４の打製石鏃、13 の掻器、22 の大型掻器、第 103 図５・10 の貼床出土の砥石がある。

15 号竪穴住居跡（図版 40・45、第 81 図）

調査区中央南側に位置し、11・14 号竪穴住居跡を切る。主柱穴は深いので他のピットと明瞭に区別でき、４基が検出された。竈は西壁中央に敷設されており、主軸方向はＮ－75°－Ｗとなる。南西隅が調査区外に延びるが、他のコーナーが検出されているので、平面プランは略正方形で、422 × 470cm を測る。貼床は明瞭に検出され、壁は貼床まで 30cm ほど残り、床下掘り込みが 15cm ほどあった。主柱穴の径が大きいのは柱穴上位を掘り込んで柱を切り取ったからだろう。竈袖は黄色粘土を部分的に使用していたので、明瞭に検出できた。竈内の支脚は見られず、据えるための穴もなかったので、調査区外に存在する可能性が高い。床土の焼けは弱くカマド内の窪みはほとんどなかった。袖先端には川原石が建てた状態で据えられており、框部分の石材を支えるための補強材だったのではないだろうか。

出土遺物は６世紀末から７世紀初頭であろう。

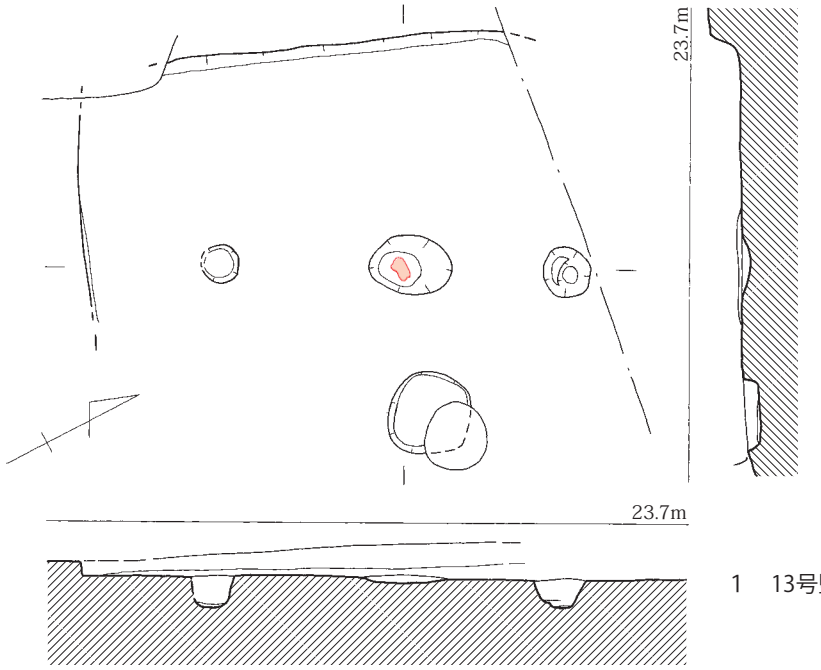
出土遺物（図版 54、第 83・104 図）

第 83 図１は土師器の甕で、外面は丁寧なナデ、内面はケズリ。器壁が薄く、内外赤茶褐色を呈する。２はミニチュアの小型丸底壺か鉢で、小さな口縁部がつくものと見られる。外面胴部は板状工具によるオサエ、内面はナデ。３は須恵器坏蓋で、口縁部と体部の間に沈線が入る。回転ヘラ切りだが、回転の中心がずれているので歪んでいる可能性がある。内外で色調が異なっているので、坏身と重ねて焼成した可能性がある。口縁部が内傾するのはその際に自重で歪んだものだろう。４は縄文後晩期の黒色磨研土器で、浅鉢の屈曲部で内面はミガキが明瞭に残る。黒川式古段階だろう。

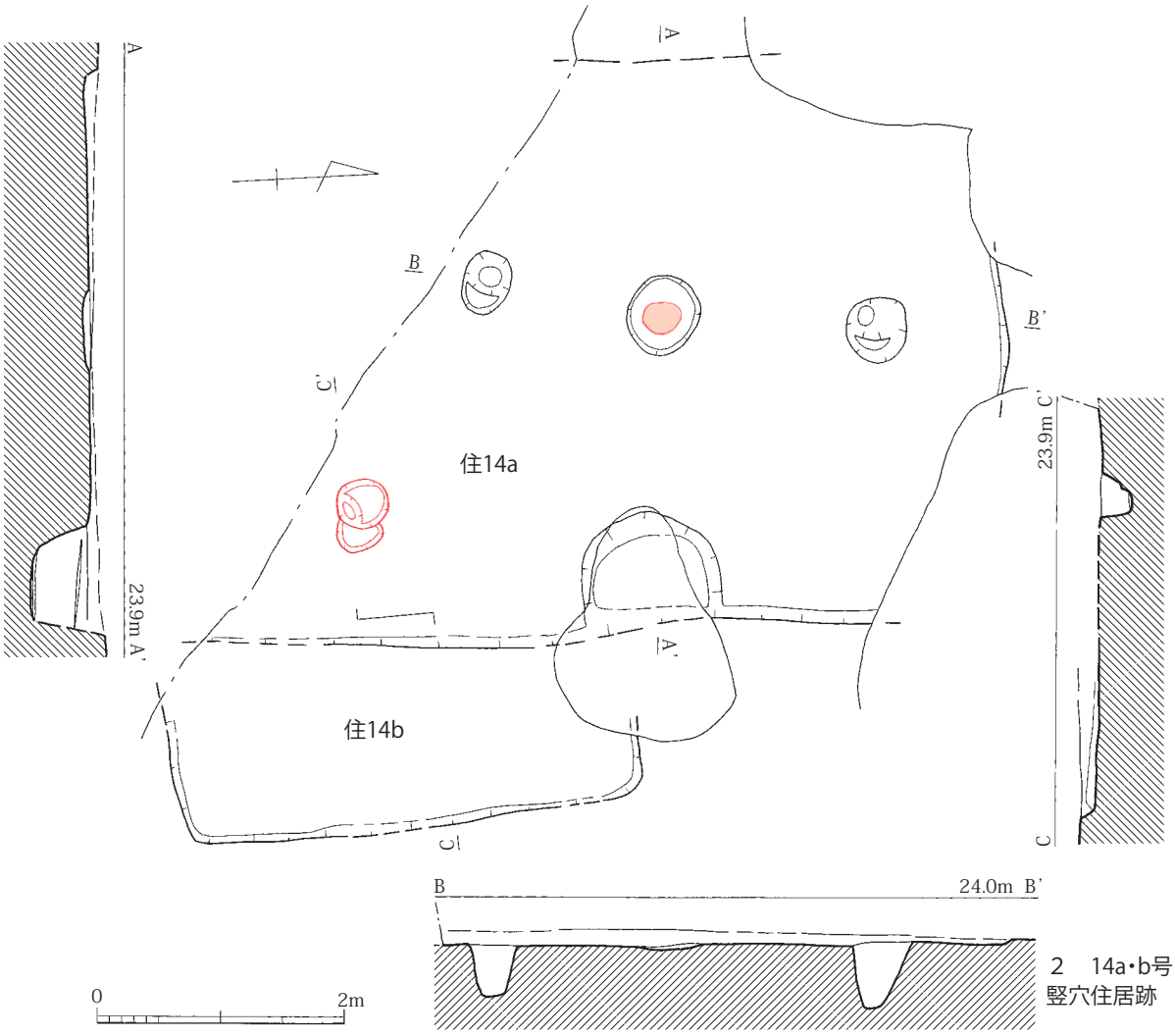
このほか、第 104 図６の袋状鉄斧が出土している。鉄滓は２点を図版 54 に掲載した。鍛冶滓と見られ、22.9 ｇと 37.4 ｇを測る。ほかにも鉄滓・鉄の小片が 10 点ほど見られた。

16a・b 号竪穴住居跡（図版 40・45、第 81 図）

調査区中央部南に位置し、西壁と 11 号竪穴住居跡の切り合いは不鮮明だった。10 号土坑は床面から検出されたので切っている。プランに凹凸があり、床面にも複数のプランが現れたこ

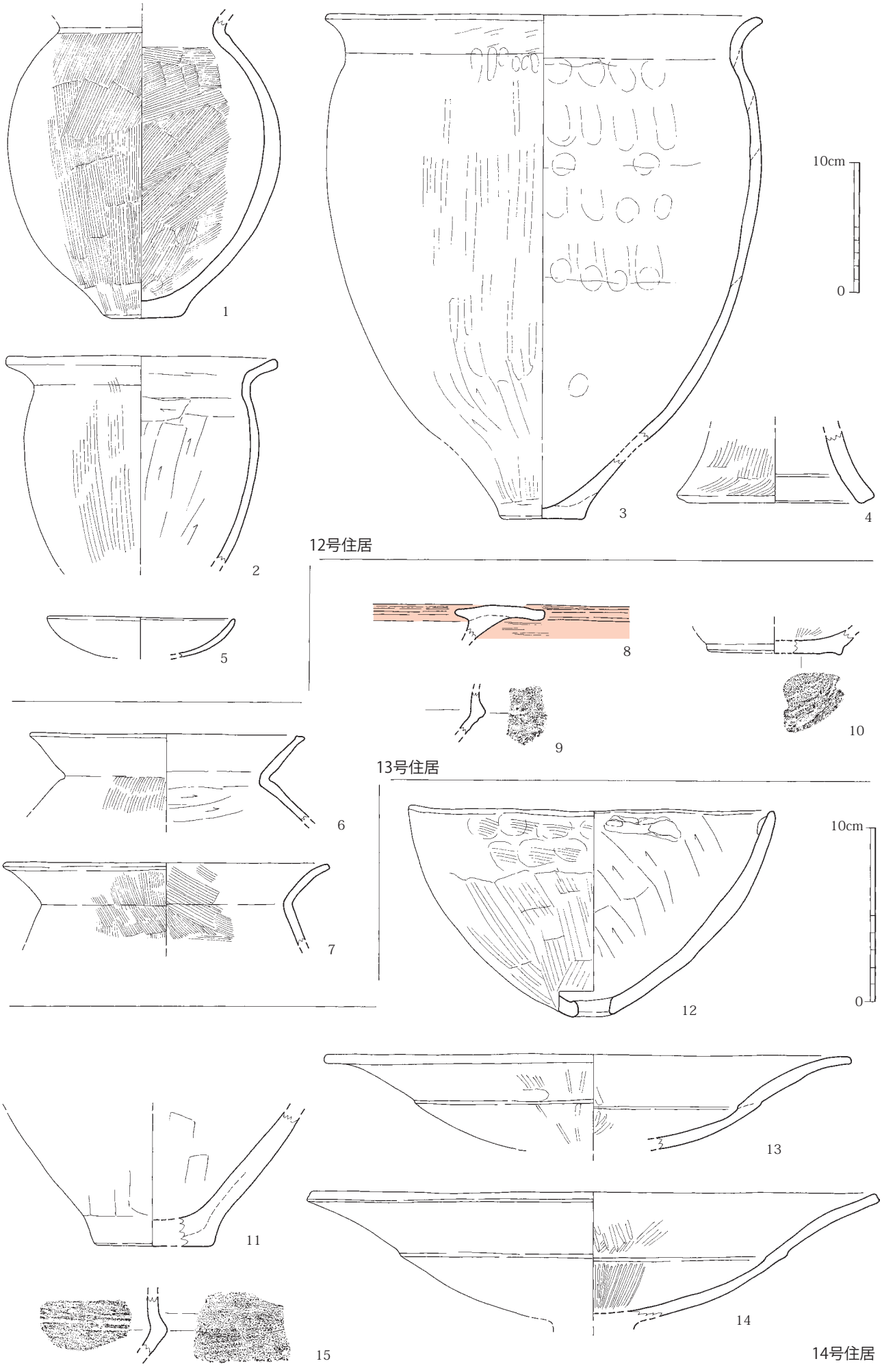


1　13号竪穴住居跡



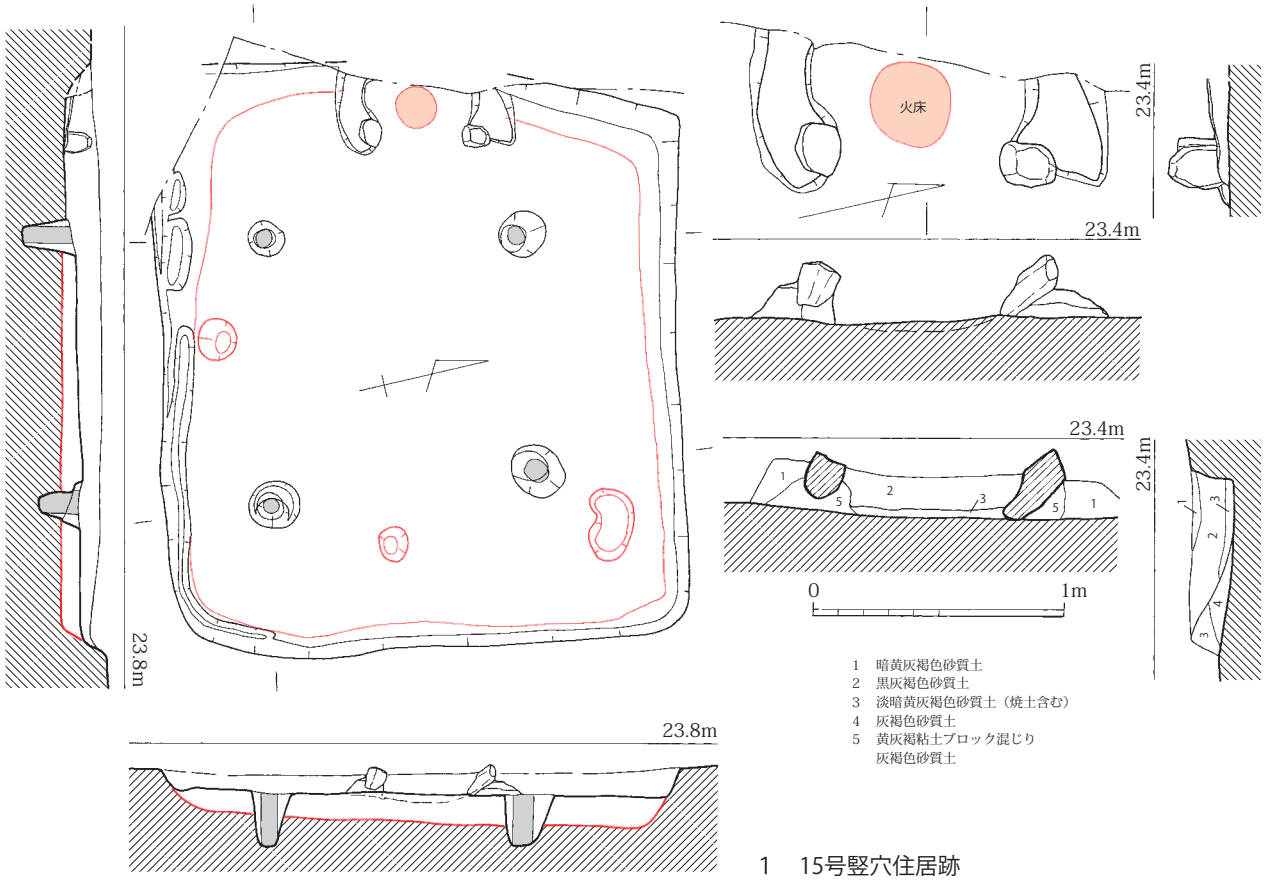
2　14a・b号竪穴住居跡

第 79 図　3次Ⅰ区 13、14a・b 号竪穴住居跡実測図（1/60）

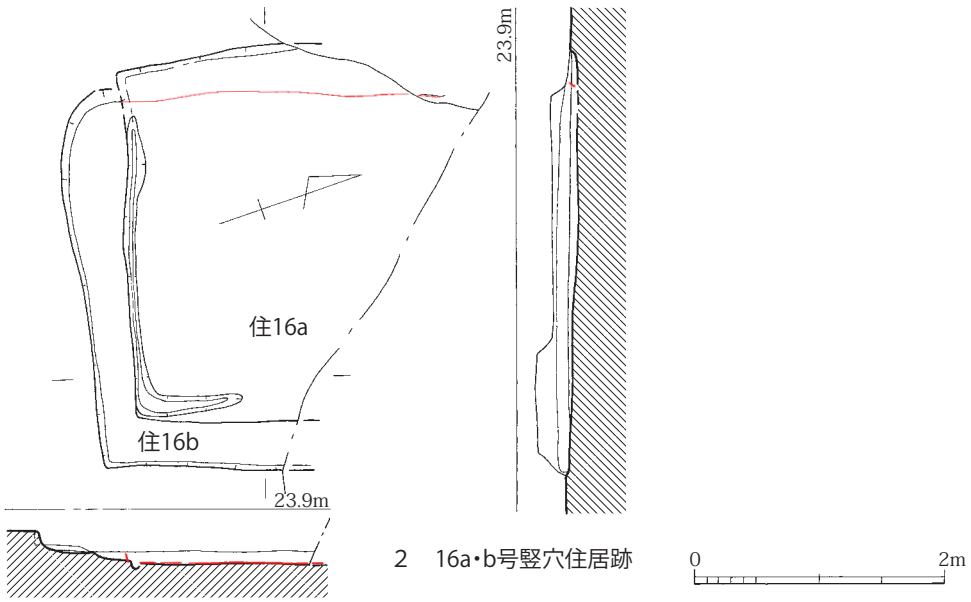


第 80 図　3次Ⅰ区 12 ～ 14 号竪穴住居跡出土土器実測図（3は 1/4、他は 1/3）

とから規模が近い遺構が主軸方向をわずかにずらして切り合っていることがわかった。検出段階での切り合いはわからなかったが、周溝が検出されたものがもっとも新しいとみて 16a 号とし、西壁が切られて床面からラインが検出されたものを 16b 号とした。いずれも方形プランで、両者とも長軸規模はわからないが、短軸は 16a 号が 300cm、16b 号が約 320cm を測る。壁の残りも悪く、25cm ほどしか残っておらず、床面にピットが検出されたが、主柱穴にふさわしい深い柱穴はなく、小型住居のためか主柱穴は検出できなかった。したがって、竪穴住居跡とし



1　15号竪穴住居跡



2　16a･b号竪穴住居跡

第 81 図　3次Ⅰ区 15、16a・b 号竪穴住居跡実測図（1/60、1/30）

て認定するには要件が不足するので、将来、限定協議範囲の調査で確認する必要がある。遺物は一括して取り上げており、古墳時代初頭の土師器と 7 世紀全前葉の須恵器があるが、新しい時期であろう。

出土遺物（第 83 図）

５は土師器の小型丸底の鉢で、内外摩滅で調整不明。６は須恵器坏で、内外で色調が違うものの受け部に変色の境界がないので伏せ焼きだろう。

18a・b 号竪穴住居跡（図版 41、第 82 図）

西側調査区に東端に位置する略方形プランで、西辺が不整形なのは２つのプランが重複していたためである。新しい方を 18a 号、東西軸を長軸とするものを 18b 号とした。18a 号は西辺だけが検出され、北を 21 号に、南は 20 号竪穴住居跡に切られる。18b 号は南北辺が検出されたが、床面が見つかったのみで壁は残っていない。その東辺らしいものが、東側の調査区に見られたが、辺が平行にならないので別遺構のプランかもしれない。

出土遺物は６世紀後半から 7 世紀前半のものだが、20 号竪穴住居跡に切られるので、伴わない可能性が高い。

出土遺物（図版 40、第 83 図）

７は甕で、内外ハケで、器壁が厚い。胎土にカクセン石が入っておらず、金雲母が多く見られる。８は甑で、外面は丁寧なタテハケ、内面体部はケズリ、口縁部はナデ。胎土は金雲母と花崗岩粒子が目立つ。

19 号竪穴住居跡（第 84 図）

調査区の中央北部に位置し、４・５号掘立柱建物、６号土坑に切られる。南側の大半が限定協議範囲に延びるので長軸規模はわからないが、短軸を 488㎝ とする大型の長方形プランと考えられる。壁は 28㎝ ほどあり、北・西辺に削り出しベッド状遺構がつくがやや不整形で確実性に欠ける。東辺の南端部に屋内土坑らしい遺構の一部があったが、その延長上の住居中央部に炉跡は見つからなかった。また、主柱穴の位置も壁からの距離が整合せず、浅いことから２基の竪穴住居跡が切り合っている可能性もある。しかし、東辺に切り合いはなく、周溝も検出されたので、同一遺構として報告する。出土遺物から弥生時代後期後半から古墳時代前期と見られるが、時期を絞り込む材料に欠ける。また、北壁付近からは赤色顔料塊が出土している。

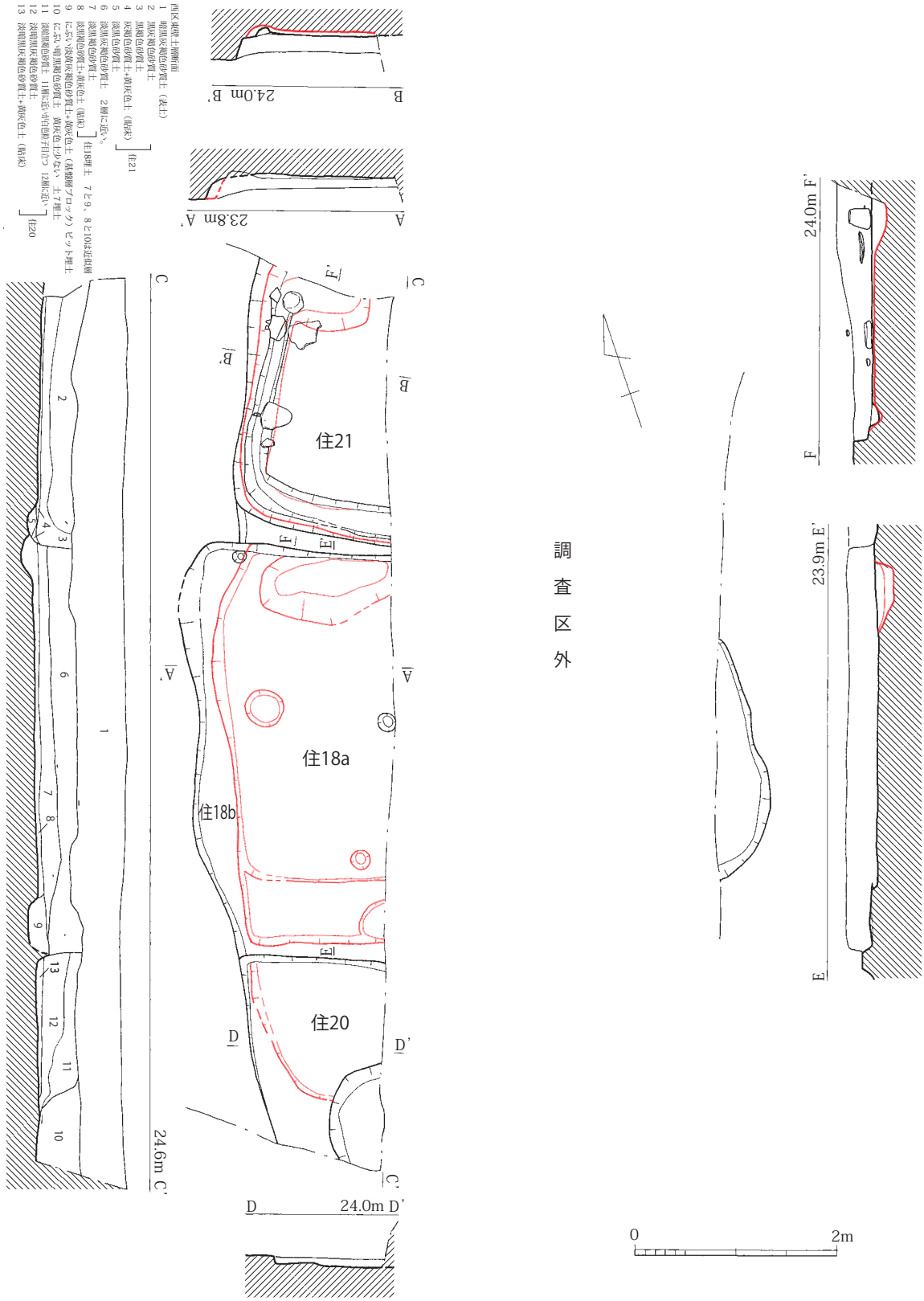
出土遺物（図版 52・53、第 83・101・103・104 図）

第 83 図９は直口壺で、外面ハケ、内面ケズリで、器壁が厚い。頸部内面に積み上げ痕が残る。内外にぶい暗黄橙灰色を呈する。10 は坏で、外面はタタキをナデ消しており、内面はハケをナデ消している。内面の沈線はハケの工具痕が残ったものだろう。底部は残っていないが丸底であろう。11 は甕で、口縁部外面に積み上げ痕が残る。内外ナデで器壁が厚い。口縁部が大きく外傾する。12 は丹塗磨研土器片で、外面に胴下位に２段のM字形突帯がつくので弥生時代中期後半から後期のものだろう。器壁から小型器種と見られるが、小型の壺・甕・無頸高坏の坏部などの可能性がある。小片なので混入であろう。

その他に、第 101 図 14・20 の掻器、第 103 図９・12 の砥石、第 104 図７の鍬先と鎌が出土している。

20 号竪穴住居跡（図版 41・46、第 82 図）

西側調査区の南東端に位置し、9 号竪穴住居跡と 7 号土坑に切られ、18 号竪穴住居跡を切る。平面プランはわからないが、壁が 40cm ほどあり、直線的だったので土坑ではなく竪穴住居跡とした。出土遺物から弥生時代後期後半から古墳時代前期の土器が時期を絞り込む材料に欠ける。



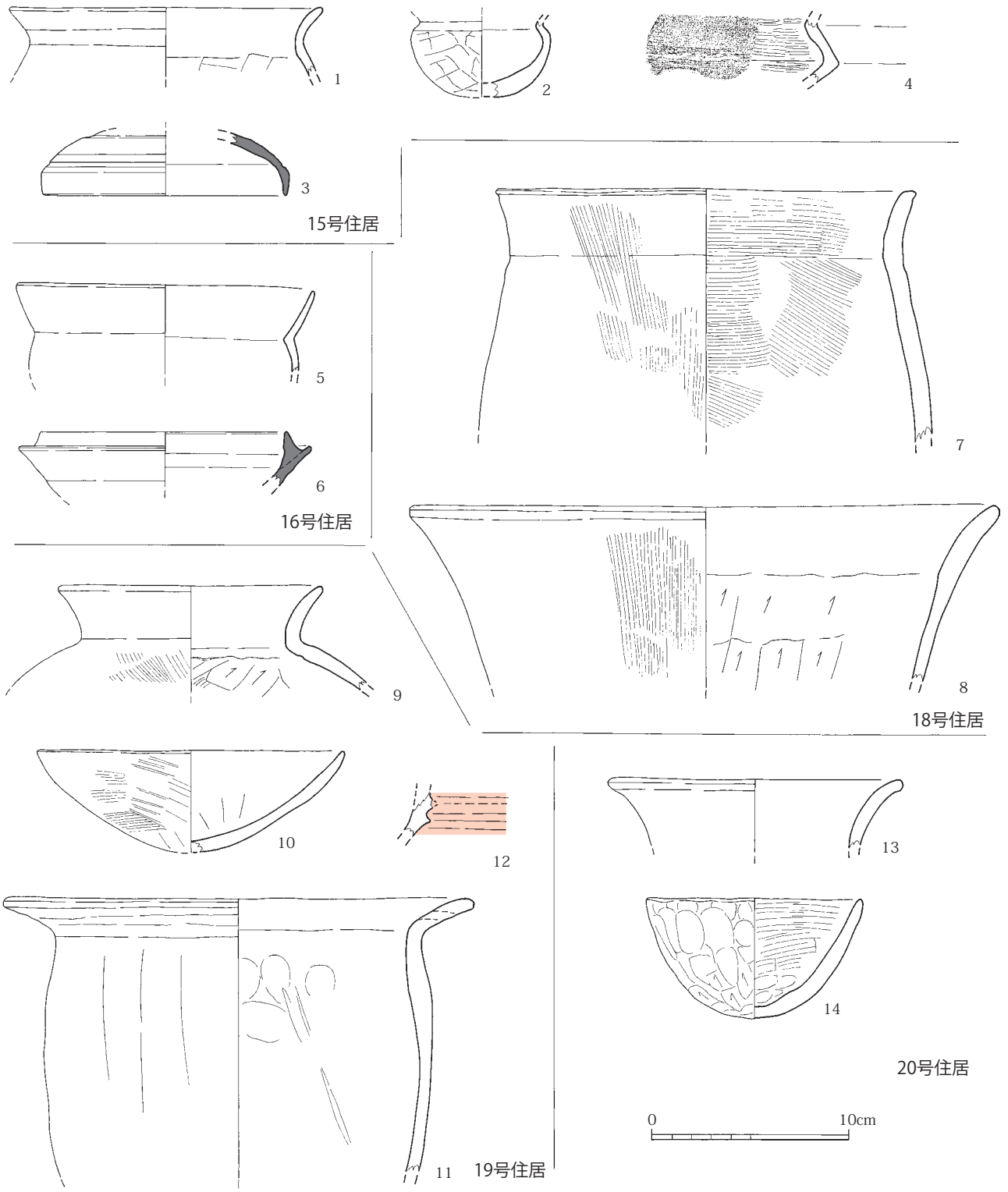
第 82 図　3次Ⅰ区 18a・b、20、21 号竪穴住居跡実測図（1/60）

出土遺物（図版 51、第 83 図）

13 は直口壺で、内外摩滅で調整不明。14 は坏で外面はオサエで、底部はケズリ。内面はヨコハケ。内外にぶい黄灰色を呈する。

21 号竪穴住居跡（図版 41・46、第 82 図）

西側調査区の東端に位置し、18 号竪穴住居跡を切る。北側は限定協議範囲に延びているが、



第 83 図　3次Ⅰ区 15・16・18 ～ 20 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

北西端にカマドの袖側に置かれていたと見られる土師器甕の完形品が正置した状態で出土しており、周囲にも大型土器の破片があった。周溝が北西端で曲がっており、この部分の埋土に焼土が混じっていたのでカマドがある可能性が高い。この仮説によれば、平面プランは隅丸正方形で、東側調査区には同一遺構が確認できなかったので、１辺 4.6m ほどと想定できる。出土遺物は北西側から多く出土しており、西壁沿いに台石と須恵器坏があり、８世紀後半に属する遺構であろう。

出土遺物（図版 51、第 86 図）

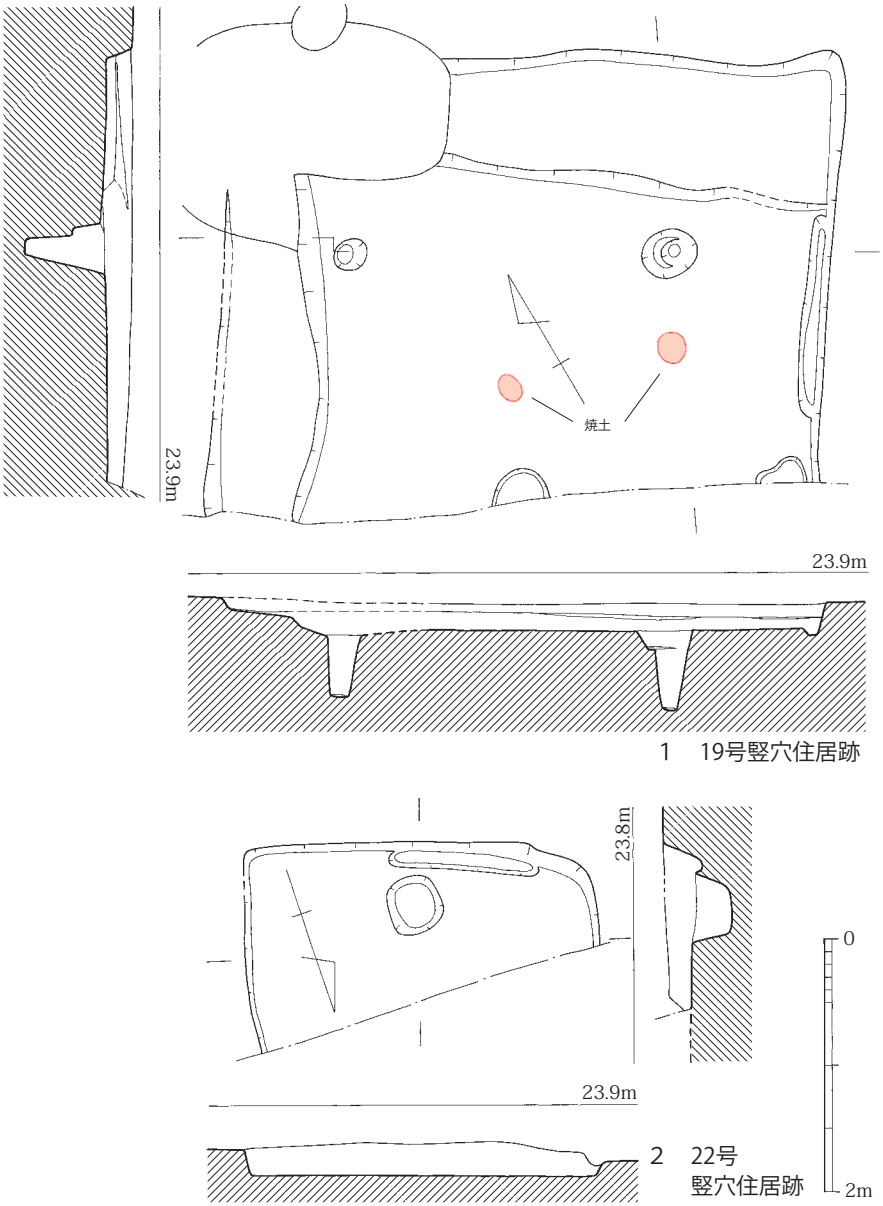
１は完形の甕でカマド袖の西横から床面に正置した状態で出土した。外面と内面口縁部は目の細かい丁寧なハケで、内面胴部はケズリ。内外赤橙色で、外面は使用変色が見られる。２は砲弾形の焼塩壺で、接合しないが１個体である。口縁部は内傾し、外面はオサエ痕が目立つ。内外淡赤橙色を呈し、底部外面には塩と見られる白色物質が浸み込んでいる。器壁が薄いが、外面にハケが残っているので器面は残っている。内面は摩滅しているが桶状板の凹凸と布目跡が残っている。３・４は須恵器坏で、口唇部で内外の色調が異なるので同一器種の重ね焼きではない。外底は回転ヘラ切り後ナデ仕上げ。

22 号竪穴住居跡（図版 46、第 84 図）

西側調査区の東端に位置し、北側の限定協議範囲にほとんど入るため方形プランであることしかわからない。辺が 282cm と竪穴住居跡にしては短いので、小型の正方形プランか長方形プランの短辺であろう。出土遺物がなく時期不明。

23 号竪穴住居跡（図版 46、第 85 図）

舗装道路下の北側調査区西に位置する長方形プランで、調査区



第 84 図　3次Ⅰ区 19・22 号竪穴住居跡実測図（1/60）

南端は限定協議範囲に入るため長辺の長さがわからないが、短辺は 415cm ほどである。壁は 30cm ほど残っているので、北辺にベッド状遺構がないことは明らかである。２基の主柱穴は 50cm ほどの深さだったのでほかの柱穴と明確に区別でき、焼け方が弱いものの炉跡も検出できた。東辺中央に略方形プランの屋内土坑が検出され、屋内土坑の床面に小ピットが見られた。屋内土坑横からはほぼ完形の小型丸底壺が、北側主柱穴の北西側に粘土塊が出土した。周溝は全周と屋内土坑の横に検出された。

出土遺物から久住ⅡＢ古段階（布留０式新段階）だろう。

出土遺物（図版 51 〜 54、第 86・88・101・102 図）

第 86 図５は直口壺の口縁部で、内外目の細かい丁寧なハケ。６は二重口縁壺の口縁部・肩部・底部で、図化しているものの口縁部と肩部の間隔は不明である。目の粗いタテハケが入る。口縁部の屈曲部はオサエのため平滑でなく、器壁が厚いので作りは粗い。内面は器面が剥離している。７は布留模倣甕の口縁部と見られる。外面ハケがわずかに残る。８は中実の高坏脚部で、屈曲部に穿孔が見られる。外面は脚部がオサエでミガキはない。裾部は内外ハケ。９・10 は坏で、９は外面底部がケズリで、胴上半はヨコナデ。内面はハケ後ミガキ。10 は外面にオサエ痕が多いがほぼ平滑で、内面は丁寧なハケ調整。11 は小型丸底鉢で、底部はケズリ後未調整で、胴中位から口縁部はタテハケ。12 は丹塗磨研土器の把手付坏の把手だろう。丹塗りは全面に見られる。13・14 は縄文土器で、13 は黒色磨研の浅鉢口縁部で、口縁部に小さな山形隆起があり、口縁下に凹線が入る。黒川式新段階。14 は深鉢の底部で、内外二枚貝条痕。

第 88 図１・２は小形丸底壺で、体部胴下半はオサエ痕が残るが平滑に仕上げられており、上半は器面が摩滅しているが、２にはハケが残る。３は坏で外面は目の細かいハケ調整で、底部外面に積み上げ痕が残る。内面は摩滅しているがミガキ痕が残る。４は小型高坏で、目の粗いハケが深く入る。内外にぶい黄灰色を呈する。５は器高の低い支脚で、手捏ね成型で内外オサエ痕が明瞭に残る。器壁の厚さなどからふいごの羽口片のように見えるが内部にもオサエが残ることから判別できる。６は弥生時代中期後半の跳ね上げ口縁甕であろう。７は土師器小皿で、底部は糸切り痕と板状圧痕がかろうじて観察できる。６・７は時期が異なるので混入品である。このほか、第 101 図 15・18 の掻器、24 の大型掻器、第 102 図３の抉り入り石器が出土している。

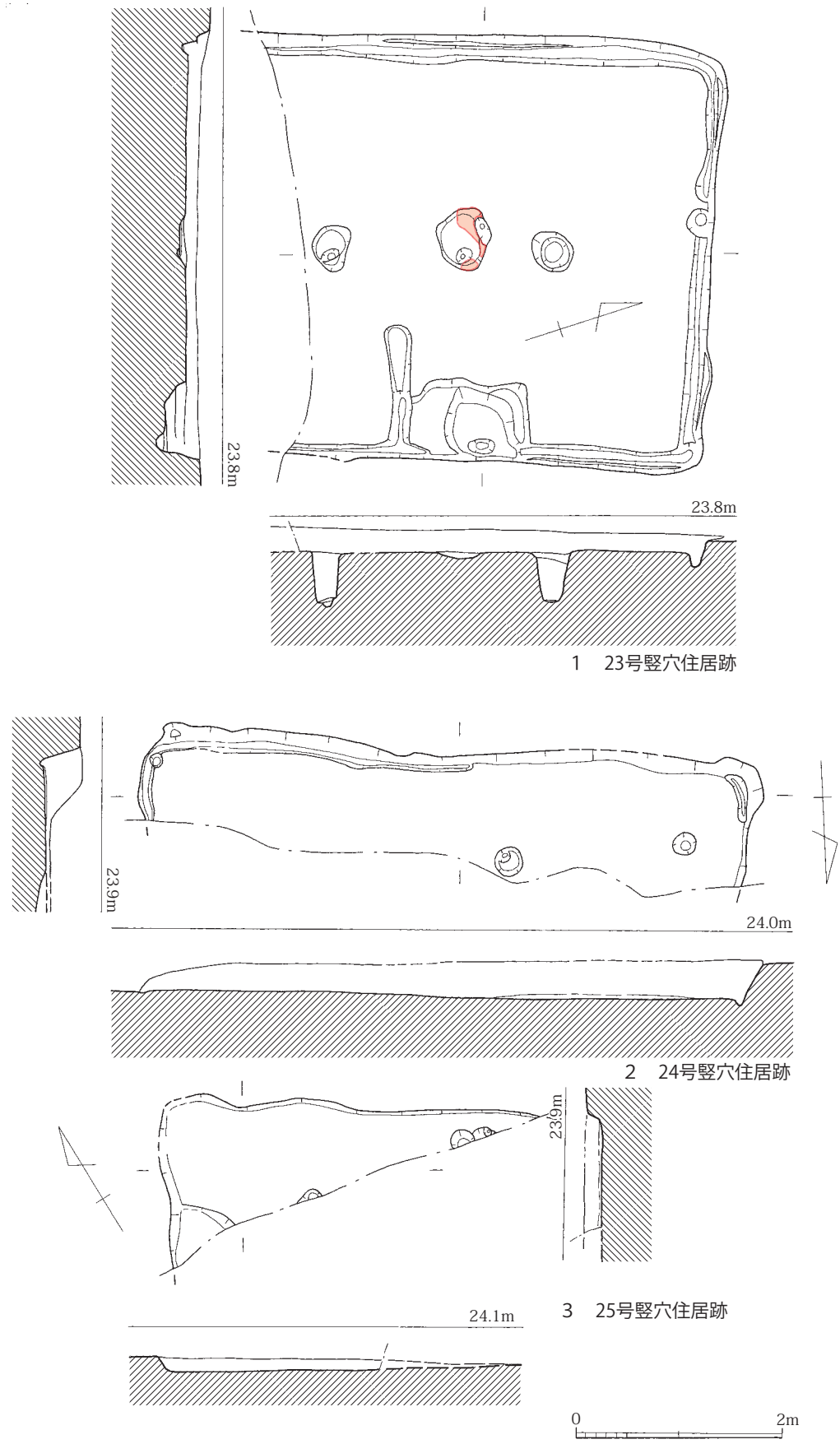
24 号竪穴住居跡（図版 46、第 85 図）

舗装道路下の北側調査区西側に位置し、調査区南端から方形プランの端部が検出された。限定協議範囲にほとんどが入るためプランはわからないが、北辺が 590cm ほどの規模であることと出土遺物の時期からすると、北辺を短辺とする長方形プランだろう。壁は 40cm ほど残っているが、検出した北辺が削り出しベッド状遺構であるとすれば、限定協議範囲内の床面はまだ深いだろう。周溝は部分的に検出された。

出土遺物から弥生時代後期末だろう。

出土遺物（第 88 図）

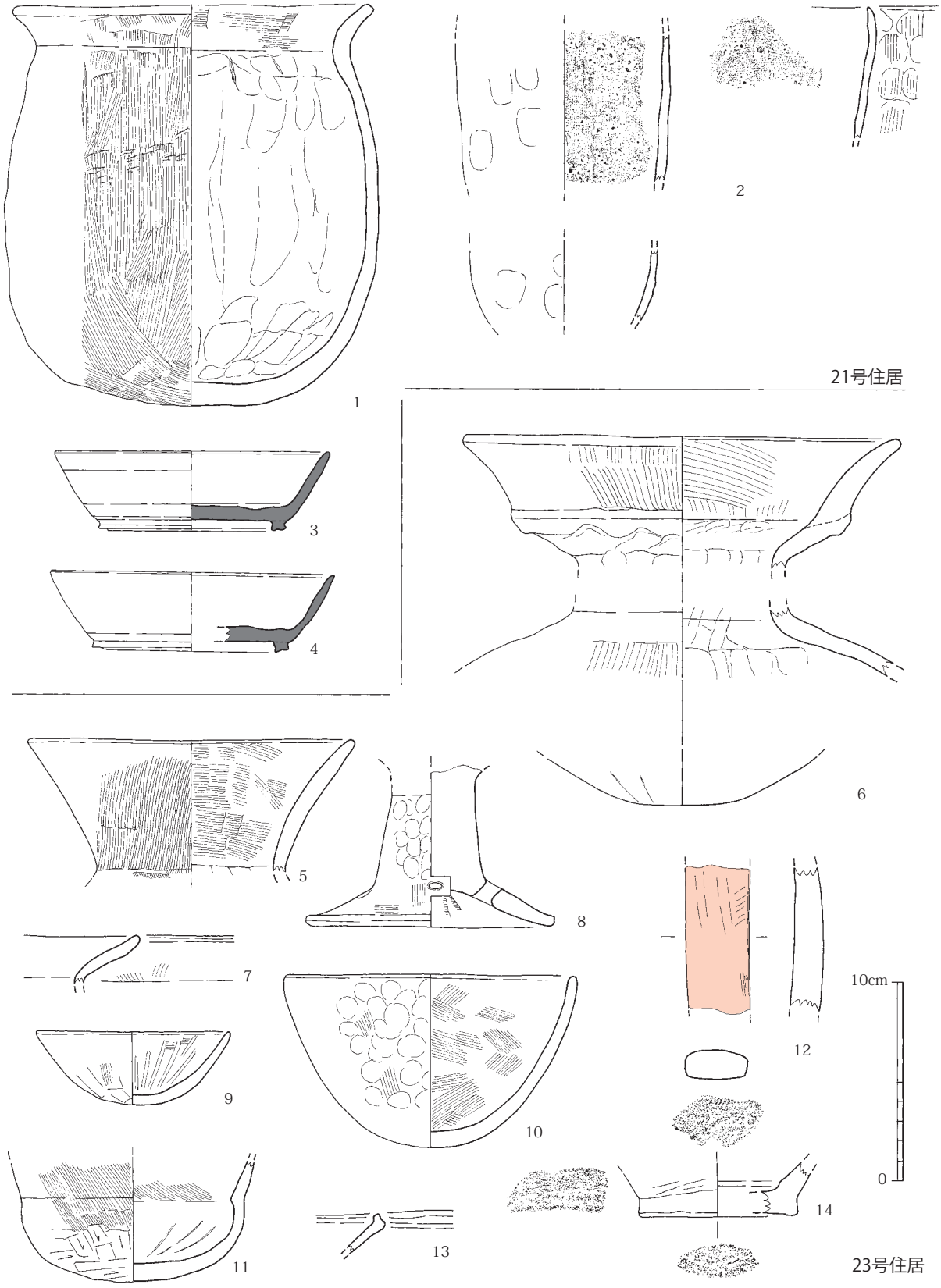
８は甕で、内外目の細かい丁寧なハケ。９は高坏の坏部で、外面タテハケ内面ハケ後ミガキ。10 は坏で外面はオサエ痕を多く残し、底部はケズリ。内面は目の粗いハケ。



第 85 図　3次Ⅰ区 23 ～ 25 号竪穴住居跡実測図（1/60）

25 号竪穴住居跡（第 85 図）

舗装道路下の北側調査区西側に位置し、調査区北端から方形プランのコーナー部が検出された。限定協議範囲に入るためプランはわからない。壁は 15cm ほどしか残っておらず、屋内施設は確認できなかった。図化可能な出土遺物は１点しかないので、時期を特定しにくいが久住



第 86 図　3次I区 21・23 号竪穴住居跡出土土器実測図（1/3）

ⅡＢ古段階（布留０式新段階）だろう。

出土遺物（第 88 図）

11 は二重口縁壺で、頸部はほぼ直立する。

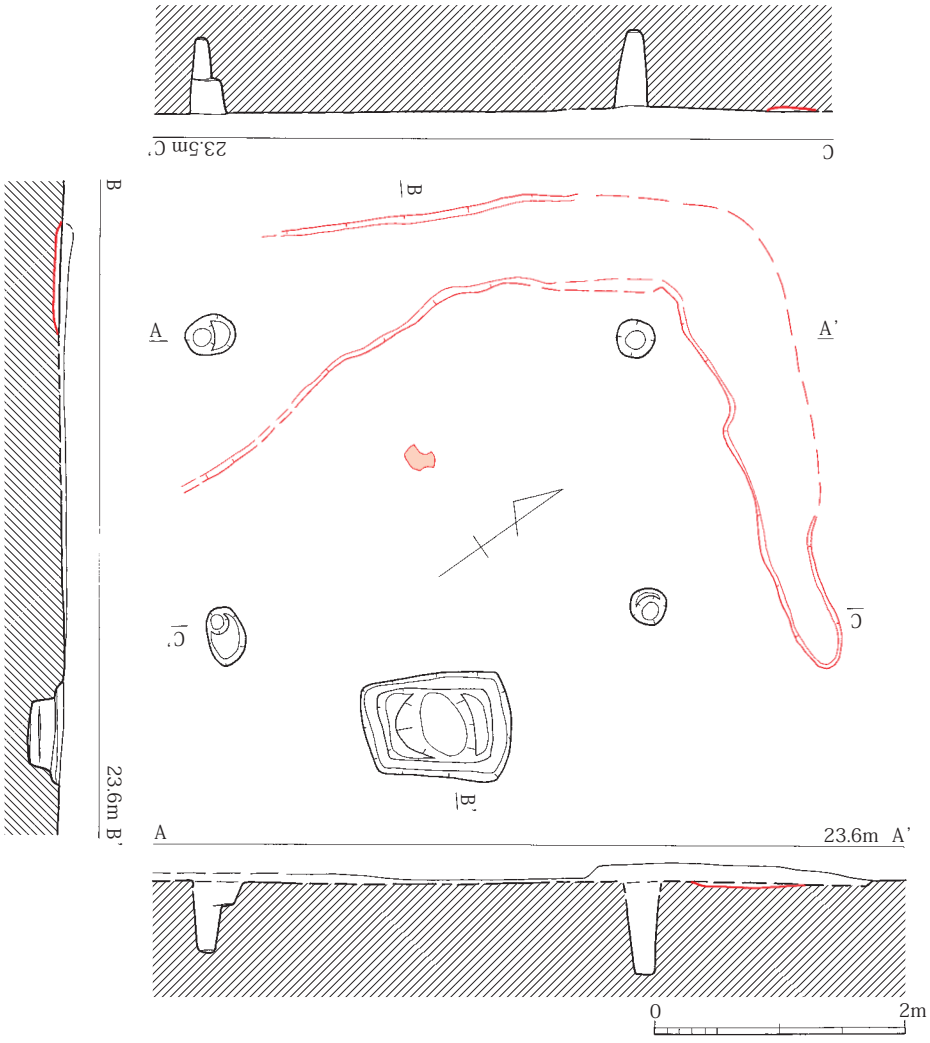
26 号竪穴住居跡（図版 49 第 87 図）

調査区の北東部に位置する。残りが悪く、東と南壁は削平のため検出されず、炉跡と屋内土坑の位置からプランを検出したので確実性に欠ける。壁際の落ち込みは床下の掘り込みと見られ、それが５号溝状遺構と切り合っていたため、切り合いを確認できなかった。4 本主柱穴の位置関係から平面プランは方形だろう。

図化可能な出土遺物が少なかったので、時期を特定しにくい。弥生時代後期後半から古墳時代前期だろう。

出土遺物（第 88 図）

12 は外面タテハケで、変色がないので壺だろうか。13 は貼床下から出土した縄文後期の黒色磨研土器で、浅鉢口縁部片である。内面はミガキを残す。口縁部の肥厚部外面には沈線が入る。黒川式古段階か。



第 87 図　3次Ⅰ区 26 号竪穴住居跡実測図（1/60）

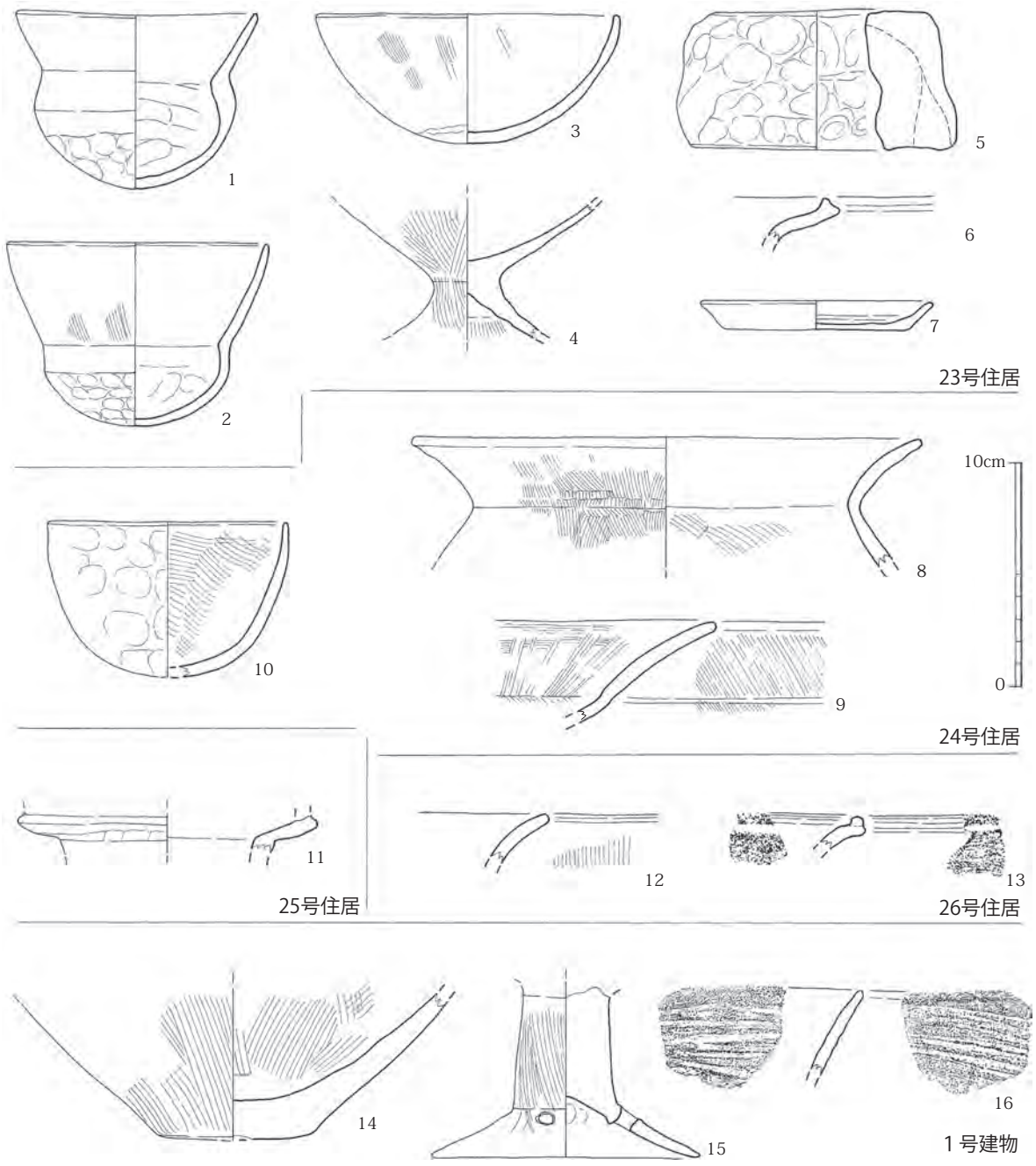
（２）掘立柱建物跡

１号掘立柱建物跡（図版 44・47、第 89 図）

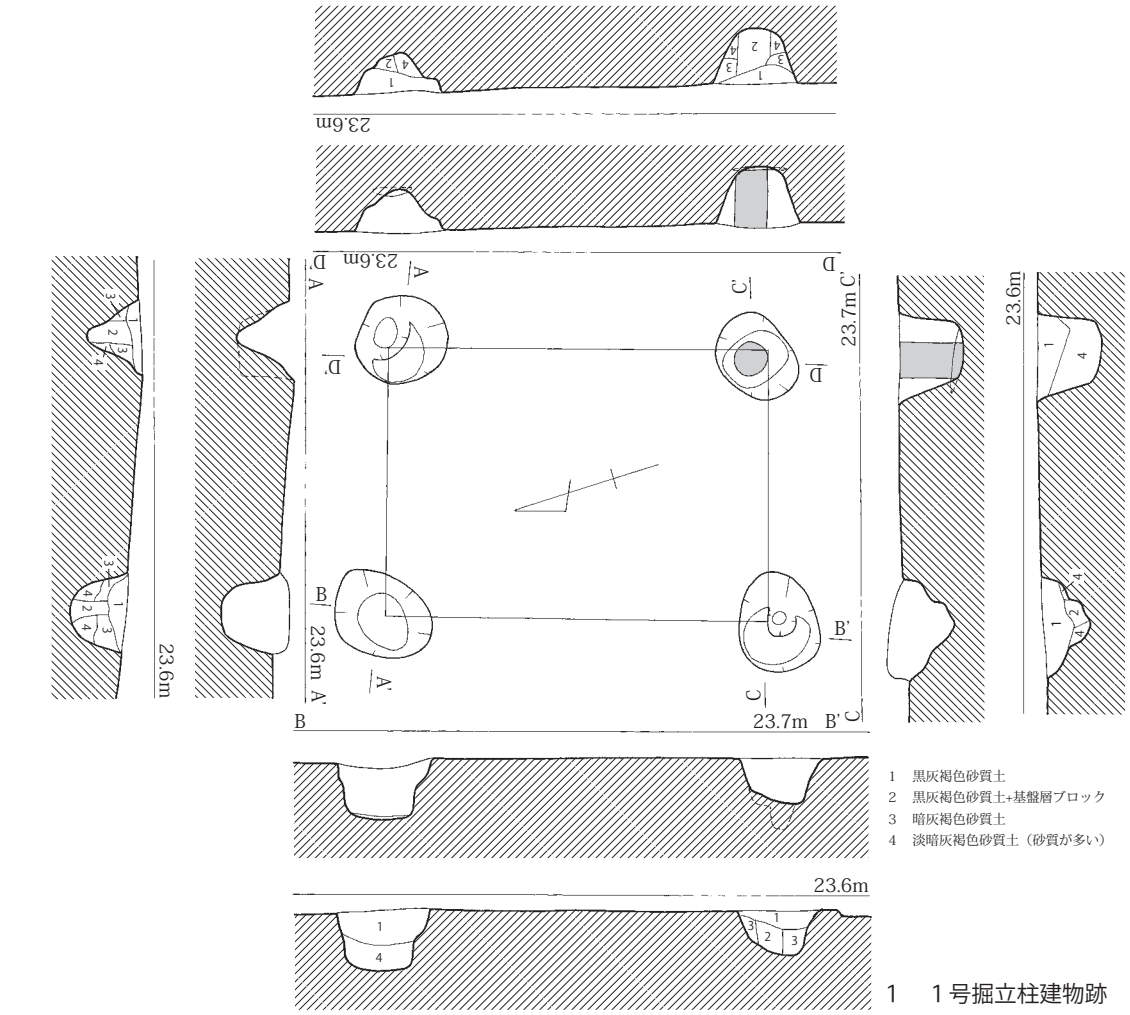
調査区北東部に位置する。主軸方向はＮ－18° 30′－Ｅで、１×１間で長辺 302、短辺 214 ㎝。柱穴は 80 × 60 ㎝の略方形プランで、深さは 50 ㎝程を測る。土層から柱が上位で切られて抜かれていることがわかる。出土遺物がなく時期はわからない。

出土遺物（図版 52、第 88 図）

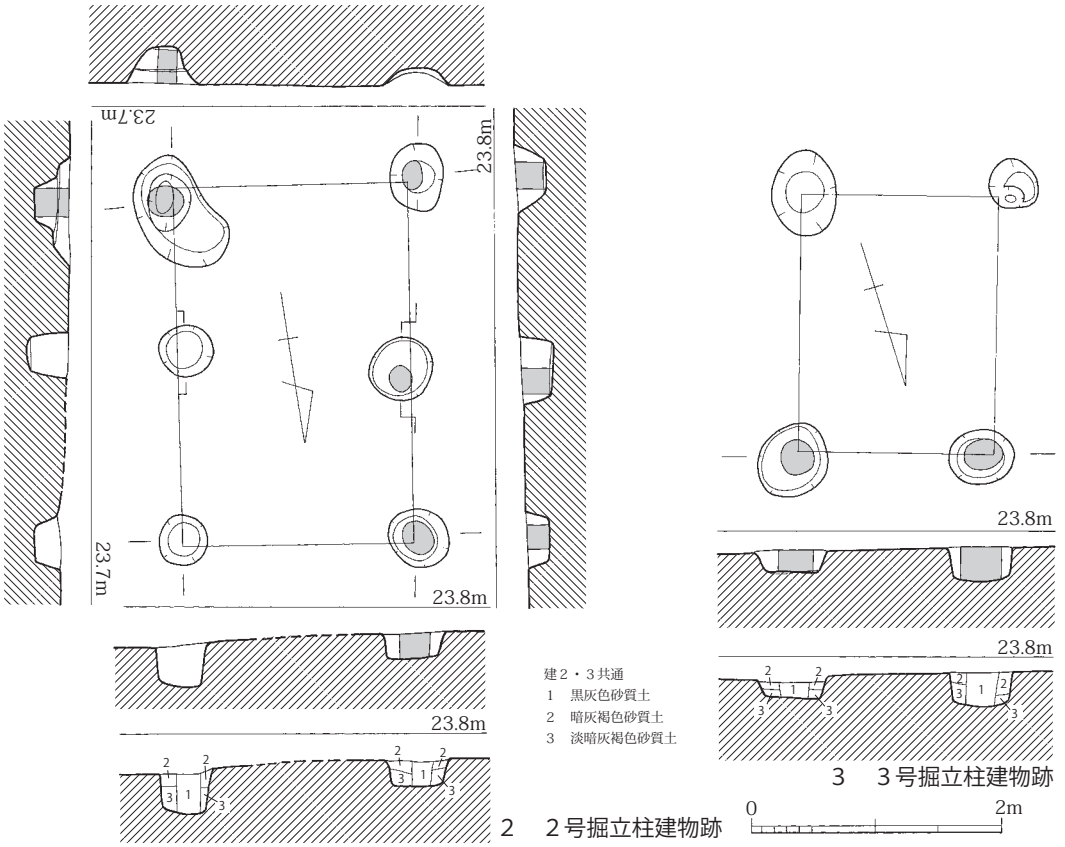
14 は柱４から出土した小さなレンズ底である。外面に変色がないので壺だろうか。内外面タテハケ。15 は柱３から出土した高坏脚部で、外面はタテハケをナデ消している。裾部には位置関係から４ヶ所に穿孔が入る。16 は柱２から出土した縄文後晩期の深鉢口縁部片である。内外二枚貝条痕で調整されている。



第 88 図　3次Ⅰ区 23 ～ 26 号竪穴住居跡、1 号掘立柱建物跡出土土器実測図（1/3）



1　1号掘立柱建物跡



2　2号掘立柱建物跡

3　3号掘立柱建物跡

第 89 図　3次I区1～3号掘立柱建物跡実測図（1/60）

２号掘立柱建物跡（図版 49、第 89 図）

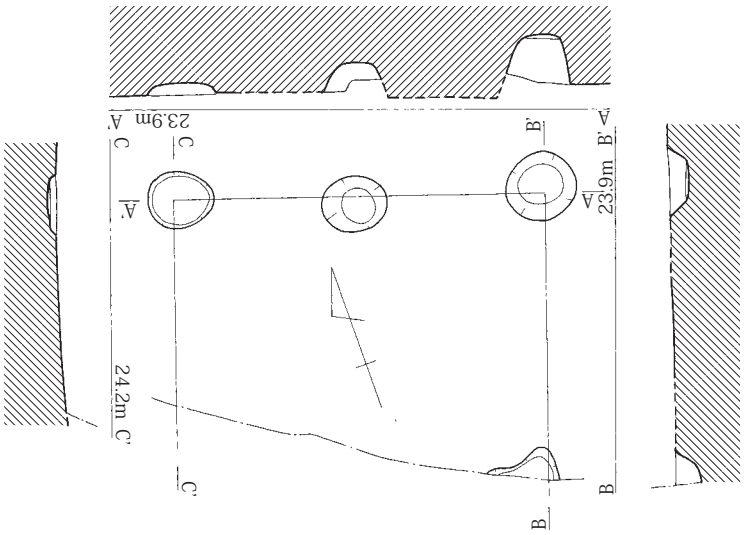
調査区北東部に位置し、５号溝状遺構を切る。主軸方向はＮ－９°－Ｅで、１×２間で長辺 286 ㎝、短辺 186 ㎝を測る。柱穴は直径 40 ㎝の円形プランで、深さは 30 ㎝前後を測る。柱痕が検出されたが、1 号掘立柱建物跡同様、上位は切られて抜き取られたものかもしれない。出土遺物がなく時期はわからない。

３号掘立柱建物跡（第 89 図）

調査区北東部に位置する。主軸方向はＮ-18° 40′－Ｅで、１×１間で長辺 203 ㎝、短辺 157 ㎝を測る。柱穴は直径 60 ㎝前後の略方形プランで、深さは 30 ㎝前後を測る。柱痕が検出されたが、1 号掘立柱建物跡同様、上位は切られて抜き取られたものかもしれない。出土遺物がなく時期はわからない。

４号掘立柱建物跡（図版 49、第 90 図）

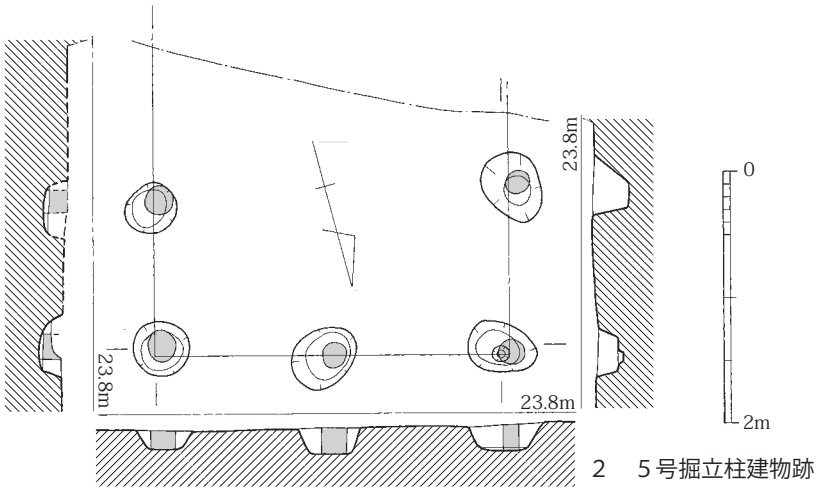
調査区北部中央に位置し、19 号竪穴住居跡を切り、５号掘立柱建物跡の北西に隣接する。検出段階では掘立柱建物跡とは認識しておらず、整理段階で１×２間の掘立柱建物跡を想定した。長辺 294 ㎝で、短辺は 240 ㎝程だろうか。主軸方向はＮ-18°－Ｅで、柱穴は直径 30 ㎝ほどで揃っているが、深さにばらつきがあるので、偶然直線上に並んだだけで建物でないかもしれない。出土遺物がなく時期はわからないが、少なくとも 19 号竪穴住居跡よりは新しいといえる。柱穴の規模や柱間は５号掘立柱建物跡に近いので、建替えの可能性がある。



1　４号掘立柱建物跡

５号掘立柱建物跡（第 90 図）

調査区北東部に位置し、19 号竪穴住居跡を切る。主軸方向はＮ-14° 10′－Ｅで、２×２間以上で調査区外に延びる。短辺 282 ㎝を測り、長辺は 242 ㎝以上。柱穴は直径 40 ～ 50 ㎝ほどで深さは 20 ～ 30 ㎝残っているので、周辺のほかの柱穴よりも深い。



2　５号掘立柱建物跡

第 90 図　3次Ⅰ区４・５号掘立柱建物跡実測図（1/60）

柱痕が検出されたが、柱穴上位で切断して柱を抜いたものかもしれない。出土遺物がなく時期はわからない。

（３）土坑

１号土坑（図版 47、第 91 図）

調査区南東部に位置し、北西隅は 12 号竪穴住居跡と切り合うが、12 号竪穴住居跡が床面しか残っていないので、切り合いはわからない。南北方向が長軸で、Ｎ－５°10′－Ｗを主軸とする。長軸は 145cm、短軸は 93cm、深さは約 45cm である。床面は凹凸が多かったものの、平面略長形プランであり法量と壁の立ち上がりから墓壙の可能性を考えたが、墓を示すものはなかった。床面直上から出土したレンズ底の土器片から後期中葉だろう。

出土遺物（図版 52、第 93 図）

１は広口壺で、頸部が失われているが、口唇部はナデ窪んでおり、肩部には断面山形突帯がつくことから中期後半から後期前半の可能性が高い。２は支脚で、外面はミガキが入るが、内面はナデで、外面から内面の中位まで赤色顔料が塗られている。口唇部はナデで広がっている。３～５は縄文後期の土器で混入であろう。３・４は粗製深鉢で、内外二枚貝条痕による調整。５は平底で、外底に二枚貝条痕が残る。

２号土坑（図版 47、第 91 図）

調査区南東部に位置し、限定協議範囲に北端が入るが、南北方向が長軸で、Ｎ-52° 30′－Ｅを主軸とするものと見られる。長軸規模はわからないが、短軸は 126cm、深さは約 30cm である。東部を掘りすぎているが平面方形プランで、床面がほぼ平坦で壁も立ち上がりが急で、埋土上位に大石が入っていたため、石材を伴う墓の可能性を考えたが、土層も出土遺物にも墓を示すものはなかった。出土土器から久住ⅡＢ古段階だろう。

出土遺物（第 93 図）

６は小型の二重口縁壺だろうか。口唇部は丸みを持ち、口縁部の積み上げ痕が残る粗い作りで、胎土も粗放である。７は断面台形の突帯が２つつく大型壺の肩部と見られ、頸部から胴上位まで複数の突帯がつくタイプであろう。

３号土坑（図版 47、第 91 図）

調査区中央部北に位置し、南北方向を主軸とし、長軸 230cm、短軸は 175cm、深さは約 20cm である。平面略隅丸方形プランで、床面がほぼ平坦で壁も立ち上がりがやや急だったので墓壙の可能性を考えたが、墓を示すものはなかった。埋土は灰褐色砂質土で、出土土器が少ないが、弥生後期後半から古墳時代初頭だろうか。

出土遺物（第 93 図）

８は甕の頸部で内外ハケ。

４号土坑（図版 47、第 91 図）

調査区中央部南に位置し、南側は調査区外に延び、14 号竪穴住居跡を切る。南北方向が長軸で、Ｎ-39° 40′-Ｅを主軸とするものと見られる。長軸規模はわからないが、短軸は 144cm、深さは

約 35cm である。平面略長方形プランで、床面がほぼ平坦で壁も立ち上がりが急だったので墓壙の可能性を考えたが、墓を示すものはなかった。出土土器が少ないが、弥生後期後半から古墳時代前期だろう。

出土遺物（第 93 図）

９は大甕の胴部片で、断面台形刻目突帯がつく。内外丁寧なハケ。

５号土坑（図版 48、第 91 図）

調査区中央部南に位置し、14 号竪穴住居跡の屋内土坑を掘り下げた時に一緒に掘ってしまい、屋内土坑の遺物は５号土坑のものと混ざった。14 号竪穴住居跡に切られていた。南北方向が長軸で、Ｎ－74° 30′－Ｅを主軸とするものと見られる。長軸 158cm、短軸は 89cm、深さは約 55cm である。平面略長方形プランで、床面がほぼ平坦で壁も立ち上がりが中位まで急だったので墓壙の可能性を考えたが、墓を示すものはなかった。出土土器が少ないが、弥生後期後半か。

出土遺物（第 93 図）

10 は鉢で、外面タタキナデ消しで、内面は丁寧なナデ。

６号土坑（図版 48、第 91 図）

調査区中央の北部に位置し、19 号竪穴住居跡を切る。検出段階の切り合いは不鮮明だったが、19 号竪穴住居跡のベッド状遺構を検出する際に切り合いがわかった。Ｎ－59°－Ｗを主軸方向とする略方形プランで、長軸 190cm、短軸は 102cm を測る。深さは約 40cm だが、土層から上位のほとんどを別遺構の掘り込みを受けていることがわかる。墓壙の可能性を考えたが、墓を示すものはなかった。

出土土器が少ないが、４本主柱穴で 19 号竪穴住居跡を切ることから古墳時代前期か。

出土遺物（第 93 図）

11 は在地系譜の甕の頸部で、外面はタテハケで、内面ケズリ。

７号土坑（図版 48、第 91 図）

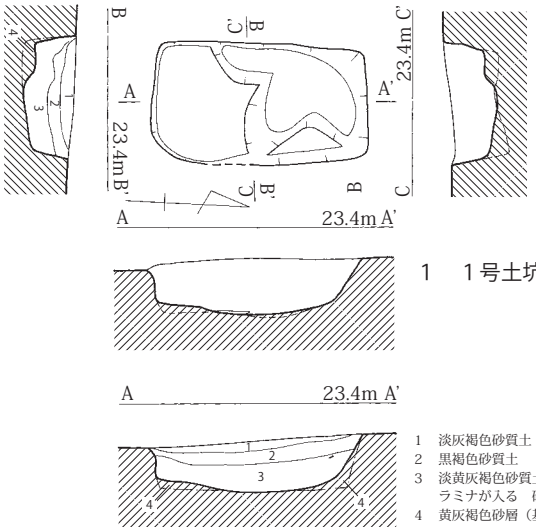
西側調査区の南東端に位置し、20 号竪穴住居跡を切る。農道の下に延びるため主軸方向や平面プランはわからない。壁が 40cm ほど残っており、床面から浮いて土器が出土した。出土遺物から弥生時代後期後半から古墳時代前期の土器が時期を絞り込む材料に欠ける。

出土遺物（第 93 図）

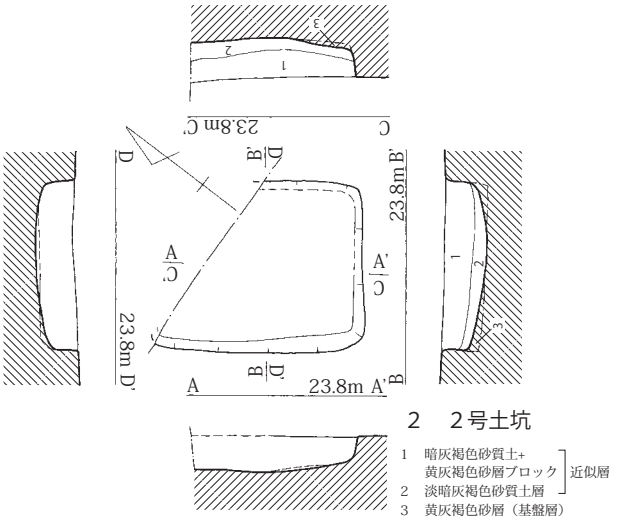
12・13 は甕で、12 は口唇部に平坦面をもつ短い口縁がつき、内面肩部に積み上げ痕が残る。外面はタタキ後ナデ消しで一部にハケが見られる。内面は工具によるナデ。13 の外面は頸部を除き全面に幅の広いタタキが入る。内面は工具によるナデで、胴上位まではタテ方向、肩部はヨコ方向に入る。口唇部はナデで平坦面をもつ。

８号土坑（図版 48、第 91 図）

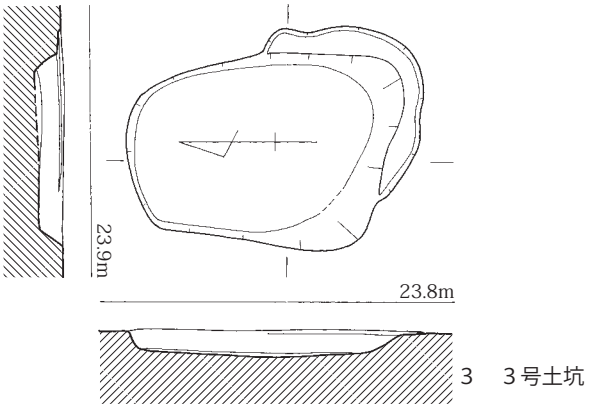
調査区南東部に位置し、５号竪穴住居跡に切られ、床下から検出されたため壁は８cm ほどしか残っていない。Ｎ－45° 30′－Ｅを主軸とする方形プランで、198 × 152cm を測る。床面は平坦で構造物はなかった。遺物もほとんどなく機能はわからない。出土土器が少ないが、弥生



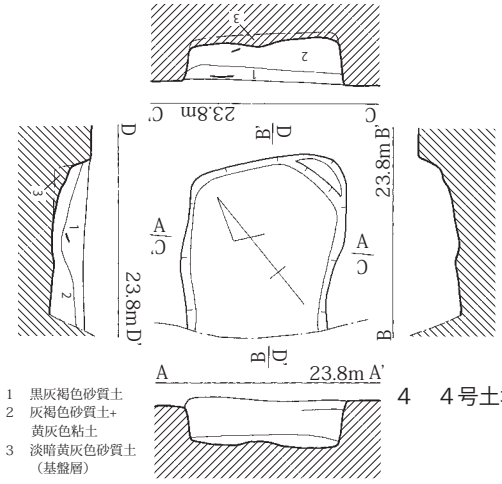
1　1号土坑



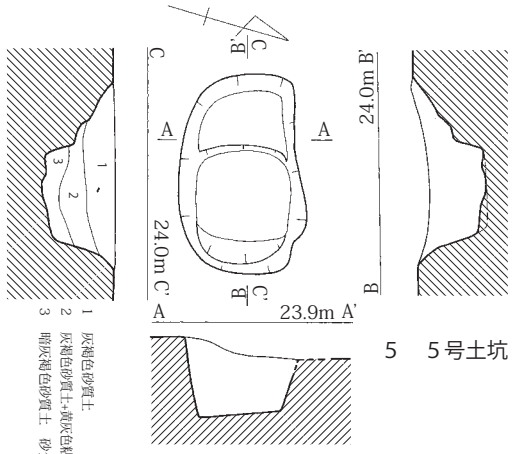
2　2号土坑



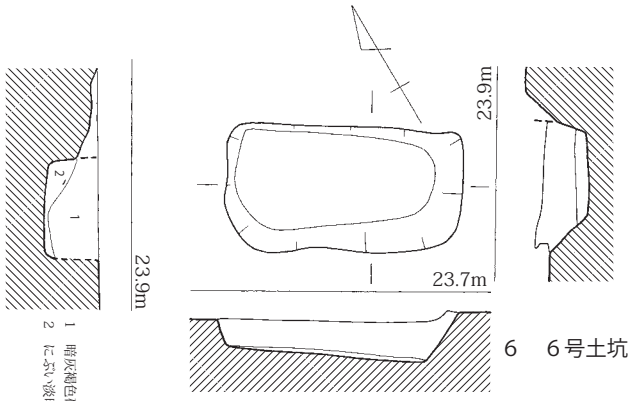
3　3号土坑



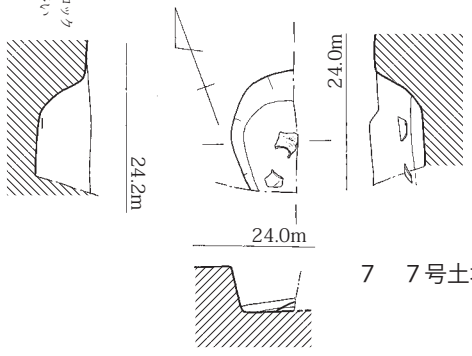
4　4号土坑



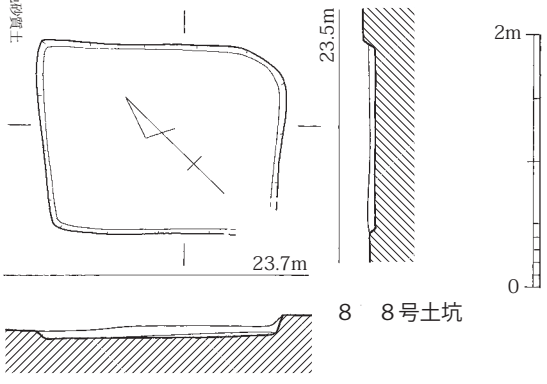
5　5号土坑



6　6号土坑



7　7号土坑



8　8号土坑

第 91 図　3次Ⅰ区1～8号土坑実測図（1/60）

後期後半だろう。

出土遺物（第 93 図）

14 は平底で内外摩滅のため調整不明。２次焼成の痕跡がないので壺の可能性が高い。

９号土坑（図版 48、第 92 図）

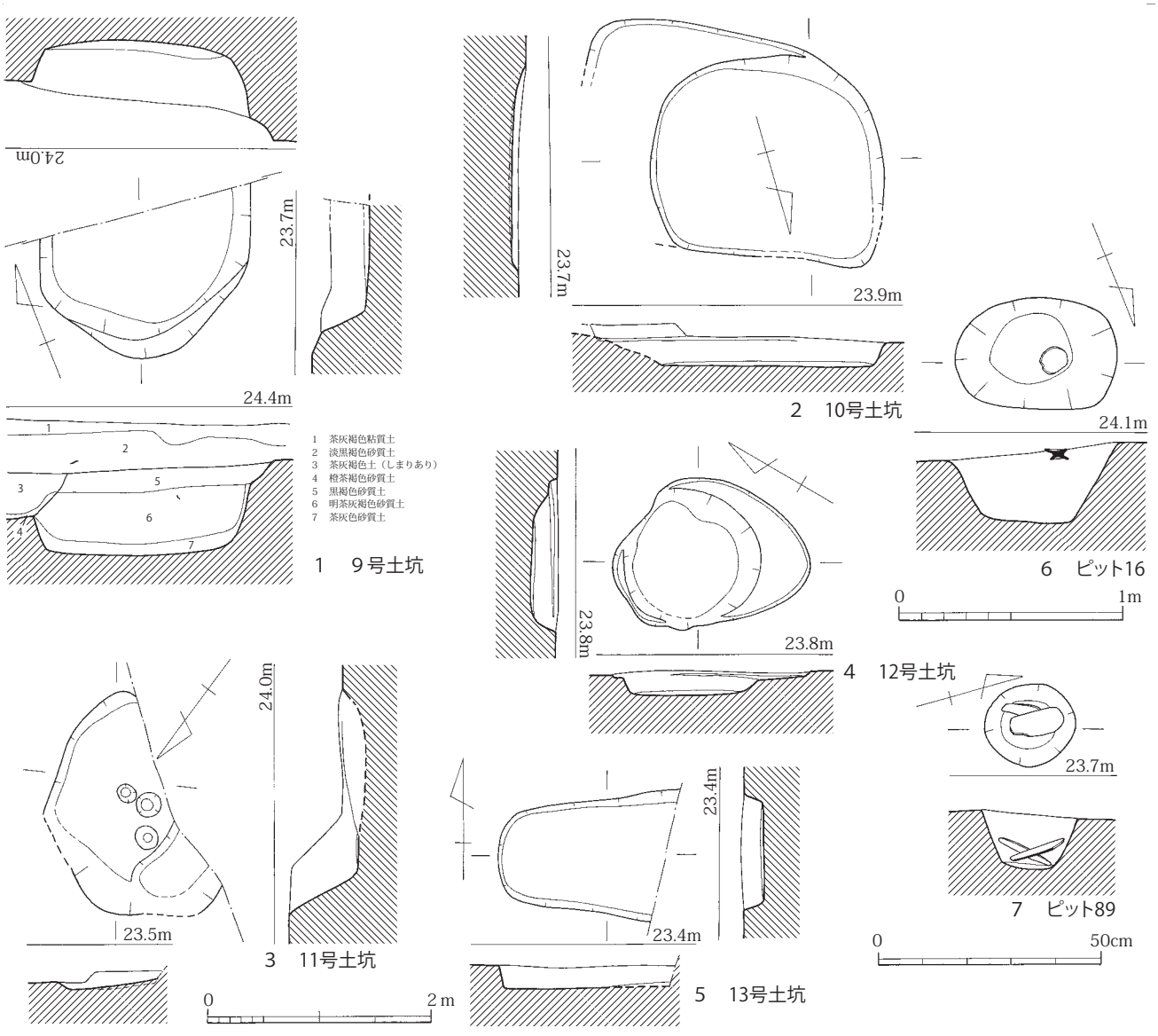
調査区西端の北部に位置し、３号溝状遺構に切られる。Ｎ－20°－Ｅを主軸方向とし、限定協議範囲に北側が延びるため長軸規模はわからない。短軸は 186cm を測るが、土層から上位は壁が崩落して広がっているものと見られる。深さは約 65cm で、床面がほぼ平坦で、壁の立ち上がりが急なので墓壙の可能性を考えたが、埋土は焼土や炭化物を含むのでではない。出土遺物から弥生後期後半か。

出土遺物（第 93 図）

15 は手底で赤化しているので甕だろう。

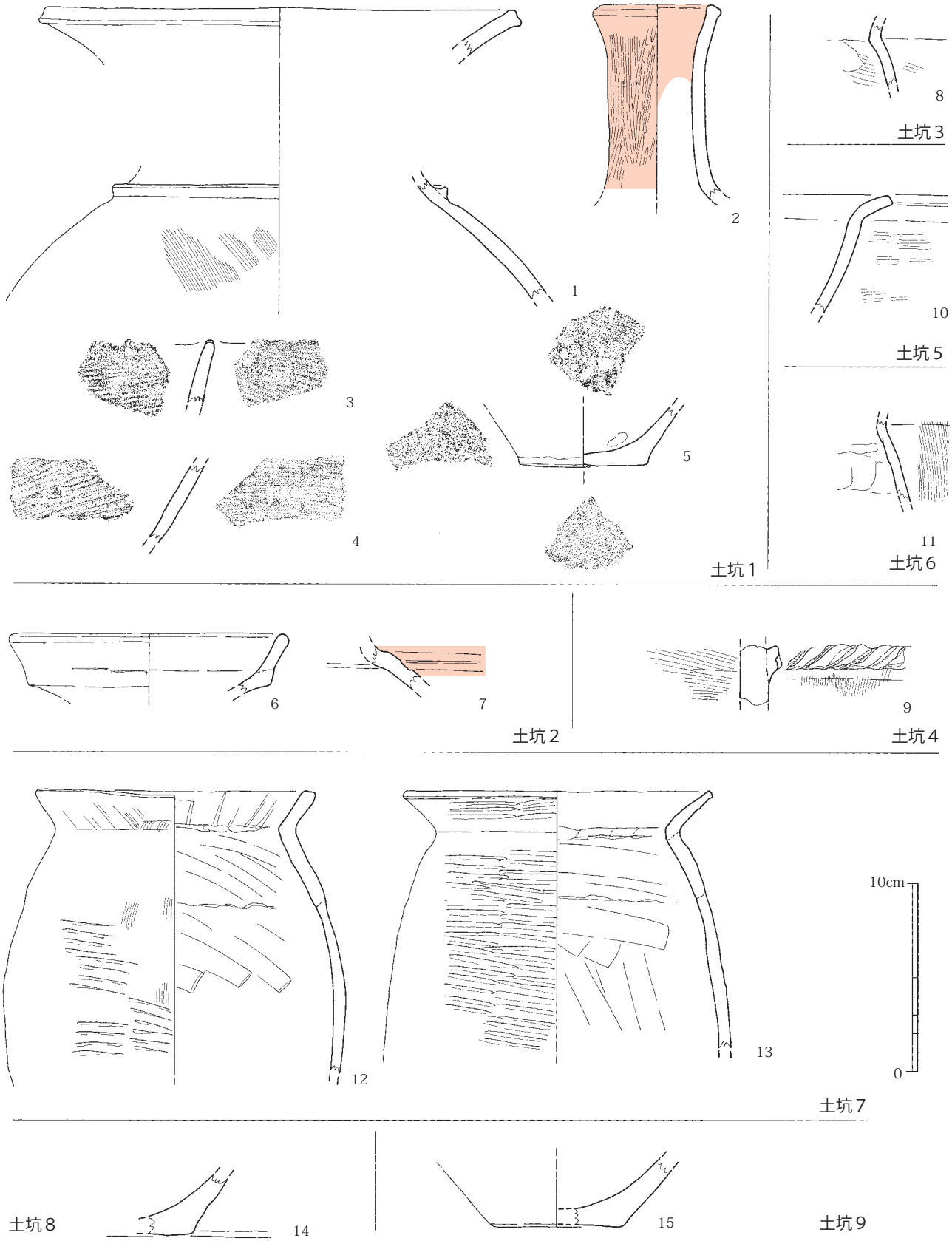
10 号土坑（第 92 図）

西側調査区北部に位置し、16 号竪穴住居跡貼床を外すと埋土が黄色土であることから明ら



第 92 図　3次Ⅰ区 9 ～ 13 号土坑、ピット実測図（1/60・1/30・1/15）

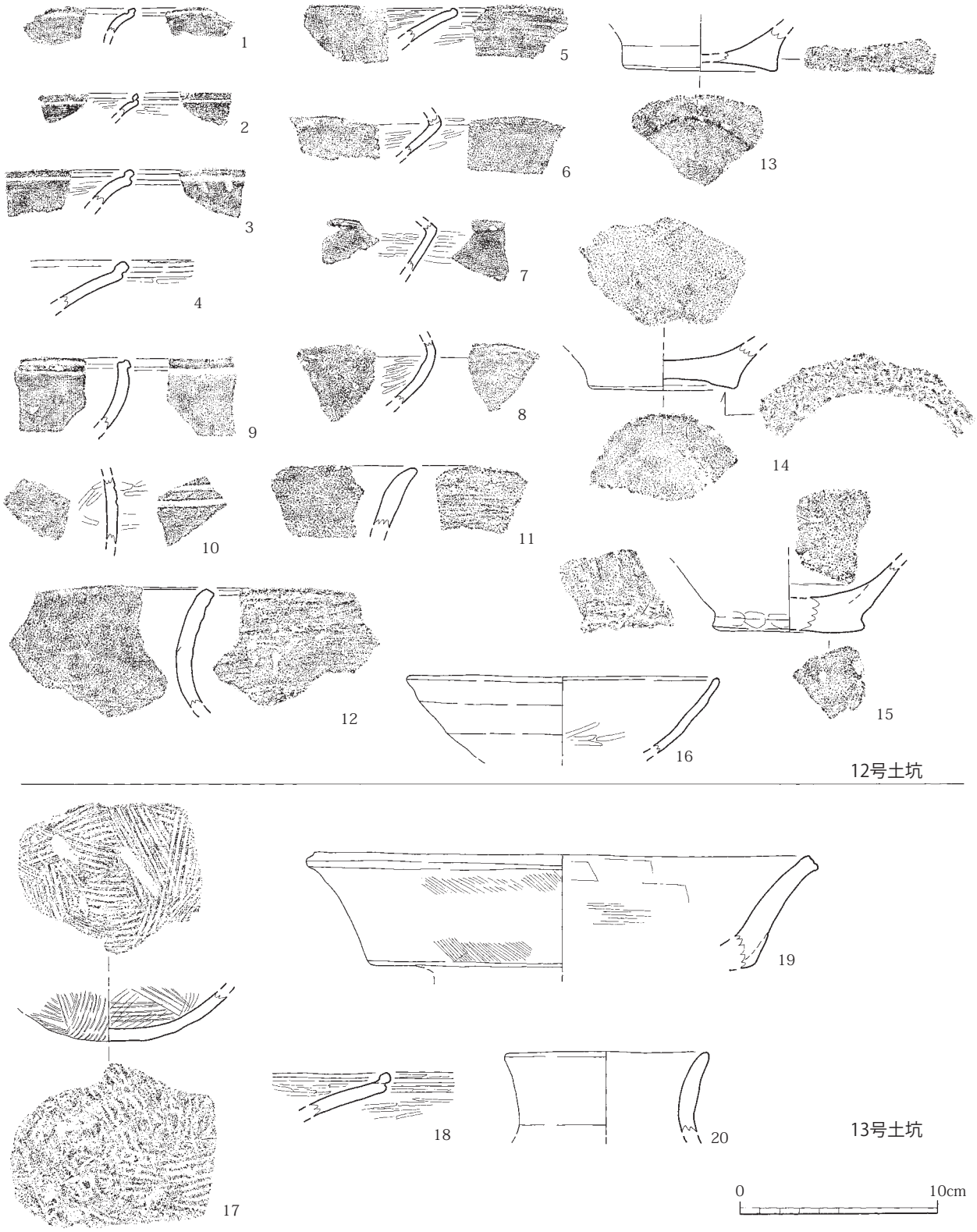
かに検出された。東・北側の壁は残りが悪いため、長軸は 280cm ほどあり、短軸は 204cm まで残っているが本来の規模はわからない。平面プランは略方形で、床面は東に向かって緩やかに上がっており、深さは 10cm 程しか残っていない。出土遺物はなく、時期はわからない。



第 93 図　3次Ⅰ区 1 ～ 9 号土坑出土土器実測図（1/3）

11 号土坑（第 92 図）

東側調査区南部に位置し、９号竪穴住居跡、北西隅からに切られて検出された。平面隅丸方形プランになるものと見られ、Ｎ－15°－Ｅを主軸と長軸 65cm で、床面に小ピットが見られた。出土遺物はなく、時期はわからない。



第 94 図　3次Ⅰ区 12・13 号土坑出土土器実測図（1/3）

12 号土坑（第 94 図）

調査区中央北部に位置し、Ｎ -30° 20′－Ｗを主軸方向とする平面卵形プランで、長軸 175cm、短軸は 134cm を測る。深さは約 20cm と浅い。土器の破片が大きいことから廃棄土坑か。16 は混入品と考えられるので。それ以外の出土土器から広川Ⅳ式か。

出土遺物（図版 52、第 94 図）

１～ 15 は縄文後晩期の黒色磨研土器で、１・２は口唇部の肥厚部が断面三角形で、接合部の外面に沈線が入る。３は外面の接合部が凹線で、内面側は沈線が入る。４は口縁部が大きく開く浅鉢で、外面口縁部に凹線文が残る。５は口縁部に肥厚がない浅鉢で、口縁部が丸くナデられている。６・７は胴部が鋭角に屈曲するもので、８は胴部に丸いもの。９は口縁部のない鉢で、外面の接合部と内面側に沈線が入る。10 は深鉢の肩部に複数の凹線が入る。11・12 は粗製深鉢で、11 は外反口縁で、12 は肩部が内傾してから外反するタイプ。13・14 は上底の深鉢で､15 は厚みのある底部で外面の胴下位にオサエがある。16 は土師器椀で器面に摩滅があり、内面にミガキが残る。

13 号土坑（図版 48、第 92 図）

調査区東北部に位置し、東半は調査区外に延びる。東西方向を主軸方向とし、長軸規模はわからない。短軸は 114cm を測る。深さは約 20cm と浅く、床面がほぼ平坦で、壁の立ち上がりが急なので墓壙の可能性を考えたが、墓を示すものはなかった。出土遺物が少なく確実性に欠けるが、布留式期か。

出土遺物（図版 52、第 94 図）

17 は丸底で内外条痕が明瞭に残る。18 は大きく外反する浅鉢の底部で外面の接合部に凹線が入る。19 は二重口縁壺で、内外ハケ。積み上げ部に外面に沈線が入る。20 は小型の直口壺の口縁部か。

（４）溝状遺構

１号溝状遺構（図版 49、第 60・98 図）

調査区東端から検出された幅 150cm、深さ約 15cm の溝で、浅いが幅が広いので、上面が大きく削平されているが、本来は規模の大きい溝であっただろう。間違いなく途中で途切れていたが、削平されているためで出入口ではない。２次調査区からは検出されていない。出土遺物からは久住ⅡＡ古段階（布留０式古段階）のものがあるが、２号溝状遺構に併走しているので、同時期と推定される。

出土遺物（図版 53・54、第 95・101 ～ 103 図）

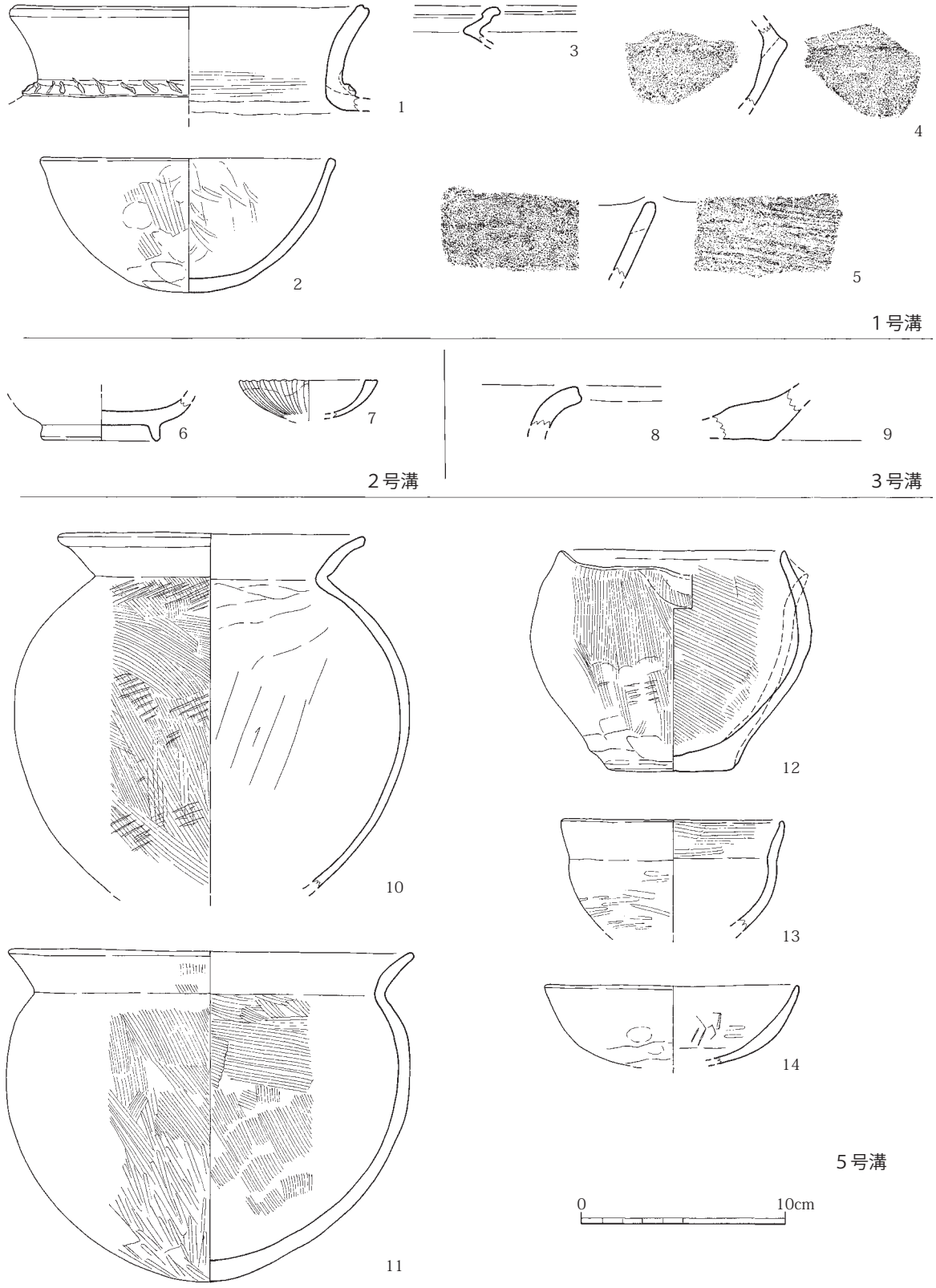
第 95 図１は古墳時代初頭から前期の大型の直口壺の口縁部で、内外ナデで、頸部は外面に刻み目突帯がつき、内面ヨコハケ。２は坏で、外面はハケ、下部はケズリ。内面はケズリ後ナデ。部分的にミガキ。口縁部の湾曲はオサエによるもの。３は浅鉢で内面口縁部に肥厚しており黒川式中段階に属する。４は頸部が鋭角に屈曲する浅鉢で、器面はミガキ摩滅している。５は小さな山形突起がつく浅鉢で、内面はナデ、外面は二枚貝条痕が残る。

この他、第 101 図５・９・10 の打製石鏃、第 101 図 26、第 102 図２の掻器、第 102 図 12 の

石核、第 103 図８の小型石器がある。

２号溝状遺構（第 60 図）

調査区東端から検出された幅 70cm、深さ約５cm の溝で、北側は削平のため途切れていた。



第 95 図　3次I区溝状遺構出土土器・陶磁器実測図（1/3）

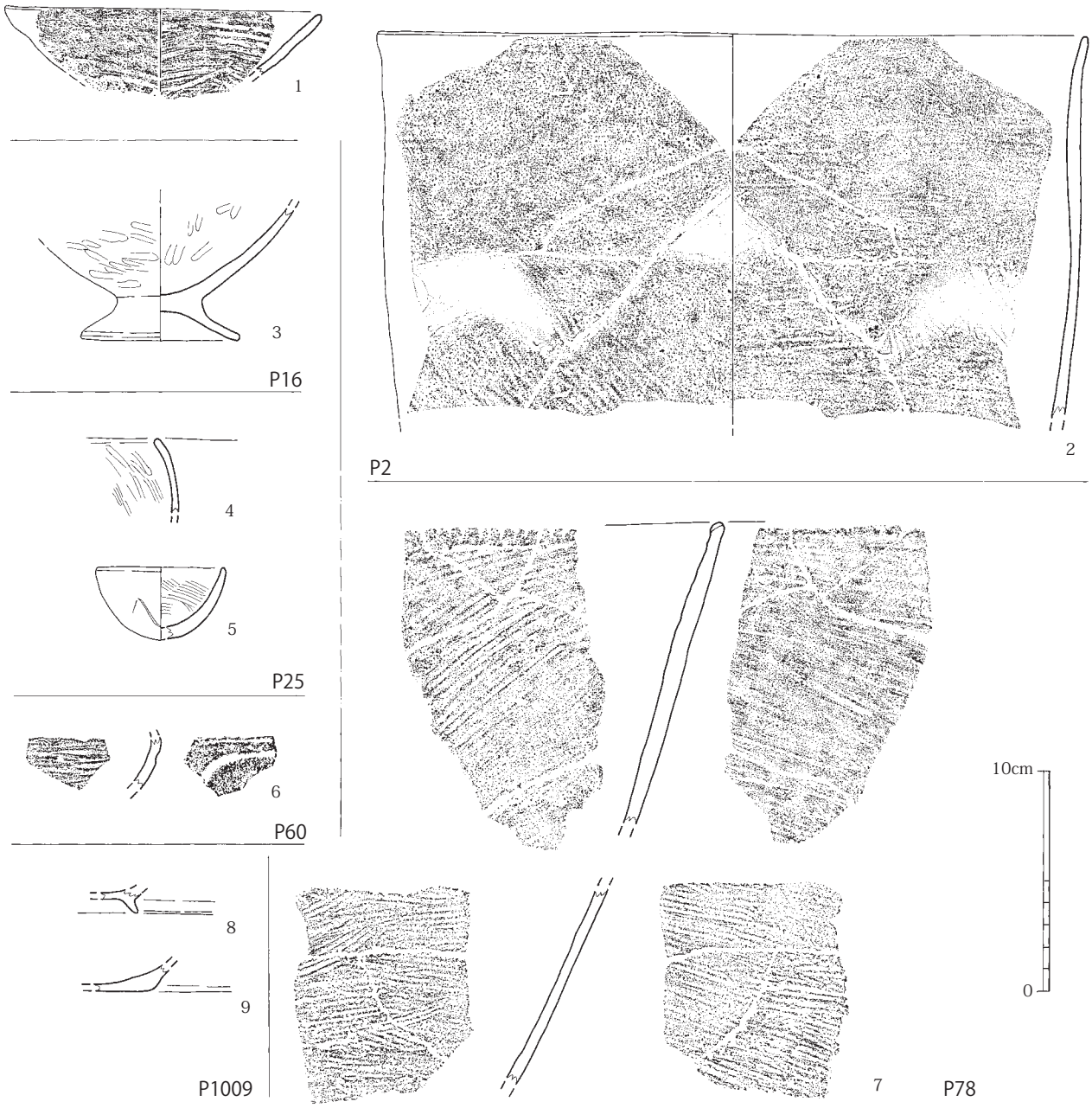
埋土は１号溝状遺構と同じであった。２次調査区からは検出されていない。出土遺物から近世後期だろう。

出土遺物（第 95 図）

６は磁器碗の底部で、文様のない部分の染付であろう。畳付は釉剥ぎ。胎は灰白色のなので波佐見焼であろう。７は型押し成型による菊花文の白磁の紅猪口で、外面口縁部から内面に透明釉がかかる。

３号溝状遺構（図版 49、第 60・98 図）

調査区西端から検出された幅 88cm、深さ約 45cm の溝で、直線的に均一な幅で、N -18° - E 方向に走り、９号土坑を切る。壁が鉄分で暗橙色になっているのが特徴的である。床面は南に

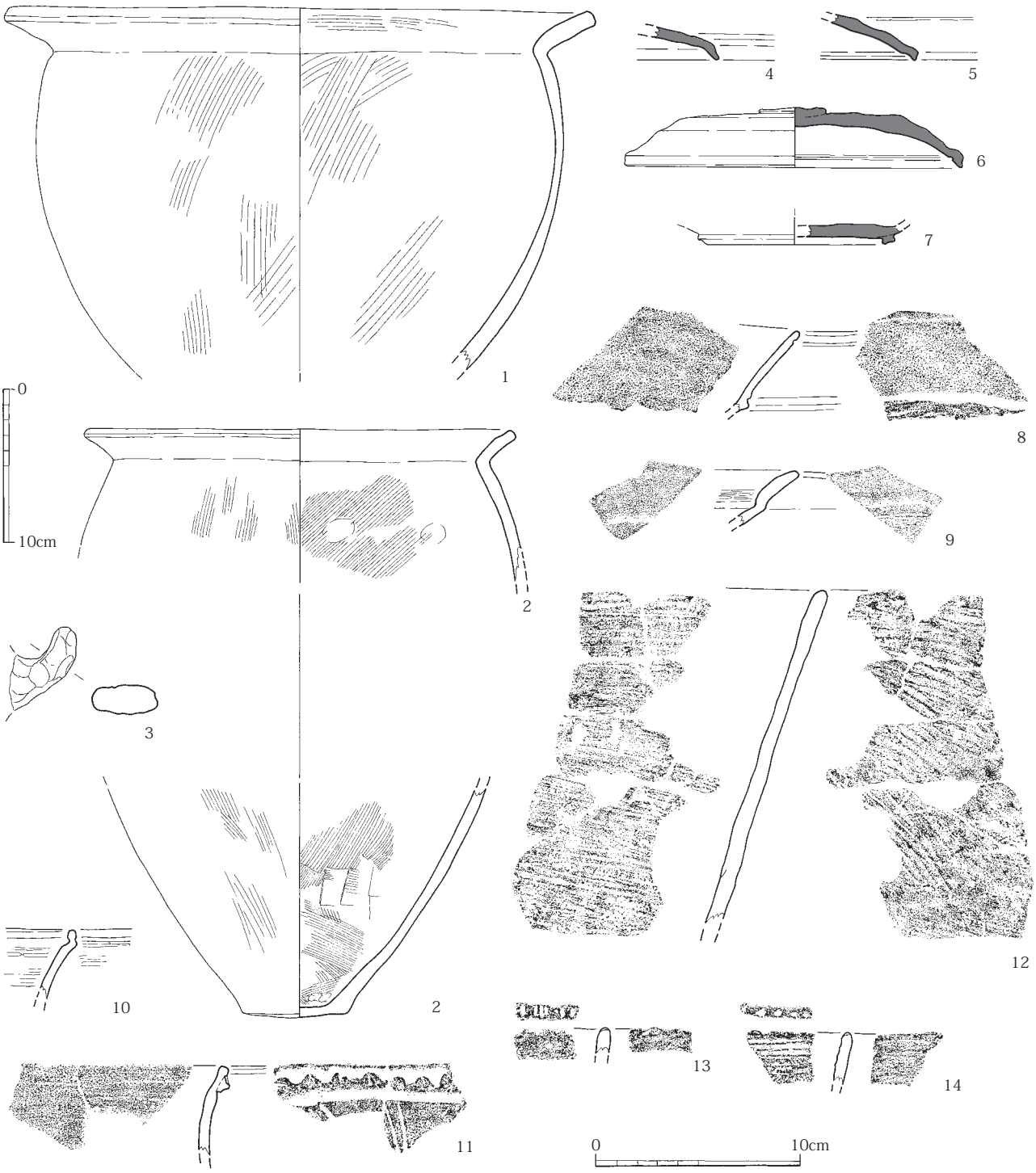


第 96 図　３次Ⅰ区ピット出土土器実測図（1/3）

下がっていた。埋土はほぼ単一で、２次調査区の弥生時代終末から古墳時代初頭の溝と同一遺構である。出土遺物から弥生後期後半～末だろう。

出土遺物（第 95 図）

８は弥生時代後期から古墳時代前期の大型壺の口縁部片か。９は外面がにぶい暗灰褐色だが、胎は赤化しているので甕である。平底で径が復元できないことから弥生時代後期後半から末だろう。



第 97 図　3次I区弥生包含層出土土器実測図（2は 1/4、他は 1/3）

４号溝状遺構（図版 49、第 60 図）

調査区西端から検出され、東壁が検出されたのみで幅、深さはわからないが、30㎝以上の深さがある。図化できる遺物はないが、２次調査区の弥生時代終末から古墳時代初頭の溝と同一遺構である。

５号溝状遺構（第 60 図）

調査区北東部から検出され、26 号竪穴住居跡に切られる。東ほど削られているため幅は不均一で、最大で 140 ㎝、深さは５㎝ほどしか残っていない。貼床まで削平された竪穴住居跡の床下掘り込みかもしれないが、そこから復元しうるものはなかった。出土遺物から久住ⅡＢ古段階（布留０式新段階）だろう。

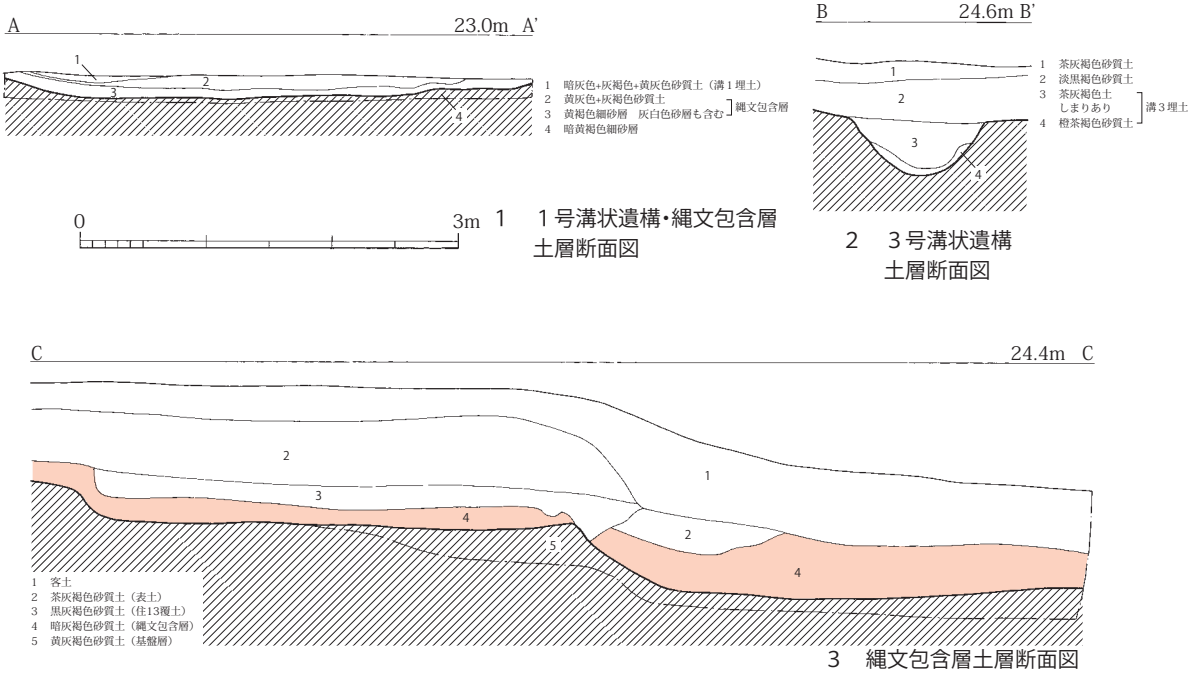
出土遺物（第 95 図）

10 は古墳時代前期の甕で、口縁部は小さく外反し返りはない。外面はタタキの後ハケ、内面はケズリ。11 は鉢で、外面は口縁部から胴中位はハケ、胴下位は幅の狭いミガキのようなナデ。内面はハケで、胴中位以下は使用のためか摩滅している。12 は無頸壺で、外面ハケ、胴下位はケズリ、内面はハケ。口縁部の一端を曲げて片口をつくる。13 は小型丸底壺で、外面はミガキ、内面口縁部はヨコハケ。14 は坏で、外面はミガキ、内面はナデで、工具端部の痕跡が残る。

（５）ピット

ピット 89（第 92 図）

12 号竪穴住居跡の貼床下から検出された径 21㎝のピットで、ほぼ完形の石庖丁２点が入っていた。中位から出土しており重なった状態ではなかったので、埋められた可能性がある。石庖丁（第 103 図１・２）のうち１点は孔があいてはいるものの直径２㎜の非常に小さい孔なので未製品と考えられ、廃棄したものではなく祭祀に伴う埋納であろう。遺物についての詳しい



1　１号溝状遺構・縄文包含層土層断面図

2　３号溝状遺構土層断面図

3　縄文包含層土層断面図

第 98 図　3次Ⅰ区1・3号溝状遺構・縄文包含層土層断面図（1/60）

説明は後述する。

その他のピット出土遺物（図版 52 ～ 52・68、第 96・101・102 図）

第 99 図　3次I区縄文包含層出土土器実測図1（1/3）

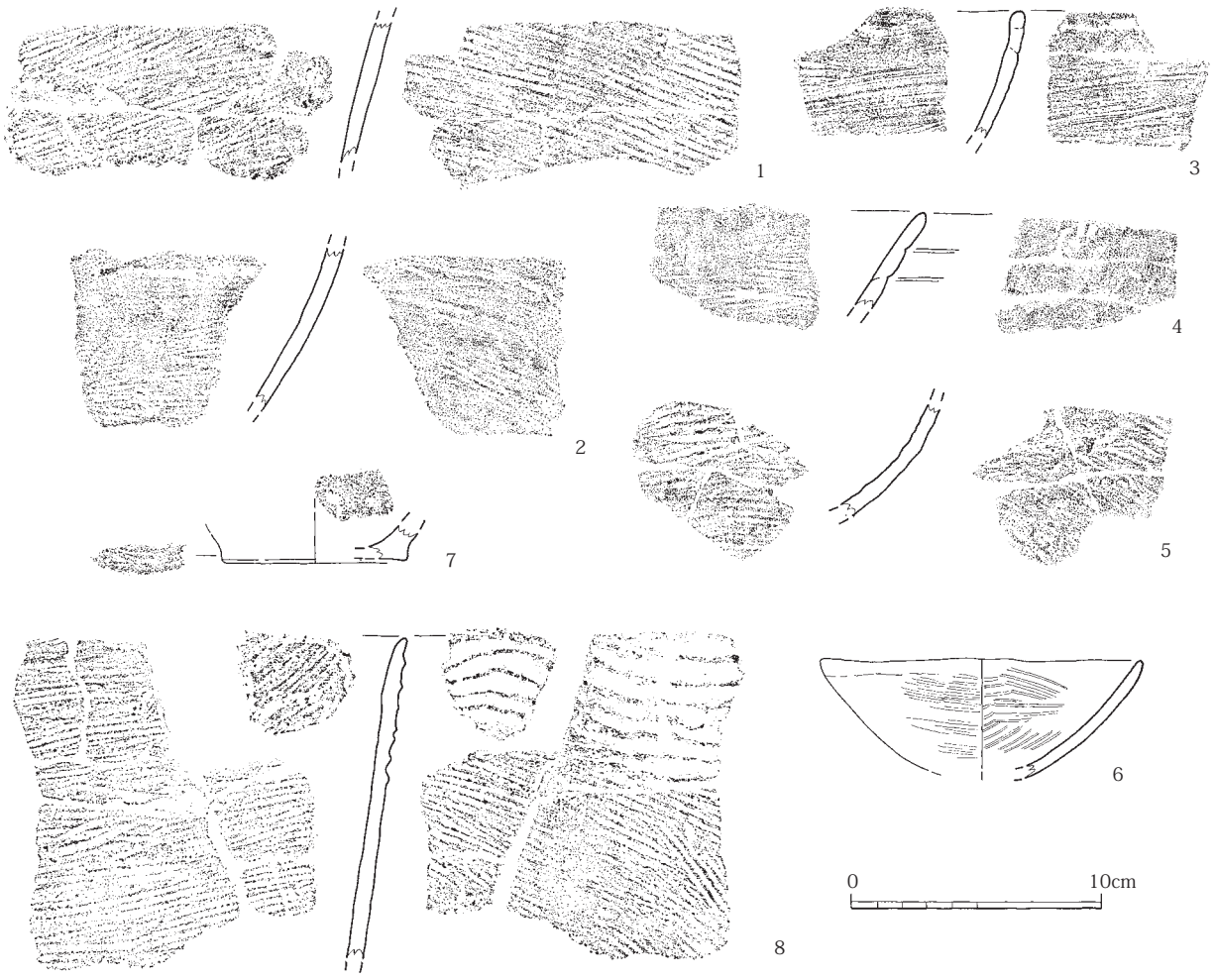
第96図１・２はピット２出土の縄文後晩期の粗製土器で、１は小型の浅鉢で、２は深鉢で内外灰白色なのは器面が摩滅しているためで、ピット２(図版48)は縄文時代の遺構とみてよい。３はピット16出土の小型高坏で、内外ミガキだが、摩滅のため単位は不明瞭。４はピット25出土の器壁の薄い鉢で、内面にミガキが残る。５はピット25出土のミニチュア坏で、表面の沈線は意図的なものかわからない。６はピット60出土の縄文後期の浅鉢胴部で、押し引きによる入組文か。7はピット78出土の縄文後晩期の深鉢で、口唇部に刺突がある。内外二枚貝条痕。８・９はピット1009出土の土師器高台付杯の底部片と底部ヘラ切りの坏の底部片で、10世紀の所産だろうか。この他、ピット１の第102図９の定形石器未製品、ピット65の第102図５の石錐、ピット95の耳環、ピット147の第101図23の大型掻器、ピット1054の第101図19の掻器が出土している。

（６）遺物包含層

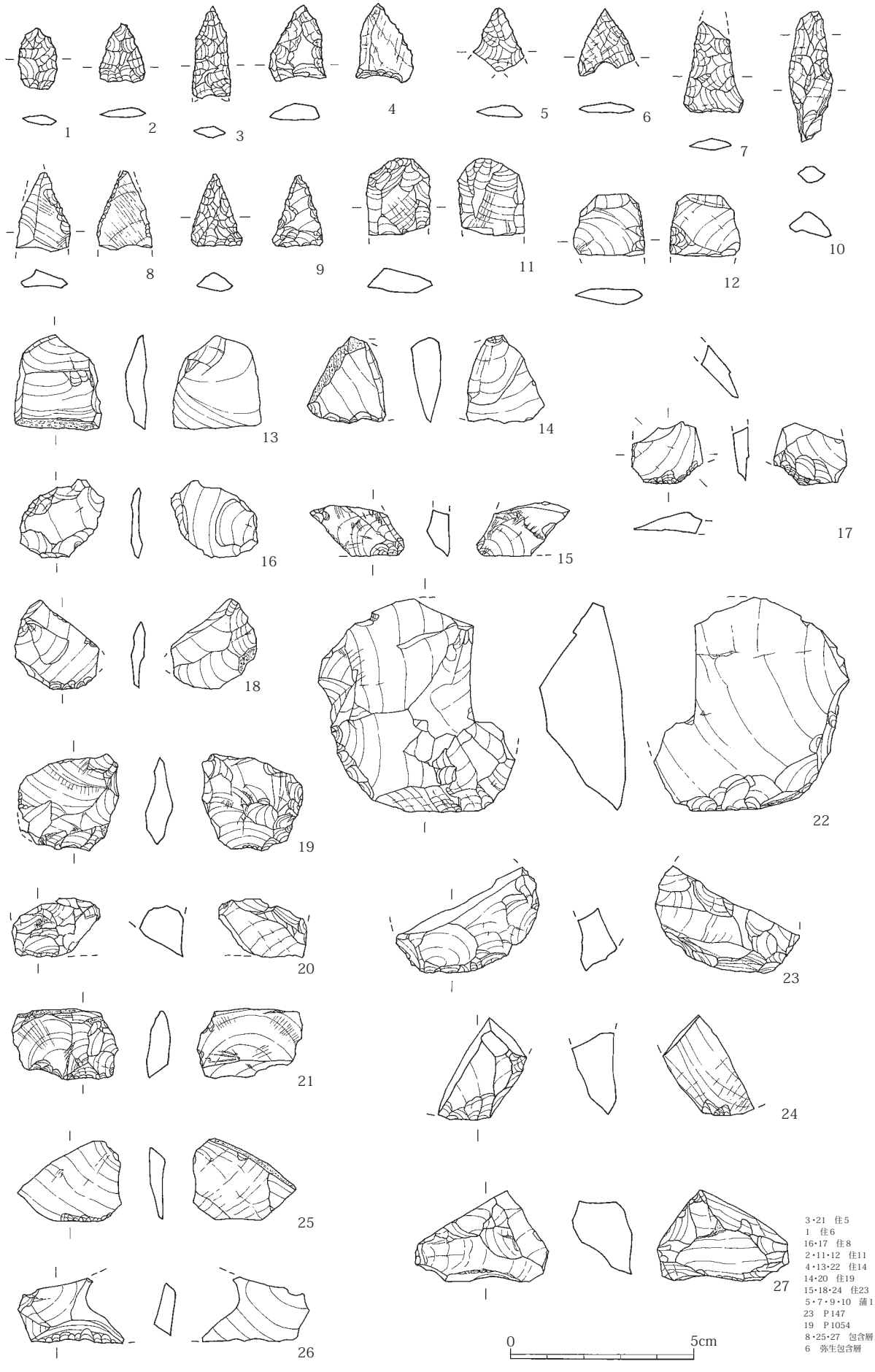
弥生包含層出土遺物（図版53・54、第97・101・102・104図）

調査区ほぼ全域の検出面の上に40～50㎝の厚さで堆積しており、遺物が混じっていた。この包含層上位は古墳時代後期から奈良時代の包含層と見られるが、土色がほぼ同じであったため平面的に分別するのは困難であった。

第97図１は内外黄灰色で煮沸使用の痕跡がないので鉢だろう。口縁部の傾きと頸部の屈曲から弥生時代後期後半から末に属するだろう。２は甕で、実測図は口縁部と底部の図上接合で



第100図　3次I区縄文包含層出土土器実測図2（1/3）



第101図　3次I区出土石器実測図1（2/3）

ある。外面は口縁部がハケ、胴下位は擦過状のナデ、内面はハケ。底部は平底でハケが残る。弥生時代後期中葉。３は土師器の把手で、小型なので坏につくものだろうか。４～７は８世紀初頭から前葉の須恵器である。４～６は坏蓋で、６は天井部回転ヘラケズリ後ナデで、ほかの個体片が付着している。器壁が厚く、歪みがある。７は坏身の底部で、外底は回転ヘラ切り後粗いナデ。８・９は波状口縁の浅鉢で、口縁部外面と内面はミガキで、体部外面には条痕が入る。夜臼式。８は外面口縁下と屈曲部に沈線が入る。10 は精製土器の深鉢で、内外ミガキで、外面口縁部に沈線が入る。11 は口縁部外面にオサエによる凹凸がある突帯がつき、その下に２条単位の鋸歯文らしい沈線が入る。夜臼式古段階。12 は口唇部に平坦面をもつ深鉢で、内外二枚貝条痕調整。13・14 は口唇部に刻み目が入る深鉢で、内外二枚貝調整。

この他、第 101 図６の石鏃、第 102 図７の石核、第 104 図８の鎌の先端片、11 の釘片が出土している。

縄文包含層（第 98 図）

調査区東部に散見され、平面的には明瞭に判別できないので、縄文土器の分布を頼りに包含層の分布範囲を検出した。南東部の１号溝状遺構付近は遺物が上位からしか出土しなかった。北東部の 12・26 号竪穴住居跡周辺は遺物が集中しており、包含層の堆積が厚かった。それより西からは遺構埋土に縄文土器や打製石器が混じることはあっても包含層は見られなかった。包含層は分層できず、前期の轟Ｂ式土器は後晩期と同一面から出土している。

出土遺物（図版 53・54、第 99・100・102・103 図）

第 99 図１・２は粗製の浅鉢で、内外二枚貝条痕調整。２は口縁部片と胴部片の図上復元で、外面は摩滅している。３～５は口唇部に刻み目がつく深鉢で、３は丸く深い刻みが入るため口唇部が広がっており、４は間隔の狭い小さい刻みが刺突されるため口唇部が平坦面をもつ。５は間隔の広い刻みが入る。いずれも内外二枚貝条痕調整。６～８は深鉢で、６・７は口縁部がやや外反している。８はやや内湾している。いずれも内外二枚貝条痕調整。９・10 は口縁部外面に多条凹線の入る口縁部をもつ深鉢で、口唇部に刻み目が入る。内面は二枚貝条痕。広田Ⅳ式だろう。11 は口縁部外面に波状に凹凸のある突帯がつく深鉢である。刻目突帯文土器の古い段階のものと見られるので夜臼式古段階だろうか。12 は口縁部外面に格子目状に沈線が入り、口唇部にリボン状突起がつく浅鉢で黒川式新段階だろう。13 は口縁部外面に２条の凹線が入るものと見られる。

第 100 図１・２は粗製深鉢で、内外二枚貝条痕調整。１の上端は積み上げ部で欠損している。３～５は浅鉢で、３は内外二枚貝条痕調整だが、外面に積み上げ痕を残す。４は内面に二枚貝条痕が残るが、外面は未調整で積み上げ痕が明瞭に残る。５は３の積み上げ部で欠損したもののようで、端部が口縁のようである。６は小型の浅鉢で、口縁が歪んでいる。７は平底の底部で外面に条痕を残す。８は轟Ｂ式の深鉢で、内外二枚貝条痕調整。山形に隆起する部分をもつミミズ腫れ状突帯が７条ある。

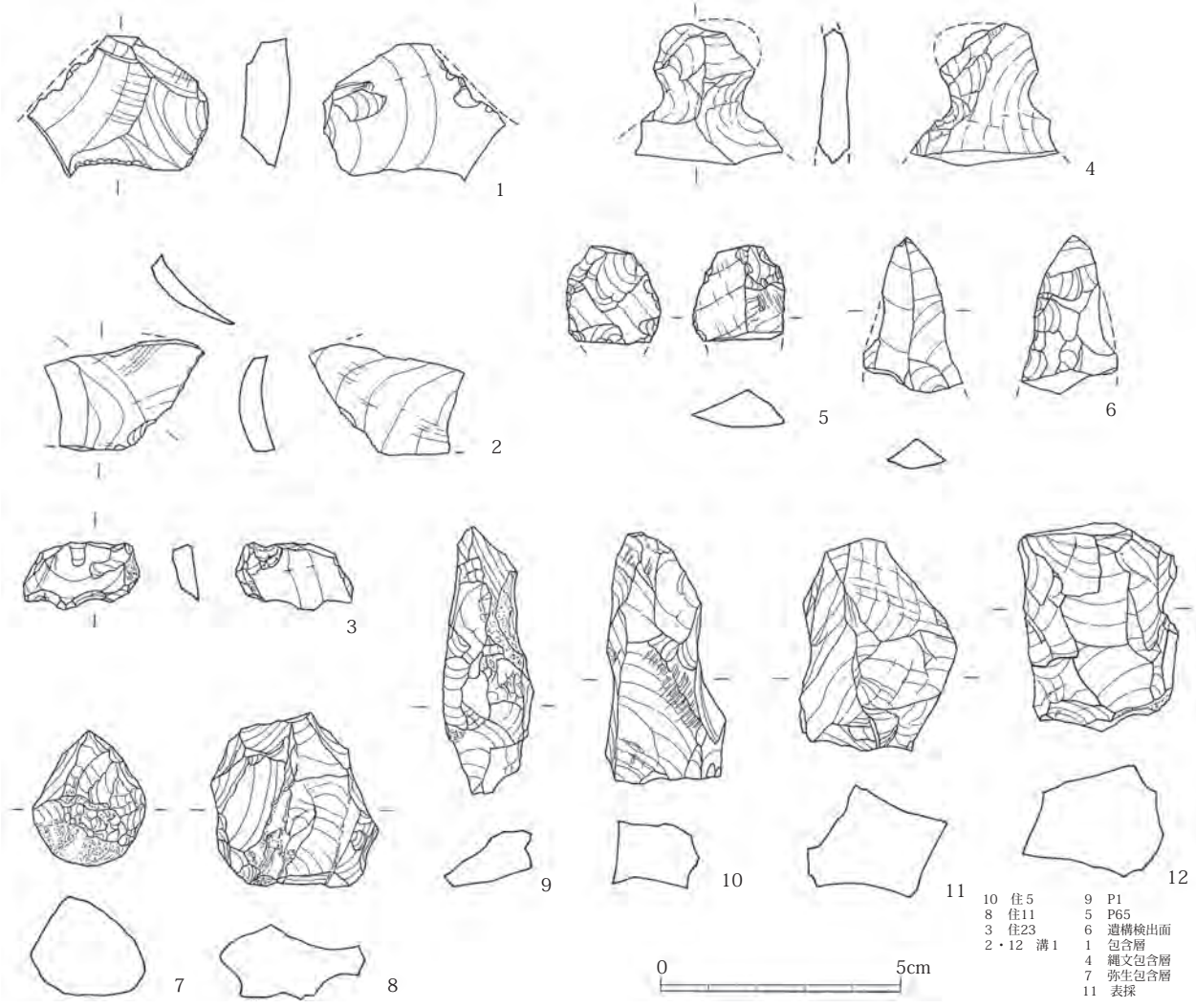
この他、第 102 図１の掻器、第 103 図４の石弾らしいものが出土している。

（７）特殊遺物（図版 53・54、第 101 図～第 103 図）

第 101 図１～９は打製石鏃で、１は６号竪穴住居跡出土の柳葉形で、1.36g を測る。２は 11

号竪穴住居跡出土の三角形で、両面加工だが片面は平坦である。1.26g を測る。３は５号竪穴住居跡出土の五角形で、先端と基部がわずかに欠損している。1.09 ｇを測る。４は 14 号竪穴住居跡出土の凹基式で、両面加工だが片面は大きな剥離面を残す。右側縁の窪みは欠損部を再加工している。1.77g を測る。５は１号溝状遺構出土の凹基式で基部は新規欠損。両面だが片面は平坦。0.87 ｇを測る。６は弥生包含層出土の凹基式で、基部の欠損は風化している。両面だが片面は平坦。1.27 ｇを測る。７は１号溝状遺構出土の長三角形で 1.55g を測る。基部の両端は尖っていないが欠損ではない。８は包含層出土で、両面加工に大きな剥離を残し、側縁にのみ刃部を形成しているので未製品か剥片鏃と見られる。上下端が欠損しているので全体の形態はわからない。1.49g を測る。９は１号溝状遺構出土の長三角形で 1.25g。両面加工だが片面は加工が少なく平坦面を残す。10 は１号溝状遺構出土の有茎式で両面加工、下半は調整剥離が粗く、素面も残る。2.87 ｇを測る。１～３・５・７は姫島産黒曜石製で、４・６・10 はサヌカイト製、８は腰岳産。11・12 は 11 号竪穴住居跡出土で、下半が欠損しているが、縦長長方形のサイドスクレーパーだろう。11 は基部を丸く加工しているが、刃部はない。側縁は片辺のみに刃部が形成されている。2.96 ｇを測る。12 は片側縁に刃部を形成している。基部は大きな剥離なので、下端が湾曲する掻器の可能性もある。1.75g を測る。11・12 は姫島産黒曜石製。

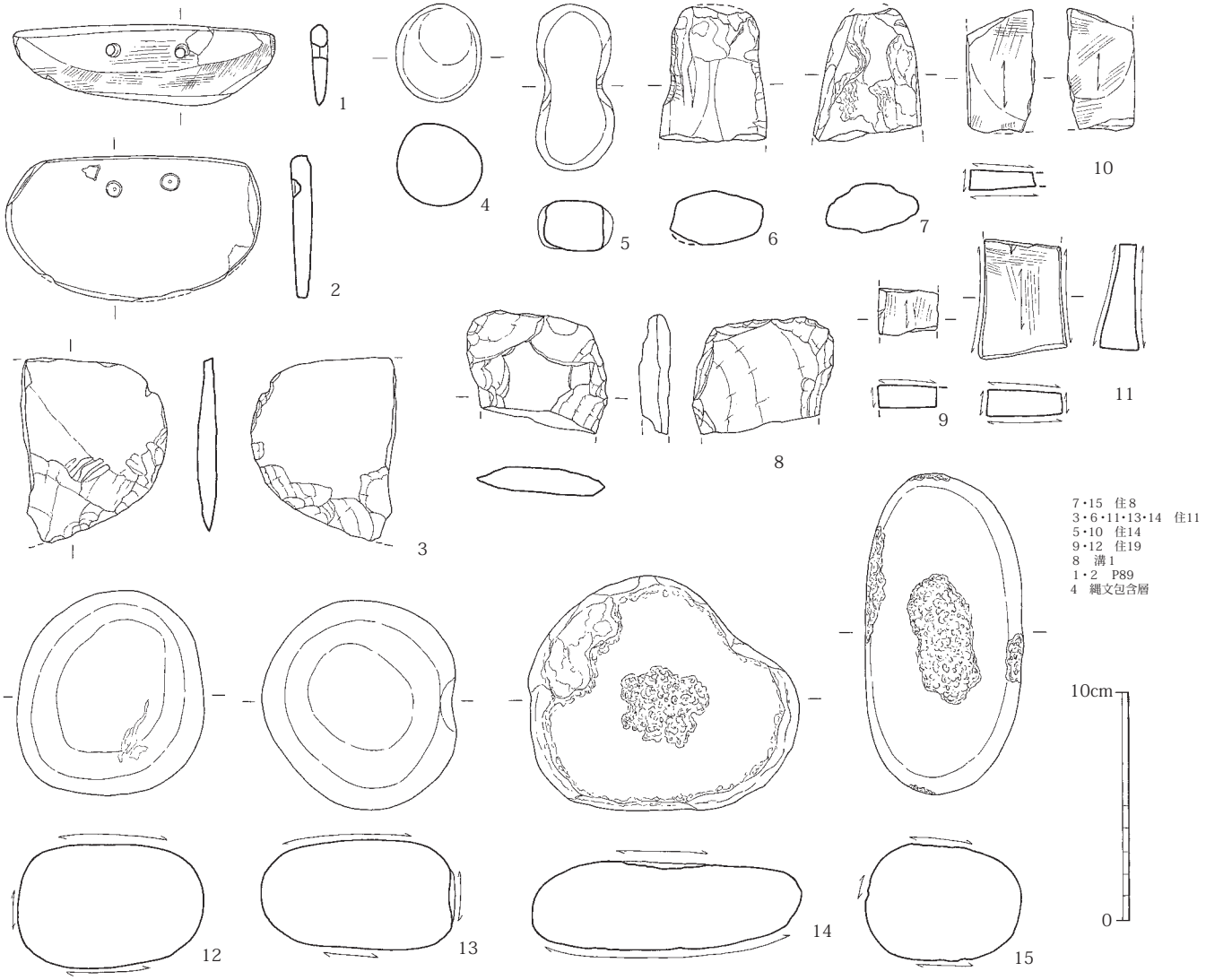
13・14 は台形の掻器である。13 は 14 号竪穴住居跡出土で、薄い剥片の側縁を粗く整形しており、刃部はないが、下端の素面を調整剥離の替わりとして利用していると見られる。3.81g



第 102 図　3次I区出土石器実測図 2（2/3）

を測る。14 は 19 号竪穴住居跡出土で、素面を残す剥片を粗く整形しており、下端に刃部を作る。3.29g を測る。13・14 は姫島産黒曜石製。15 は 23 号竪穴住居跡出土で、基部と片端が欠損しているが、下面の刃部が平坦なので台形の掻器とした。2.55g を測る。

16 ～ 18 は縦長剥片を斜めに利用し片側につまみ状の基部を残す掻器で、16 は 8 号竪穴住居跡柱 7 出土で、剥片の片面の縁を加工して刃部を形成している。湾曲は小さいが、形態的には掻器である。17 は 8 号竪穴住居跡出土で、片面は下端を大きく剥離して湾曲面を作って刃部を形成しており、反対面は縁のみを調整剥離し、下端と片側縁に刃部を形成している。1.90ｇを測る。18 は 23 号竪穴住居跡出土で、基部は素面を一部残しているので大きな剥離は素面を剥がす目的であろう。主要剥離面側の下端を調整剥離して刃部を形成している。2.68g を測る。16 ～ 18 は姫島産黒曜石製。19 ～ 21 は方形の掻器で、両面剥離している。19 はピット 154 出土で、基部は折切後に刃潰ししており、右縁は平坦面をもつので、下端と左縁に刃部を形成している。5.08g を測る。20 は 19 号竪穴住居跡出土で、厚い剥片なので大型品の一部の可能性があり、基部を欠損しているため全体の形態はわからない。下端のみに刃部を形成している。4.03g を測る。21 は 5 号竪穴住居跡出土で、基部に素面がある横長剥片を利用しており、下面の大きな剥離の湾曲を刃部にしている。19 は姫島産黒曜石製、20・21 は腰岳産黒曜石製。22 ～ 24 は大型の掻器である。22 は 14 号竪穴住居跡出土で、幅広の厚い剥片の側縁を丸く整形しており、下端に両面加工した湾刃を形成している。50.56g を測る。23 はピット 147 出土で、

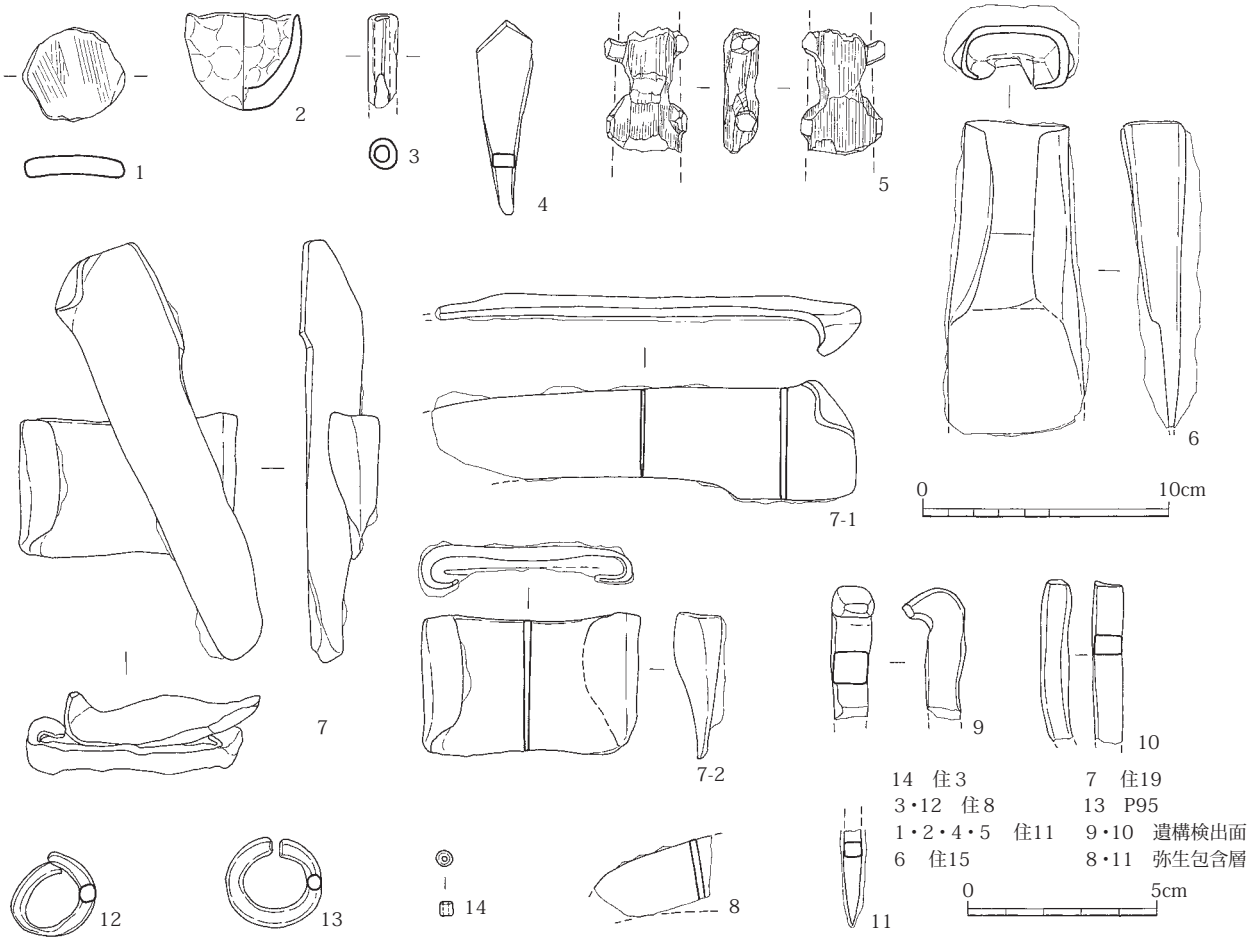


第 103 図　3次Ⅰ区出土石器実測図 3（1/3）

両面加工しており、基部を欠損しているため全体の形態はわからないが、下端に湾刃を形成している。10.01g を測る。24 は 23 号竪穴住居跡出土で、幅広の厚い剥片を利用しており、片面に主要剥離面を残し、下端に刃部を形成している。4.75g を測る。22 ～ 24 は姫島産黒曜石製。

第 101 図 25 ～ 27・第 102 図 1 は包含層出土の偏三角形の掻器で、25 は遺構面出面で、基部に素面を残す三角形の剥片を利用しており、調整剥離はなく、下端に刃部を形成しているのみ。2.74g を測る。26 は 1 号溝状遺構出土で、側縁が欠損しているので全体形態がわからないが、横長剥片を斜めに利用し、下端を大きく剥離して刃部を形成している。2.47g を測る。27 は表採で、石核の湾曲の大きい２辺を刃部に利用している。1.82g を測る。

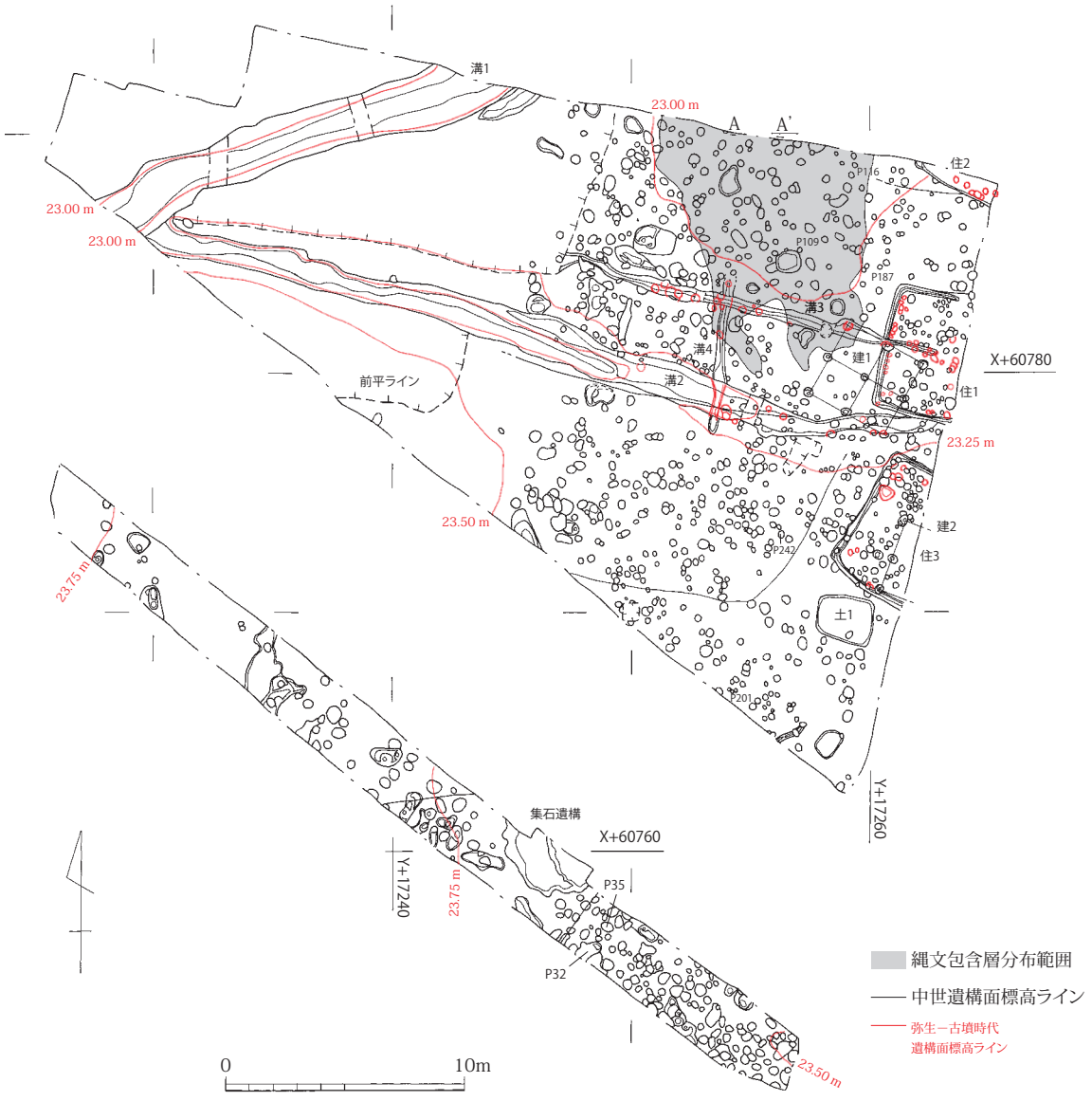
第 102 図 1 は幅広の剥片の下半を大きく剥離し、それを横にして下端と側縁に刃部を形成している。下端面の先端部はやや下に下がって刃部はこれ以上長くならない。8.02g を測る。すべて姫島産黒曜石製。２は 1 号溝状遺構出土で、基部と側縁を大きく剥離しているので全体の形態はわからない。下端と側縁に刃部を形成している。姫島産黒曜石製で 4.43g を測る。３は 23 号住居出土の抉り入り石器で、基部に素面が残り側縁との角は刃潰ししている。下端に２ヶ所のノッチが入る。姫島産黒曜石製で 2.56g を測る。４は縄文包含層出土のサヌカイト製石匙の基部で、両縁からの剥離でつまみを形成している。6.04g を測る。5・6 は石錐だろう。５はピット 65 出土の縦長剥片を利用した基部で、側縁は丸く調整剥離しているが刃部はない。3.84g を測る。６は遺構検出面出土の石鏃にしては大きく、刃部は片面にしか形成されていないので削器でなく、掻器にしては湾曲がない。4.15g を測る。いずれも姫島産黒曜石製。７～12 は石核で、７は弥生包含層出土の球形の原石を円錐形に剥がしており、８は 11 号竪穴住居跡出土で、不純物が多く入る石材のためで、定形的な石器は作りにくかったものと見られる。



第 104 図　3次Ⅰ区出土土・金属・ガラス製品実測図（1・2・6・7は 1/3、他は 1/2）

18.51g を測る。 9 はピット 1 出土の両側面に素面がある細長い石材なので、定形的な石器の未製品だろう。9.27g を測る。10 は 5 号竪穴住居跡出土で、細長い板状なので定形的な石器の未製品だろう。不純物を多く含む。21.15g を測る。11 は表採品で、不純物が多い石材だったため皮剥ぎ段階で廃棄したようだ。32.00 g を測る。12 は 1 号溝状遺構出土で、直方体のような形態で剥片を剥がした残欠ではない。表皮を剥がしたものか。35.07g を測る

第 103 図 1 ・ 2 はピット 89 出土の石庖丁で、 1 の下端が斜めに偏っているのは研ぎ直しのためで、本来は半月形である。刃部幅の狭い側に刃毀れが見られる。基部の傷は荒割時の剥離が研磨で消えなかったものだろう。穿孔は両面からで、断面形はほぼ直線的なので穿孔具は径の小さいものである。凝灰岩製で、39.9g を測る。 2 は隅丸方形で、軟質の凝灰岩製で石材のせいか研磨痕が残っていない。石材の選定を誤ったためか穿孔を片側だけでやめており、刃部は作られておらず、未製品である。66.5g を測る。 3 は 11 号竪穴住居跡出土で、大型だが石庖丁の未製品と見られる。両面から刃部を剥離して研磨しておらず、穿孔もしていいない。基部は斜めで荒割段階のままで整形していない。68.3g を測る。 4 は縄文包含層出土で、石弾だ



第 105 図　上唐原榎町遺跡3次ⅡB区全体図（1/300）

ろうか。カクセン石を多く含む安山岩製で、70.8g を測る。５は 14 号竪穴住居跡出土の石錘で、側面中央に打ち掻きによる窪みがある。88.5g を測る。安山岩製。６・７は磨製石斧で、６は 11 号竪穴住居跡出土の基部片で、側面に打ち掻きによる窪みがある。安山岩製の石材の性質のためか研磨痕は見られない。70.4g を測る。７は８号竪穴住居跡貼床出土の基部片で、緑泥片岩製。93.9g。８は１号溝状遺構出土の両面加工の小型石器で、側縁は調整剝離しているが刃部はなく、打製石斧にしては小さいことから十字形石器片の可能性が高い。安山岩製で 49.2g を測る。

９～ 11 は砥石で、９は 19 号竪穴住居跡出土で、２面だけが残っており、どちらも使用している。頁岩製で 10.3 ｇを測る。10 は 14 号竪穴住居跡貼床出土で、３面残っており、いずれも使用している。上下面は使用部が窪んでいる。凝灰岩製で 41.6g を測る。11 は９号竪穴住居跡出土で、上端の欠損面以外はすべて使用している。上下面は使用で窪んでいる。長石英製で 24.2g を測る。12・13 は磨石で、ともに平坦面と側面の平坦部を使用している硬質砂岩製で、12 は 19 号竪穴住居跡出土で 655.3g、13 は 11 号竪穴住居跡出土で 577.8 ｇを測る。14 は 11 号竪穴住居跡出土の平坦な円礫を利用した凹み石で、裏面は磨石として使用している。多孔質凝灰岩製で 62.2g を測る。15 は８号竪穴住居跡出土の凹み石兼敲石で、平坦面の両面に彫啄による窪みがあり、側面の４面に敲打痕が見られる。

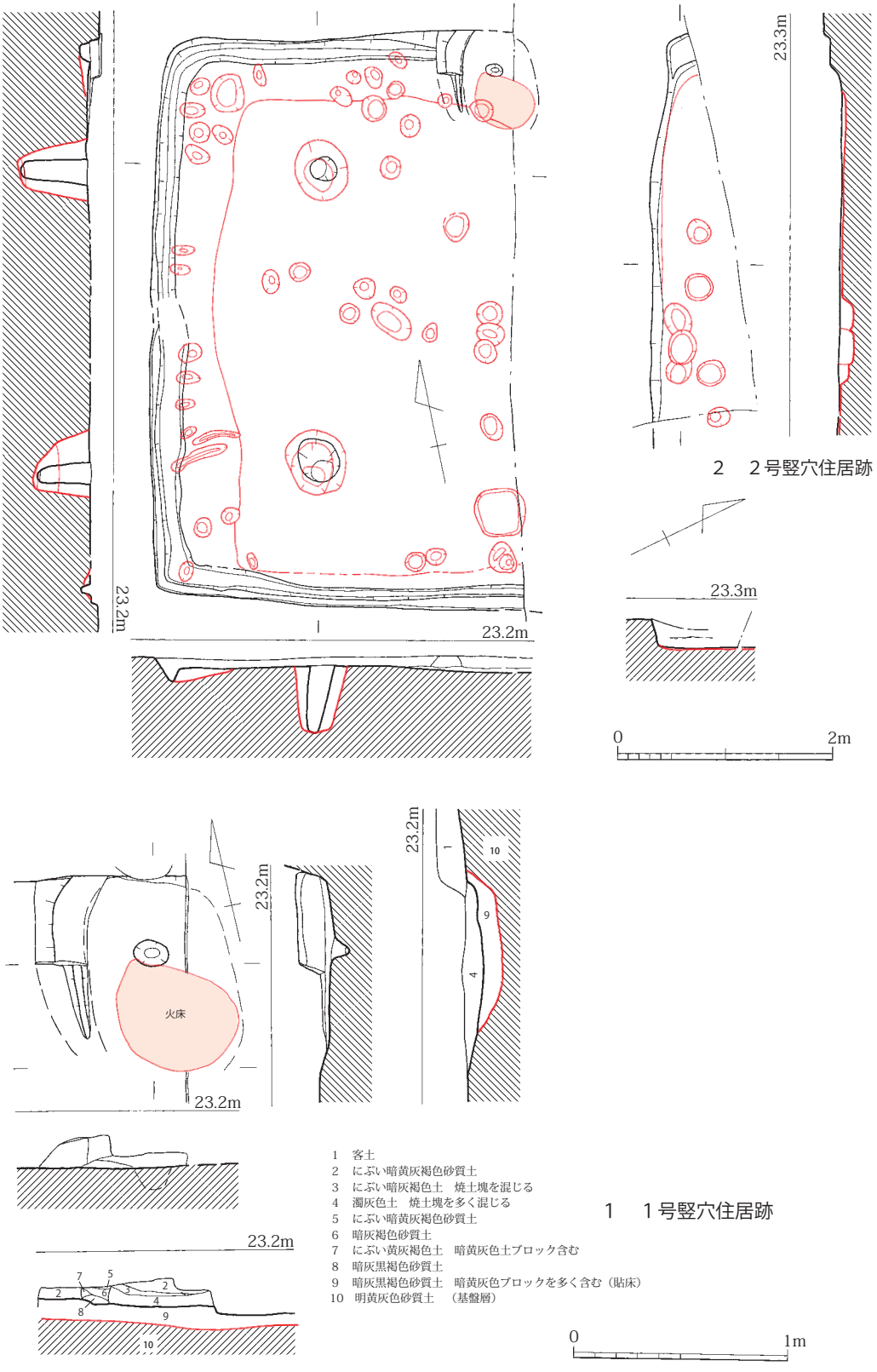
第 104 図１は 11 号竪穴住居跡出土の円盤形土製品で、外面にハケ目のある器種の胴部片を加工したものである。２は 11 号竪穴住居跡出土のミニチュア土製品で、手捏ね成形である。３は８号竪穴住居跡出土の管状土錘で、0.8g を測る。４は 11 号竪穴住居跡出土の圭頭鏃で、刃部は不明瞭。基部に木質は残っていない。５は 11 号竪穴住居跡出土の弓金具で、木質に付いた状態で出土したもので、管状の中に芯部をもつ２重構造ではない。直線でなく湾曲しているのは変形したためか。６は 15 号竪穴住居跡出土の袋状鉄斧で、刃縁は摩耗によって湾曲している。７は 19 号竪穴住居跡出土の方形鉄鍬先と鉄鎌が錆着したもので、７－１の鎌の先端は欠損の可能性がある。７－２の鍬先の刃部もやや窪んでいる。研ぎ減りの可能性がある。８は弥生包含層出土で鎌の先端部分の可能性が高い。９は遺構検出面出土で、下半を欠損しているため全体形状がわからないが頭折釘の可能性が高い。10 は遺構検出面出土で下端が欠損しているので全体形状がわからない。上端の平坦面は欠損している可能性もある。11 は弥生包含層出土の釘の先端だろう。12・13 は耳環で、12 は８号住居出土で環が歪んでいる。銀板が失われたもので、錆びて白くなっていることから銅ではなく鉛の可能性がある。13 はピット 95 出土で箔は失われており銅地が露出している。14 は３号竪穴住居跡出土のグレーのガラス小玉で巻き技法による。

３　３次ⅡＢ区の調査

ⅡＢ区はⅠ区の西に位置し、県道までの間の用地は上毛町教育委員会の試掘調査で削平により遺構が認められなかったので調査対象地から除外した。一方、調査区南側は限定協議範囲だが、南端部分は水路が施工されるため調査範囲となり、計 980 ㎡を調査した。調査区の東側に遺構を検出したが、西側には東側から東西方向に延びる溝状遺構があるのみである。これは、西側が高くなっていたため遺構面が削平されたためだろう。

水路施工部分でも東側にはピットが集中しているが、西側にはない。中央部には集石があっ

たが、石と石の間にも埋土が入っており組まれた遺構ではなかった。石は人頭大のものが多く、焼けた痕跡はなかった。集石下に遺構はなく、撤去した石が集められたものと考え、遺構としては掲載していない。ここでは竪穴住居跡３基、掘立柱建物跡２棟、土坑１基、溝状遺構４条



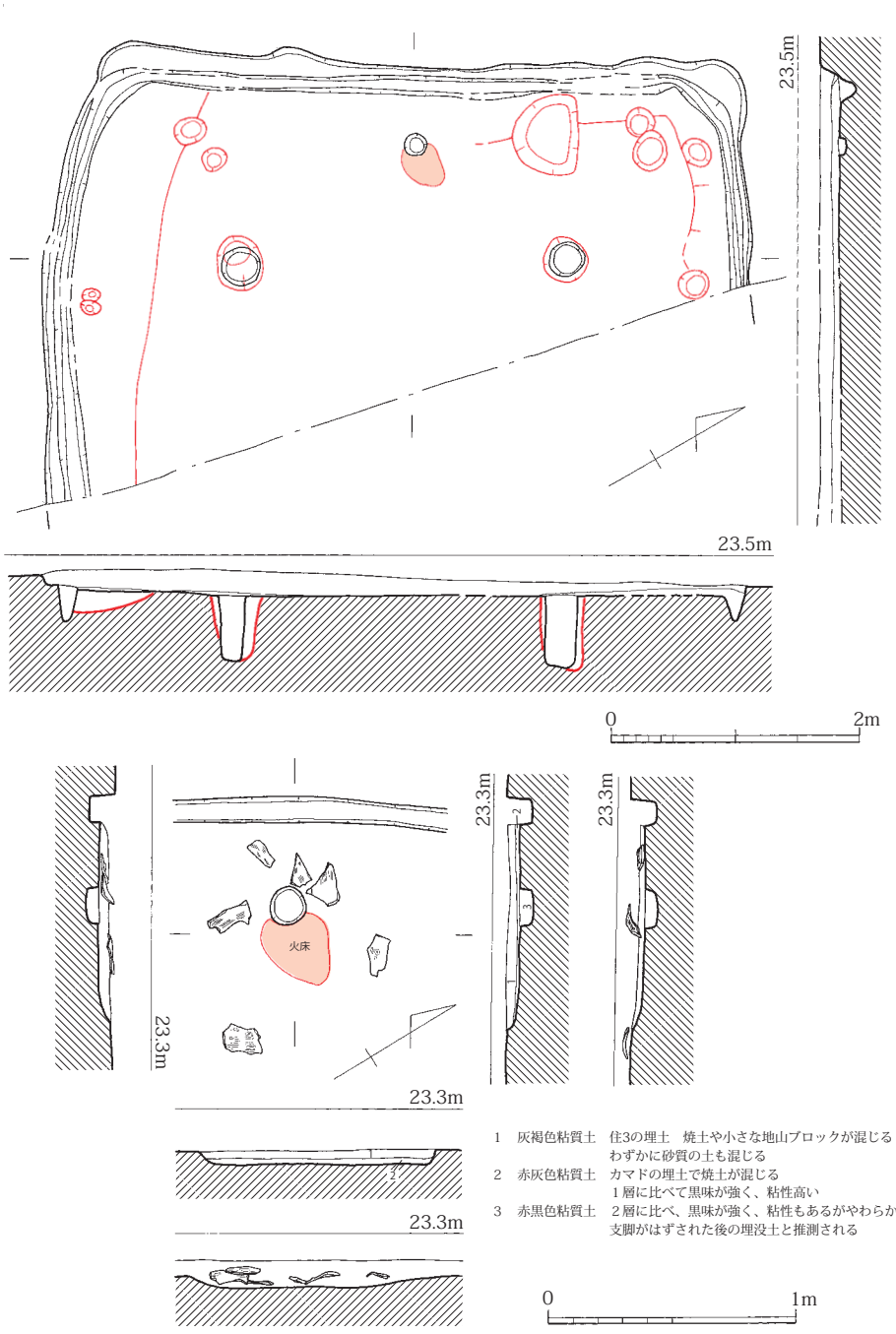
第 106 図　３次ⅡB区１・２号竪穴住居跡実測図（1/60・1/30）

などを報告する。

（１）竪穴住居跡

１号竪穴住居跡（図版57、第106図）

調査区南東部に位置し、１号掘立柱建物跡に切られる。調査区端に半分が検出され、続きは１・２次調査範囲に入る。主軸方向はN－12°－Eで、東辺の長さは518cmを測り、壁は約10㎝残っていた。北辺に竈がつく方形プランで、竈の位置が辺の中央ならば横長の長方形になる。位置関係から４本主柱穴であり、検出された２基の主柱穴は南側に抜き取り痕跡が見られた。壁沿いには周溝が検出され、竈の袖まで巡っている。貼床は明瞭で、床下の掘り込みは壁沿いに見られ、主柱穴の掘り込みは床下から検出された。貼床下には壁沿いに小ピットが多く見られたが、壁立建物の柱穴としては浅かった。竈は西側の袖が残っており、袖の先端は残っていたものの掘りすぎた。支脚の据え穴と火床が検出された。



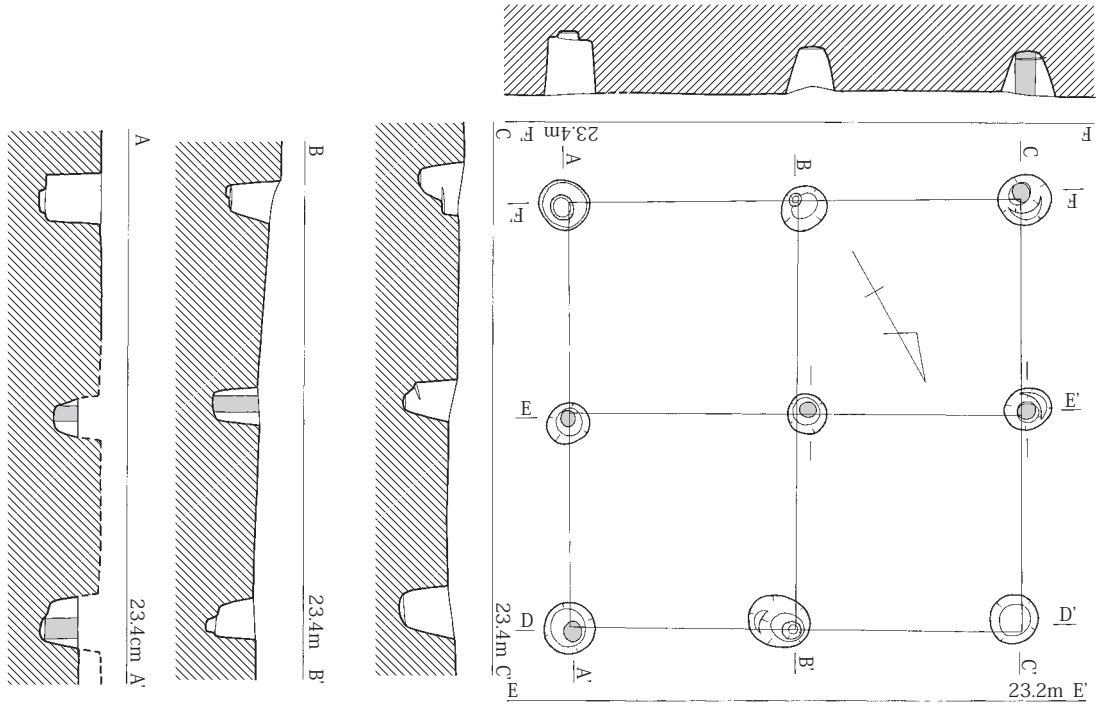
第107図　３次ⅡB区３号竪穴住居跡実測図（1/60・1/30）

出土遺物から７世紀初頭に属する。

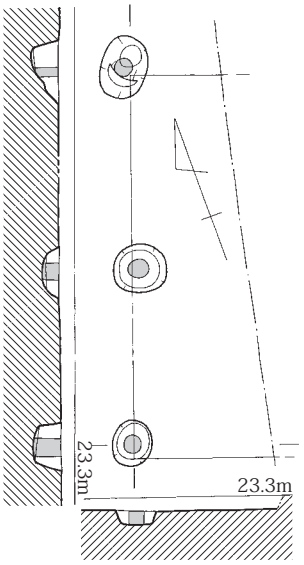
出土遺物（第109・117図）

第109図１～３は須恵器で、１は坏蓋で天井部にナデ窪みがある。２は脚部との接合部まで残っていないが高坏だろう。突帯状の段は積み上げ部につけられているので接合部の補強を兼ねた装飾であろう。３は下位に櫛描波状文が入るので瑞の口縁部だろう。

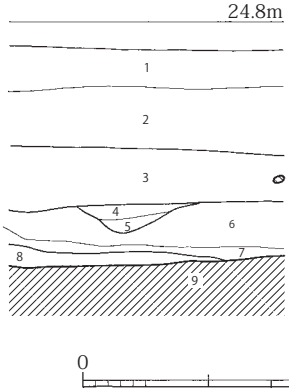
この他、第117図９のミニチュア土製品が出土している。



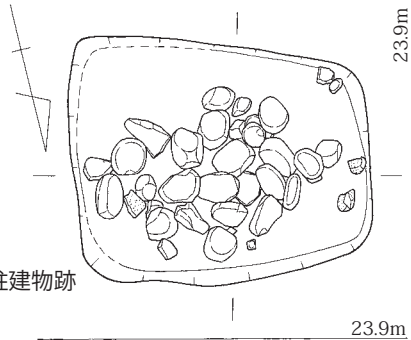
1　1号掘立柱建物跡



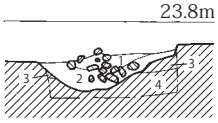
2　2号掘立柱建物跡



5　4号溝状遺構土層断面



3　1号土坑



4　2号溝状遺構土層断面

第108図　3次ⅡB区掘立柱建物跡・土坑・溝状遺構実測図（1/60・1/30）

２号竪穴住居跡（第 106 図）

調査区南東部に位置する。調査区北端に南辺が検出され、続きは１・２次に調査されている。コーナーは１ヶ所しかないので辺の長さは確認できない。壁は 15 ㎝ほど残っていた。貼床は見られず、床下の掘り込みはなかった。当該時期の出土遺物がなく時期不明。

出土遺物（第 109 図）

４は縄文土器の浅鉢胴部片で、鋭角に屈曲する。

３号竪穴住居跡（図版 58、第 107 図）

調査区南東部に位置し、２号掘立柱建物跡に切られる。調査区端に半分が検出された。主軸方向はＮ－58° 50′－Ｗで、東辺の長さは 526㎝を測り、壁は 10 ㎝程残っていた。西辺に竈がつく隅丸正方形プランで位置関係から４本主柱穴であり、検出された２基の主柱穴には柱痕が見られなかったが、明瞭な抜き取り穴も見られなかった。壁沿いには周溝が検出されたが、竈の後背にも巡っている。貼床は明瞭でなく、床下の掘り込みは確認できなかった。

竈は袖が残っておらず、支脚の据え穴と火床だけが検出された。竈の存在する位置には土器片が出土したが、この土器は出土位置から竈袖の補強材として埋め込まれていたものとは考えにくく、袖材が取り除かれたようだ。

出土遺物から７世紀中葉だろうか。

出土遺物（図版 60、第 109・113 図）

第 109 図５は土師器高坏の脚部で、外面ナデ、内面ケズリで、胎土は精良。内外黄橙色で変色無し。６は小型の甑で、把手部分は残存してない。外面は丁寧なハケ、内面は上半がハケ、下半がケズリ。口縁下に貫通していない孔があるが、焼成後のものである。孔面の風化具合からは調査時のものではないようだ。器面の残りがよく煮沸使用の痕跡がないので、使用していないか。７は坏蓋のボタン状つまみで、床面直上出土。８は小型の坏身で、歪みが大きいため反転径は不正確。受け部で色調が異なるので蓋と重ねて焼成している。９は高坏の裾部で、内外青灰色で床面直上出土。

この他、第 113 図 17 の打製石鏃が出土している。

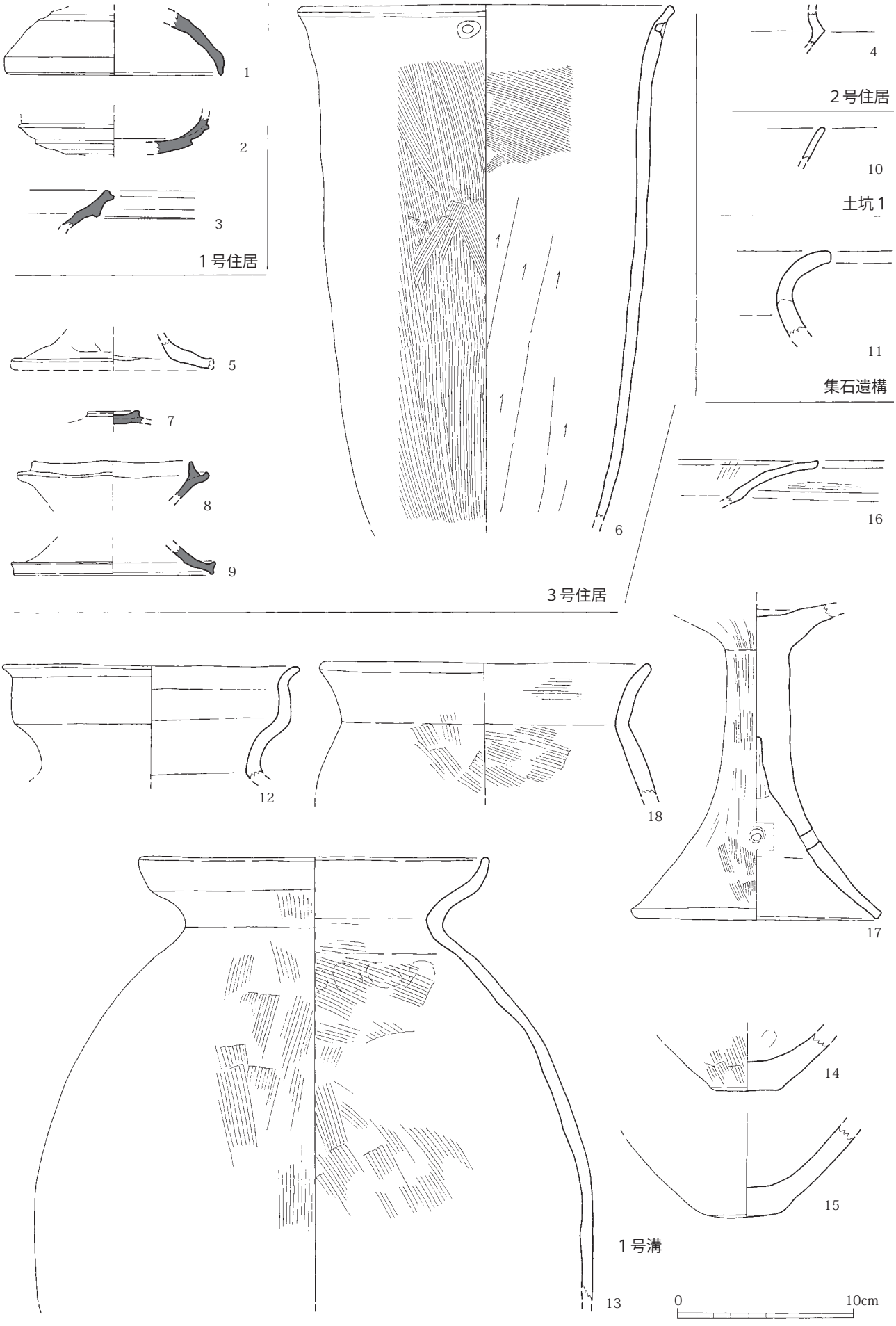
（２）掘立柱建物跡

１号掘立柱建物跡（図版 58、第 108 図）

調査区東端に位置し、1 号竪穴住居跡を切る。平面プランが正方形に近い２×２間の総柱建物である。主軸方向はＮ－60° 20′－Ｗで、長辺 360㎝、短辺 342㎝を測る。柱間は長軸側が 180 ㎝、短軸側が 170 ㎝で、柱痕は一部で検出された。出土遺物がなく時期はわからないが、１号竪穴住居跡を切るので、７世紀初頭以降。

２号掘立柱建物跡（図版 58、第 108 図）

調査区北東端に位置し、３号竪穴住居跡を切る。西辺のみが検出されたので規模や構造はわからない。主軸方向はＮ－20° 20′－Ｅで、西辺 302 ㎝を測る。柱間は 150 ㎝で、柱痕が検出された。出土遺物がなく時期はわからないが、３号竪穴住居跡を切るので、７世紀初頭以降。



第109図　3次ⅡB区遺構出土土器実測図（1/3）

（３）土坑

１号土坑（図版 59、第 108 図）

調査区南東部位置し、主軸方向はＮ -76° -Ｗで、長軸 232cm、短軸 198cm を測り、壁は 15 cmほど残っていた。中央部に人頭大の大きさの揃った扁平な礫が出土したが、床面に接地したものは少なく、組んだ痕跡はない。礫は表裏面が焼けているものと上面のみが焼けているものが混在しており、焼土や炭化物もないので焼けた礫を廃棄したものだろう。

礫が何に使用されたものかはわからないが、出土遺物から 12 世紀後半から 13 世紀前半に属するので、掘立柱建物跡の屋根に置かれた礫が建物の焼失によって焼けた礫を片付けたものだろうか。

出土遺物（第 109 図）

10 は瓦器椀片で、外面は口縁部が黒灰色、その下が灰白色、内面は口縁部が黒灰色、その下が灰白色、灰色となる。傾きと口縁部がわずかに外反することから 12 世紀後半から 13 世紀前半だろう。

（４）溝状遺構

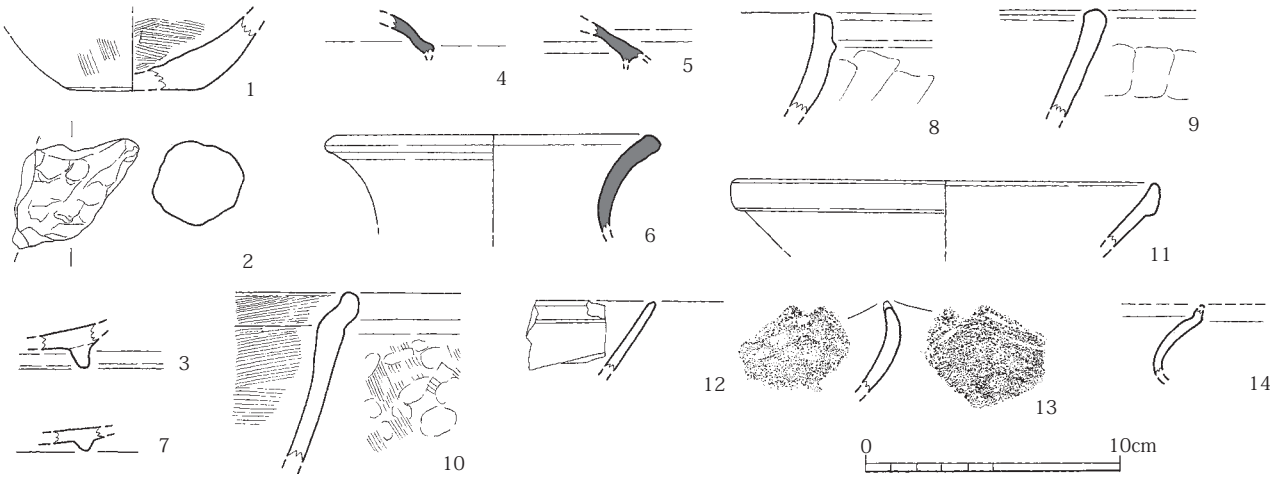
1 号溝状遺構（図版 59、第 105 図）

調査区北部に位置し、東西方向に走っている。幅は 200cm、深さは約 40 cmを測り、床面は西方向に下がっている。埋土には礫が多く人頭大のものも含まれていた。出土遺物から久住ＩＡ（庄内Ⅱ式）からⅡＡ（布留０式古段階）に収まる時期幅と考えられる。

出土遺物（図版 60・61、第 110・113・116・117 図）

第 109 図 12 は複合口縁の壺で、内外ナデ。胎土はカクセン石を多く含む。13 は複合口縁壺の屈曲部が湾曲したもので、胎土に含まれる砂粒が他とは異なるので搬入品の可能性が高い。器面の摩滅が著しいが内外ハケとわかる。14・15 は煮沸使用の痕跡がないので壺の底部だろう。14 は外面ハケで、15 は器面摩滅しているがハケだろう。16・17 は高坏で、16 は内面がミガキ、外面はハケで、口唇端部が尖る。17 は外面がハケで、ミガキは見られない。裾部の穿孔は位置関係から３ヶ所であろう。

この他に、第 113 図７の打製石鏃、第 116 図８の打製石斧、第 117 図３の磨製石斧が出土している。



第 110 図　３次ⅡB区遺構出土土器・陶磁器実測図（1/3）

２号溝状遺構（第 105 図）

調査区北部に位置し、東西方向に走っている。ほ場整備前の土地区画とほぼ一致しており、土地の境界でもあったのだろう。幅は140㎝、深さは45㎝を測り、床面は西方向に下がっている。埋土中には礫が多く、南から入って中央部に集まっており、溝の東ほど多く入っていた。礫は積んでいたものではなく廃棄されたか流れ込んだものだろう。中世前期包含層に掘り込まれており、埋土に 12 世紀後半の遺物があることから、それ以降だろう。

出土遺物（図版 61、第 110・116・117 図）

第 110 図１は外面が赤橙褐色に赤化しているので小型の甕の底部片であろう。内面のハケが残り、平底が残っているので弥生時代後期から古墳時代初頭に属する。２は小型の甑の把手で、先端が尖っているのは把手として実用されないからかもしれない。３は土師器椀の底部で、胎土に金雲母の混入が目立つ。径は復元できないが、11 世紀代か。４・５は須恵器坏蓋で、４は湾曲した短い裾部を持つもので、返り部分が欠損しているが、小さな返りがついていたものと見られるので８世紀前葉。５は裾が湾曲せずに延び、返りが大きいもので、7 世紀中葉。６は器壁が薄い口縁部で、壺か瓶の口縁部である。口唇部のナデで口唇部がやや肥厚しており、7 世紀中葉か。７は瓦器椀の底部片で、12 世紀後半から 13 世紀前半代であろう。８は瓦質土器で、器面が黒灰色を呈し、摺り目はないのでこね鉢か。９は土師質土器で、内外淡橙褐色を呈し、煮沸痕跡がないのでこね鉢か。口唇部を丸く仕上げており、14 世紀代か。10 は土師質土器の土鍋で、外面に煤が付着しており、煮沸使用している。内外丁寧なハケで、口縁部は肥厚させ屈曲している。11 は玉縁口縁の白磁碗で、12 世紀後半か。12 は青磁碗で、内面口縁下に沈線があるのみでオリーブ色の釉薬なので 12 世紀後半の龍泉窯だろうか。13 は波状口縁の深鉢で口唇部外面に２本の沈線が入る三万田式。14 は黒色磨研の口縁が大きく外反する浅鉢で広田Ⅳ式。

この他、第 116 図５・11 ～ 13 の打製石斧、第 117 図 15 の土錘が出土している。

３号溝状遺構（第 105 図）

調査区東部に位置し、東西方向に走り調査区外に延びている。ほ場整備前の土地区画とほぼ一致しており、土地の境界でもあったのだろう。幅は約 70㎝、深さは 10 ㎝ほどで、床面は西方向に下がっている。弥生から古墳時代の黒色土層に掘り込まれているので、２号溝状遺構に併走しているので中世に属するものか。

出土遺物に第 113 図２～５の打製石鏃、第 113 図 23・24・30 ～ 32 の掻器がある。

４号溝状遺構（第 105 図）

調査区北端に位置し、北方向に走り調査区外に延びている。幅は約 60㎝、深さは 10 ㎝ほどで、床面は北方向に下がっている。溝自体が小規模なためか礫の混入はほとんどなかった。中世前期の２・３号溝状遺構に切られ、古墳時代後期から奈良時代の黒色土層に掘り込まれているので、平安時代に属するものか。

（５）ピット

ピット出土遺物（図版 60・61、第 110・113・114・116 図）

第 110 図 14 はピット 187 出土の波状口縁の深鉢で、頂部に逆三角形の窪みが入り、外面口縁部に２条の沈線が入る。黒色磨研で太郎迫式だろう。15 はピット 201 出土の黒色磨研土器の浅鉢口縁部で、内面が黒灰色を呈する。口縁部の肥厚部が小さく斜めになっているので黒川式期だろう。

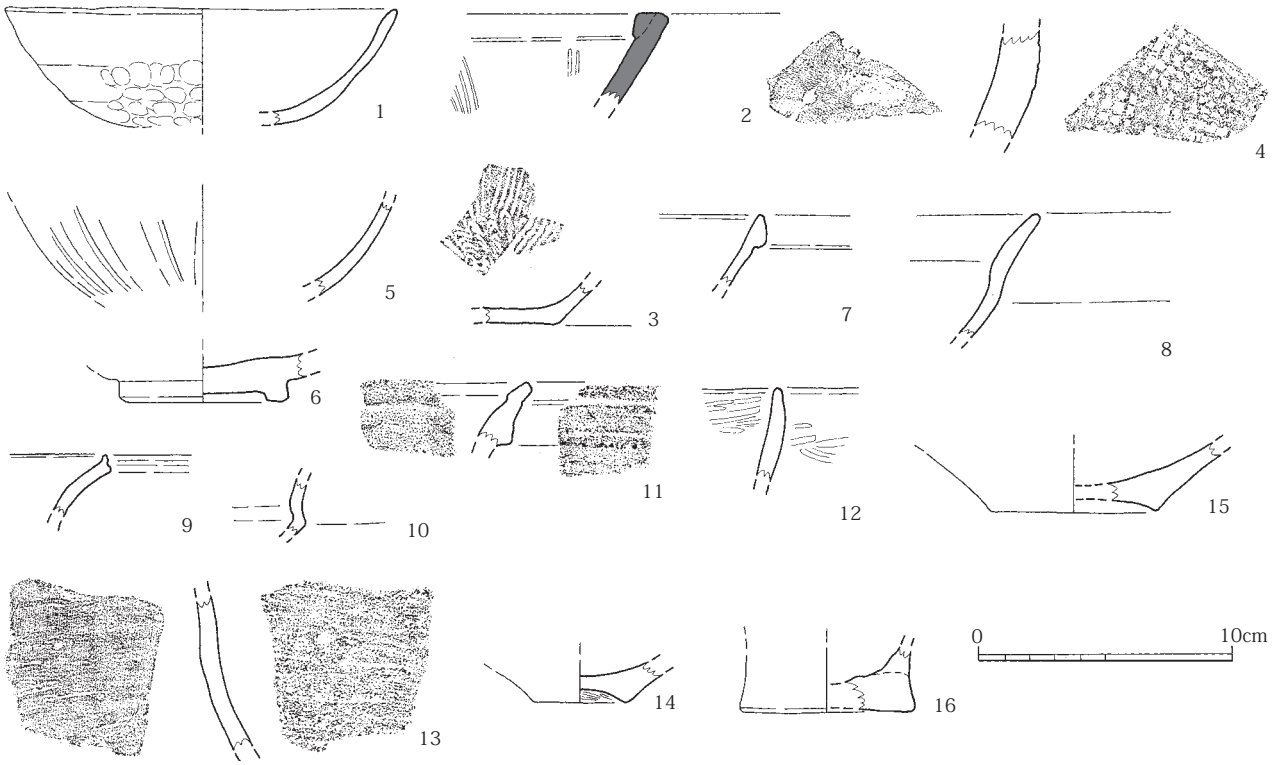
この他、ピット 13 から第 114 図３の石核、ピット 32 から第 113 図 13 の打製石鏃、ピット 35 から第 116 図 10 の土製柄杓、ピット 109 から第 113 図６の打製石鏃、ピット 242 から第 113 図１の打製石鏃が出土している。

（６）遺物包含層

中世包含層出土遺物（図版 60・61、第 111・113・116 図）

調査区北東部に向かうほど厚く堆積しており、遺物の混入量は少なかった。第 111 図１は瓦器椀で、内面はミガキがあったようだが摩滅している。外面胴中位以下はオサエ。外面口縁部は灰色、口縁下は青灰色、胴部は黒灰色、内面口縁部は青灰白色、胴部は灰黒色を呈する。13 世紀前半。２は須恵質の瓦質土器の摺り鉢で、16 世紀前葉に属する。３は瓦質土器の摺り鉢で、底面は櫛描波状文で、内外黒灰色を呈し粗放な胎土。４は陶器の大甕で、外面は格子目タタキで、内面はタタキ当て具痕をナデ消している。15 ～ 16 世紀代か。5・6 は龍泉窯青磁碗で、５は鎬蓮弁文碗で、蓮弁が大きいので 12 世紀後半か。６は底部で、畳付は釉剥ぎで、オリーブ色を呈する。７は玉縁口縁白磁碗で、玉縁が大きいので 12 世紀後半から 13 世紀前半代だろう。８は弥生土器の小型高坏か鉢か。内面口縁部はにぶい暗黄灰色で、坏部は黒灰褐色を呈する。

９～ 16 は縄文後晩期の土器である。9・10 は黒色磨研の浅鉢で、９は外面口縁部に凹線文



第 111 図　３次ⅡB区中世包含層出土土器・陶磁器実測図（1/3）

が残るので広田Ⅳ式に属する。10 は胴部が屈曲し、口縁部が外反するもので、黒川式期だろう。11 は口縁部が外反する深鉢で、肥厚部外面に２条の沈線が残るが、磨り消し縄文は見られない。内面口縁部にも肥厚があるので三万田式期に属する。12 は口縁部が内湾する砲弾形の深鉢で、内外ミガキが残る。13 は胴上半が内径する深鉢の胴部片で、内外 2 枚貝条痕。14・15 は上底の底部で、14 はミガキが残る。16 は厚く裾が開く底部で胴下位は外反する。砲弾形の深鉢の底部か。

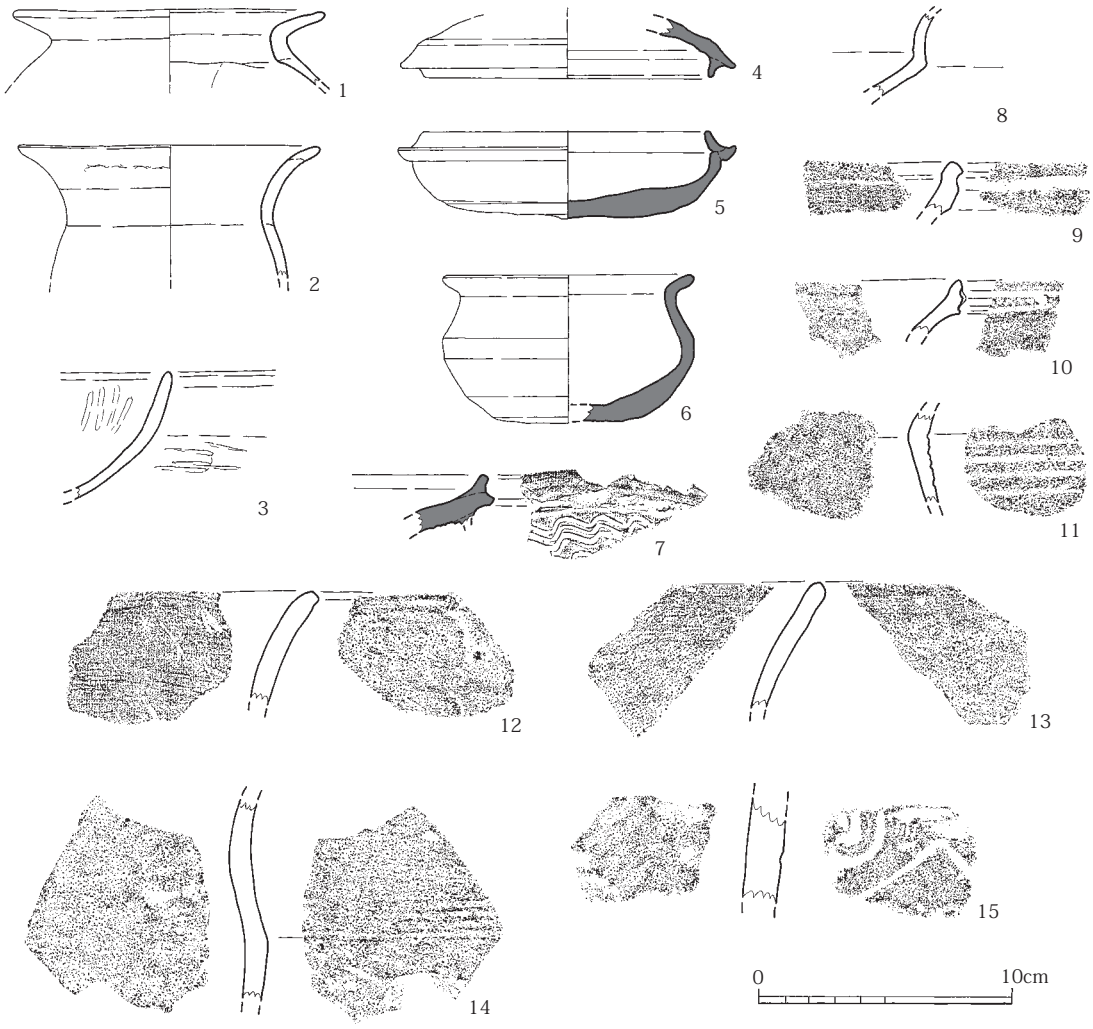
この他、第 113 図 10 ～ 12 の打製石鏃、19 の石錐、21・22 の掻器、第 116 図１・２・４の打製石斧、第 116 図５の小型打製石器、13・14・16・19 ～ 22・24・25・27 の土錘、28 のヒスイの管玉、30 の楔状鉄製品、図版 61 の鉄滓がある。鉄滓は断面皿形の部分があるので椀形滓の可能性があるが、不明瞭である。186.4 ｇを測る。

黒色土包含層（第 108 図）

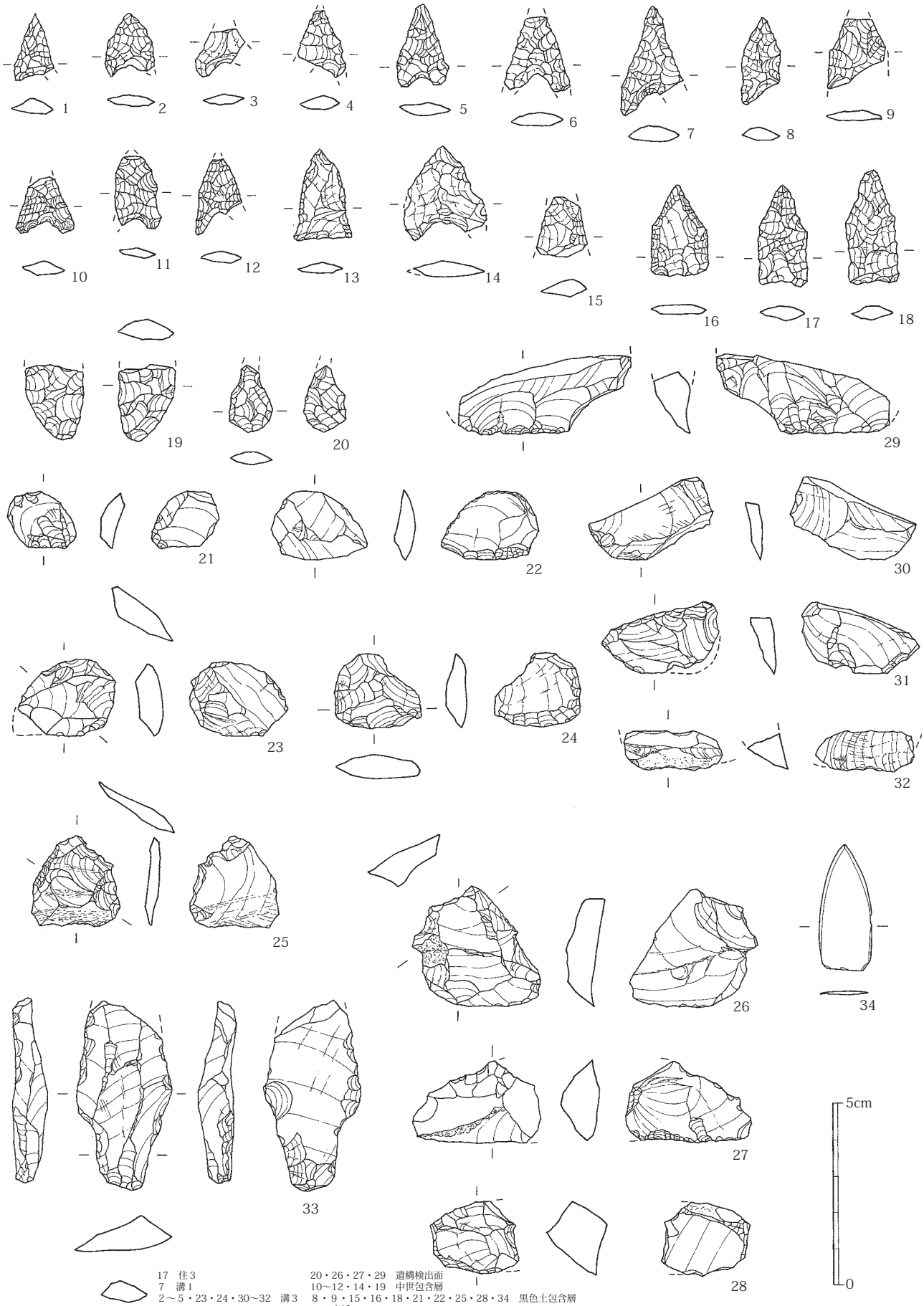
調査区北東部に分布しており、中世包含層とほぼ同じ範囲に見られた。わずかだが古墳時代後期から奈良時代の遺物も含んでいた。断面では弥生時代後期から古墳時代前期と分層できたが、平面的には判別できなかった。

出土遺物（図版 60・61、第 112・116 図）

第 112 図１～３は古墳時代初頭～前期の土師器で、１は甕で口縁部内面に小さなナデ窪みが



第 112 図　３次ⅡB区黒色土包含層出土土器実測図（1/3）



17　住3
7　溝1
2～5・23・24・30～32　溝3
13　P32
6　P109
1　P242

20・26・27・29　遺構検出面
10～12・14・19　中世包含層
8・9・15・16・18・21・22・25・28・34　黒色土包含層
33　表採

第113図　3次ⅡB区出土石器実測図1（2/3）

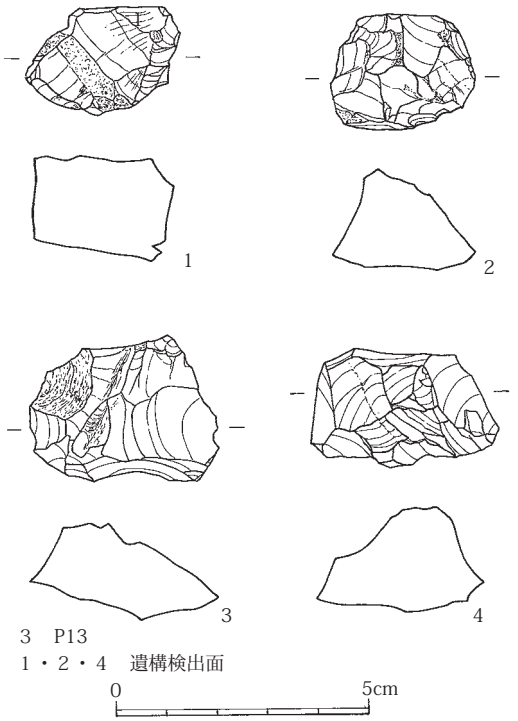
ある。肩部内面はケズリで明瞭な稜がある。器面が摩滅しているので調整は不明だが、外面にタタキは見られない。赤褐色から暗紫赤色を呈しているので煮沸使用している。２は小型丸底壺の口縁部で、胴部内面はケズリ。胎土は精良。３は椀で、内面はミガキ、外面はタタキナデ消しで、口縁部はやや横ナデで窪む。内面は黄橙色を呈する。４～７は須恵器で、４は蓋坏であろう。受け部に焼成不良箇所があるので身と重ねて焼成している。５は坏身で、口縁部と受け部を成型した後、内面の積み上げ部と受け部の下部は未調整。外底は静止ヘラ切り後粗く調整し、内底はナデ消している。６は小型の鉢で、胴中位以下は回転ヘラケズリ、底部の切り離し方法は不明。内面口縁部側が灰白色なので蓋を重ねてを焼成した可能性がある。７は大甕の口縁部で、外面に櫛描波状文が入る。

８～15は縄文後晩期の土器で、８は黒色磨研土器の浅鉢で、胴部が屈曲し口縁部が外反するもので黒川式期か。９は深鉢の口縁部で、外面と内面口唇部を肥厚しており、外面は凹線が入る。押し引きの始点と終点が観察できる。10は深鉢の口縁部で、肥厚した外面には２条の沈線の擬縄文らしいスタンプの痕跡が見られるが、摩滅のため不明瞭で原体がわからない。９・10は太郎迫式か三万田式に属するか。11は頸部が屈曲して口縁部が小さく外反する深鉢で、肩部に４条の沈線が入る。12～14は粗製深鉢で、いずれも二枚貝条痕だが、14は屈曲部以下に板状工具による擦過が見られるので黒川式期に属する。15は器壁の厚い深鉢の胴部で、外面に凹線による入組渦文が入る。一部に縄目文らしい痕跡があるが、磨り消し縄文の施文位置とは異なるので意図的な施文かははっきりしない。北久根山式か。

この他、第113図８・９・15・16・18の打製石鏃、25・28の掻器、34の磨製石鏃、第116図３・６・７・９・10・14の打製石斧、第116図２の扁平局部磨製の打製石斧、第116図６の砥石、７の磨石、８の敲石兼凹み石、11・12・18・26の土錘、29の棒状鉄製品、31の耳環が出土している。

縄文包含層（図版61、第108図）

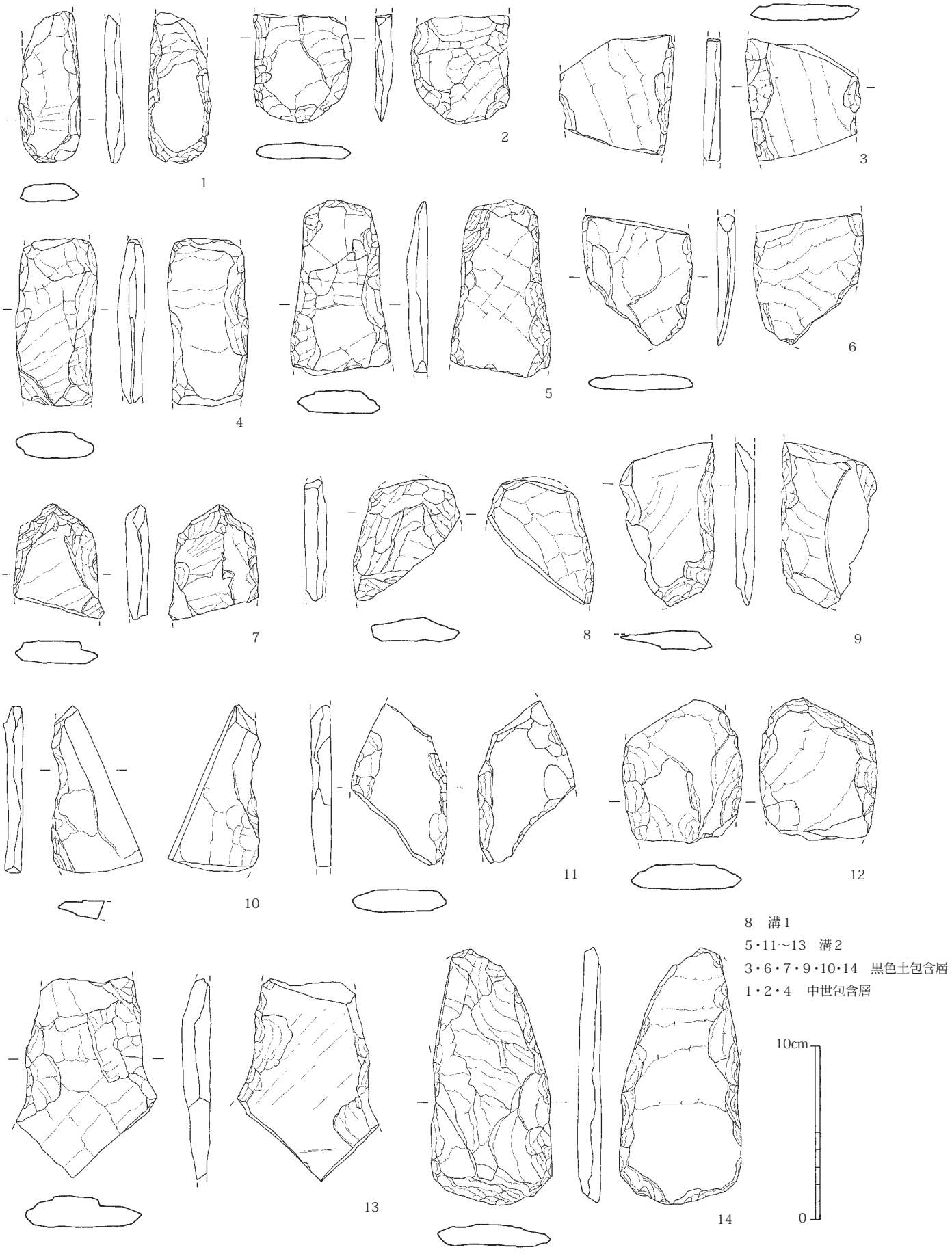
黒色土包含層の下から谷地形状に調査区北東に分布しており、上毛町教育委員会が担当した２Ａ調査区で流路状に堆積していたことから、それに続くものと見られる。北側に傾斜しており、遺物はほとんど含まなかったが、第116図４の磨製石斧が出土している。



第114図　３次ⅡＢ区出土石器実測図２（2/3）

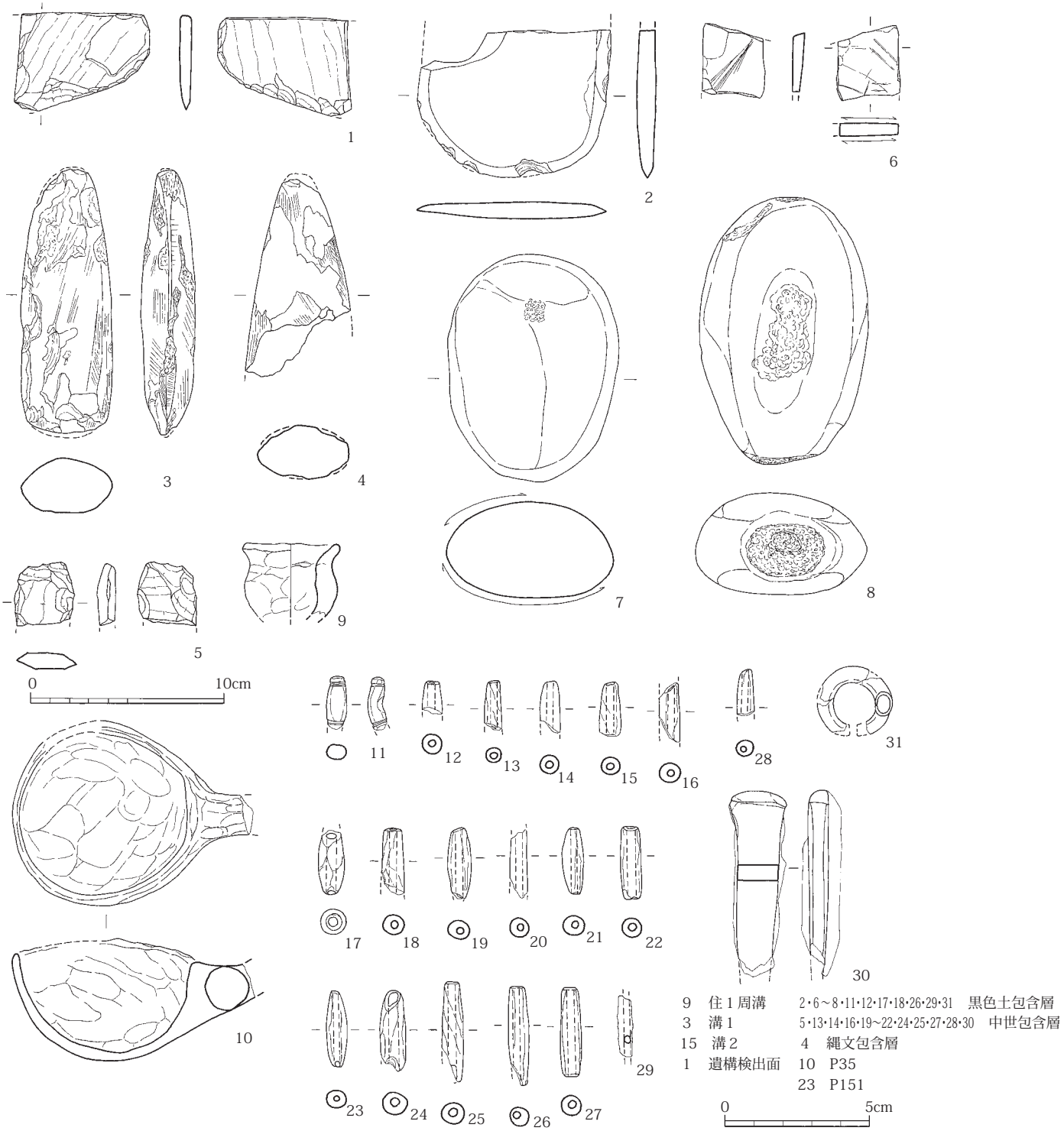
（７）特殊遺物（図版60・61・70、第113～116図）

第113図１～18は打製石鏃で、１はピット242出土の凹基式で、両面加工だが片面は平坦である。チャート製で0.98gを測る。２は３号溝状遺構出土の凹基式で、両面加工で扁平である。0.99g。３は３号溝状遺構出土の凹基式で、先端と基部が欠損している。0.79ｇ。４は３号溝状遺構出土の凹基式で、両面加工だが片面は



第115図　3次ⅡB区出土石器実測図3（1/3）

平坦である。1.45g。５は３号溝状遺構出土の完形の凹基式で、両面加工で扁平である。1.23ｇ。６はピット 109 出土の凹基式で、両面加工で先端と基部の欠損は風化している。1.39 ｇ。７は１号溝状遺構出土の長三角形で、両面加工だが片面は平坦である。基部は尖っており、1.67ｇを測る。8・9 は黒色土包含層出土の五角形鏃で、両面加工だが片面は平坦である。８は1.05g、９は大型品で 1.42g を測る。10 は中世包含層出土の三角形で 1.12 ｇを測る。11 は中世包含層出土の五角形鏃で、先端右縁の大きな剥離は欠損後の再加工のためであり、その結果先端の角度が緩やかになっている。1.08 ｇを測る。12 は中世包含層出土の長脚鏃で 0.76 ｇ。



第 116 図　3次ⅡB区出土石・土・金属製品実測図（30・31 は 1/2、他は 1/3）

13 はピット 32 出土の五角形鏃で、両面加工だが片面は平坦である。1.53g を測る。14 は中世包含層出土の大型三角形鏃で、横幅が広いので銛先の可能性もある。摩滅が著しい。2.97g。15 は黒色土包含層出土で、先端・基部が失われているが長三角形鏃だろう、1.38g を測る。16 ～ 18 は五角形鏃で、16 は黒色土包含層出土で 2.01 ｇ、17 は 3 号竪穴住居跡出土で 1.06g、18 は黒色土包含層の下層である弥生包含層出土で 1.96g を測る。１はチャート製、２・４～ 12・16 ～ 18 は姫島産黒曜石製。３・13・14 はサヌカイト製腰岳産。15 は阿蘇産黒曜石製か。19・20 は石錐の基部だろう。19 は中世包含層出土で、両面加工で半楕円形を呈するもので、側縁は尖っているが剥離が大きく刃部ではないものと見られる。2.25g を測る。20 は遺構検出面で略円形の基部で、先端の刃部を欠損している。両面加工で側縁の調整は粗い。いずれも姫島産黒曜石製。21 ～ 24 は横長剥片を利用し片側につまみ状の基部を残す掻器で、21 は中世包含層出土で、下端にのみ刃部を形成している。1.84g を測る。22 は中世包含層出土で下端の水平部分と上端の湾曲部分に刃部を形成している。3.08 ｇ。23 は３号溝状遺構出土で、刃部は同じ方向の剥離を連続させて下端と側縁に形成し、それ以外は整形している。4.44g。24 は３号溝状遺構出土で、刃部は同じ方向の剥離を連続させて曲面を形成している。3.66g。いずれも姫島産黒曜石製。25 は黒色土包含層出土の台形の掻器である。不純物を多く含む薄い剥片の下端と１側縁に刃をつけ、反対の側縁と基部は整形している。2.95g。腰岳産黒曜石製。26 ～ 29・32 は大型の掻器である。26・27 は遺構検出面出土で、26 は下端と片側縁に刃部がつき、基部は刃潰ししている。11.83g。27 は片側の側縁を欠損しているため全体の形態はわからないが、剥片の厚さから大型品と見られる。6.84g。28 は黒色土包含層出土の掻器で、片側の側縁は欠損しているが、厚いことから方形だろう。7.95g。29 は遺構検出面出土で上端を欠損しているため全体形状はわからない。下端を大きく剥離して曲面を形成そこに刃部をつけている。8.56g を測る。32 は３号溝状遺構出土で、上端と片側縁が欠損しているので全体像がわからないが、素面を残した大きな剥片を利用している。26 ～ 29 は姫島産黒曜石製、32 は腰岳産黒曜石製。30 は３号溝状遺構出土で、縦長剥片を、利用したもので曲線部に刃をつけている。裏面には表面の風化が見られないので剥離しているかもしれない。サヌカイト製で 4.87g を測る。31 は３号溝状遺構出土で下端に湾曲した刃をつけ、基部の素面は指のあたる部分として利用している。姫島産黒曜石製で 4.10g を測る。33 は表採の剥片尖頭器で、先端が欠損しており側縁の残りもよくないが、調整剥離による刃部の形成は見られない。基部は丁寧に整形している。姫島産黒曜石製で 11.59g を測る。34 は黒色土包含層出土の磨製石鏃で、緑色片岩製のため扁平で 1.29g と軽量である。石材のためか研磨痕は残っていない。5.08g を測る。

第 114 図１～４は石核で、１は遺構検出面出土で、不純物が帯状に入る。14.97g を測る。２は遺構検出面出土で、素面が小さく残るもので、皮剥ぎ段階のものだろうか。12.14g を測る。３はピット 13 出土の不純物が中央部に入るもので 19.35g。４は遺構検出面出土で、打面転移を繰り返したもので 15.21g を測る。１・３・４は姫島産、２は腰岳産黒曜石製。

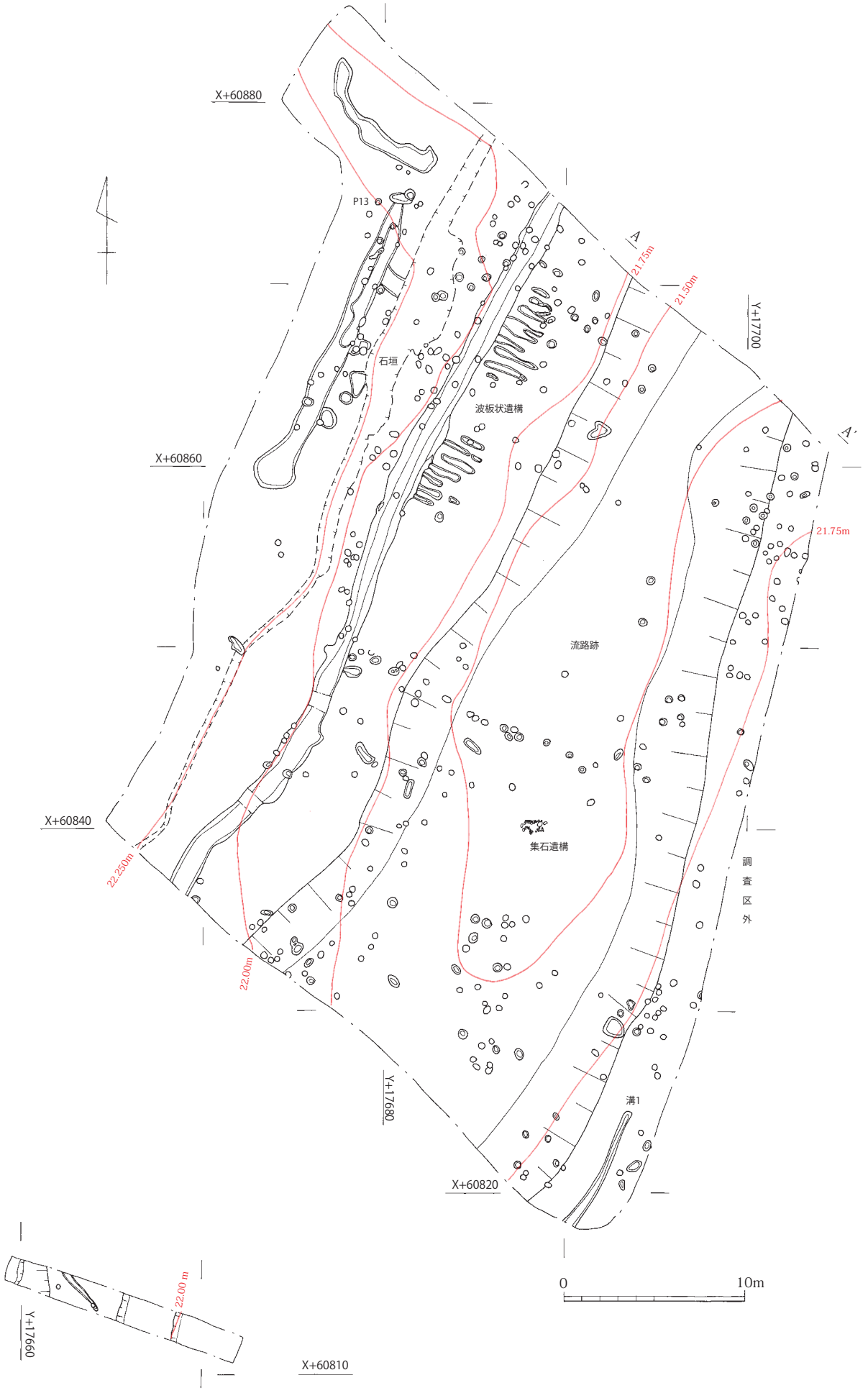
第 115 図は打製石斧で、１は中世包含層出土で、小型の打製石斧で、片面は全周に同様の剥離を行い、反対面は側縁の剥離が小さい。55.38g。２は中世包含層出土で、片側縁は外湾し、反対側は内湾しているので、欠損した刃部の欠損面を調整剥離して側面として再利用した可能性が高い。55.58 ｇを測る。８は緑泥片岩製、１・３・４・９・10・12 は緑色片岩製、２・６・７・11 は安山岩製。５は軟質安山岩製。３は黒色土包含層出土で、右側縁に大きな剥離が見られ

る。風化が著しい。４は中世包含層出土の小型品で、右側縁に大きな剥離が見られる。風化が著しい。120.59g を測る。５は２号溝状遺構出土で撥形を呈する。右側縁に大きな剥離が見られる。102.61g を測る。６は黒色土包含層出土で片面の側縁全周に剥離が見られる。65.94g。７は黒色土包含層出土の基部片で、右側縁を大きく剥離している。54.11g を測る。８は１号溝状遺構出土の基部片で、片面に大きな剥離が見られる。73.8g を測る。９は黒色土包含層出土で、右側縁に大きな剥離が見られる。76.24g を測る。10 は黒色土包含層出土の小片で、右側縁に大きな剥離が見られる。66.74g を測る。11 は２号溝状遺構出土で、平坦面が多いので未製品の可能性もある。77.16g。12 は２号溝状遺構出土で、右側縁に大きな剥離が見られる。127.0g を測る。13 は２号溝状遺構出土で、撥形であろう。片面の剥離が大きく 174.62g を測る。14 は黒色土包含層出土で、形態は石鎌のようだが、基部の側縁が欠損したものなので中心軸が湾曲した打製石斧である。片面の剥離が大きく、198.89 ｇを測る。

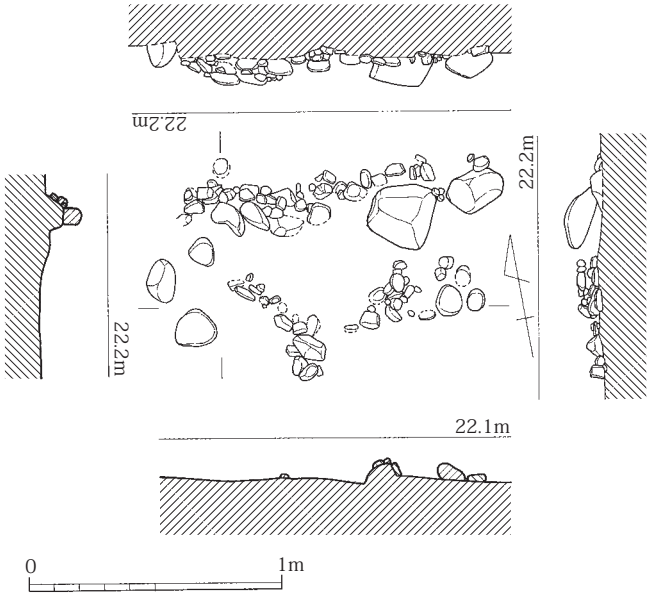
第 116 図１は遺構検出面出土の緑色片岩製の石庖丁未製品で 40.42g。２は黒色土包含層出土で石材の性質のためか研磨痕が残っていない。剝離面がないが扁平局部磨製の打製石斧の可能性が高い。凝灰岩製で、124.6g を測る。３・４は磨製石斧で、３は１号溝状遺構出土で刃部全体が摩耗している。蛇紋岩製なので荒割段階の剥離面が部分的に残る。275g。４は縄文包含層出土の基部で、表面は多くの欠損を受けている。蛇紋岩製で 158.7g を測る。３・４とも縄文時代に属する可能性が高い。５は中世包含層出土の両面加工の小型打製石器で、打製石斧にしては小さすぎるので縄文晩期の十字形石器の一部であろう。緑色片岩製で 14.9 ｇを測る。６は手持ち砥石で、黒色土包含層出土で、２面だけが残っており、どちらも使用している。明瞭な刃の研磨痕があるので鉄器に使用したものだろう。頁岩製で 14.09 ｇ。７は黒色土包含層出土の磨石で、上下面を使用しており一部に敲打痕がある。カクセン石を多く含む安山岩製で、表面は摩滅している。805g を測る。８は黒色土包含層出土の敲石兼凹石で、上下面は使用で窪んでおり、下端面に大きな敲打痕があり、上端面には小さいが敲打痕がある。硬質砂岩製で 984.9 ｇを測る。９は１号竪穴住居跡周溝出土のミニチュア土製品で、手捏ね成形で器壁が厚く、口縁部に積み上げ痕を残す。10 はピット 35 出土の土製柄杓で、手捏ね成型である。弥生時代後期後半から古墳時代前期に属する可能性が高い。11 ～ 27 は土錘で、11 は小さく湾曲しているが、上下端に刻みが入る有溝土錘であろう。2.6g を測る。12 ～ 27 は管状土錘で、長さは 4.0 ～ 5.2 ㎝、重量で完形品のうち 21 は 4.4g、22・23 は 4.3 ｇ、27 は 3.4 ｇあり、４～７ｇの範囲に収まるほぼ均一なサイズである。11・12・17・18・26 は黒色土包含層、13・14・16・19 ～ 22・24・25・27 は中世包含層、15 は２号溝状遺構、23 はピット 151 出土である。28 は中世包含層出土のヒスイ管玉で、側面がやや丸みをもつ。1.50 ｇを測る。29 は黒色土包含層出土の細い棒状の鉄製品なので針や釣針が想定できる。30 は中世包含層出土の楔状の鉄製品で先端が欠損しているので刃がつくかはわからないが、基部は平坦で敲打することができる。31 は黒色土包含層出土の鍍金層の残りがよい銅地銀板被鍍金耳環で、本来はほぼ完形であっただろうが調査時に欠損した。そのため断面が観察でき、銅地は銅質が悪く、銀板は環の内側に端部が観察できた。

４　３次Ⅲ区の調査

Ⅲ区は県道吉富本耶馬渓線の北西に隣接する調査区である。対象地（対象面積 2,620 ㎡）の



第 117 図　上唐原榎町遺跡3次Ⅲ区全体図（1/300）



第 118 図　3次Ⅲ区集石遺構実測図（1/30）

北半分は礫原で遺構が見られなかったので調査対象から外し、遺構の確認できた南半分の1,600㎡を調査区とした。南東半分に流路跡が検出され、現道の南側の狭小な用地はトレンチ調査で流路跡の西端部が検出された。流路跡内には集石遺構があり、流路跡と同方向に波板状遺構と石垣が検出された。石垣は３～４段の自然石を積んだもので上位は削平されている。出土遺物はいずれも 18 ～ 19 世紀代で、近世の水田区画と見られるため、遺構として掲載していない。

ここでは集石遺構１基、溝状遺構１条、波板状遺構、流路跡を報告する。

（１）遺構と遺物

1 号集石遺構（図版 63、第 118 図）

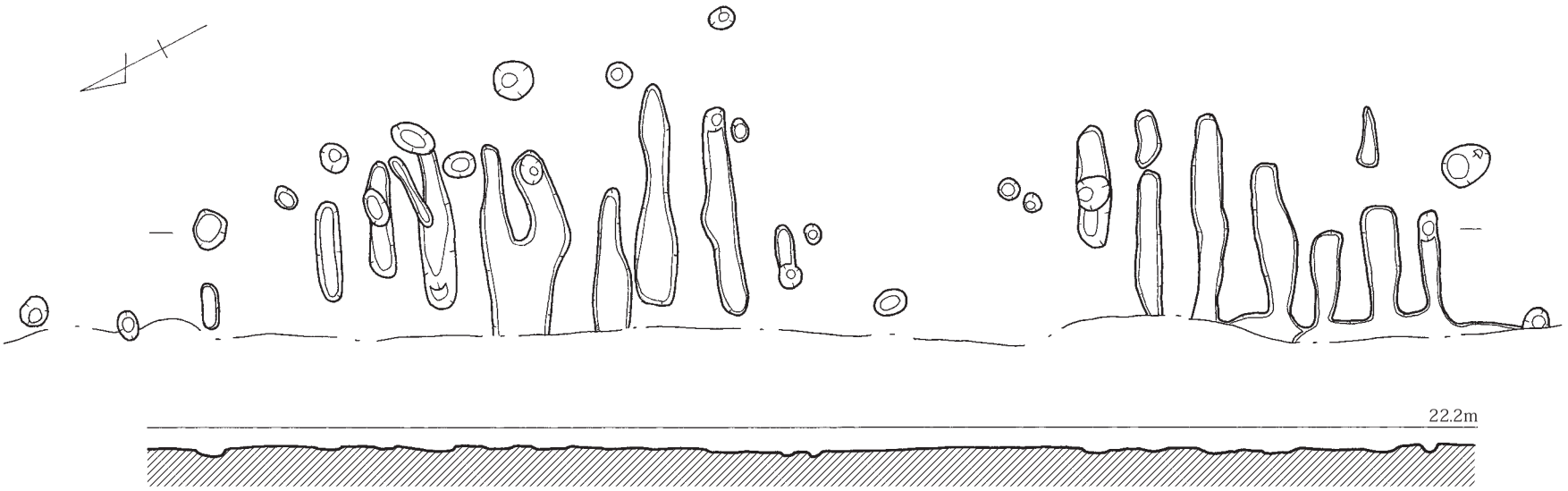
流路跡中央部の最深部から検出された遺構で、流路跡からは小礫も含めて石が出土したのはこの遺構周辺のみであった。人頭大の礫が略方形に巡っており、小礫が礫の間を埋めてラインを形成している。大型の礫は散在しており、なんらかの構造物のようだが方形プランの内部には何も施設がない。流路跡で礫が動いているにしても残っている部分もわからないので遺構の性格はわからないが、流路跡内に存在することから祠の基壇のようなものか。出土遺物はなく時期もわからない。

1 号溝状遺構（図版 62、第 117 図）

南端には流路跡と同方向に走る小溝があり、南は調査区外に延びる。幅 130㎝、深さ 20㎝前後で暗青灰色粘土を埋土としていた。床面は北に下がっている。出土遺物で図化できるものは第 123 図１の打製石鏃のみで、時期を特定する出土遺物がないので時期不明。

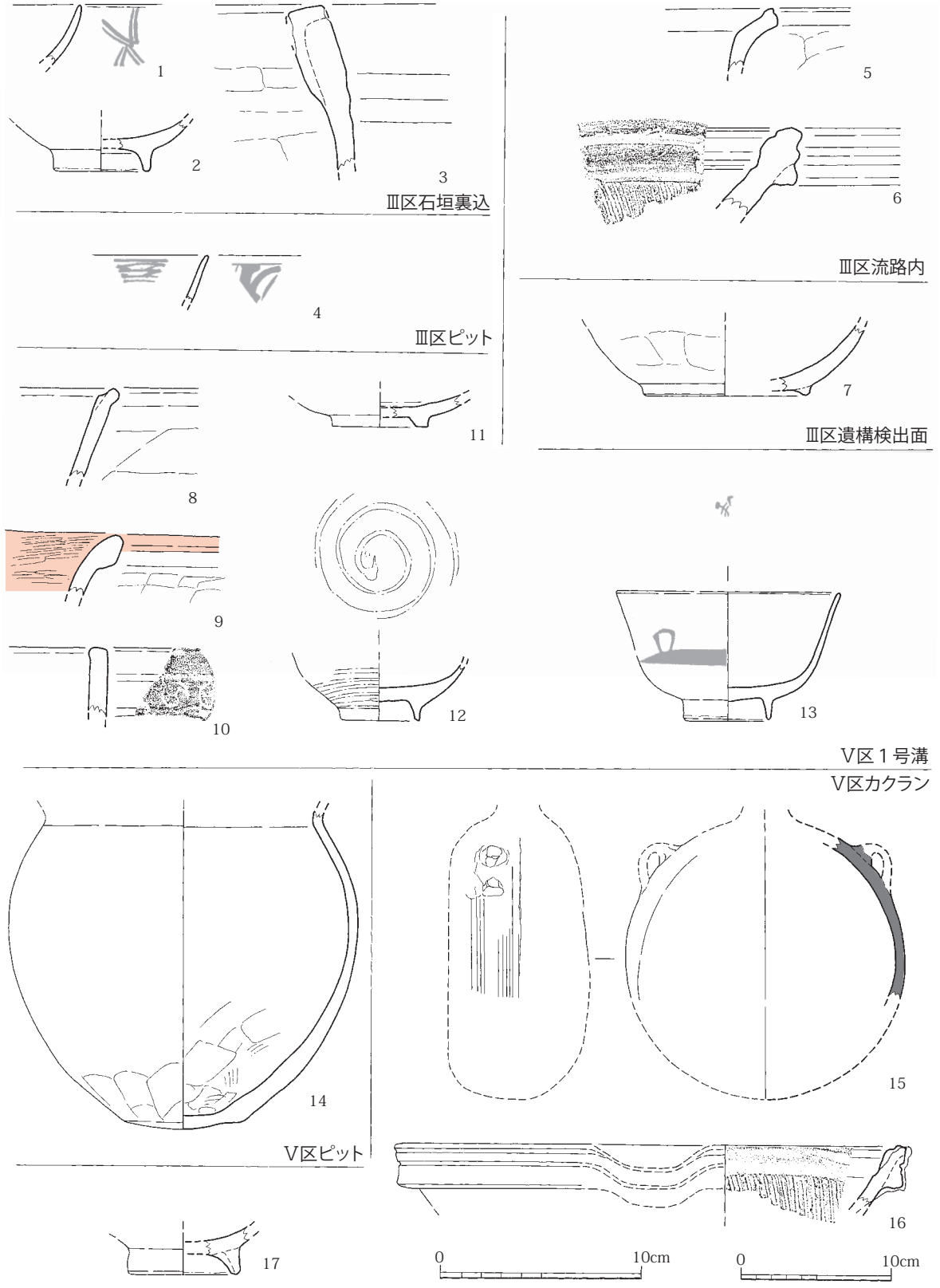
波板状遺構（図版 63、第 119 図）

流路跡の北壁と砂礫層の間の土壌部分に、流路跡と併走して 12 ｍほどの長さで検出され、南北は本来あったものが失われている可能性もある。北側は攪乱溝に切られている。幅は約 280 ㎝で、杭のような小ピットは波板状遺構の西側には直線的に分布しているが、東端には不



第 119 図　3次Ⅲ区波板状遺構・流路跡土層断面実測図（1/80）

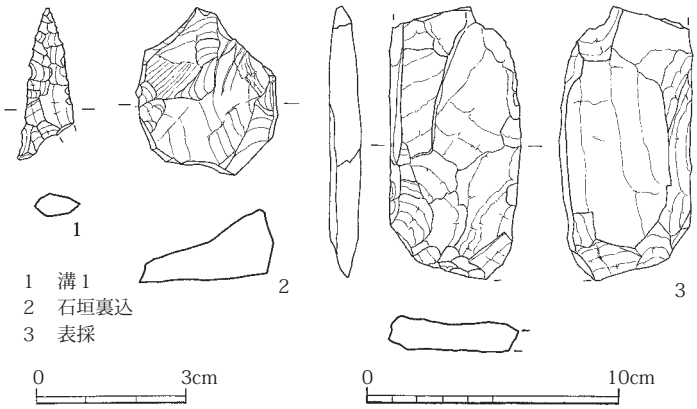
規則に見られる。波板の間隔は 30 ㎝ほど、幅は 35 ～ 40 ㎝で、10 ㎝前後と浅いものがほとんどで、板や丸太を敷いたような痕跡である。時期はわからない。



第 120 図　３次Ⅲ・Ⅴ区出土土器・陶磁器実測図（16 は 1/4、他は 1/3）

流路跡（図版 62、第 119 図）

おおむねＮ -30° - Ｅ方向に走り北側の延長上は県道下に向かう。幅は約調査区内に 250 ㎝程検出されたが東壁は県道下に入る。深さは約 60 ㎝と幅に比べて浅く壁の立ち上がりも緩やかである。流路跡の最下層は砂質土層で湧水があるが、周囲が砂礫層なのに集石遺構以外には礫がないので、水の流れは弱く、堆積層はほぼ水平で、人為的に埋め戻した痕跡はない。流路内には小ピットが流路跡の主軸方向と垂直方向に並んでいるが、水の流れがないので簗の杭ではないだろう。埋没後の上位層にも畦畔は見られず、明瞭な水田痕跡は見られない。出土遺物はわずかで、近世に属する可能性が高い。



第 121 図　３次Ⅲ区出土石器実測図（１・２は 2/3、他は 1/3）

出土遺物（第 120 図）

５はにぶい淡灰褐色なので、弥生中期の跳ね上げ口縁甕と考えられる。６は陶器の堺産摺り鉢片で、口唇部に色調の境があるのは重ね焼きのためである。18 世紀代。

その他の出土遺物（図版 70、第 120・121・123 図）

第 120 図１～３は石垣裏込から出土した。１は伊万里産染付碗で２重網目文が呉須で描かれている。２は陶器の底部で、全面施釉で、焼成不良。３は土師質の大甕で、口縁部は内面に肥厚し、外面には凹線が入る。内外灰白色で変色や器面の荒れがない。４はピット 13 出土の伊万里産染付で、外面はモチーフ不明、内面口縁部は雷文が崩れた文様帯。19 世紀中葉。７は遺構検出面出土の瓦器椀で、器面は摩滅のためオサエやミガキ痕は不明。13 世紀前半代。

第 121 図１は 1 号溝状遺構出土の打製石鏃で、凹基式長三角形で、両面加工。20.6g を測る。２は石垣裏込め出土の石核で、裏面に平坦な素面を残しているので、皮剥ぎ段階の大きな剥片を利用したものだろう。10.08g を測る。１・２とも姫島産黒曜石製。３は表採の打製石斧の刃部片で、片側の側縁を欠損している。片面は全周に同様の剥離を行い、反対面は平坦面の剥離が大きいものの側縁の剥離が小さい。緑色片岩製で 101.08g を測る。

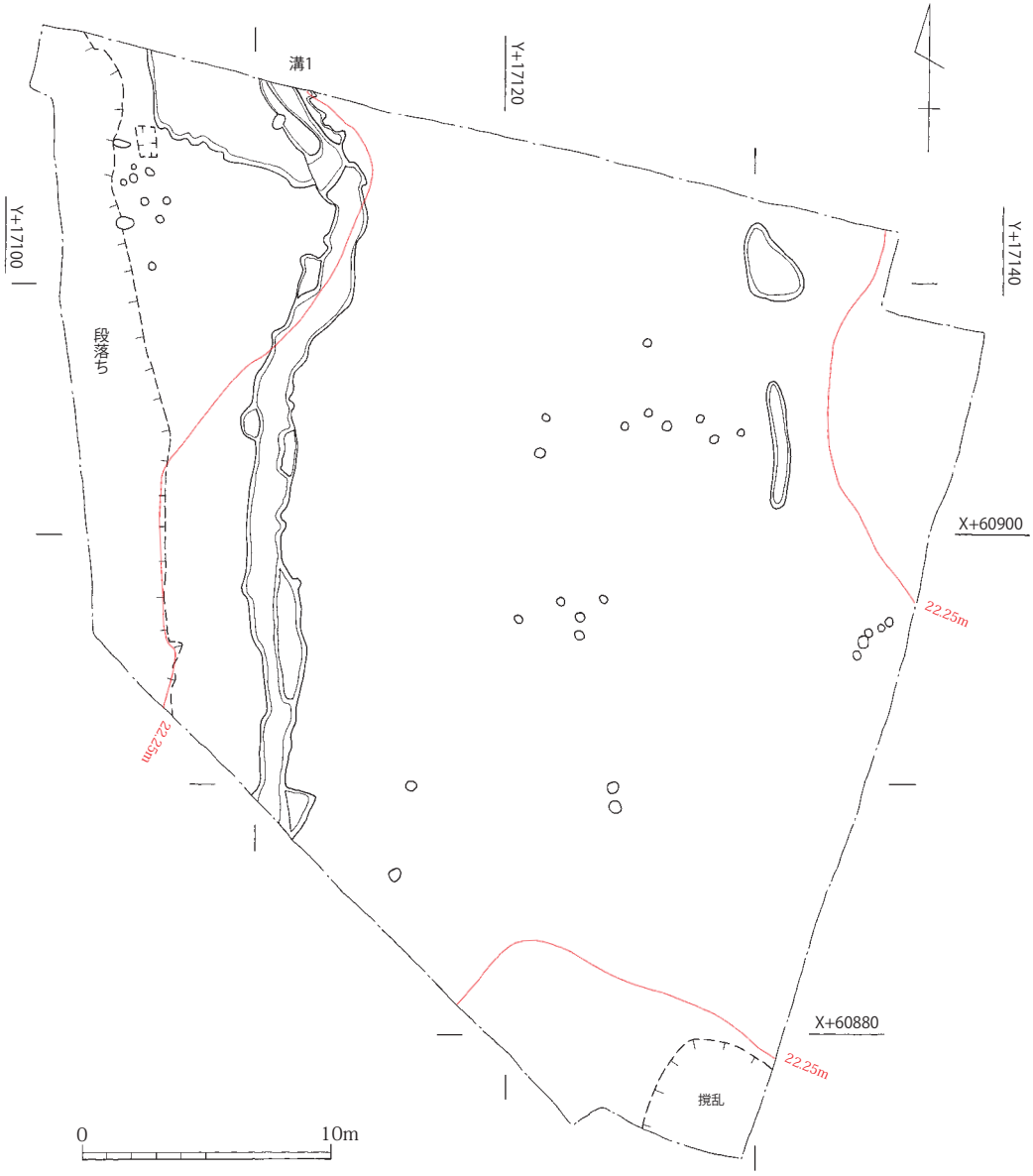
５　３次Ⅴ区の調査

Ⅴ区は、対象地の西側が礫原で、調査区西端には地下げによる深い段落ちが入っていたので、土壌の残る部分 2,020 ㎡を調査とした。調査範囲内も土壌が薄いため、礫が露出している部分が多く、溝状遺構 1 条とピット少数が検出されたのみだった。土坑状の落ち込みが見られたが、遺物が何もなく、水田耕作地にできた落ち込みと考えられたので遺構としては報告しない。ここでは溝状遺構 1 条のみを報告する。

（１）遺構と遺物

1 号溝状遺構（図版 64、第 120・122 図）

調査区西端を蛇行しながらほぼ南北に走る溝で、幅は広いところで 160㎝ほど、深さは



第 122 図　上唐原榎町遺跡3次V区全体図（1/300）

15cm ほどで小礫が混入し、北側では礫が溝を塞ぐように入っていた。浅く壁の立ち上がりが緩やかで、地形に合わせて蛇行しているものと見られるので水田の用水路であろう。4 次調査区からは検出されていない。出土遺物から 18 世紀後半から 19 世紀前半だろう。

出土遺物（図版 70、第 120･123 図）

第 120 図 8 は土師質土器の土鍋で、外面はケズリ後ナデ。外面は暗灰褐色、内面はにぶい黄灰色を呈する。13 世紀中葉。 9 は土師質土器の高村焼（註 3）で、外面はケズリ、外面口縁部から内面はミガキで、赤色顔料が塗布されている。口縁部形態から 19 世紀後半から 20 世紀初頭。10 は瓦質土器の火鉢で、外面口縁下には 2 条の突帯間に巴文のスタンプが入るが突帯が剥落している。内外灰黒色を呈する。11 は緑灰色の灰釉がかかる肥前陶器椀の底部で、畳付から高台内部は露胎で、見込みに蛇ノ目釉剥ぎがある。12 は陶器椀の底部で、内外面は白化粧土掻き取り後イッチン掛け。内面は螺旋状にかける。胎土は青灰色で肥前系か。畳付が欠損しているのは窯道具から外す際のものだろう。13 は伊万里産の端反碗で外面は帆掛船、見込みは崩れた鳥文が呉須で描かれている。畳付は釉剥ぎ。

このほか、第 123 図１～３の縄文時代の石器が混入している。

その他の出土遺物（図版 70、第 120・123 図）

第 120 図 14 はピット１出土の弥生時代後期の鉢で、図上接合である。レンズ底の底部は押し出し技法によるもの。内外面胴下位はケズリ。15 ～ 17 は攪乱出土で、15 は 6 世紀代の小型の須恵器提瓶片である。耳部は環状の痕跡が残っている。側面にカキ目が残っているが、膨らみのある面は切り離し後ナデ仕上げ。膨らみのある面の頂部が最終工程の接合部と見られ、その接合部が破損している。16 は堺産の陶器摺り鉢で、片口部に近い破片のため口縁部に歪みがある。口唇部に色調差があるのは重ね焼きのため。18 世紀代。17 は肥前産陶器椀の底部で、灰白色の胎に貫入の多い透明釉がかかる。18 世紀代か。

第 123 図１は１号溝状遺構出土の打製石鏃の先端部で、凹基式長三角形だろうか。両面加工で、1.91g を測る。サヌカイト製。２・３は１号溝状遺構出土の掻器で、１は基部の片側につまみ部を作るタイプで、幅広の剥片の両側縁の表裏に互い違いに刃をつけている。姫島産黒曜石製で 190.68g を測る。姫島産黒曜石製。３は台形を呈し、下端に刃をつけている。姫島産黒曜石製で 4.32g を測る。４は攪乱出土の小型の手持ち砥石で、表面が風化している。凝灰岩製で、欠損面以外は使用している。13.14g を測る。

６　３次Ⅵ区の調査

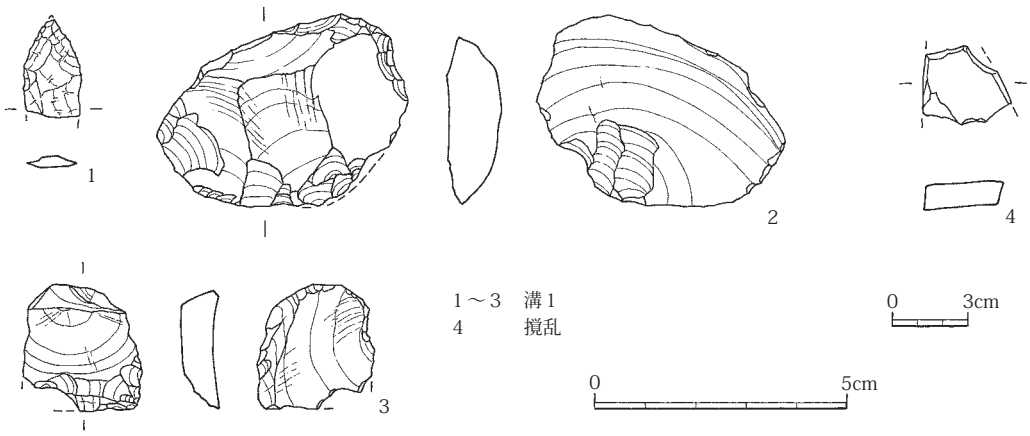
Ⅵ区は調査対象範囲の最も北側に位置し、対象面積は 3,620 ㎡あったが、台地側は礫原だったので土壌の広がる部分 1,820 ㎡を調査区とした。土壌範囲の中でも礫は多く含まれており、礫を貼った堤状遺構と石垣、土坑３基、溝状遺構１条とピット少数が検出された。

礫を貼った堤状遺構と石垣は、南北両壁に礫を貼る堤の北側が低いため、削平された部分は南側の壁面だけが残り石垣状になったもので、本来は堤状に延びていたものである。堤状遺構の南側は広い平坦面が広がるので近世以降の水田と見られ、堤部分は上面が平坦なので農道として利用されただろう。堤と石垣については近世以降の水田に伴うので掲載していない。

ここでは、土坑３基、溝状遺構１条を報告する。

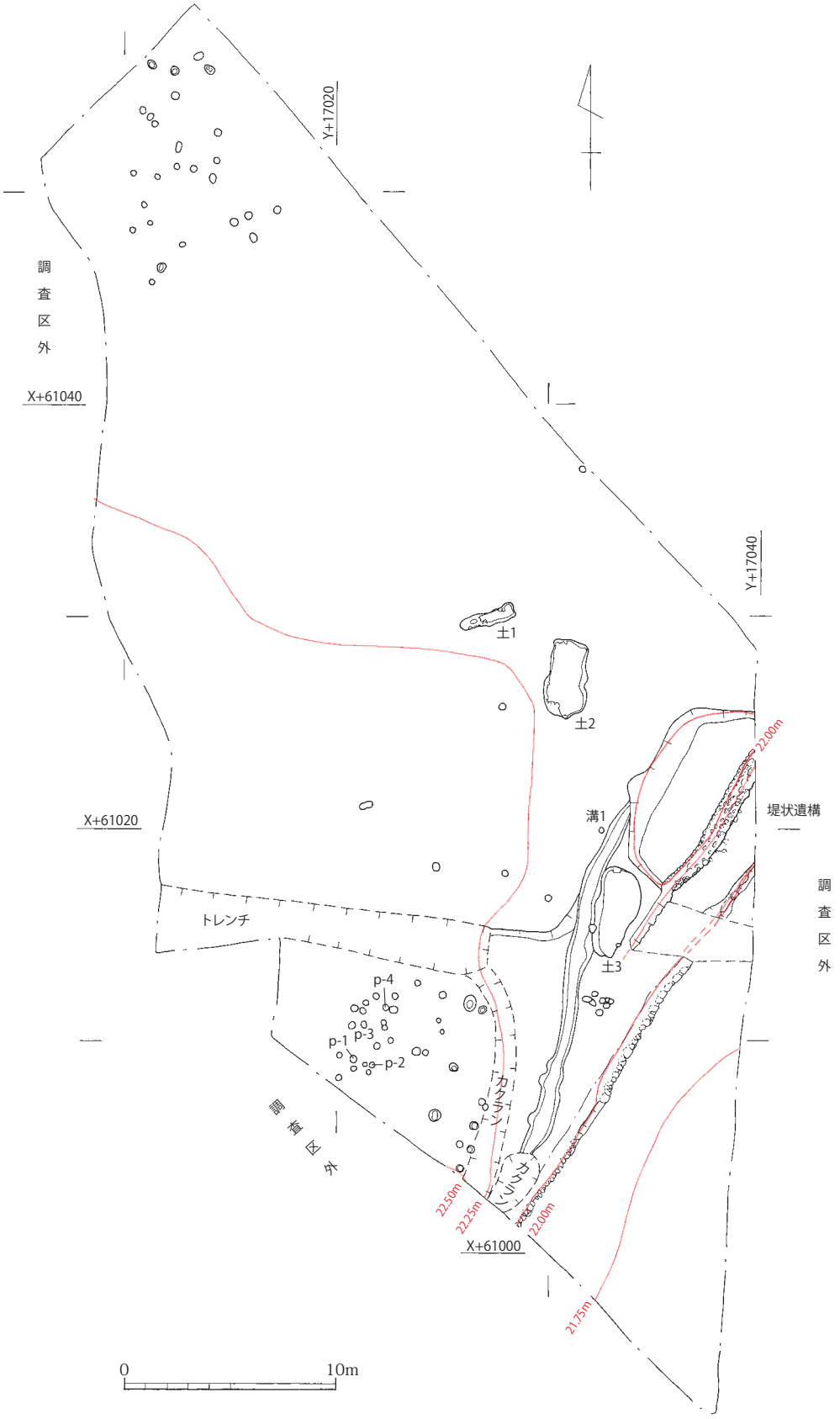
1 号土坑（図版 65、第 125 図）

礫原に掘り込まれているもので石囲いや石積はない。主軸方向はN -73° - E で、石垣とは一

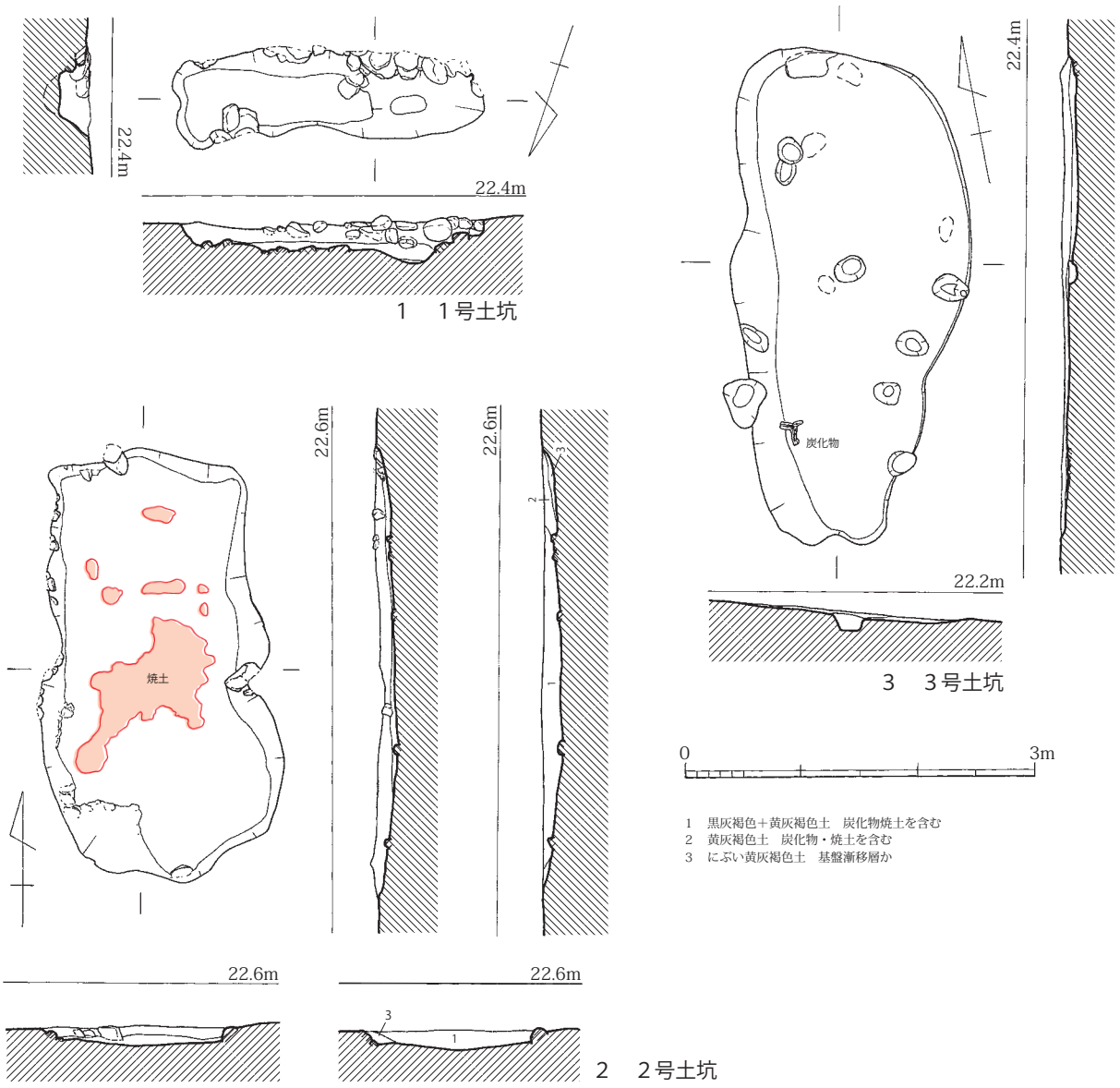


第 123 図　３次Ⅴ区出土石器実測図（4は 1/3、他は 2/3）

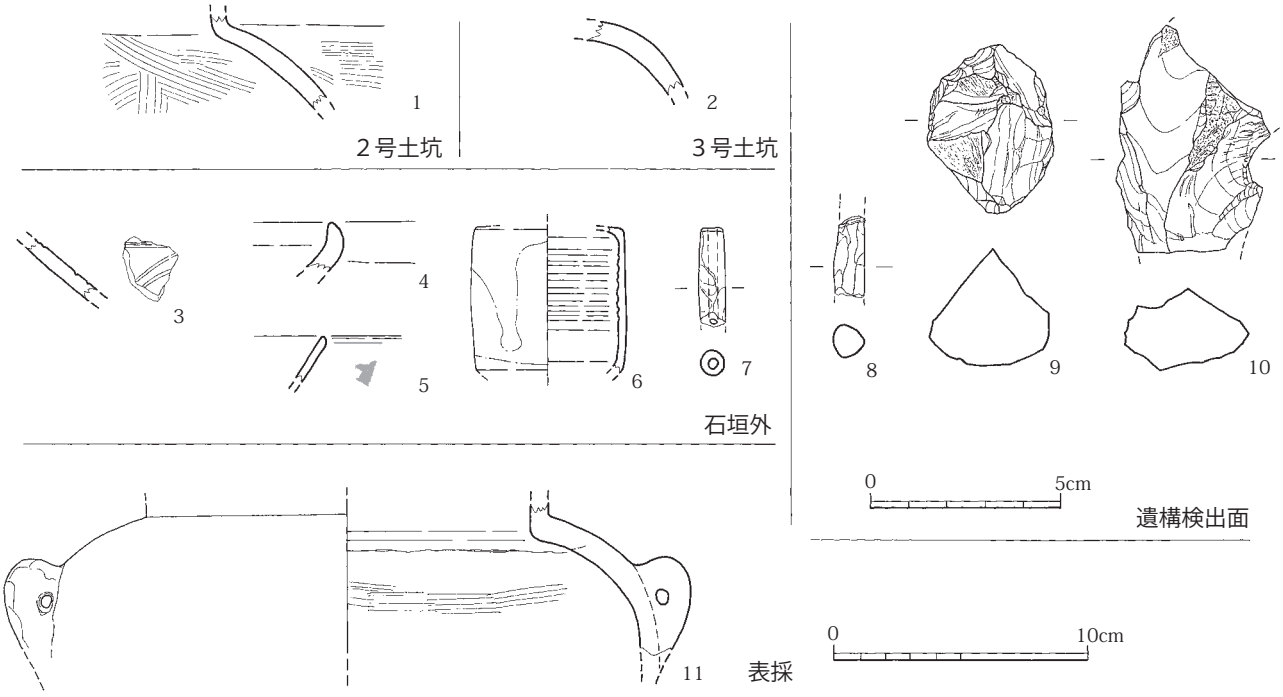
致しない。長軸 270 ㎝、短軸 80 ㎝の略長方形プランで、形態と規模は土壙墓に近い。深さは 38 ㎝で、壁の立ち上がりが高い。遺物が出土していないので時期不明。



第 124 図　上唐原榎町遺跡3次Ⅵ区全体図（1/300）



第 125 図　3次Ⅵ区土坑実測図（1/60）



第 126 図　3次Ⅵ区出土遺物実測図（9・10 は 1/2、他は 1/3）

２号土坑（図版 65、第 125 図）

礫原に掘り込まれているもので石囲いや石積はない。主軸方向はＮ－9° 50′－Ｅで、石垣の走る方向に近い。長軸 360 ㎝、短軸 182 ㎝の略方形プランで、埋土には炭化物や焼土塊を含み、床面には部分的に焼土が見られる。火葬場遺構のようだが焼土が一部にしかなく、火葬骨が残っていないことから火葬場ではない。深さは 18 ㎝で、床面はやや湾曲している。遺物が出土していないので時期不明。

出土遺物（第 126 図）

１は弥生土器か土師器の壺の肩部で、内面肩部にハケ目があるので頸部は比較的広いものと見られる。２は弥生土器か土師器の肩部と見られるが器種を特定できない。

３号土坑（図版 65、第 125 図）

東片が削平されて不整形プランになっているが、本来は略方形だっただろう。主軸方向はＮ－11° 10′－Ｅで、長軸 420 ㎝、短軸 210 ㎝で、埋土には炭化物や焼土塊を含むが、床面は焼けていない。小ピットが散在するが、規則性はない。倒木痕の可能性もある。

1 号溝状遺構（図版 63、第 124 図）

調査区東部で検出され、３号土坑に切られる。Ｎ－13° 50′－Ｅ方向に東に湾曲しながら走る小溝で、幅 160㎝、深さは深いところでも５㎝前後で、床面はわずかだが北に下がっている。等高線と同じ湾曲なので、地形に沿って掘られたものだろう。南の水路とつながる水田の用水路だろうか。出土遺物がないので時期はわからない。

その他の出土遺物（第 126 図）

第 126 図３～７は石垣と調査区東端の間から出土したもので、３は小片ながら胎土や色調の特徴と、外面に沈線をもつ土器片で、二重の同心半円になるものと見られることから、弥生前期から中期前半の壺の胴部の可能性がある。４は瓦質土器の土鍋の口縁部で、外面は煤が付着している。５は井形文が手描きされた 18 世紀代前葉から後葉の伊万里産染付碗であろう。６は陶器の茶入れで外面は鉄釉二度掛けで、外面底部と内面は露胎である。７は管状土錘で、下端は欠損している。８～ 10 は遺構検出面出土で、８は棒状の土製品

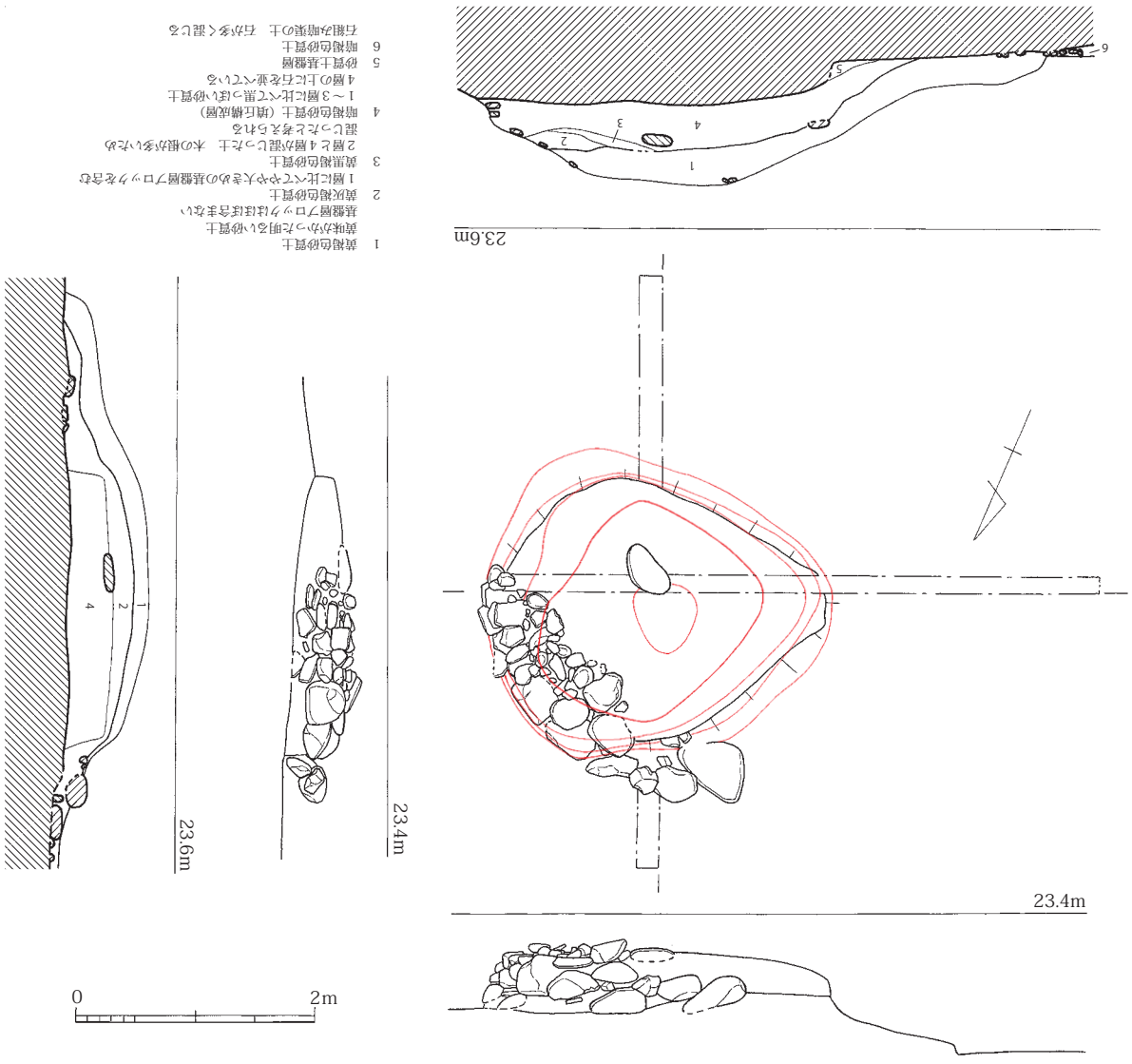
第 127 図　上唐原榎町遺跡４次全体図（1/300）

だが、一端の一部に平坦面があることから有孔土錘の孔の部分が欠損し、孔の内部の平坦面が残ったものだろう。9・10は姫島産黒曜石製の石核で、9は曲面の素面を残しているので、球形の原石を荒割した段階のものだろう。38.77 gを測る。10は上下端が欠損しているので大型品である。皮剥ぎ段階のものか。11は表採の瓦質土器の湯釜で内面肩部はハケ、外面はナデ仕上げで、摩滅のためミガキの痕跡は観察できなかった。16世紀前半だろう。

7　4次調査

調査対象範囲（対象面積1,480 ㎡）の東側は攪乱と礫原が入っていたので調査区から外し、980 ㎡を調査した。調査範囲内も家屋の基礎が多く見られ、残りが悪かった。調査区中央部にマウンドがあり、マウンドの裾を切って石組暗渠が検出された。当初溝状遺構としていたが、他の溝状遺構の埋土と比べても明らかに礫の量が多く、意図的に礫を充填した石組暗渠と考えられた。出土遺物から明治時代のものと見られることから、遺構としては報告しない。また、この溝に垂直方向に走る小溝も石組暗渠に排水するものと見られるので、同時期だろう。

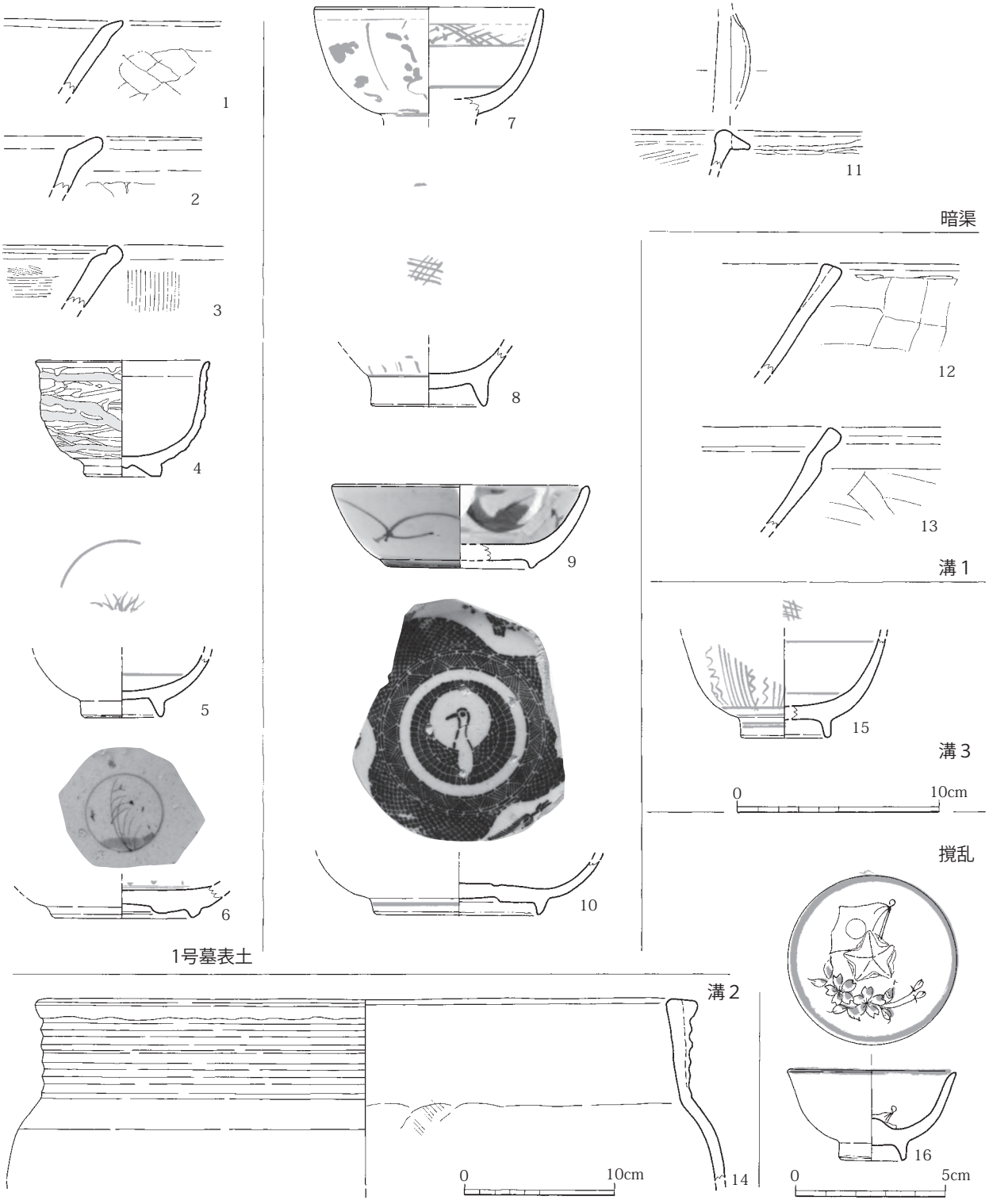
中央部に南西隅には石塔が集められていた。小ピットが調査区北西部に分布するが、掘立柱建物跡は構成しない。ここでは、基壇状遺構と以外は、溝状遺構は1・2号溝状遺構が出土遺物から近代に属することがわかり、3号溝状遺構のみを報告する。



第128図　4次基壇状遺構実測図（1/60）

基壇状遺構（図版 67、第 128 図）

平面正方形の盛土だが、土層から平坦な裾が広がっているが、裾部は一部しか残っていない。盛土部分は平面正方形なので、裾部も同様に正方形だっただろう。本来は盛土の斜面に礫が積まれていたようだが、現在は一辺しか残っていない。裾部に石が貼られていたかは残りが悪いためわからない。石積みのある部分は辺が弧状になるので、本来は隅丸方形プランだっただろう。頂部の平坦面にも扁平な石が 1 点のみ存在していいたので本来は石を貼っていたものと見られる。石積みの残っている辺は 185 ㎝、残っていない辺は 140 ㎝を測る。裾部は各辺に 1 m



第 129 図　4次出土遺物実測図（14 は 1/4、16 は 1/2、他は 1/3）

ほどあったと推定できるので一辺 380 ㎝ほどに復元できる。高さは 45 ㎝で、断面低台形を呈する。石積みは一番下に大きな石を置き、その上に人頭大の石を積み上げ、石間に小礫を入れている。裏込めは存在せず、表面に貼っている。盛土はブロックが少ないことから周囲の土を集めて盛り上げたものだろう。

立ち割りトレンチでは内部に墓壙や火葬骨を収めたピットは存在せず、遺物も出土していない。表土上から出土した陶磁器は 19 世紀中葉なので、それ以前のものであることは間違いない。

出土遺物（第 129 図）

1 ～ 3 は土師質土器の土鍋で、表土上から出土した。１・２は外面がケズリ状ナデで、内面は丁寧なナデ。２は外面煤付き。３は外面タテハケ、内面ヨコハケ。内面口縁部に沈線が入る。４は萩焼のビラ掛け椀で、黒釉と長石釉の順にイッチン掛けされている。外底は螺旋ケズリ。５は染付の小碗で、内面胴下位に界線と見込みに草文が入る。畳付は釉剥ぎ。６は染付の小型皿の底部で、外底は蛇ノ目高台で、見込みに丸にススキ文が入る。

３号溝状遺構（図版 66、第 127 図）

幅 100cm、深さ 30 ～ 60cm で、南北方向に走る。現代の建物跡に下に延びるのでそれ以前のものである。出土遺物から 18 世紀後半から 19 世紀前半か。

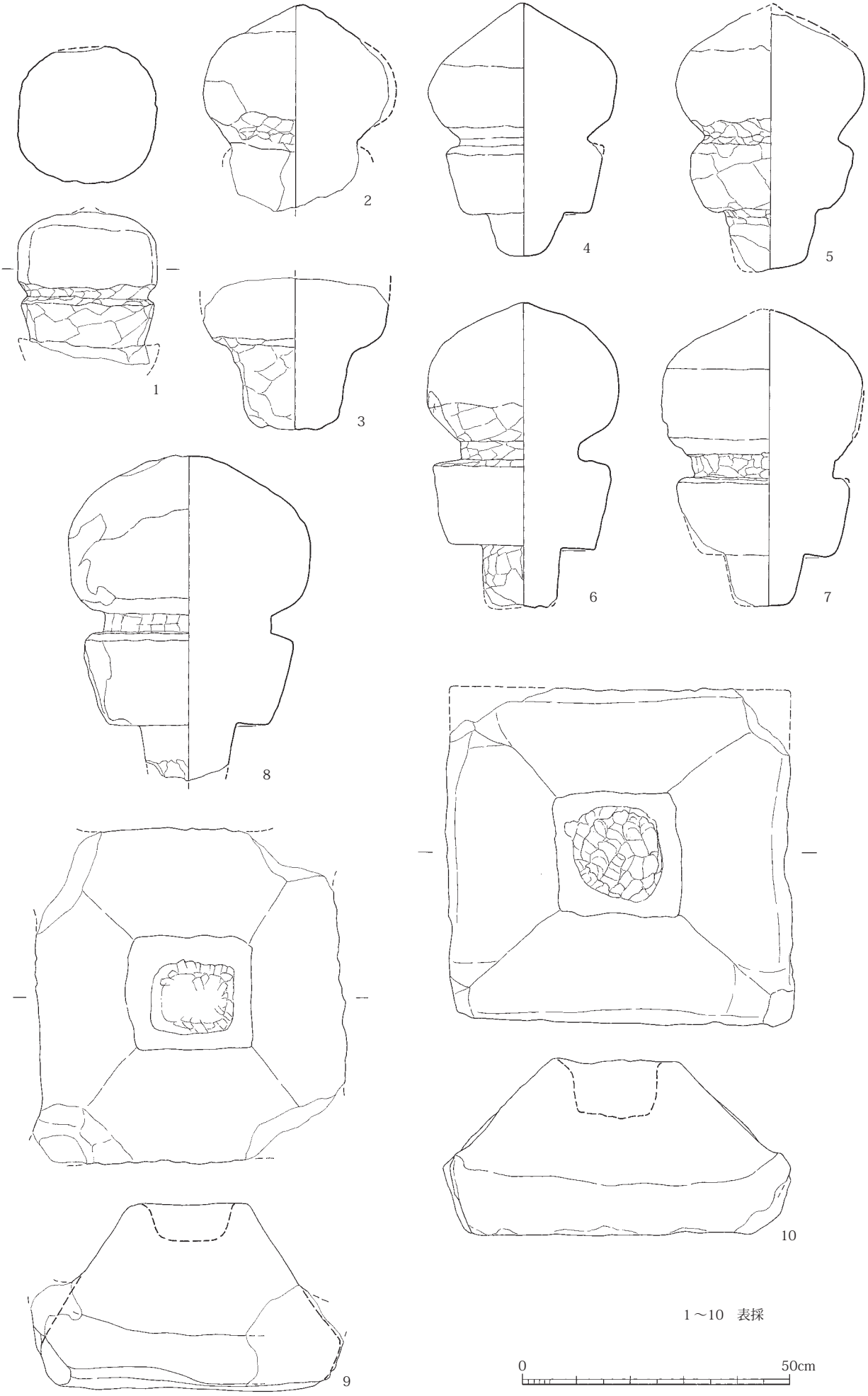
出土遺物（第 129 図）

15 は染付小碗で、外面は縦の縞文帯の間によろけ縞文が入る。

そのほかの出土遺物（図版 70 ～ 72　第 129・130・131 図）

第 129 図 7 ～ 11 は石組暗渠出土で、７・８は染付碗である。７は小片のため外面はモチーフ不明で、内面口縁下は崩れた袈裟襷文帯が入る。８は広東碗で、外面は霊芝文だろうか。見込みに格子文が入る。畳付は釉剥ぎ。９・10 は５寸皿で、９の外面は唐草文、内面は扇文と花文で、波佐見焼。発色が悪く胎の焼成も悪い。畳付は砂目跡付着。10 は型紙摺りで、中央に鶴、斜線鋸歯文帯、白抜きの網目地文が入る。蛇ノ目高台はまた見込みに針目跡が５つつく。外底の台部は釉剥ぎ。11 は土師質土器の焙烙で、長半円形の小さな手捏成型の耳がつくので高村焼（註３）だろう。内面ミガキ。耳部は小さいので箱形焜炉に引っ掛けるように使用するのではないだろうか。外面は煤が付着している。18 世紀後半から 19 世紀前半に属する。12・13 は１号撹乱溝出土の土師質土器の土鍋で、12 は口縁部肥厚で、外面は板状のナデが施されている。内外にぶい暗灰色を呈する。13 は外面ケズリ状のナデで、口縁部外面にナデ窪みをもつ。14 は２号攪乱溝出土の陶器の甕で、口縁部を肥厚して櫛掻き状に引いた多条凹線が入る。近代のものだろう。16 は攪乱から出土した従軍記念杯で、コバルトで口紅が施されており、内面口縁下に金字で『支那事變□□』と書かれている。判読できない部分は『記念』だろう。支那事変は昭和 12(1937)年の盧溝橋事件に端を発する日中戦争の別称で、国内では昭和 16(1941)年の日米開戦以降は「大東亜戦争」と呼称されるようになるため、その間のものである。見込みに立体的な星形文が貼付けている。星は日の丸旗の上に掛かり、日の丸の下には桜花が配置されている。畳付は釉剥ぎで、胎土から瀬戸焼だろう。

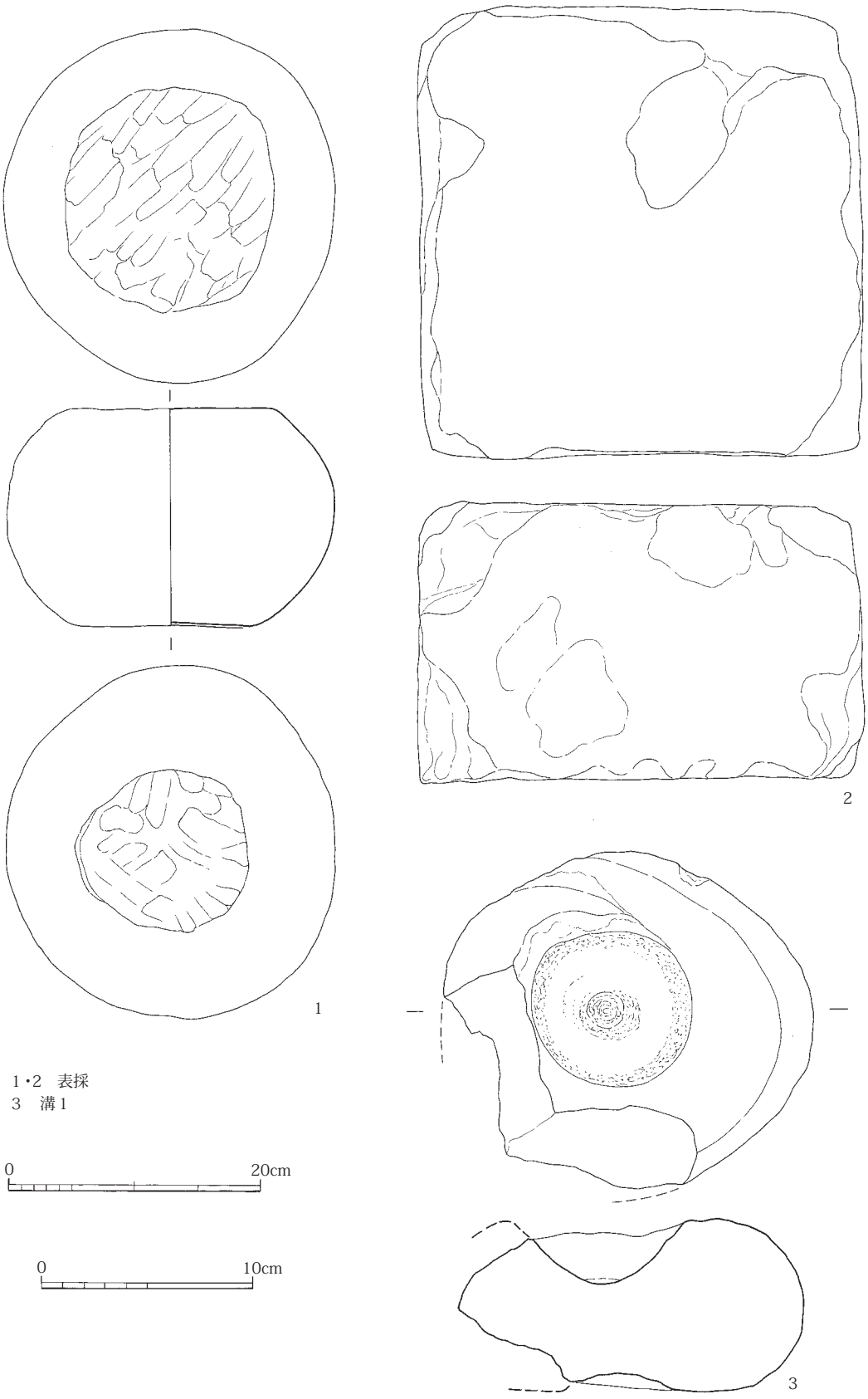
第 130・131 図は表採の五輪塔の部材で、調査区西端表土上に集められていたものである。いずれも多孔質の凝灰岩製である。線刻や墨書はなく、組み合わせはわからない。基壇状遺構



第 130 図　4次出土石製品実測図1（1/10）

の上に置かれていたものを片づけたのだろう。

第 130 図１～８は空風輪で、１は風輪下部の段が二重になっている。横断面が隅丸方形状を



第 131 図　４次出土石製品実測図2（3は 1/3、他は 1/5）

呈するので五輪塔ではない可能性もある。2.5kg。２は上半部片で表面の摩滅が大きい。3.8kg。３は下半部片で臍の整形は粗い。2.5kg。５～８の窪み部はノミ痕が明瞭に残るが、４は不明瞭である。４は4.8kg、５は5.1kg、６は7.5kg、７は8.2kg、８は13.9kg。９・10は火輪で、角の裾が小さく反る。上面の孔はノミ痕が明瞭に残る。9は16.9kg、10は16.0kg。第131図１は水輪で、上面より下面の平坦面の方が広く、ノミ痕が明瞭に残っている。側面は平滑に仕上げられている。18.0kg。２は地輪で、崩落が著しい面が接地面と見られる。43.6kg。３は１号溝状遺構出土の石臼で、中世の豊前に多く見られるものである。大きな孔の裏面にも凹みがあるが、接地時の安定性のために設けられたものと見られる。カクセン石を多く含む暗灰赤色の凝灰岩製。2.5kg。

註

1　この礫層は（豊前）中津層と呼ばれるもので、川床の礫層に比べて亜角礫や風化の進んだ礫が多いので区別できる。坂本亨　長谷紘和1972「大分県北部、中津平野の第４系」『地質調査所月　報第23巻　第９号』

2　久住猛雄1999「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』ⅩⅨ

3　秦憲二2003「Ⅲ．調査の内容　１．市丸城居屋敷遺跡　６）小結」『県道新吉富豊前線関係埋蔵　文化財調査報告（１）市丸城居屋敷遺跡・六郎堂ノ前遺跡・六郎神田遺跡・六郎桜木遺跡』福岡　県文化財調査報告書第179集

4　前掲２

参考文献

渡辺智恵美2010「第５章　百留横穴群ほか出土耳環の自然科学的調査」『百留横穴墓群』上毛町文化財調査報告第13集）・

比佐陽一郎「弓金具の再検討」『月刊考古学ジャーナル12』 No,496,2002ニューサイエンス社

８　小結

上唐原榎町遺跡は試掘調査の結果、県道の西の水田地帯まで包括する包蔵地となったが、縄文時代後晩期・弥生時代後期末から古墳時代前期、古墳時代後期から奈良時代の集落遺跡の県道東側と、中世の溝状遺構、時期不明の谷や土坑などしかない県道西側に大きく性格が分かれている。これは別の遺跡というよりも地形に応じた土地利用の差であろう。

現在は連続する平坦地形だが、調査で確認された各区の基盤層は、県道から東のⅠ・Ⅱ区では砂質土層で、県道から西のⅢ区には砂質粘土の流路跡の谷が入り、Ⅴ・Ⅵ区は近世・近代の水田に伴う遺構と礫原が広がっていた。この基盤層の差異は地形の違いであることから、削平前の地形を復元して、検出された遺構から遺跡の全体像を考えてみる。

上唐原榎町遺跡の地形復元

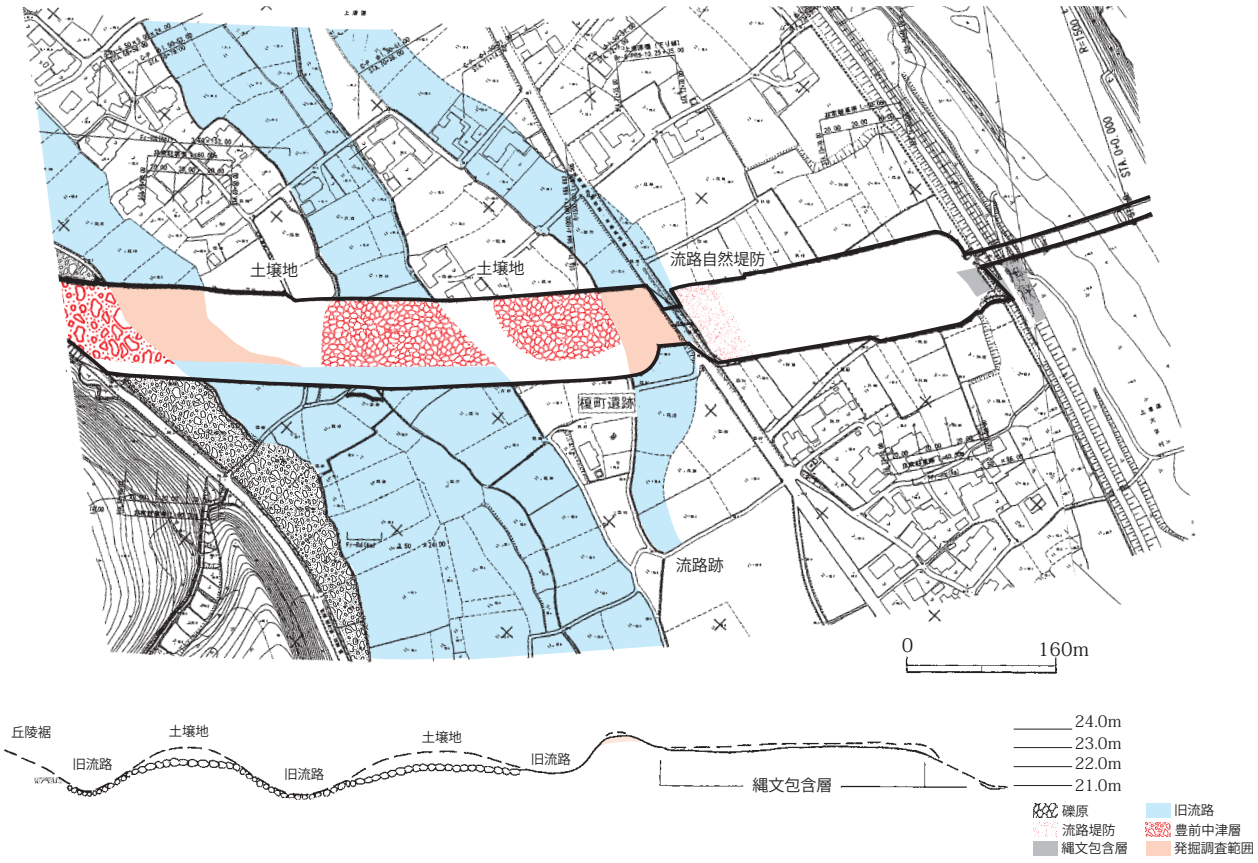
上唐原榎町遺跡Ⅰ・Ⅱ区は基盤層が砂質土であることから、川岸から県道までの現在の集落が営まれる範囲が山国川の自然堤防である。Ⅰ区の東端部は、竪穴住居跡の床面が露出するほ

ど残りが悪いことから、堤防付近までは遺跡南の集落側の現地表ほどの高さがあったことがわかる。現堤防下は上唐原了清遺跡（註１）として調査されており、縄文時代から中世の遺構が確認されているが、榎町遺跡のⅠ区とは約２ｍの比高差がある。了清遺跡の西側に中世の大溝が入り、弥生時代後期から奈良時代の遺構がないことから、榎町遺跡の集落との間に斜面があったようだ。したがって、榎町遺跡は、了清遺跡の立地する河岸段丘の１つ上の段丘に立地していたと考えられる。

Ⅱ区西端部も遺構が少なく、単に遺構が少ないにしては粗密が極端なので、西側は削平を受けていると考えられる。これはⅠ区東端と同様に地形が高かったと考えられる。3 区東側は流路跡の谷地形であり、この流路跡の自然堤防がⅡ区西端に形成され、その堤防上を通路として使用していたのでのちに県道が整備されたのだろう。

縄文時代の遺構・包含層は、了清遺跡で大型の落ち込み状遺構が検出されているが、榎町遺跡Ⅰ区では東部に土坑と薄い包含層が見られるのみで、川側の斜面に向かって堆積していた。Ⅱ区では東部に南北方向に谷地形状に包含層が広がっていたので自然堤防の高い部分の裾下に堆積していたものと考えられる。

Ⅲ区西端から西には礫原が広がっており、礫原の間に南北方向に帯状の土壌地帯があった。土壌層は浅く、その下は礫原と同じ礫層だった。礫原を重機で掘削して見ると約２ｍ下まで変化のない礫層であった。したがって、礫原は山国川旧流路の川床であり、そこに小河川が流れて低い部分に土壌が堆積し、礫原は微高地部分が削平された露出したものと見られる。遺構があるとすれば高い礫原側にあるはずだが、土壌の堆積は薄いため遺構を掘り込むこと自体が困難なので、集落を営むことはできなかったようで深い遺構は見られなかった。また、礫層が



第 132 図　上唐原榎町遺跡地形復元図（1/2,000）

厚く堆積しているため保水しにくく可耕地にするには、床土を貼る必要があるので、土壌部分を谷水田のように利用していただろう。Ⅲ区に見られた旧流路は水がほとんど流れていない池のようだったものと見られるので、こうした自然の溜池から水を得ることができたのではないだろうか。Ⅰ・Ⅱ区で確認された弥生・古墳～奈良時代集落の人口を支える耕作地は県道から西の谷水田だったと考えたい。Ⅲ区の北に位置する上唐原道祖丸遺跡では、古墳時代後期から奈良時代の大規模な集落が営まれており、給水のための溜井も発見されている。Ⅲ区で発見された流路跡も南北どちらかの端部になんらかの導水施設を設ける大規模な溜井なのかもしれない。また、Ⅲ区で検出された波板状遺構は道祖丸遺跡Ｃ区（註２）で発見された波板状遺構につながる可能性がある。

平安時代にはⅠ・Ⅱ区の集落は廃絶しており、東西に走る中世の溝が検出された。榎町２次調査の北西部と了清遺跡で中世集落が確認されていることから、集落周辺を水田化したもの見られる。中世には牛馬を利用した耕作が普及することから、灌漑施設を整備して広い耕作地を開墾することができるようになったため、谷水田は使われなくなったのではないだろうか。

今回の調査では以下の成果が注目される。

剥片尖頭器

表採ながら剥片尖頭器（第 113 図 13）が出土している。表面には大きな剥離面が３つあり、裏面は主要剥離面を残す。基部の整形の整い方から、ナイフ形石器中期段階のものだろう。上毛町の剥片尖頭器として初例であるだけでなく、上毛町域のナイフ形石器文化期の石器は流紋岩製が多いなかで、姫島産黒曜石を使用していることが興味深い。

轟Ｂ式土器・出現期の刻目突帯文土器

縄文時代の遺構はわずかで包含層も薄かったが、少量ながら縄文前期の轟式土器の大きな破片（第 100 図８）が出土したことは注目に値する。Ⅴ区の北に 300 ｍ位置する上唐原道祖丸遺跡Ｄ区（註３）で、轟式土器を多量に含む遺物包含層が見つかっているので、この遺跡から持ち込まれた可能性がある。山国側下流域では希薄な時期であり、不明な部分が多かったので貴重な資料となった。

また、同様に縄文晩期遺跡も希薄であり、上唐原地区では黒川・夜臼式期の遺跡の中心地はわかっていない。出現期の刻目突帯文土器（第 97 図 13・14）は他地域でも多くは見られない貴重な資料である。

打製石斧の２つの製作技法

打製石斧は縄文時代のものと弥生時代のものの区別は形態からはつかないが、安山岩製のものと緑色片岩製の２種類があり、前者が主体を占めていた。安山岩製は素材となる石材の片面縁を荒割し、裏返して調整剥離する技法をとっている。緑色片岩製は右側縁を大きく剥離し、左側縁は右側縁の剥離に合わせて調整剥離する方法が多いが、中には緑色片岩でありながら、安山岩製と同じ剥離方法のものも見られた。

縄文時代の石器組成

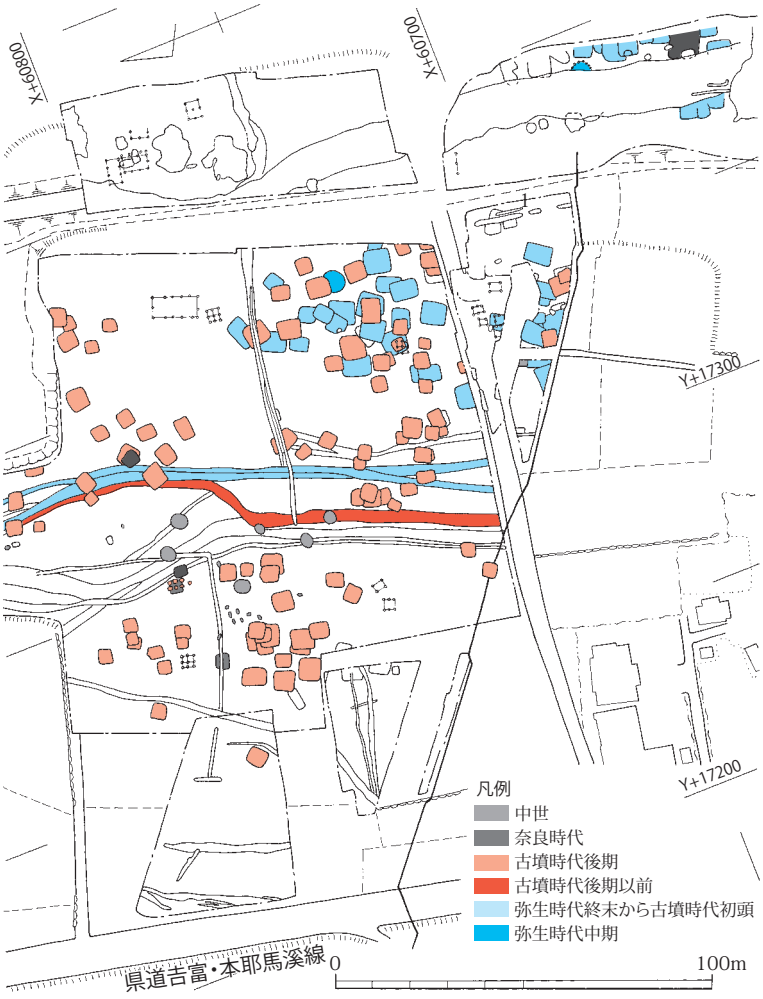
縄文時代の石器は前述の打製石斧のほかは打製石鏃と掻器が多数を占め、近接する了清遺跡と比較すると、石錘がなく、削器と石匙が少ない。この石器組成が生業を反映しているとすれば、石鏃は狩猟でなく漁撈に使用するもので、漁撈と根茎植物の採集の依存度が高かったことになる。時期が異なるにしても同じ立地の了清遺跡と石器組成が大きく異なるので、この石器組成については同時期の資料の蓄積を待って判断するべきだろう。

弥生時代中期の遺構は見つからなかったが、榎町遺跡１・２次調査と了清遺跡ではわずかながら中期後半の遺構が検出されており、本遺跡からも包含層や遺構への混入品だが遺物は出土している。

弥生時代中期から古墳時代前期の集落

弥生時代中期後半に自然堤防で集落が形成されていたようだが短期間で断絶している。本格的に集落が形成されるのは弥生時代後期中頃から古墳時代前期と古墳時代後期から奈良時代で、弥生時代後期から古墳時代前期の遺構は調査区中央から東に分布し、南にどこまで広がるかはわからないものの、Ⅰ区が集落の中心部にあたる。倉庫機能が想定される１×１間の掘立柱建物跡がⅠ区に集中するのもそのためであろう。

１・２次調査では、弥生時代後期から古墳時代前期の遺構群の西を区画するように、３次調



第 133 図　上唐原榎町遺跡・上唐原了清遺跡遺構略配置図（1/2,000）

査Ⅰ区８・９号溝状遺構につながる南北方向の溝が２条あり、東端は了清遺跡との間の比高差約２ｍの自然堤防が天然の土塁となりうることから、防御施設を有する集落であったものと考えられる。墓地としては鏡迫古墳群が最も近く、集落を見下ろせる丘陵端部に位置していることと、今回の調査で鏡迫古墳群との間に墓地が見つからなかったことから、最有力である。鏡迫古墳群はそれ自体が有力集団墓だが、埋葬施設や規模、副葬品に大きな格差のない石蓋土壙墓群であり、有力集団内の階層分化はそれ程進んでいなかったようだ。そのことは、榎町集落内の竪穴住居跡の規模に大きな格差が見られないことと一致する。

Ⅰ区で見る限り、集落は弥生後期後葉から末にかけて遺構が少なく、布留０式に急速に竪穴住居数が増えて最盛期を迎え、布留１式には縮小傾向へ向かっている。おそらく、下唐原地区の能満寺古墳群や西方古墳などの前期古墳を造営した首長の勢力下に組み込まれていく過程で防御施設は不要となり、集落が再編されたのではないだろうか。

古墳時代後期から奈良時代の集落

古墳時代後期から奈良時代のカマド付きの竪穴住居跡は、カマドを西か北に敷設するもので、石製支脚の有無や竈袖への補強石材の使用の有無などバリエーションがある。２次調査では大きく３つの竪穴住居跡のグループが見られ、Ⅰ区は南東グループに、ⅡＢ区は西グループに含まれる。

なお、上唐原榎町遺跡２次調査Ⅱ区 10 地点では１基の古墳が発見されており（註４）、百留居屋敷遺跡（註５）でも時期は不確定ながら小竪穴式石室が２基発見されている。ⅡＢ区に見られた集石は古墳とは考えにくく、むしろ抜き取られた石材が集められたものかも知れない。遺跡西にある丘陵には、崖面に百留横穴群（註６）が存在し、皿山古墳群（註７）・四ッ塚山遺跡（註８）などの古墳群が知られているが、堤防上の埋葬遺構は丘陵の古墳群・横穴墓群の消長と考え併せて検討しなければならないだろう。

詳しい遺構の時期変遷については１・２次調査の報告書刊行を待たなければならないが、奈良時代の遺構は少なく、散村に近い様相を呈する。遺物では上毛町の山国川下流域では希少な焼塩壺がⅠ区 21 号竪穴住居跡から出土している。

基壇状遺構

中・近世の遺構は少なく、４次調査区の基壇状遺構が注目される。４次調査区には五輪塔部材が表土上に集められていたので、基壇状遺構の上に設置されていた可能性もあるが、石塔の部材が五輪塔を構成していたとすれば多すぎて全部は基壇状遺構の平坦面に乗らない。また、基壇状遺構が中世に遡らないことと基壇状遺構内部に墓壙がないことから、五輪塔の部材を集めて安置するために基壇状遺構が作られたと考えるべきだろう。したがって、五輪塔を伴う墓地を造営した集落が存在するはずだが、上唐原榎町遺跡の１・２次調査で確認された中世集落は規模が小さい。ⅡＢ区の南には梶屋宝塔が現存しており、上唐原了清遺跡（註９）には中世前期の居館が発見されているので、了清遺跡を中心とする中世集落に伴う可能性が高い。

以上のように、調査面積に比して検出された遺構は少ないものの、既往の調査成果を考え合わることで、得られた成果を意義付けることができた。

註

1　福岡県教育委員会 1999『一級河川山国川築堤関係埋蔵文化財調査報告４　上唐原了清遺跡Ⅰ』
　福岡県教育委員会 2000『一級河川山国川築堤関係埋蔵文化財調査報告５　上唐原了清遺跡Ⅱ』
　福岡県教育委員会 2001『一級河川山国川築堤関係埋蔵文化財調査報告６　上唐原了清遺跡Ⅲ』
2　福岡県教育委員会 2004『福岡県埋蔵文化財調査年報 - 平成 15 年度 - 』
3　前掲註２
4　福岡県教育委員会 2007『福岡県埋蔵文化財調査年報 - 平成 17 年度 - 』
5　福岡県教育委員会 1999『一級河川山国川築堤関係埋蔵文化財調査報告３　百留居屋敷遺跡』
6　上毛町教育委員会 2010『百留横穴墓群』上毛町文化財調査報告第 13 集
7　九州歴史資料館 2015『ガサメキ古墳群２・３区　皿山古墳群』東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告第 23 集
8　本書所収遺跡
9　福岡県教育委員会 1999『一級河川山国川築堤関係埋蔵文化財調査報告４　上唐原了清遺跡Ⅰ』

参考文献

上毛町教育委員会 2015『七ツ枝遺跡　安雲山田遺跡　土佐井遺跡　上唐原榎町遺跡』上毛町文化財調査報告書第 20 集

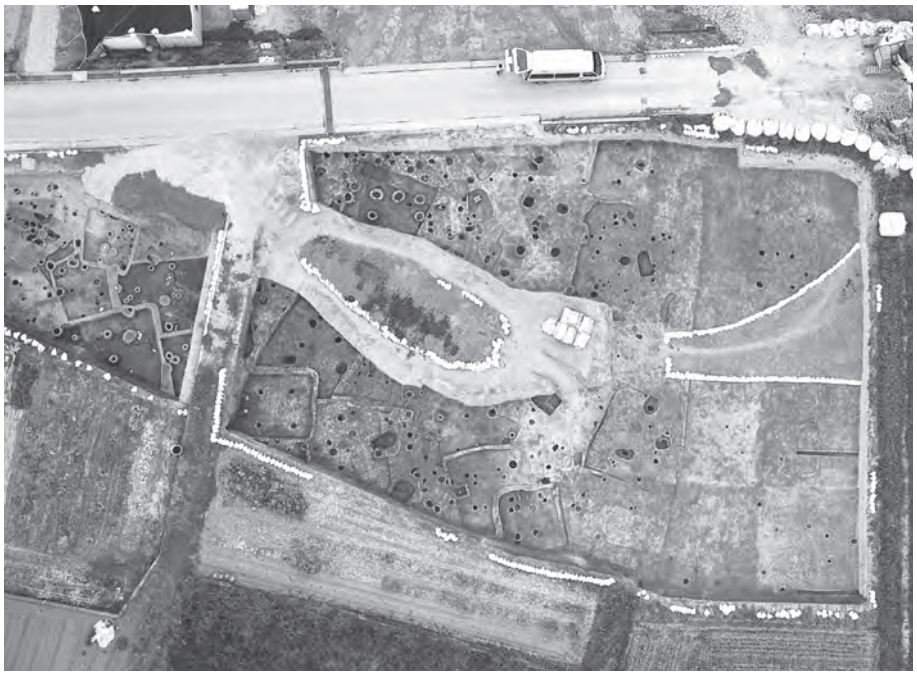
木崎康弘 1997「九州石槍文化の展開と細石器文化の出現」『九州旧石器第 3 号』

photo.4　梶屋宝塔

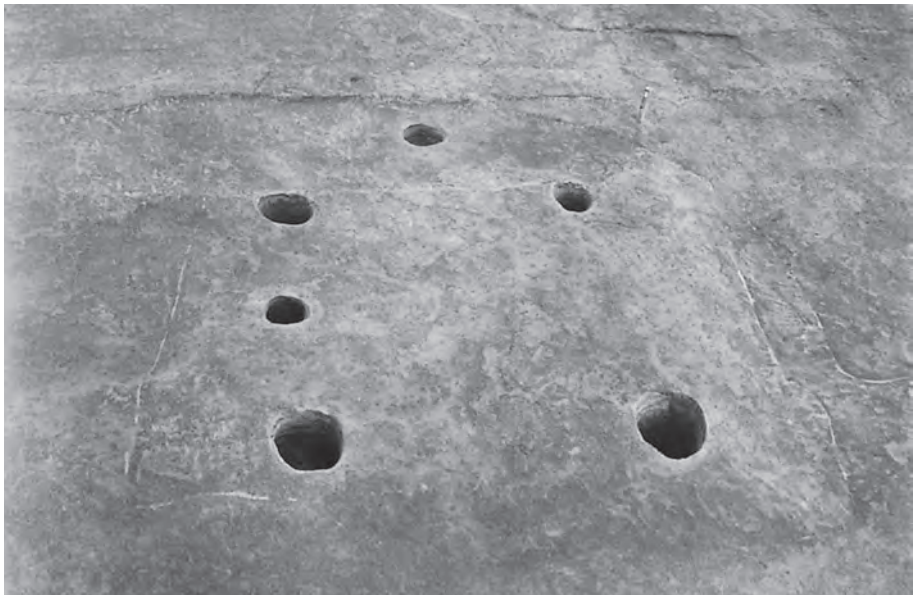
図　版

1　上唐原榎町遺跡 3 次I区
遠景（東上空から）

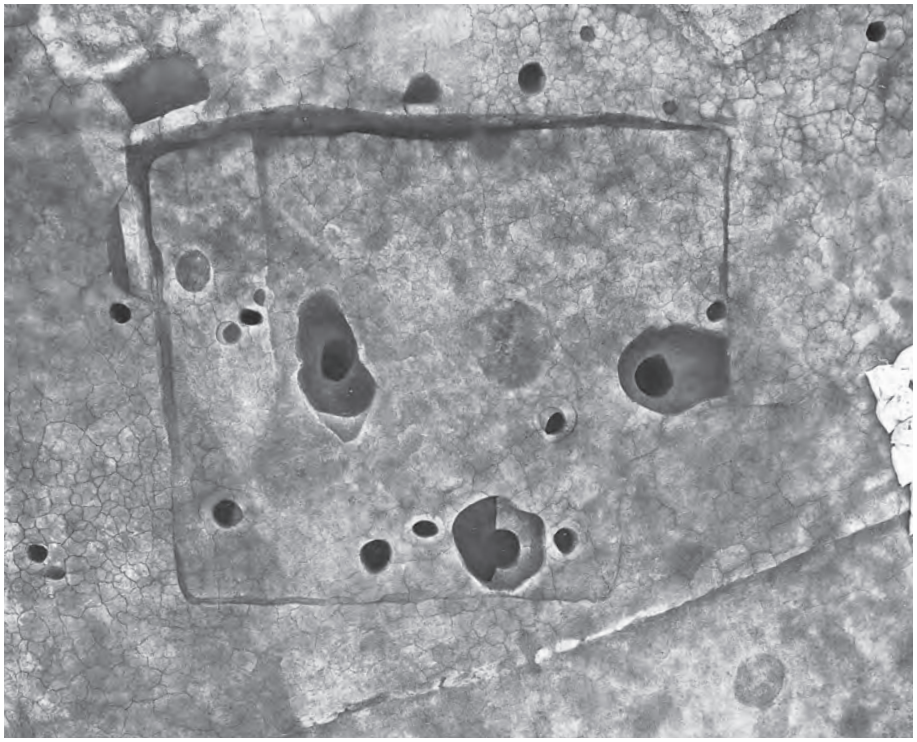
2　同上現道下調査区
（上空から）



3　同上（上空から）

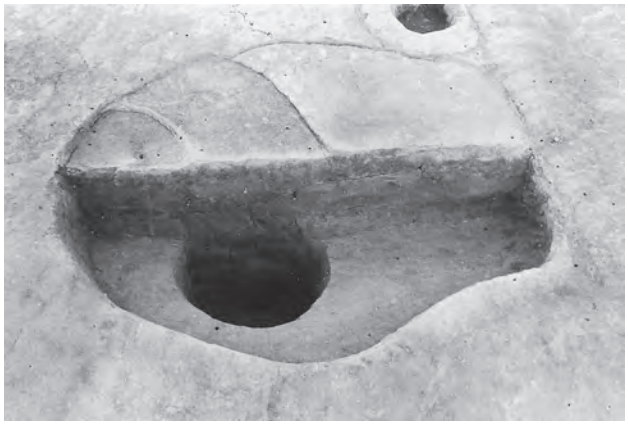


1　I区 1・2 号竪穴住居跡（西から）

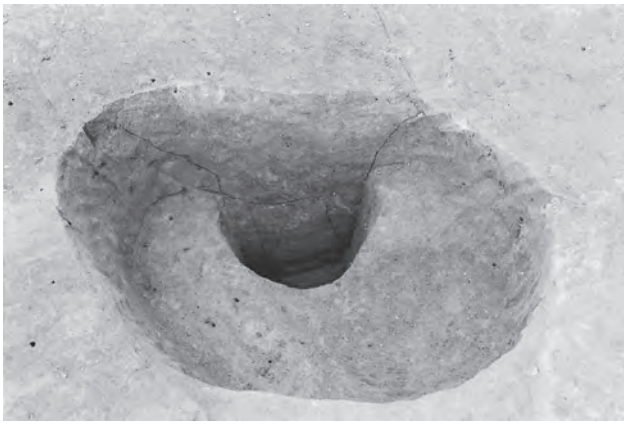


2　I区3号竪穴住居跡（上空から）

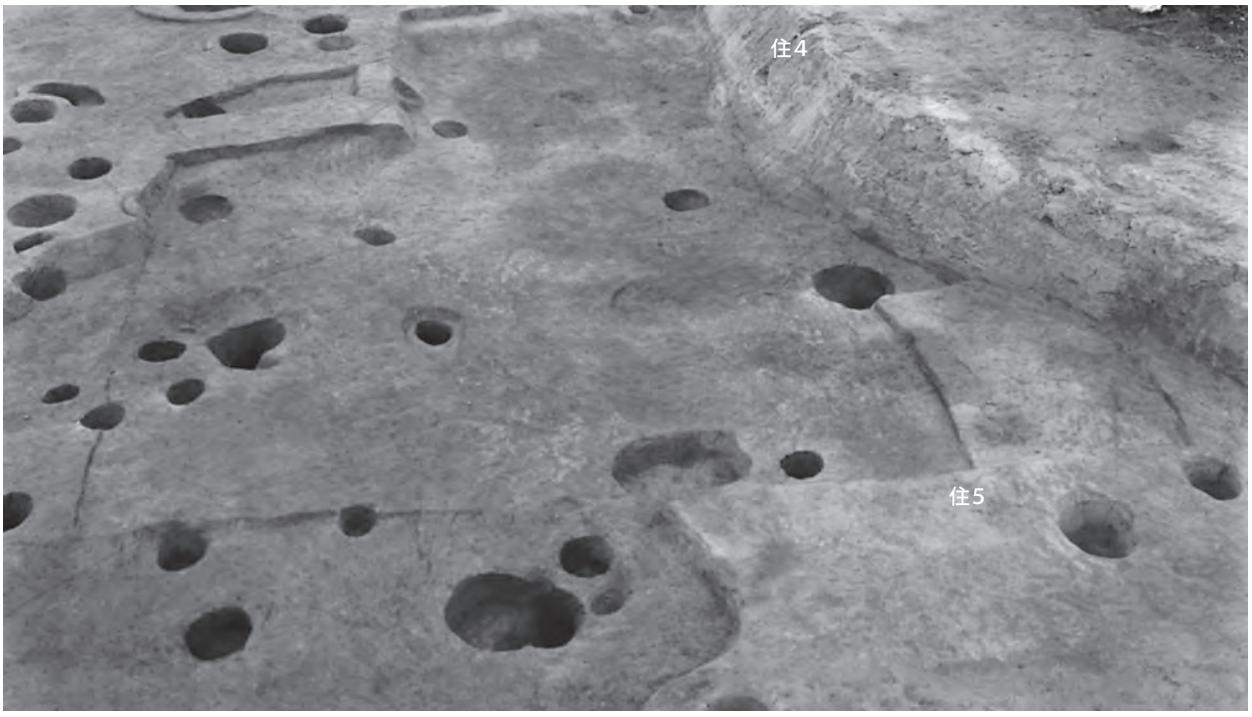
3　同上遺物出土状況（南から）



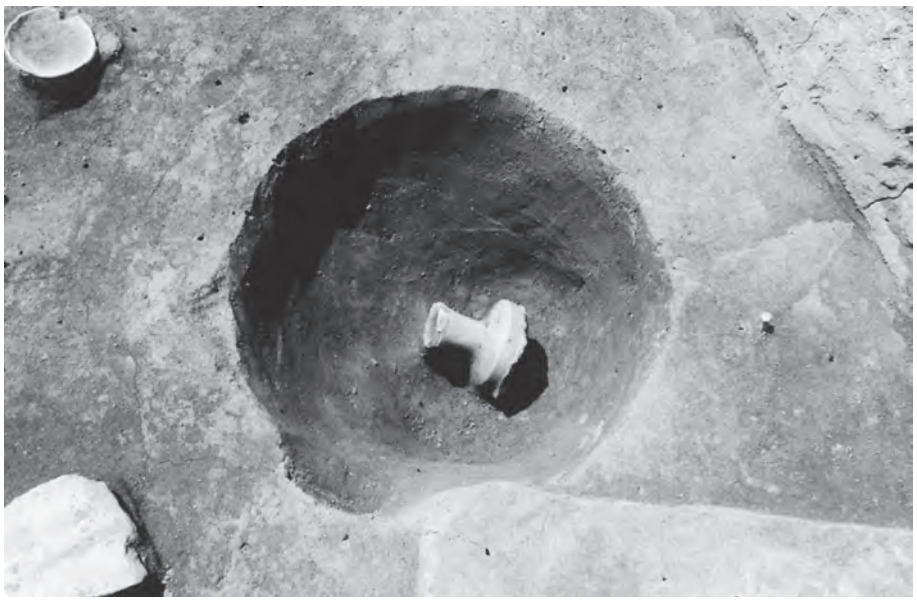
1　I区3号竪穴住居跡北側主柱穴土層断面（東から）



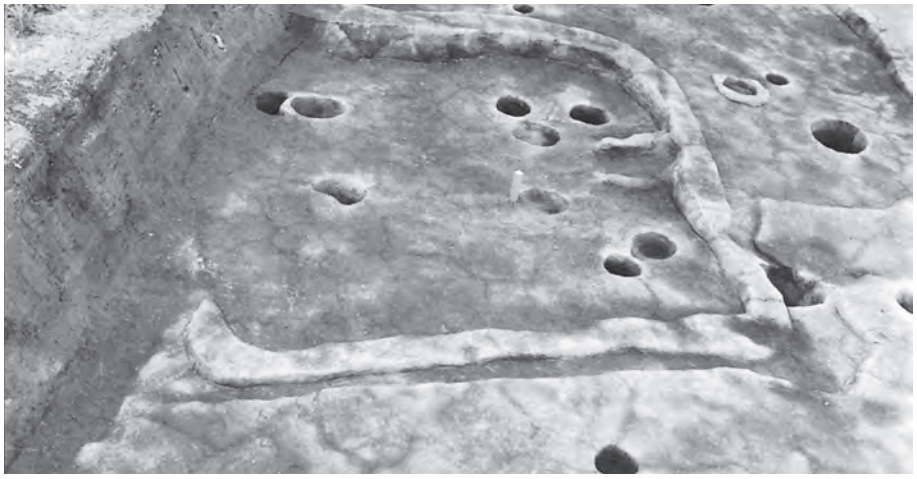
2　同左南側主柱穴土層断面（東から）



3　I区4・5号竪穴住居跡（南東から）



4　I区5号竪穴住居跡北側
主柱穴土器出土状況　（南東から）



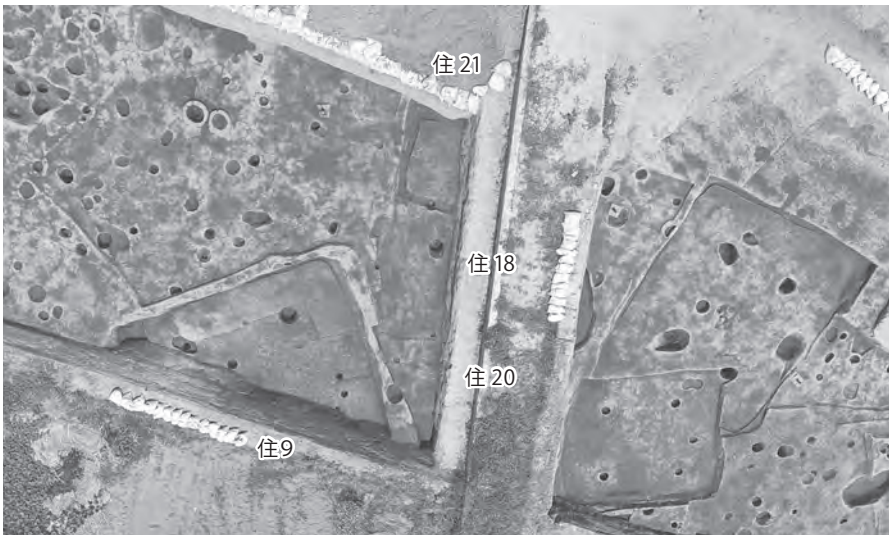
1　I区6・7号竪穴住居跡（東から）

2　I区6号竪穴住居跡カマド（南から）

3　I区4～8・14・11・15・16 号
竪穴住居跡（上空から）

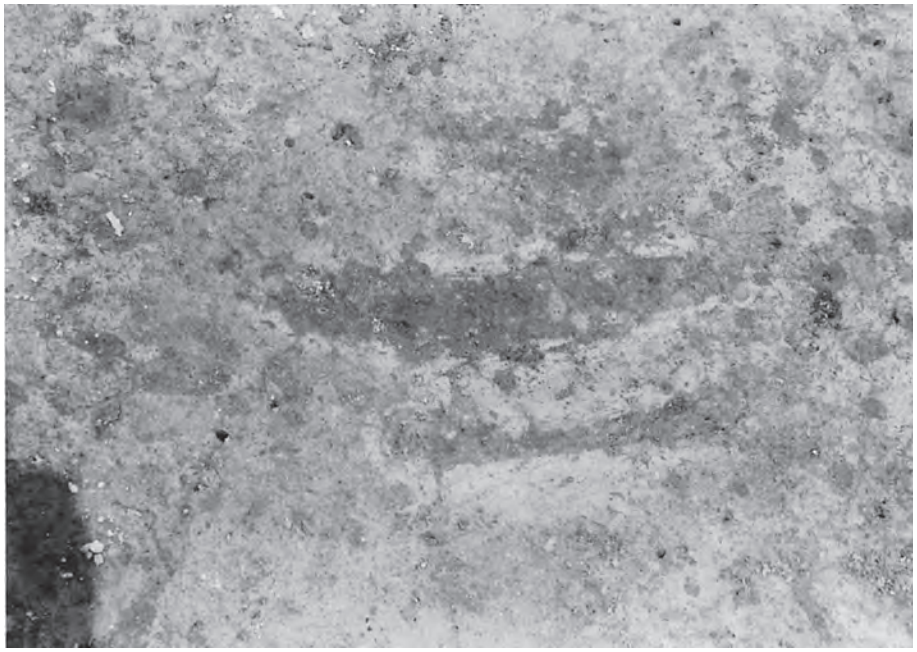
1　I区8号竪穴住居跡
（東から）

2　同上カマド（東から）



3　I区9・18・20・21 号竪穴住居跡
（上空から）

図版 42



1　I区9号竪穴住居跡
弧状掘り込み検出状況（西から）

2　同上土層断面（北から）

3　I区 10 号竪穴住居跡（西から）

1　I区 11 号竪穴住居跡（西から）

2　同上遺物出土状況（南から）

3　同上屋内土坑遺物出土状況（北から）

1　I区 12・13 号竪穴住居跡・1号掘立柱建物跡（上空から）

2　I区 14 号竪穴住居跡（東から）

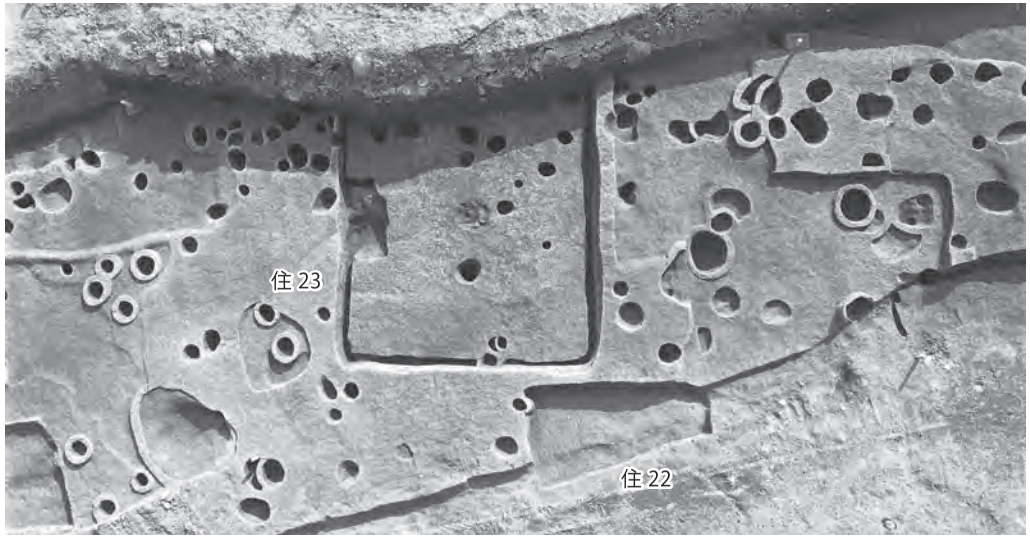
1　I区 15 号竪穴住居跡（東から）

2　同上カマド（東から）

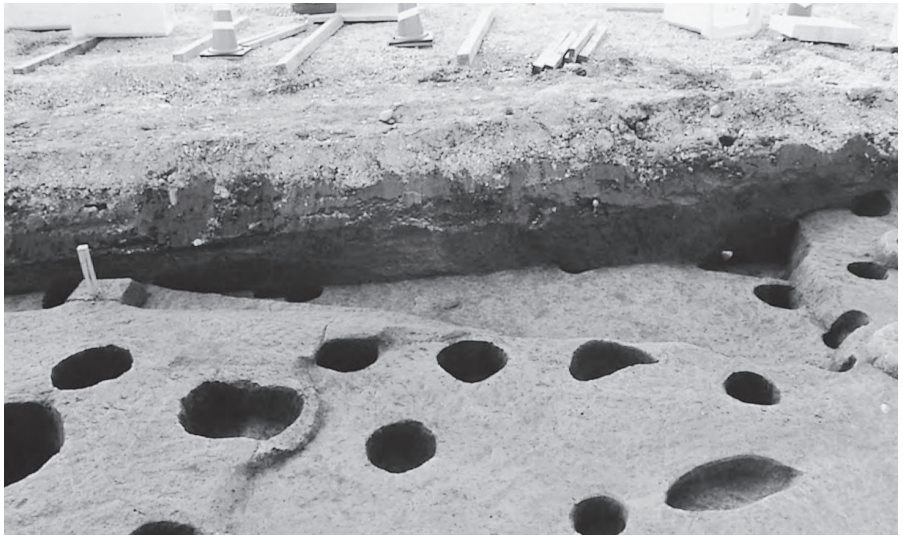
3　I区 16 号竪穴住居跡（南から）

1　I区 20 号竪穴住居跡（北西から）

2　I区 21 号竪穴住居跡（南から）



3　I区 22・23 号竪穴住居跡（上空から）



4　I区 24 号竪穴住居跡（南から）

1　I区1号掘立柱建物跡柱1土層断面（南東から）

4　I区2号土坑（南から）

2　I区1号土坑（東から）

5　同上土層断面（東から）

3　I区1号土坑土層断面（南西から）

6　I区3号土坑（西から）

7　I区4号土坑（北西から）

8　I区5号土坑（北から）

1　I区5号土坑土層断面（東から）

2　I区6号土坑（北から）

3　I区6号土坑土層断面（東から）

5　I区8号土坑（南西から）

4　I区7号土坑（北から）

7　I区 13 号土坑（北から）

6　I区9号土坑（南から）

8　I区ピット2遺物出土状況（東から）

1　I区 26 号竪穴住居跡・2号掘立柱建物跡（上空から）

2　I区9号竪穴住居跡、3・4号溝状遺構（上空から）

3　I区1号溝状遺構土層断面（北から）

63 図 4

65 図 5

73 図 11

63 図 5

67 図 10

74 図 4

67 図 13

65 図 1

67 図 14

75 図 1

65 図 2

67 図 19

76 図 6

67 図 3

72 図 12

I区出土遺物1

76 図 3

77 図 11

80 図 1

76 図 7

78 図 6

86 図 1

76 図 12

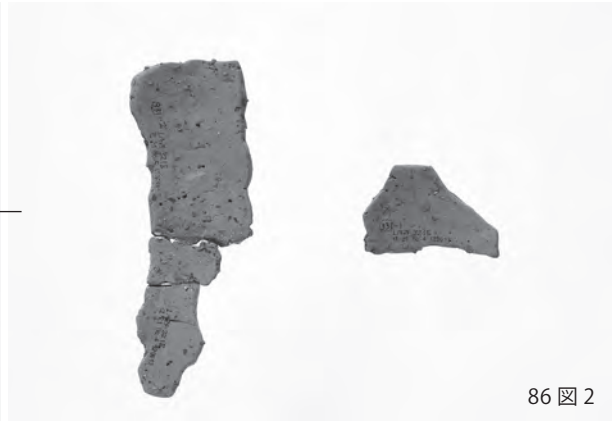
78 図 11

88 図 1

76 図 14

83 図 14

88 図 2

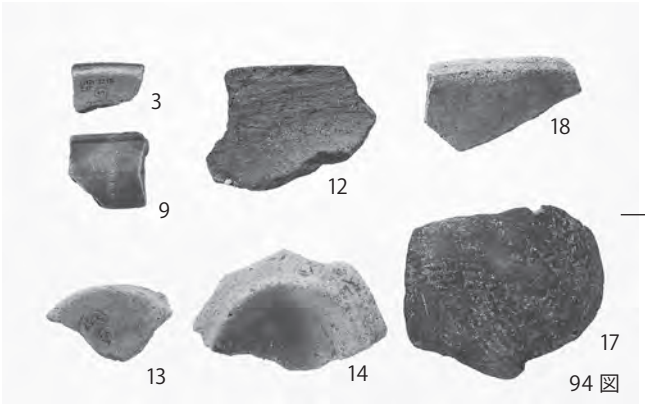

86 図 2

I区出土遺物 2

88 図 5

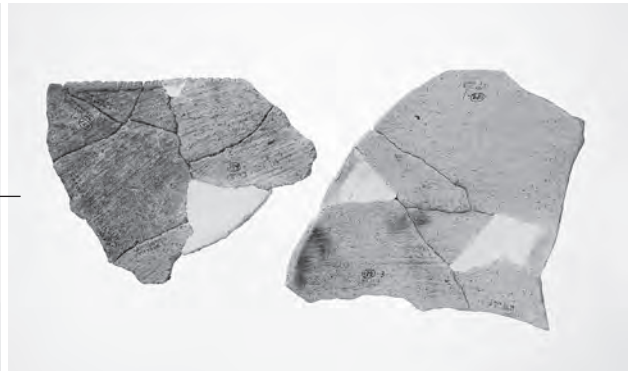
88 図 15

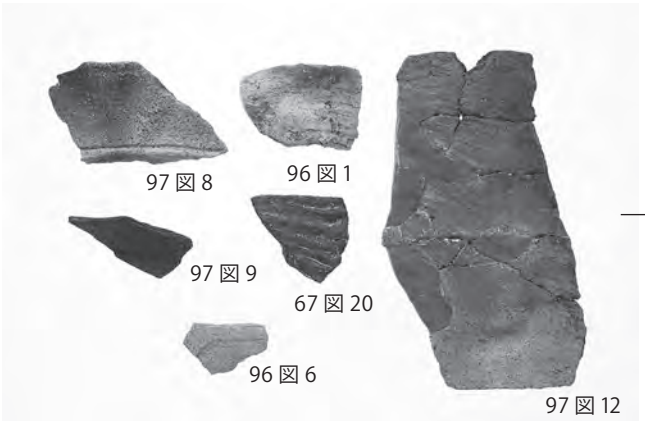
93 図 2



94 図

96 図 2

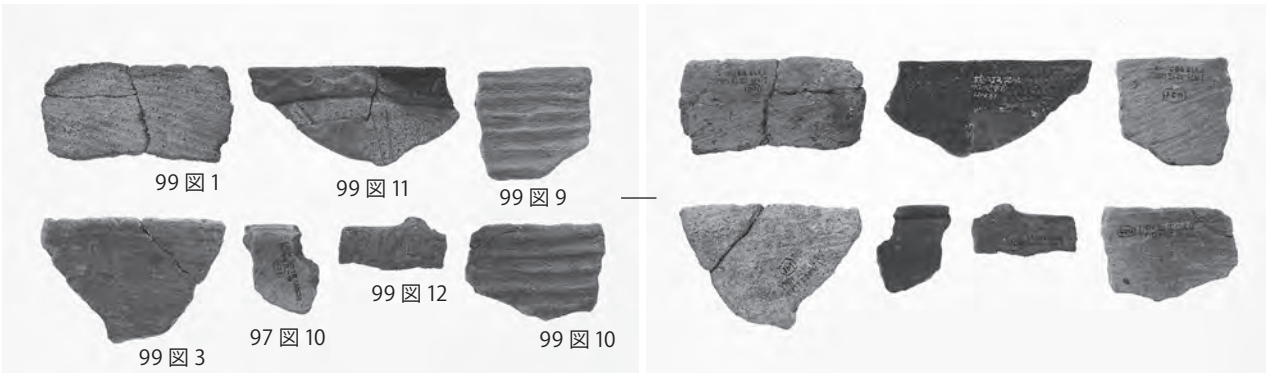


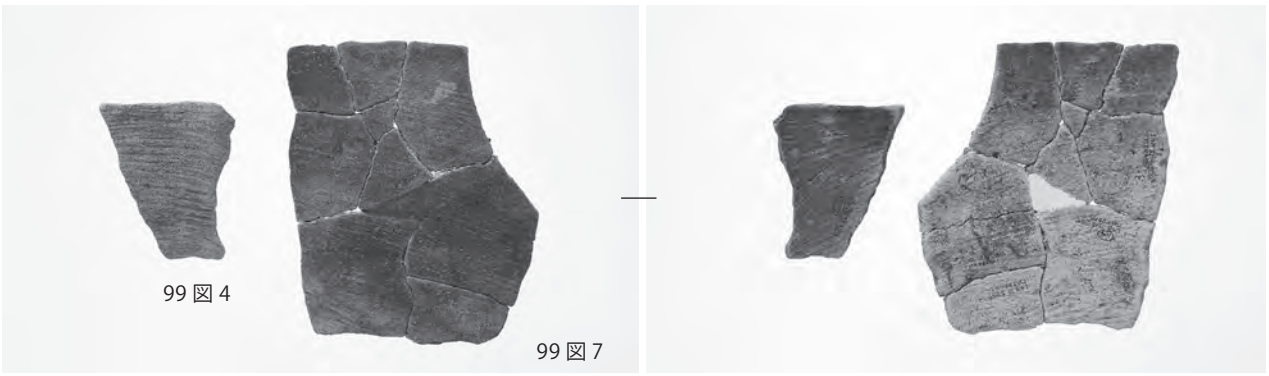


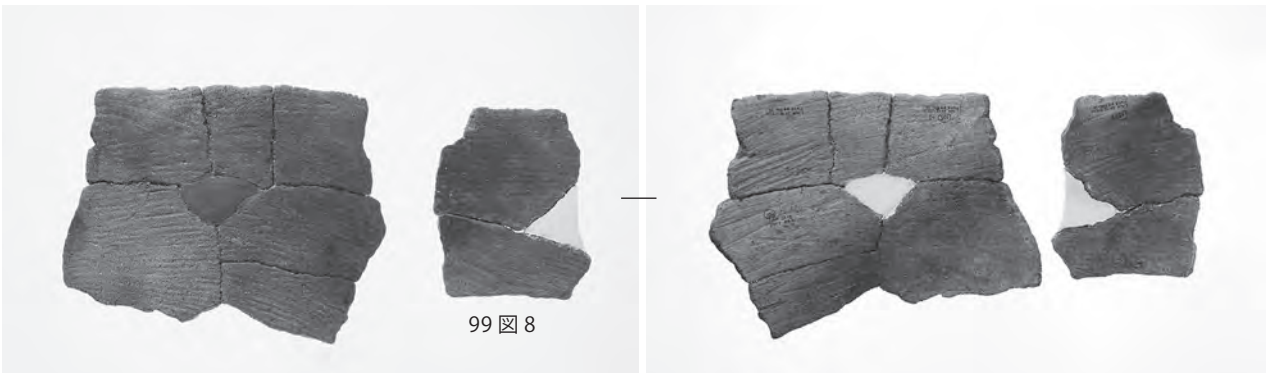
97 図 12

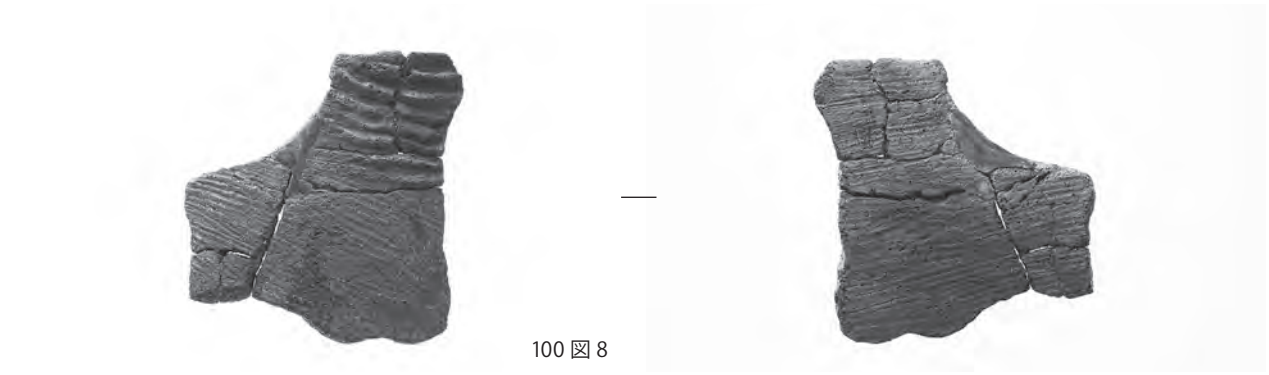
96 図 7

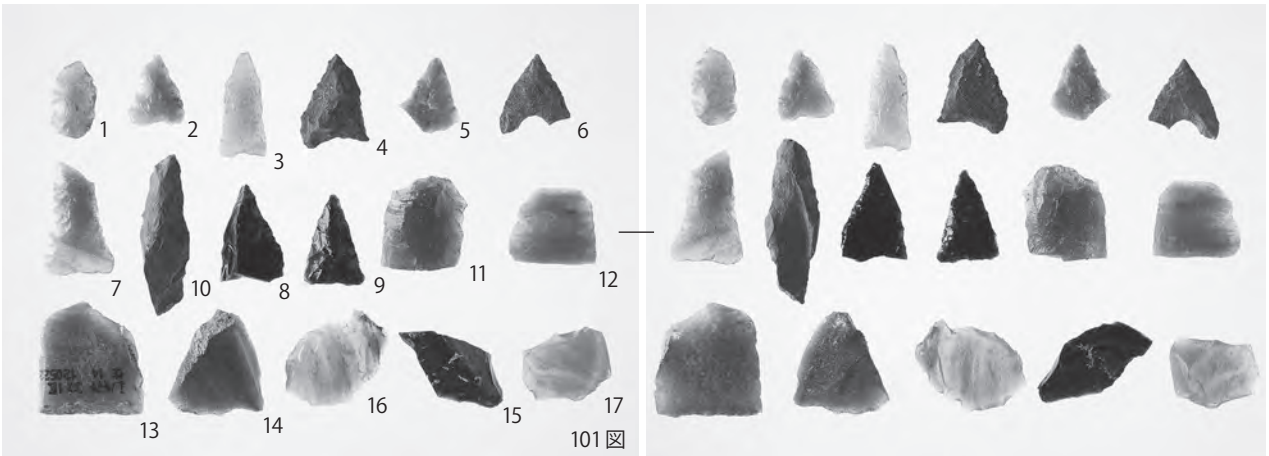
I区出土遺物 3


99 図 1
99 図 11
99 図 9
99 図 12
99 図 3
97 図 10
99 図 10

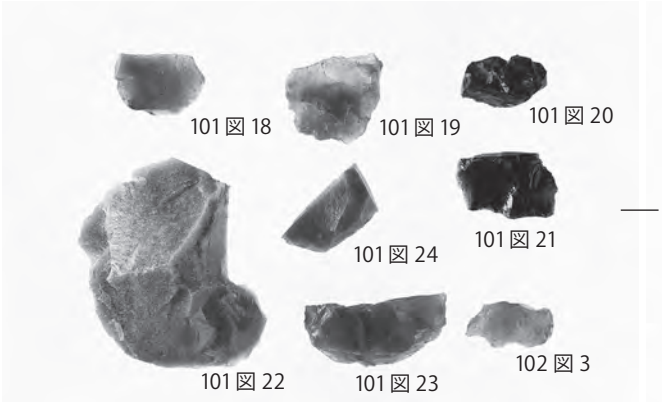

99 図 4
99 図 7

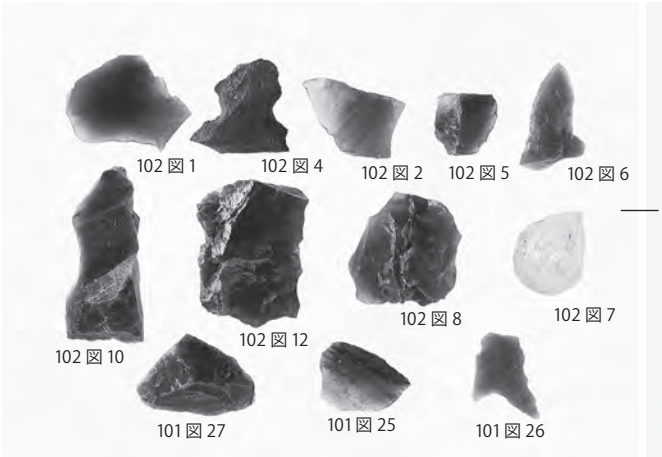

99 図 8

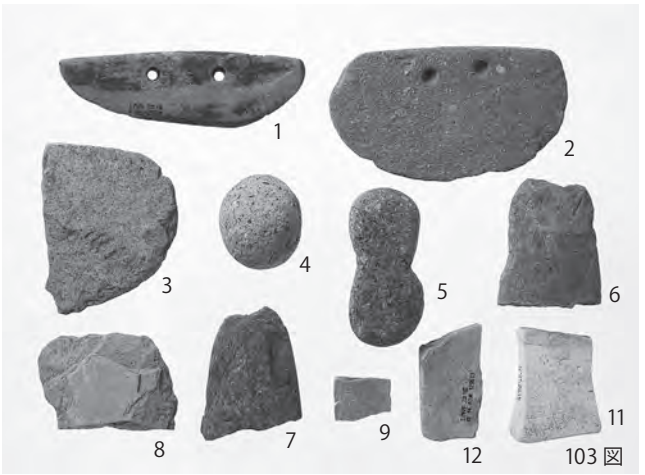

100 図 8

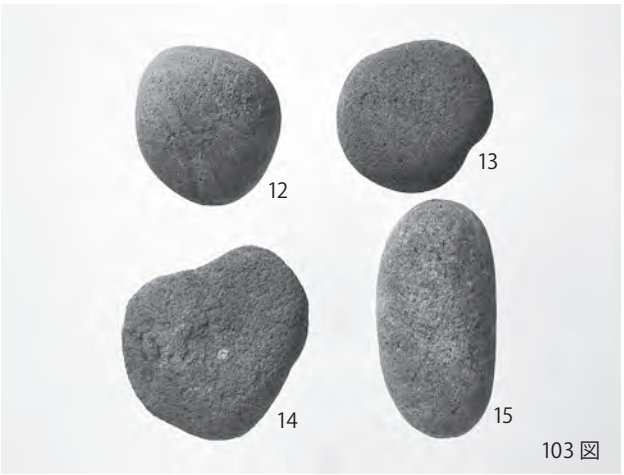

1
2
3
4
5
6
7
10
8
9
11
12
13
14
16
15
17
101 図

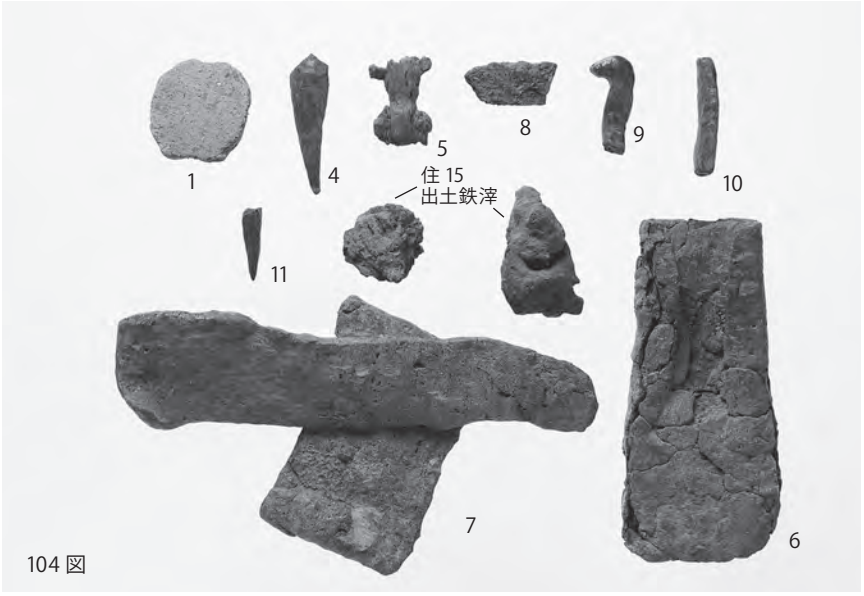
I区出土遺物 4


101 図 18
101 図 19
101 図 20
101 図 24
101 図 21
101 図 22
101 図 23
102 図 3


102 図 1
102 図 4
102 図 2
102 図 5
102 図 6
102 図 10
102 図 12
102 図 8
102 図 7
101 図 27
101 図 25
101 図 26


1
2
3
4
5
6
8
7
9
12
11
103 図


12
13
14
15
103 図


1
4
5
8
9
10
住 15
出土鉄滓
11
7
6
104 図

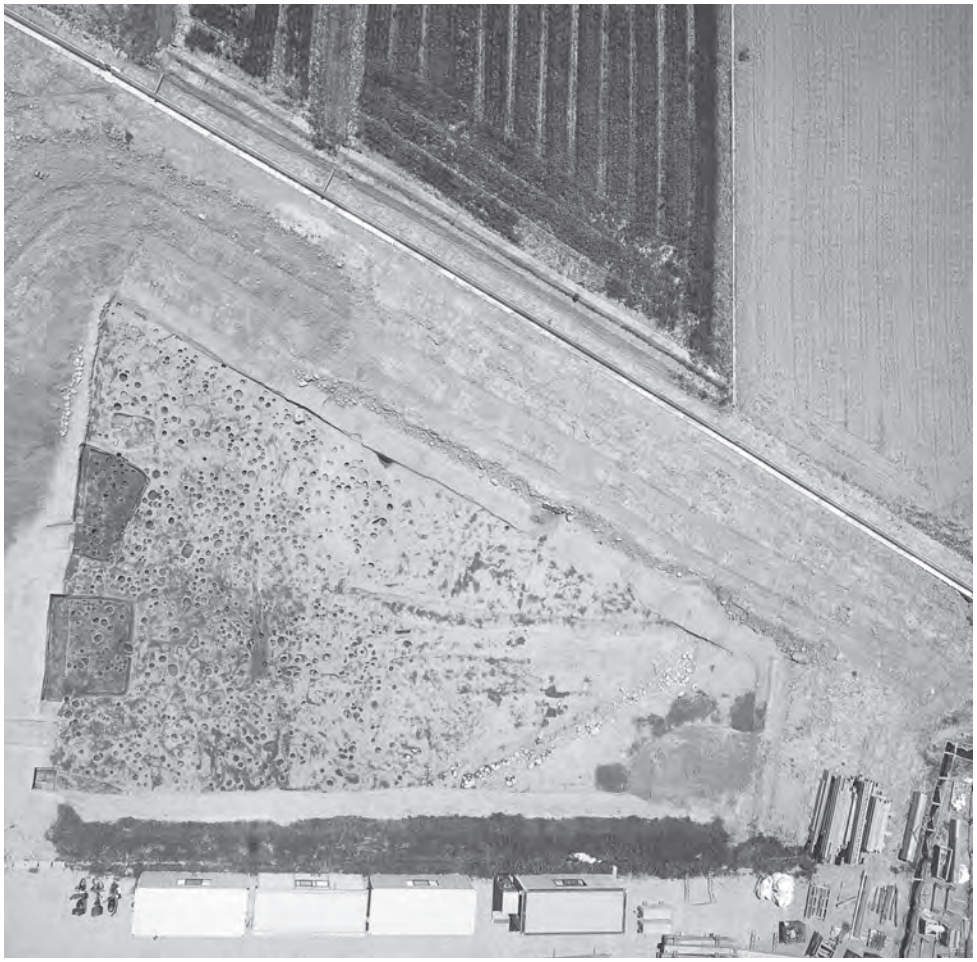
104 図 2

I区出土遺物 5

1　ⅡＢ区遠景（東から）

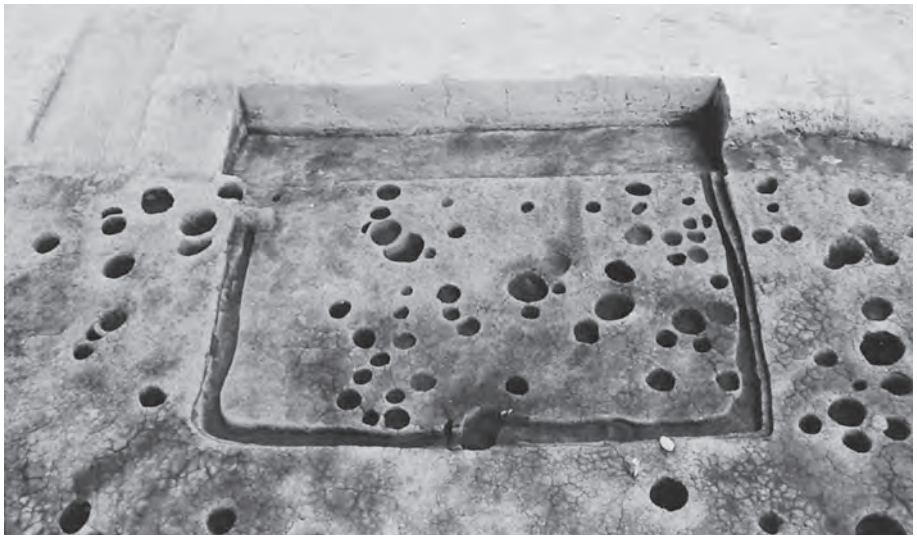
2　同上（北から）

1　ⅡＢ区第1遺構面（上空から）



2　同上第2遺構面（上空から）

1　ⅡＢ区基本土層（南から）

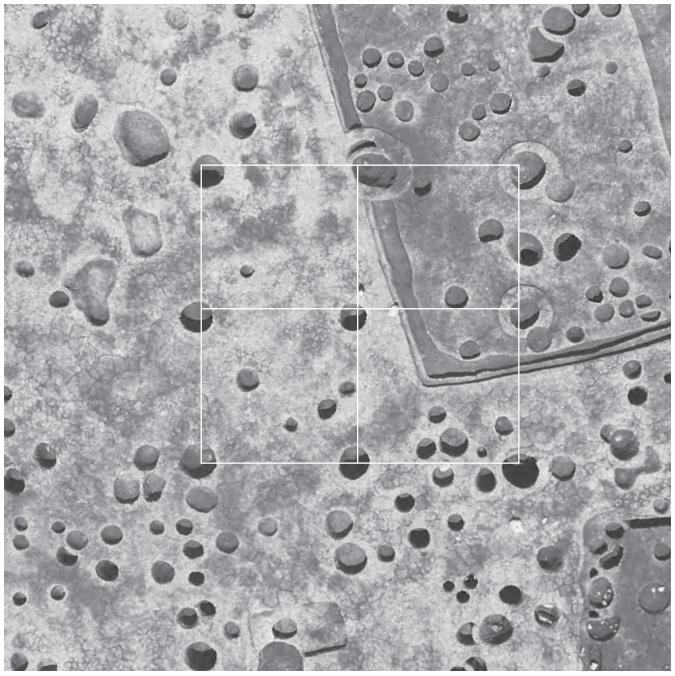


2　ⅡＢ区1号竪穴住居跡全景（西から）

3　同上カマド（南から）

1　ⅡＢ区3号竪穴住居跡（西から）

2　同上カマド（東から）



3　ⅡＢ区1号掘立柱建物跡（上空から）

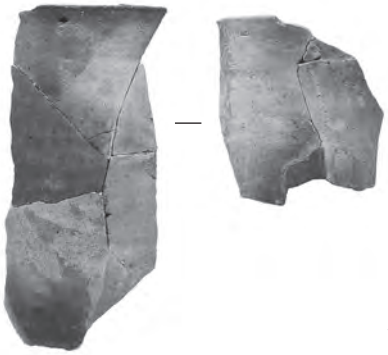
4　ⅡＢ区2号掘立柱建物跡（上空から）

1　ⅡＢ区1号土坑礫出土状況（南から）

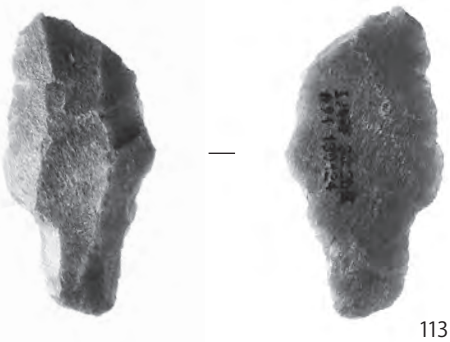
2　ⅡＢ区1号集石遺構（南西から）

3　ⅡＢ区1号土坑（南から）

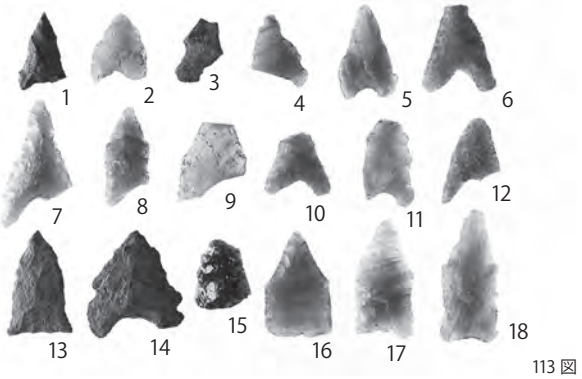
4　ⅡＢ区1号溝状遺構土層断面(西から)



109 図 6

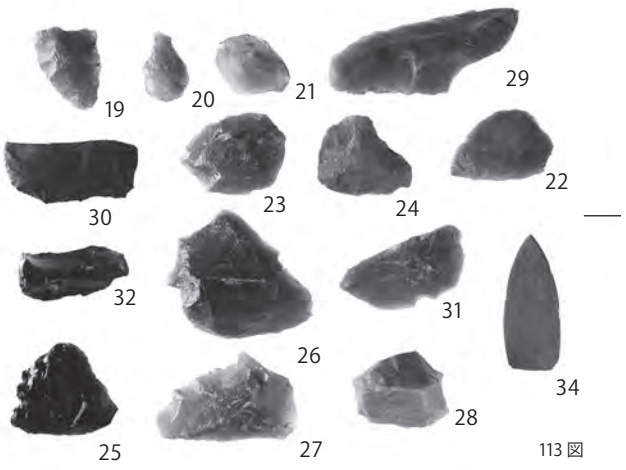


113 図 33



113 図

114 図



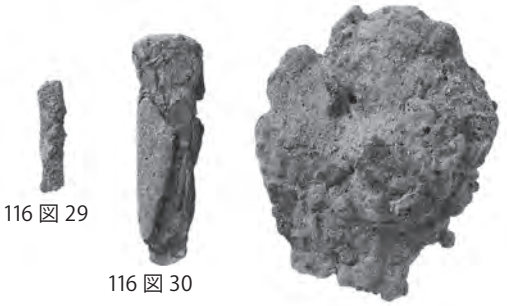
113 図

ⅡB 区出土遺物1

115 図

116 図 10

116 図



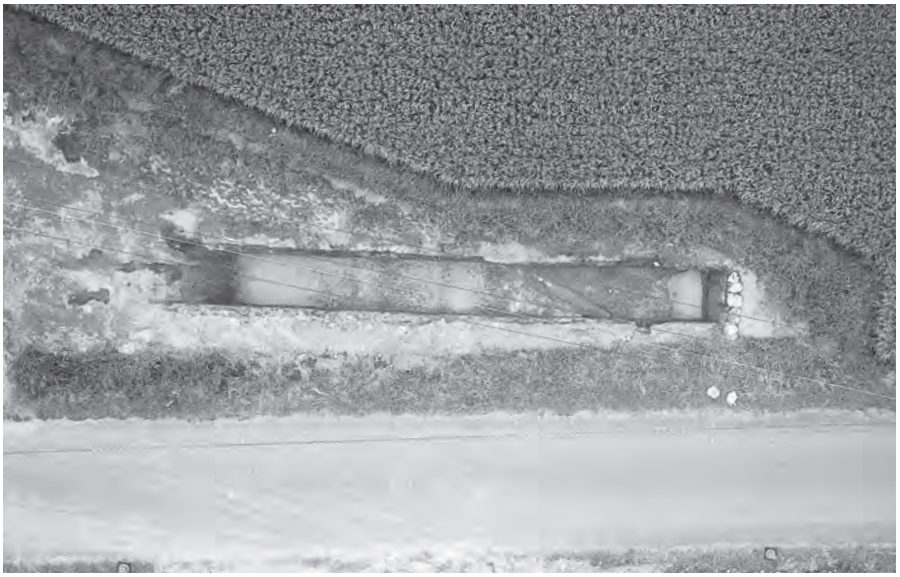
中世包含層出土鉄滓

1　ⅡB 区出土遺物2

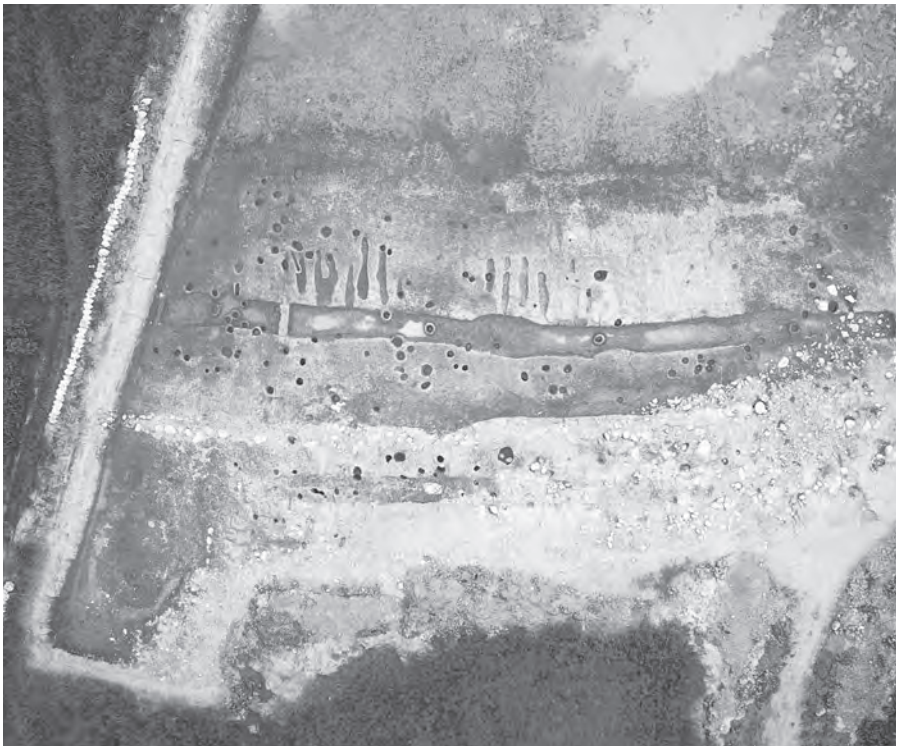
2　Ⅰ・ⅡB 区出土土錘

1　Ⅲ区遠景（南から）

2　同上（上空から）



1　Ⅲ区南端トレンチ（上空から）



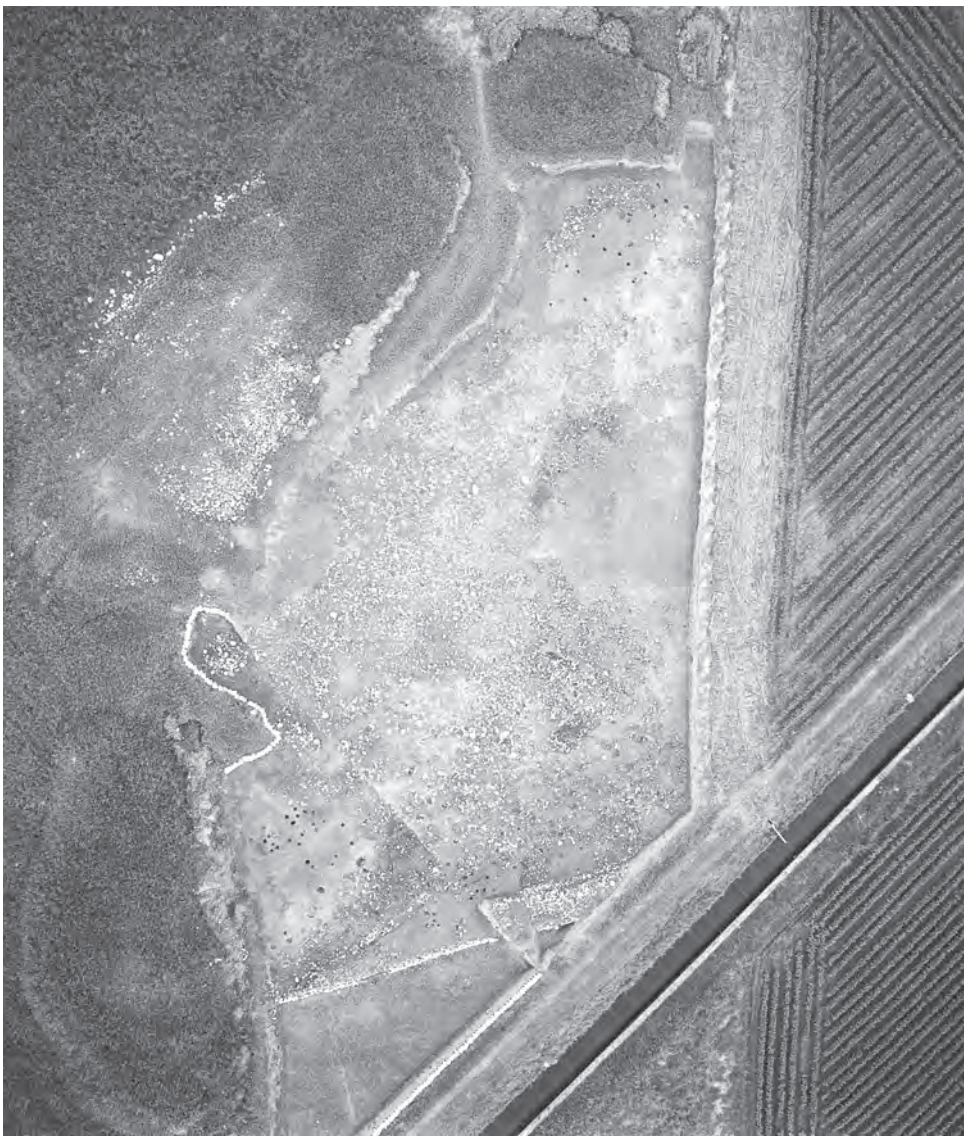
2　Ⅲ区波板状遺構（上空から）

3　1号集石遺構（東から）

1　V区全景（上空から）

2　V区ピット1土器出土状況（西から）

1　Ⅵ区全景（東から）



2　同上（上空から）

1　堤状遺構全景（東から）

2　同左（北から）

3　同上東壁（東から）

4　同上土層断面（南から）

1　Ⅵ区1号土坑（北から）

2　Ⅵ区2号土坑（西から）

3　Ⅵ区3号土坑（西から）

1　4次調査全景（東上空から）

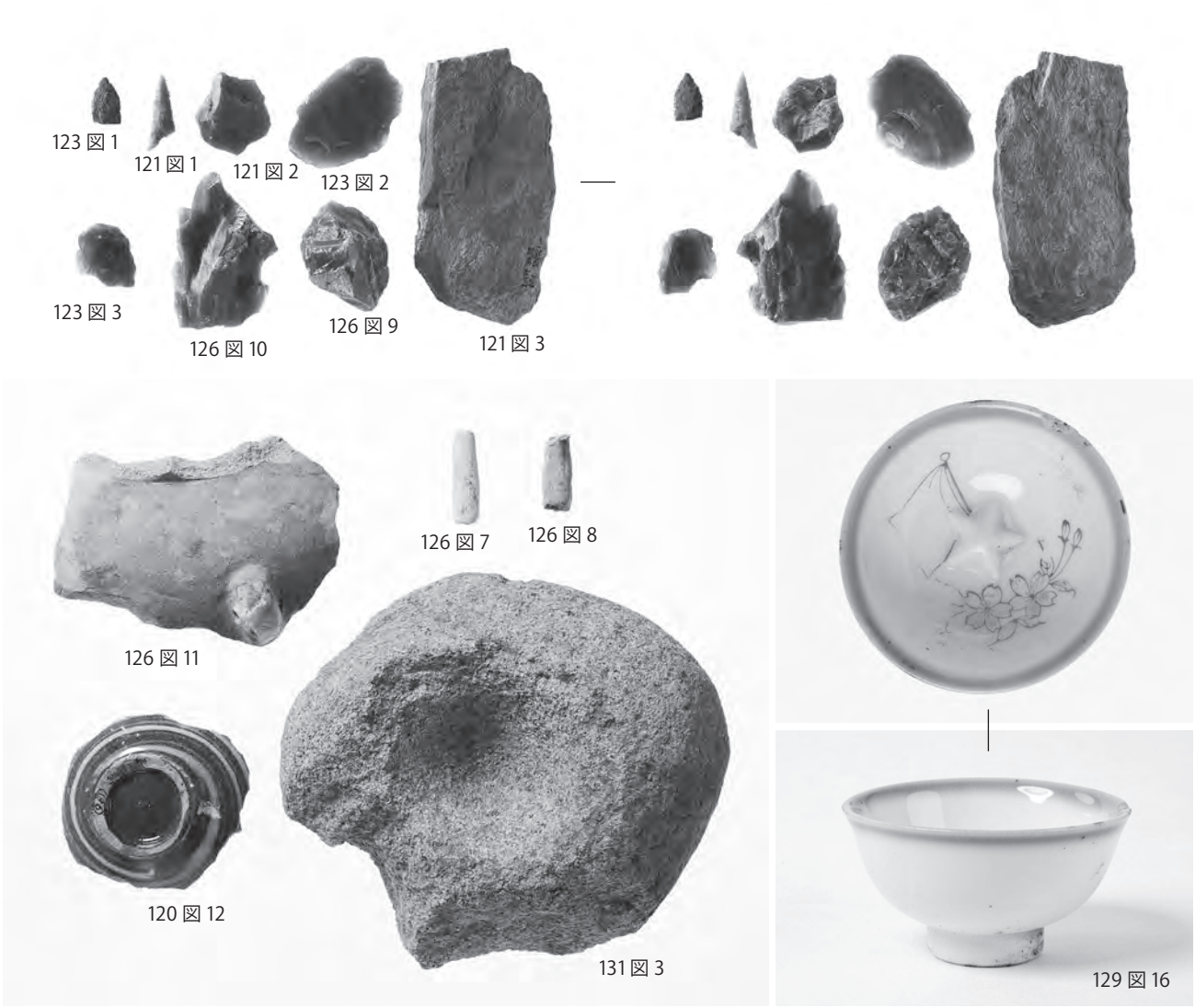
2　同上（上空から）

1　基壇状遺構（北東上空から）

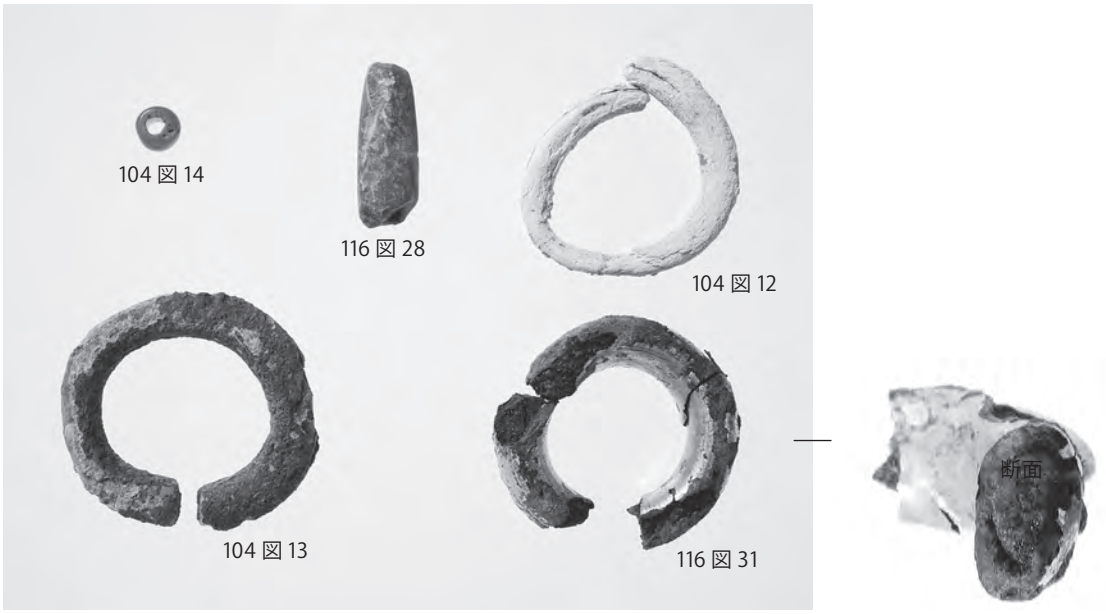
2　同上（上空から）

3　同上（東から）

4　同上土層断面（北東から）



1　3次Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ区・4次出土遺物

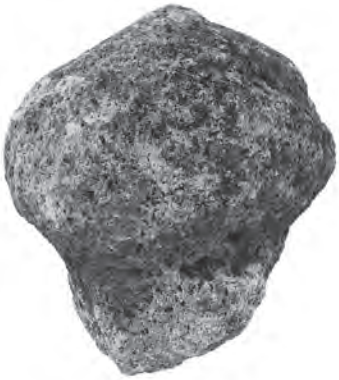


2　3次出土装身具

130 図 1

130 図 5

130 図 9



130 図 2

130 図 6

130 図 3

130 図 7

130 図 10

130 図 4

130 図 8

4次出土石製品 1

131 図 1

131 図 2

1　4次出土石製品2

2　4次調査石塔集積状況（東から）

3　同上（南から）

Ⅵ　おわりに

上唐原地区では、四ッ塚山遺跡・鏡迫古墳群・上唐原榎町遺跡の３遺跡に加え、近接する皿山古墳群や山国川築堤事業で調査された上唐原了清遺跡のほかほ場整備事業関連で調査された多くの遺跡があり、併行期の遺構が自然堤防上と丘陵上という異なる立地で発見されている。丘陵上と自然堤防上の集落・埋葬地の関係を考える上で興味深い地区である。上唐原地区北部と下唐原地区でも、一般国道 10 号バイパス関連の調査と自然堤防上のほ場整備関連調査で、台地上と自然堤防上の同時期の遺跡が発見されており、内容の明らかな遺跡数が蓄積されてきている。特に、上唐原地区の丘陵は小河川に開削され、独立丘陵を呈するものが多く、平坦地の多い下唐原地区の台地とは異なった様相を見せており、多角的な検討が可能となっている。

今回の報告では時間の制約もあり、遺跡間の関係を考察することはできなかったが、将来、東九州高速道路の複線化事業に伴う限定協議範囲の調査が行われた際には、上毛町教育委員会の実施した上唐原榎町遺跡１・２次調査や上唐原道祖丸遺跡の成果を勘案して、上唐原地区の総合的な遺跡の動態の考察を行いたい。

平成 27 年度の収用地の発掘調査を豊前市教育委員会が実施し、最後の収用地も試掘調査の結果、遺跡が発見されなかったため、福岡県文化財保護課・九州歴史資料館の東九州自動車道路関係の埋蔵文化財発掘調査は今回の上唐原地区の調査をもって終わりを迎えた。

東九州自動車道関連の埋蔵文化財調査は、平成 13(2001) 年度に北端の苅田町雨窪地区から始まったものの、本格的な工事に伴う調査が始まったのは平成 20(2008) 年度からなので、実質的にはわずか５年で苅田町から大分県との県境の上毛町上唐原地区まで到達したことになる。この短期間の調査を可能にするため、配置可能な最大限の職員に再雇用職員と臨時調査員を加える体制を整え、調査地の当該市町教育委員会にも協力していただいた。また、発掘作業員数も調査地周辺のみでは不足するため、遠方からも参加していただいた。ご尽力いただいた多くの方々に感謝したい。

報 告 書 抄 録

ふりがな	よつかやま かがみさここふんぐん かみとうばるえのきまちいせきさん・よじちょうさ
書名	四ッ塚山遺跡　鏡迫古墳群　上唐原榎町遺跡３・４次調査
副書名	
巻次	
シリーズ名	東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第28集
編著者名	坂本真一　小嶋篤　秦　憲二(編)
編集機関	九州歴史資料館
所在地	〒836-0106　福岡県小郡市三沢5208－3
発行年月日	平成28(2016)年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
よつかやまいせき 四ッ塚山遺跡	ふくおかけんちくじょうぐんこうげまち 福岡県築上郡上毛町 かみとうばる 上唐原2561-3･6番地他	40646	960109 960110	33° 10′ 46″	130° 24′ 47″	2011. 4. 19～ ～2012. 3. 26	6,600㎡	東九州自動車道建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
四ッ塚山遺跡	集落 古墳	弥生 古墳 近代	竪穴住居跡 土坑 溝状遺構 古墳	8 19 1 2	弥生土器 土師器 須恵器	金属製品 石製品	耳環 宇島鉄道跡

遺跡の概要
　縄文時代の土坑や、弥生時代後期から古墳時代後期の竪穴住居跡と古墳を検出した。宇島鉄道跡については、人為的な平坦面を確認した。

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
かがみさここふんぐん 鏡迫古墳群	ふくおかけんちくじょうぐんこうげまち 福岡県築上郡上毛町 かみとうばる 上唐原2738番地他	40646		33° 10′ 46″	130° 24′ 47″	2013. 8. 28～ ～2014. 3. 24	2,000㎡	東九州自動車道建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
鏡迫古墳群	古墳	弥生 古墳 平安	石蓋土壙墓	49	弥生土器 土師器 須恵器 黒色土器	金属製品 石製品	供献須恵器

遺跡の概要
　調査地では、石蓋土壙墓のみで構成された古墳時代前期の集団墓が検出された。調査地外には群集墳が分布する。

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
かみとうばるえのきまちいせき 上唐原榎町遺跡 さん・よじちょうさ 3･4次調査	ふくおかけんちくじょうぐんこうげまち 福岡県築上郡上毛町 かみとうばる 上唐原610番地他	40646	960228	33° 10′ 46″	130° 24′ 47″	2012. 6. 12～ ～2013. 3. 5 2013. 5. 24～ ～2013. 7. 22	10,410㎡	東九州自動車道建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
上唐原榎町遺跡 3･4次調査	集落	縄文 弥生 古墳 鎌倉 江戸	竪穴住居跡 土坑 溝状遺構 集石遺構 基壇状遺構	32 17 14 1 1	縄文土器 弥生土器 土師器 須恵器 陶磁器	金属製品 石製品 土製品	耳環 三稜尖頭器

遺跡の概要
　本遺跡は弥生時代後期から古墳時代前期、古墳時代終末から飛鳥時代を中心とする集落遺跡で、部分的に縄文包含層も残っていた。

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2117104
登録年度 27	登録番号 7

東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告　第28集

四ッ塚山遺跡　鏡迫古墳群　上唐原榎町遺跡3･4次調査

平成28年（2016年）3月31日

発行　九州歴史資料館

福岡県小郡市三沢5208－3

印刷　株式会社　四ヶ所

福岡県朝倉市馬田336